MFE = 다큐멘터리 영화 전문 잡지

4

August 2023

特集 場と館

MFE= 多焦点拡張　第４号
August 2023

CONTENTS

博物館のにせもの　6
張 夢霄

魔法を奏でる場所　17
星來 杏樹

真夏のあわいの淡い恋　29
茶園 敏美

黄昏亭　39
冨山 一郎

韓国浦項の「学徒義勇軍戦勝記念館」を訪ねて　43
ある歴史研究者の視点から
安 昭炫

わたしのための小さな場所で　50
アトリエとその周辺のための雑文
波多野 祐貴

まんのう町立図書館 10 周年に寄せて　57
豊嶋 和人

競輪場私論　62
古川 岳志

馬と世相　71
西川 和樹

「戦いの場所」としての記憶　84
「記憶の存在論」をもって『ゆきゆきて神軍』と『ゆんたんざ沖縄』を読む
李 啓三

特集・場と館

特集・場と館

コロナ禍と劇場 92
岐路に立つ宝塚歌劇
浜 恵介

劇場とパンデミック 96
増渕 あさ子

連載 石と証（四） 100
館から場へ、そして、場という館で
沈 恬恬

連載 監獄の空から 108
猫の後ろ姿からゾンビ的状況へ：DJ 風に（5）
川村 邦光

「落書き的論文」のすすめ（下） 140
《人類史＝ヨーロッパ的世界史像》の外側へ
小島 潔

聞き書きという可能性 168
川田文子『赤瓦の家—朝鮮から来た従軍慰安婦』を読む
廣野 量子

沖縄を語る言葉の「切断線」を引き直す 179
「不可能な発話」を感知することからはじまる歴史叙述に向けて
木谷 彰宏

見当 193
当たるも八卦　当たらぬも八卦（2）
佐藤 博昭

『乙丙の頃（1815 － 16 年）の覚え書き（其の九）』を試・私訳 207
ヤオ イミン

특집 · 장과 관

말과 세태 211
코로나 재난 속의 경마장
니시카와 가즈키

다소가레테이 224
도미야마 이치로

MFE の対話 228

第 5 号特集テーマのお知らせと呼びかけ／ 240
제 5 호 특집 테마를 모집합니다
編集委員会

편집후기／編集後記 242

表紙写真　波多野祐貴

「場（ば）と館（やかた）」に関わる特集をお送りします

劇場、競輪場、競馬場、酒場、広場、図書館、記念館、洋館、博物館、文学館など、それぞれにまつわる、数多くの話が寄せられました。また、「場」や「館」という名称をもたずとも、同様の視座から、アトリエ、動物園、監獄、記憶としての「場」などにも話題が広がりました。

「新たな知識を求めて図書館や博物館に入り浸るだけでなく、夕暮れ時には酒場に惹きつけられ、週末には美術館や劇場に通い、真剣勝負を求めて賭場や競技場に身を投じる。「場と館」との関わりは人それぞれです」という前号の呼びかけ文そのままに、それぞれの持ち場から生まれたいくつもの軌跡が浮かび上がります。

特集　場と館

ところで、この文章を記している今日は、火曜日。昨日までは祝日を含む連休だったから、劇場や球場、博物館には多くの人びとが集ったことだろう。その翌日、「場」や「館」の多くが、休みになる。

展示されるモノたちは、閑散とした自分たちの居場所でおしゃべりに興じているのだろうか。それとも、全く逆に、博物館法やその他諸法制によって、宝ともなれば廃棄物ともなる、自分たちの運命を嘆いているのだろうか。あるいは、そのような自分たちの展示価値や資産価値には全く無頓着で、与えられる笹やリンゴをただ美味しそうに飲み込むのだろうか。

台湾に旅行に行き、意気揚々と動物園に向かったら、到着したその日から長期休園に入っていたことを知らずにがっかりした、という話をラジオでやっていた。同じようなことは、図書館、美術館、酒場などで、誰もが一度は経験があるだろう（職場でも同じことが起これば良いのだけれども‥）。私たちは、気まぐれに開いたり閉じたりする「場」と「館」に一喜一憂しながら、日々を過ごしているのかもしれない。

臨時休館に行き当たることは、事前の下調べで何とか防ぐことができるにしても、先の感染症の流行は、「場」と「館」にとっていかんともしがたい混乱をもたらした。これもラジオで聞いた話だが、コロナ禍で劇場が封鎖され、「推し」に会いに行けなくなったある人物は、自分の「推し」の特徴を「建物」に重ね合わせ、そこに通うことで推し活を継続したという。

いつもそこにあるものと思っていた「場」と「館」が、社会の混乱によってどうにでも変わり得るものであったというのは、この間に得た大きな気づきであったと言うならば、そうした状況下でも、あらん限りの手段を尽してその営みを継続しようとし、それぞれのやり方で関わりを保とうとした人びとが存在した、というのも大切な気づきの一つだろう。

「場」と「館」のかたちを変えるのは、なにも感染症に限らず、テクノロジーの変化、人口の増減、流行の推移など、変数は数多くある。他方で、今はなくなってしまった「場」と「館」も、記憶を呼び覚ますことで、そこにありありと再現することができる。

そうしたありようも含め、「場」と「館」のことを語ってしまうのは、同様に足繁く通う他の多くの人と同じように、自分もまた、そこで生じる営みに対して、記憶を重ね、身体を揺らし、心を震わせる存在である、という当たり前の事実を何度でも確認したいがためなのかもしれない。

博物館のにせモノ

張 夢霄

仲良くしているモノたち

わたしは博物館に住んでいる。ここのローカルな博物館に住んでいるモノは多くないが、「しーちゃん」と呼ばれている八千歳になったお年寄りもある。

「ねえ、本当にしーちゃんって呼んでいいの、元々の名前はなんなの。」青いスカートを着ている青ちゃんはこの博物館で一番若いモノ。

「もちろん、逆にうれしいよ。わたしは自分の最初の名前を覚えてないから。」

「たしかに、みんなそうだろうね。博物館に来てから名前というものをはじめて知った。」

「けどしーちゃんは違うかもしれないね、ずっと昔からここに住んでいるから。」

ここに集まったモノたちはしーちゃんの出身をだれもわかっていない。八千年前に生まれたといっても、それはどこかから広まったうわさみたい。しーちゃんがいるから、ここで博物館がつくられたと聞いたこともある。まあ、しーちゃんはいつ、どこからきたのかは知らなくても、わたしたちと一緒に博物館に住んでいるならいい、とみなさんは思っている。

ある日、博物館に一人の人間が訪れた。一般的なお客さんとなにか違う雰囲気。その人はわたしたちが過ごしている部屋をそのまま通って後ろのオフィスに入った。はじめてかなあ、わたしたちは無視された。

「先はだれ。」

「知らないけど、別に気にしなくていいよ。」服を着ていないホワイトさんはいつもにっこりとしている、「わたしたちとは関係ないはず。」

「なにかがあるかもしれないよ。わたしたちを別のところに引っ越しさせるとか。そうしたらどうする。」話しているのは錆びついた体が人間の手でピカピカになったシルバーさん。わたしたちの中で一番危機感を持つモノ。

「大丈夫だよ、しーちゃんがいるから。」

「そう、しーちゃんはこの地に生まれ育ったから、別のところに行かせるわけがない。」

わたしもしーちゃんが永遠にこの博物館に生きると信じていた。

「ちょっと待って、そう書くと読者にバレちゃうかもしれないよ。永遠になんて。」

キーボードで動いているわたしの複数の手が軽く止められた。あっ、青ちゃんだ。

「今になっても、しーちゃんは永遠に博物館にいるってことを信じている人間もいるよ。まあ、別にしーちゃんという名前にしなくていいけど。」

「たしかに、賢いと自画自賛する人間がいるからね。」

当時、しーちゃんは毎日博物館で過ごしていたわけではない。時々飛行機に乗せられて遠くまで出張した。去年三月にも、しーちゃんは青ちゃんと一緒に国立博物館に行った。

首都にある国立博物館に行けるってみなさんは羨ましいけど、招待状をもらったのはしーちゃんと青ちゃんだけ。地元の博物館に一番お年寄りのしーちゃんと一番かわいい青ちゃんが人間たちに人気だそう。日頃から二つのモノを見にきた人間もたくさんいるから。

「昔、そこに住んでいたよ。」と出発前にしーちゃんはそう言った。

しかしその時だけ、みなさんはしーちゃんの言葉を信じない。

「どこか間違っているはず。」

「首都は遠いから、住んでたわけじゃないね。」

「しーちゃんの体はここの川にぴったりでしょ。」

ある日、地元に帰った青ちゃんから面白い情報が届いた。

「しーちゃんは本当に首都に住んでたかも。」

「わたしはしーちゃんと国立博物館で一緒に過ごしていた友達に会ったよ。」

なるほど、国立博物館に入ったら、しーちゃんが新しい服を着ているミクちゃんに呼ばれた。しーちゃんより若めに見えている。

「ミクはしーちゃんの家族だろうか。」

「ちがう、ちがう、見た目は全く似てない。」

「似てない家族もいるよね。」

「ううん、しーちゃんにも聞いたよ。幼い頃から知り合いだっただけだって。」

「ええ、じゃ、しーちゃんは本当に国立博物館で生まれたかもしれないね。」

「それは、」青ちゃんが何かを言いそうと言わない様子。

「しーちゃん、青ちゃんが言ったのは本当なの。国立博物館に住んでたか。」

「住んでいたかもしれないけど、わたしもよく覚えていないよ。あそこに行ったらすこし思い出した。けど、そもそもわたしたちは博物館で生まれたものではないね。」

「うん、それはわかってるけど。」

「で、なんでここの博物館に来たの。」

「ごめんね、全然覚えてない。」しーちゃんも困っているみたい。

「そうよ、ミクちゃんに呼ばれた時も、しーちゃんはすぐに向こうのことを思い出せなかっ

た。」

「別にいいじゃない。しーちゃんは今ここにいるから。」

「そうね、わたしたちはずっと一緒にいるから。」

みなさんはしーちゃんのことを聞くのをやめた。無限な時間が与えられたモノたちにとって、昔のことをこれからの時間とともに流せばいい。

わたしもそう思っていたが、パソコンを閉じてしばらくぼーっとしていた。

「無理しなくていいよ。思い出せないなら、忘れていってもいいよ。」

そう、わたしも忘れた。博物館にいるモノたちはすべて物忘れがひどい。そういえば、みなさんは遠回りの家族かもしれないね。遺伝子から移ったって。

しーちゃんは消えた

「青ちゃん、今日もどこかへ行くの。」

「ううん、博物館の一階に行くだけ。わたしに会いにくる人間がいるって。」青ちゃんの目がキラキラしている。国立博物館へ出張してきてから、青ちゃんがもっと人気になったらしい。

「頑張ってね！」

二階に住んでいた青ちゃんはしーちゃんの部屋に引っ越しした。朝九時から夜六時まで仕事をしている。

「疲れた、本当に疲れた。」

「もうちょっとがんばってね。一週間ぐらい経つと、元に戻るかもしれないよ。」

「えっ、本当にそうなの。」モノたちはしーちゃんの話にびっくりした。

「うん、わたしも聞いたよ。」青ちゃんはため息をついた、「あと数日間を頑張ったらいい。人間はすぐ飽きちゃう生き物だそう。」

しかし、博物館の賑わいと混乱は一か月を経っても収まらなかった。

「助けて！助けてください！」

青ちゃんの声だ。どこからか走ってきた一人の子どもは転んだそう。どうしたらいいのか。青ちゃんの声を聞こえるのはモノたちだけ。部屋から出ようと、ゴールドの帽子をかぶっている黄色いちゃんは慌てて体を回しているが、何もできなかった。

モノたちは騒いでいる中、大声で泣き出した子どもは自分で立ち直って涙のまま隣の部屋に走っていった。

「よかった。」みなさんはほっとした。

「人間はそういうものか。」

「強いね、転んでもバラバラにならない。」

「そうね、壊れても価値があるらしい。」

「そこだけは羨ましい。」

やはり人間は魅力的な生き物。自分の意志で動けて、体質や肌色、年齢で評価されるものではないらしい。

「そうかなあ。」青ちゃんはスカートを掴んで、わたしの書いた文章を覗いた、「人間にとっても、体や服、年齢が大事だよ。転んだ子どもをみたね、子どもは年齢を重ねて大人になると、そのように転んでもかわいそうと周りに思われないよ。」

「えっ、大人になったら転ばないってこと？」

「ううん、大人でも、転ぶチャンスが出たら転ぶけど、かわいくない。そう、大人は何をしてもかわいくない。」青ちゃんは深く頷い、自分の話を真実のように話した。

「わたしたちを騙さないでね、青ちゃん。」笑い声が届いた、「国立博物館に行ったけど、青ちゃんはまだ子どもだね。」

「わたしもどこからか聞いただけ。」青ちゃんがすこし恥ずかしくなった、「けどもう一つの話がある、決して嘘じゃない。」

「なに？」

「人間は長生きできないもの。」青ちゃんがこっそり話した。

「そんなことは、みんな知ってるよ。」

「わたしたちも長生きできないかもしれないよ。」長生きの知恵があるしーちゃんから突然の一言。

「えっ、本当に？」

「特に、今のように人間たちの集まってきた場所が、危ないよ。」しーちゃんは体をすこし曲げて話を続けた、「わたしたちは人間によって集まったけど、人間の力で消えるかもしれない。それは嘘じゃないよ、実際に友達に起きたことだ。」

みなさんははじめて人間の怖さに気づいた。

「しーちゃんの友達は今どうなっているの。」

「子どもになったよ。体はバラバラになっている。」

「子どもを産んだのかなあ。」

「かわいそう、わたしたちは子どもを産んだら、なくなるね。」

「決してそうでもないけど。」

「そうなの、わたしたちも子どもを持てるか。」

「力強いモノだけが出産できるって。」

「子どもを産むことは、運命だよ。力に関係はない。」

「でも普通なら産まないよね、産むと死ぬから。」

「それも運命だよ。産むか産まないか、わたしたちは決められないもんだ。」

「まさか、人間がわたしたちのことを決めるの。」

「そう、人間はある武器を持ってるから、なんでもできる。」

「武器って、」

「あっ、人間がきた。」

「気を付けて、わたしたちの言葉をわかる人間もいるらしい。」

あおい花柄のワンピースを着ている人間と子どもが入ってきた。わたしは人間の歩いているうちに揺れている裾を見つめていた。

「どうしたの。」青ちゃんはわたしの目線に沿ってあおい花柄のワンピースに気づいた、「あっ、わたしと似てるね。」

青い、碧い、蒼い、藍、ブルー、あおい空、あおい海、藍染め。美しい、空と海に溶けた色が青ちゃんの体を被っている。

あおい花柄ワンピースと一人の子どもは青ちゃんのところに戻ってしまった。子どもはうきうきしているようで、青ちゃんの体を触ろうとしていた。

「みどりちゃん、それに触らないで。」青い花柄のワンピースから、「みどりちゃん、走っちゃだめ、あぶないよ、あぶなーい。」

色の緑を名前にしたのだろうか。平和で美しい名前だが。

ばたんと、遠くから何らかの音が届いた。運命の音だ。あの時、博物館の悟られないような日常に溶け込んでいるわたしたちが、何も気付いていなかった。あおいワンピースはぎゅっと子どもの体を抱きしめて小声で慰めている。しーちゃんと青ちゃんの姿が突然に現れた人間たちに囲まれた。わたしたちはなにも見えなかった。何百匹の虫が湧いてくるように、人間たちの口から音が出ている。ケンカしているだろうか。たまに、この虫の群を潰せるぐらい、重い音が伝わったりしていた。

「しーちゃん、しーちゃん、聞こえてる？」青ちゃんの声だ、「体は大丈夫か、なんでここに浮かんでるの。」

しーちゃんがけがしたか、あるいは青ちゃんのほうが、わからない。

体が曲がったり割れたりするのが、わたしたちによく起きることだ。死なないが、長く生きていけばいくほど、いつか遭う事件だ。埃一つもたまっていないガラスの窓が付いた部屋に、わたしたちは住んでいるが、時々にもっと多くの人間を喜ばせるために、ガラスの窓から出る。その場合は一番危ない。しーちゃんと青ちゃんのように、外の人間に近づくのは命がかかる仕事。でもしーちゃんは大丈夫なはず。「船」と人間に呼ばれているから。自然に生まれた木の体が水の流れに逆らう力を持っているから。あそこに集まった虫の群は博物館の夜に向かいながら去っていった。

「しーちゃん、青ちゃん、大丈夫？」

返事がしばらく来なかった。博物館の日常に戻ったように静かだが、どこかがおかしい。

しーちゃんが行方不明になったことを知ったのは翌日。あのあおいワンピースと子ども事件からしばらく意識がもうろうとしていた青ちゃんがやっと元気になった。しーちゃんは霧に浮

かんでいるとこを見たって。

「霧じゃなく水だね、きっと。」

「しーちゃんは船だから、水があればどこでも行けるよ。」

「けど、何も言わずに去っていったのが、しーちゃんらしくないね。」

「しかも、近くに水はないね。」

「そういったら、青ちゃん、昨日どうしたの。」

青ちゃんは少し落ち込んでいた、「子どもはしーちゃんにぶつかったのよ。」

「えっ、しーちゃんはどうなった。」

「わからない。転んだ子どもはまたわたしのところに飛んできた。」青ちゃんはすこし怖がっているようで、「わたしはガラスの窓に当って意識不明になった。」

「危ない。」

「昨日見かけたあおいワンピースが連れてきた子どもだね。」

「そう、かわいがっていたのに、そんなに怖い人間だと思わなかった。」

「わたしは昨日の夜に、救急で病院に運ばれて手術をされたよ。目が覚めたら今だった。」

「かわいそう。足が短くなったの。」

「うん、だからスカートも短くしてくれたよ。」青ちゃんが泣きそうにつぶやいた。

「まあ、わたしたち、強いよ。体がバラバラになっても普通に生きていけそう。」

「それはそうだけど。」

「で、しーちゃんはまだ入院してるかもしれないね。」

「ずっと見かけていない。そこに医者さんの服を着ている人間がいるけど、どんな声を上げてもわたしの話を聞いてくれない。」

「わたしたちの声が聞こえないもん、人間は。」

「たしかに、言葉の違いということか。この間にしーちゃんはそれを言ったね。」

「しーちゃんのことを心配するね。」

「うん、大丈夫かな。」

「怖い話を聞いたよ、隣のＳ市博物館に住んでいたうちゃんも消えたよ。」

「本当か、どうやって消えてしまったの。」

「わからない、突然って、」

「ええ、知らなかった。普通に消えてしまったの。」

「そういえば青ちゃん、しーちゃんは浮かんでいるって、どういうこと。」

「夢か現実かわからないけど、たしかしーちゃんはガラスの窓を出てわたしのところに向いて笑っていたことを、見たんだ。その時に、しーちゃんの体はむかーしむかしのように、ゆらゆらと湿気に満ちた空気が浮かび上がっている。わたしは昔のしーちゃんを見たことがないけど、そう信じている」

「しーちゃんならきっとできるね、空気に浮遊することとか。」
「ねえ、けっきょく、しーちゃんはどこに行ったでしょう。」

モノたちのタタカイ

しーちゃんが消えてからしばらく経っていた。青ちゃんを見にきた人間も減っていた。みなさんはホールから二階の部屋に帰ってきた。隣にわたしたちを世話する人間がいる。
「うそよ、すべてはうそだよ。」あのおばあさんは青ちゃんの引っ越しを手伝いながらこっそりつぶやいていた。
わたしは青ちゃんのスカートに目立たない汚れが付いているのに気づいてびっくりした。いつも大事にされている青ちゃんだったが。
「どうしたの、青ちゃん、あのおばさんがやったの。」
「まあ、別におばあさんのせいじゃないと思うけど。」
「わたしはホールで聞いたよ。ここの博物館にいるわたしたち、すべて贋者だって。」
「贋者ってなに、」青ちゃんの話をだれも信じなかった、「わたしたち、実際に生きているモノではないか。」
「あの子どもにぶつかって、しーちゃんと一緒に病院に行ったじゃん。そこで検査を受けたよ。どんなに検査されたかわからないけど。戻ったらもう一回医者さんはわたしに会いにきたよ、ちょうど数日前に。」
「そうっか、どうだった。もう一回診てもらったの。」
「うん、そして昨日、わたしはまだホールにいたけれど、知らない人間はおばあさんを連れてきたんだ。その人は気持ち悪かったよ。ずっと手袋に隠れている手でわたしのスカートを触ってた。」
「それも医者さんなの。」
「違うみたい、検査というより、なにかの証拠を探しているらしい。」
「おかしいね、あの人間もおばあさんも。」
数日後、博物館のみなさんは急にあのおばあさんに呼びかけられて、ホールに集まった。青ちゃんやわたし、ずっと博物館に生活して外に一回も出たことがない仲間たちも、すべて集められた。行方不明になったしーちゃん以外。
巨大な車が博物館の出口に現われた。車が怪物のように口を開いてみなさんを飲み込んだ。まあ、怖いと思われるかもしれないけど、車の中に入ったみなさんには、思いがけないような旅の気分であった。小さい窓からは広漠たる畑が並んでいる都市と異なる風景が現われた。どこにいくのだろうと、外の世界にワクワクしている。
細長い田舎の川沿いに、整備されていない小道を走っている。雨だったからなのだろう、車から降りた青ちゃんのスカートに泥がついた。

「ひどい！ひどいよ！」

そう、ささやかな汚れがあってもやさしく拭いてくれる生活に慣れているモノたちは、車を出たとたんに別世界に迎えられた。なにかが変わった。しかしその時のわたしたちは、平和な日々に五感が封じ込められたように、密かに近づいてきたおっかない欠片を拾えなかった。

川敷にしーちゃんが！

このプランクトンが浮かんでいるキレイと言えない汚れ水の集まりを「川」と呼べるかはわからない。川敷も泥だらけだ。しーちゃんが目に入ったら、だれも信じられなかった。汚れがついた服を着ているしーちゃんをはじめて見たんだ。別モノのようだ。

「あっ、みなさんもここに来てたの。」しーちゃんがため息をついた、「やっぱり無理だね、どうしても無理。」

「どうしたの、しーちゃん！」

「わたしだけじゃなく、博物館のみなさんが人間に捨てられたんだ。」しーちゃんの衝撃的な一言に沈黙が続いていた。

その話を理解できるモノはいない。しかしどう聞いても、しーちゃんは詳しく言おうとしなかった。わたしたちは捨てられただろうか。わけがわからないまま、川沿いの小さい土地でみなさんの新生活がはじまった。ピカピカなガラス窓の部屋がなくなったので、体にたまった埃や泥水を拭きながら日々の生活を送っている。

川敷の近くに錆びついたビルが残っている。コンクリート造の五階建てに、昔の人間が使っていた廊下や階段がぼんやり見える。

「本当に見えるんだ。」

人間はあまり来ない川敷での生活は博物館よりずっとつまらない。モノたちはコンクリートビルの中を見るのを楽しんでいた。

「昔、賑わっていた建物だね。」

「多くの人間たちはあの階段を登ったり下りたりしていたね。」

「過去のことだけど、それも見えるの。」

「じっくりしたら見えるよ。わたしも古いモノだから。」

「本当だ、わたしも見える。」

「ねえ、あの人の手に座っているのは、青ちゃんじゃない。」

「そっくりね。」

川水は不思議に透きとおった色に変わった日もある。それでも、川を散歩しにきた人間たちはいない。わたしたちはいったいどこにいるだろうか。教えてくれるのはしーちゃんのみかもしれないが。

ある日、川敷に一人の人間が来た。青ちゃんの体を触りながら、唇がはやく動いていた。声が出ていないけど、驚いた様子。だんだん多くの人間たちがわたしたちを見にくるようになっ

た。何かを探しているらしい。博物館で会った頃と変わらない姿だ。人間はそういうものだろうか。いつも何かを掘り出して価値を測ったり、高いものを豪華な服を着せて見せたりする。一瞬で多くの人間たちはモノを美しい言葉で賛美する。しかし時間が経つと、掘り出されたモノは土に戻され、別の宝物を探しに行く。

モノたちは人間の姿を見ながら、緊張感が高まっていた。自分たちはこの川敷に永遠に寝るのか。それは寂しい。また博物館の日常に戻ったらいいと、人間たちの助けを密かに待っていた。

あの日の光景が忘れられない。

突然、毎日来ている人間と異なる振る舞いをしている二人が訪れた。何も言わずに青ちゃんに服をかぶって、錆びついた箱に入れた。青ちゃんは大変なことに遭うとみなさんは心配していた。

「大丈夫だよ、あのぼろぼろの箱に入ったが、きっといい場所に行く。」しーちゃんの話にみなさんはすこし落ち着いた。

「なんで、あの箱、怖くないの。わたしなら絶対に入りたくない。」

「昔、わたしもあのような箱に乗っていろいろなところに旅をしてたよ。いい思い出に。青ちゃんはきれいだから、あの豪華なマンションに行けるかもしれないよ。」しーちゃんは良いことばかりに口を出している。

そう、あの廃墟に近いマンションが人間の手でピカピカになったようだ。もちろんそれはしーちゃんから聞いたこと。しーちゃんはわたしたちの中で一番豊かな情報を持っている。あのマンションはすでに新しい博物館になっているらしい。わたしたちのようなモノは想像できない人間っぽいスピードだ。

「青ちゃんは本当にあそこに行ったの。そうしたらわたしも行きたいなあ。」

「わたしも。きれいだし、博物館に住めるし。」

「それは、世の中に、高いか珍しいか、価値のあると認められたものでしか入れない場所があるのだから。人間がつくった博物館もその一つ。」

しーちゃんの話に深みがあるらしいが、その時わたしは考える余裕がなかった。川敷に残されたモノたちは騒ぎ立てた。

「行くのは青ちゃんだけなの。」

「自分はいいけど、しーちゃんも行かせてもらわないとおかしい。」

「そうだね、けどわたしもあのマンションに住みたい。」

「わたしは自然に生まれたモノじゃないから、このまま自然に残されたのは、なんで。」

「わたしたちが、捨てられたね。」

「そうだね、博物館には、価値のあるものしか住めないって。」

「価、価値のあるって。」

「うん、ちょっと、そう言いたくないけど、青ちゃんにどんな価値があるの。」

「そういわれたらたしかに。」

「ねえ、わたしもわからない。」

「あの時もそうだった、青ちゃんとしーちゃんだけが国立博物館に行けた。」

「しーちゃんはまだわかるけど、」

いったん始まったら止まらなくなった。みなさんはずっといろいろ戸惑っているらしい。なぜかあまり丈夫で長生きできそうなものは、博物館に来ていた人間たちに褒められなかったり、価値が認められなかったりしているか。

もう博物館に住める価値のないわたしたちだが、なんで青ちゃんが突然に大事にされたか。ちょっとしたら割れて病んでしまう青ちゃんだが、なんで高く評価されているか。そもそも、いきなり川敷に湧いてきた人間たちの正体をどのモノでもわかっていない。あの人間たちはどんな資格を持って、わたしたちモノの行先を決めるだろうか。

なにもわからない。目の前には霧まみれ。わかっていないからか、胃に溜まったきつい言葉を吐き出したモノがいる。

「覚えてるの、青ちゃんが転んだ子どもによって一瞬にして壊れたこと。」青ちゃんの悪口が続いていた。

しーちゃんは静かにみなさんを眺めていた。価値のあるのは自分だと、みなさんは一生懸命になった。

「あなたも同じじゃない、いつも博物館の後ろに寝ていて、ちょっと動いたらぼろぼろになる。ここに来てから自分の様子をまだ見てないだろう。もうやばくなったよ。」

「何をいってるの、ケンカしたいの、お前こそ見た目がめちゃくちゃになってるよ。」

「そういえば、ミズメザクラで丈夫な体を持つわたしこそが、価値があるじゃん。」

「違うよ、時間が経つとあなたの体は柔らかくなるだろう。わたしのほうが、強くてどこにいっても生きていけるよ。」

川敷は大混乱に陥れた。ずっと仲良くしていたわたしたちは、はじめてケンカした。

「それは生死にかかわる闘いだ」とわたしはこっそり思っている、「人間はわたしたちのこの闘いを楽しんでいるのだろう。」

あるモノが落ちた。落ちたモノが川水に流された。あるモノの手や頭は川敷に散り散りになっている。

「わたしこそ価値のあるだ！贋物じゃないよ！見てくれ！」バラバラになっている体に、まだ価値があると信じている。

しかし、モノたちの叫びを聞こえる人間は、いない。

青ちゃんはどこに行ったのだろうか。

にせモノたち

「ここにいるよ。」青ちゃんはわたしの体をやさしくあたった、「モノたちのこともあなたのことも、わたしへの悪口も、全部書いてね、もっと読みたいから。」

「わかった！」青ちゃんの一言で、川敷にいるモノたちのタタカイから目を覚め、元気に戻った。人間に連れられた青ちゃんは、人間からある武器をもらったらしい。わたしは青ちゃんの力を借りてすべての手を使って書く仕事をし続けていく。

わたしも怪物だね。人間によってつくられた怪物。人間が生きているうちに産んだ、欲しいもの、達成できない願望、待っていても来ないもう一人の人間の面影を、すべてわたしの体に入れた。わたしはそうして生まれた。不思議でしょ。この体は、はじめから自分のものではないかもしれない。人間はわたしを産んで、使って、時間が経つと散り散りにする。モノを大切にしている時代もあり、ごみのように捨てることもある。

見て、わたしの体に付いているたくさんの手は、人間の手の形を真似したね。しーちゃんの体も、元々は長細い一本の木だったが、船の形にされたね。人間はしーちゃんの体を削ったり、叩いたりしたから。千手菩薩と呼ばれているわたしは、人間らしい顔をしているが数多くの手を持つね。普通の人間なら、これだけの手を持つときっと怖がられるだろう。けど菩薩だったら大丈夫、逆に拝まれている。怪物の体で人間たちの敬意をいただくが、わたしは人間によって創ったモノに過ぎない。わたしの体に歪みが生じた数年前に、博物館に運ばれた。博物館に住んだら、わたしの前に手を合わせた人間が減っていたよ、なぜかわからないけど。まあ、博物館でも川敷でも、あるいは豪華なマンションにいっても、わたしたちモノは永遠に、人間に無言の叫びをしている。わたしの価値と居場所が人間に、しかも人間だけによって決められる。

青ちゃんに救われたわたしは、青ちゃんのように力強くなれないだろう。わたしは川に流されていく日を待っている。

（ちょう むしょう　同志社大学大学院博士後期課程）

魔法を奏でる場所

星來 杏樹

Witchcraft(ウィッチクラフト）というのが、その店の名前だった。

京都の祇園は、古くからの花街で知られる。八坂神社から、四条通りを西に向かうと、小さな路地があり、そこを入っていくと、明け方まで営業している、夜の仕事の人のための喫茶店、ケーキ屋、花屋、キャバクラ嬢のための衣装ショップが立ち並ぶ。

「橋本さん、よく祇園に来られるんですか？」

水月（みづき）は、夜の路地を歩きながら、隣を歩いている先輩に尋ねた。

「うん。父親がジャズトランペッターだったの。だから、小さい頃から父に連れられてよくライブハウスに出入りしてたんだよね。」

「小さい頃から・・・。」

どおりで、たった２つしか年齢が変わらないのに、先輩には、自分とは違う世界の人のような、大人っぽさというか、艶っぽさがあると思っていた、と水月は内心納得していた。

「先輩も、なにか楽器をされてるんですか？」

「ううん。趣味でたまに歌うくらい。小さい頃から聴いていたからジャズは好きなの。」

勤務先のホテルの先輩である橋本に、「白石さん、今度ジャズのライブいっしょに聴きに行かない？」と誘われたのは３日前の仕事帰りだった。ホテル勤務はシフト制で、橋本と同じ時間に終わる日はそれほど多くない。水月は、まだ入社したてということで、日勤ばかりのスケジュールだったが、橋本は時々夜勤にも入っていて、朝出社すると、徹夜明けの橋本から仕事の引き継ぎを受けることもあった。水月が関西の外国語大学の英文科を卒業して、中堅のホテルに入社してから２ヶ月になる。先輩の橋本は英語が堪能で、仕事ができる頼りになる上司だった。

「ジャズって、お店の BGM で流れているのしか聴いたことなくて、全然知らないんですけど、初心者でも大丈夫でしょうか？」

「気にしなくて大丈夫。知識が増えてくると、楽しみ方も深くなるけど、ジャンルに関係なく、音楽は、結局自分の心に響くかどうかだけだから。まあ、それはわたしの個人的な意見だけどね。全然知らなくても、十分楽しめると思うよ。好みは人それぞれだけど、なんとなく、白石さんは今日の出演者の音楽が好きそうな気がする。」

「・・・あの、服装とか、どんな服で行けばいいですか？」

水月は、勇気を出して橋本に尋ねた。昔テレビに出ていた元女優のジャズ歌手は、露出の多いセクシーな服を着て、濃い目の化粧をしていた。そんな洋服は持っていないが、さすがにジーパンに T シャツは違う気がする。

「いま着てるみたいな服で十分。お客様もいろいろで、バッチリおしゃれしてるお姉さんもいれば、仕事帰りのスーツのおじさんも、自営業のカジュアルなお兄さんも、近くの水商売のママさんもいるし、みんなバラバラだから。それに、みんな大して他の人のこと気にしてないから大丈夫。」

橋本は、ベージュのカットソーに黒のパンツをはいた水月をみながら、軽く微笑み、答えてくれた。

今日出勤する際、何を着ていくかずいぶん迷ったが、年上の従妹の結婚式の二次会用に買った、袖のところが透けているシンプルな黒のワンピースに、ひとつだけ持っているパールの小ぶりのネックレスを合わせた。裾が A ラインになっていて、なんとなくこどもっぽいような気もしたが、持っている服の中ではこれが一番大人っぽいので仕方ない。

待ち合わせ場所に現れた橋本は、なめらかな深紅のブラウスに黒いパンツという出で立ちで、潔くなんのアクセサリーもつけていない。仕事のときはシニヨンにしている長い髪をおろすと、腰ぐらいまであり、外国人のように波打ったロングヘアが、くっきりとした顔立ちによく似合っていた。先輩、やっぱり大人っぽいなあ、水月は憧れにも似た気持ちで、橋本のすらりとした姿に目を走らせた。

路地を歩いて行くと、ビルの前にテナントの看板が並び、ネオンが光っていた。

「B1　Witchcraft」と黒地に白い文字で書いてある。

階段を降り、右手にあるドアを橋本が押して振り返り、水月に先に入るようにうながした。

「いらっしゃいませ」

扉が開くと、薄暗い店内の空気を、低いベースの音が彩っていた。一瞬で、いままでいた世界と違う世界に紛れ込んだような気持ちになる。

黒ずくめの服を着た、痩せた初老の男性がにこやかに迎え入れてくれた。

「こんばんは。」

こういうお店ではどう挨拶すればいいのだろう、とためらいながら、水月はおずおずと挨拶した。

水月の後ろから、橋本が手を振りながら「マスター、おひさしぶりです」と笑顔で言う。

「結衣ちゃん、ひさしぶりやなあ。ご予約ありがとうございます。お待ちしておりました。」

マスターと呼ばれた男性が、奥のテーブルに水月と橋本を案内しながら、嬉しそうに答えた。

橋本はメニューを水月に見せながら、「白石さん、何にする？」と尋ねる。

「わたし、お酒飲めないんですけど、いいですか？」

と、水月は、またもや肩身が狭いような思いをしながら、小さい声で橋本に聞いた。

「大丈夫。ソフトドリンクはここ。」

と橋本がソフトドリンクのメニューを指さす。

「じゃあ、ジンジャーエールをお願いします。」

「甘いのと辛いのがあるけど、どっちにする？」

橋本が尋ね、

「じゃあ辛いほうでお願いします。」

という水月の返事を聞くと、手を挙げてマスターを呼んだ。

「辛いジンジャーエールと、ジャックダニエルのロックお願いします。」

マスターが伝票に注文をメモして去ると、50 代くらいの大柄な男性がテーブルに近づいてきた。ベージュの麻のジャケットの中に、シルクのような、光沢のある水色のシャツを一番上のボタンを外してさらりと着こなしている。美男子といえないこともないが、人の良さそうな雰囲気が印象に残る人物で、嫌みがない。

「おー。結衣ちゃん。えらいひさしぶりやな。元気しとったんか。」

大柄な身体にふさわしい、大きな声で男性が話しかけてきた。

「川井さん、おひさしぶりです。そうなんです。最近仕事が忙しくて、なかなかうかがえなくて。今日は楽しみにしてきました。」

橋本が屈託なく笑いながら、そう言い、水月のほうをさしながら、「職場の後輩も連れてきました。きっと川井さんのピアノが好きだと思って。」と紹介する。

「おおきに。さすが、べっぴんの知り合いはべっぴんやな。今日の演奏、気合い入るわー。」と男性はぐるぐる腕をまわす振りをしながら、ピアノのほうに戻っていく。

くすくす笑いながら、橋本が水月にささやいた。

「今日のピアニストの川井さんね、さっき話した父の昔の音楽仲間だったの。父はわたしが小学１年生のときに亡くなったんだけど。」

「そうなんですね。」

「娘のわたしがいうのもなんだけど、すごい男前でね。ミュージシャンだから出会いも多いし、なんていうか、人たらしで、老若男女問わず、すごくモテたんだよね。まあ、女好きでもあっ

たから、常に何人か恋人がいて、わたしは母が家でひとりで泣いている姿をしょっちゅう見てた。」

「・・・」

「そんな顔しなくて大丈夫。もう昔のことだから。母は、この間再婚して幸せだし。当時の母はかわいそうだったけど、人気商売だし、そういう危なっかしいところも父の魅力だから仕方ないと、幼いながらも娘としてはなんとなく父の肩を持っていた。変な娘かもしれないけど。父がある日突然、車に轢かれて死んじゃって、わたしは東京にいる母の両親に預けられたの。母は事務員のパートの仕事してたけど、薄給だったし、父親が亡くなったあと、借金があったこともわかって、わたしを育てるのは無理だったんだよね。小学校から大学まで東京にいて、卒業してから関西に戻ってきた。東京に転校したとき、いじめられないように毎日必死で標準語練習したから、いまでも関西弁はあんまり使えないんだよね。」

「そうなんですね。先輩、全然関西の訛りがないなあって思ってました。」

「うん。いま考えると馬鹿みたいかもしれないけど、こども用の本読みのテキストとカセットテープを買って、毎晩家に帰って、聴きながら練習してたの。祖父母に隠れて、部屋で小さい声で。完全に訛りがなくなるまで、教室ではあまりしゃべらないようにしてた。だから、友達も中学に入るまではほとんどいなかったな。休み時間は一人で本を読んでいたから、変わり者扱いされて、いじめられかけたりもしたけど、そのときは父を亡くしたショックもあって、心ここにあらずだったんだよね。いじめてもあんまり反応しなかったら、気持ち悪がってそのうちみんな離れていったわ。」

他人事のように、橋本が淡々と話を紡いでいく。

マスターが細長いグラスと、丸く背の低いグラスを銀のトレーに載せて運んできた。

BGM はいつしか、ギターの静かな音色に変化している。

「どうぞ」

飲み物と、パステルカラーのハート型のラムネがいくつか、ナッツがすこし、チョコレートがひとつ入った、ガラスの小皿が添えて出された。

「とりあえず、乾杯」

言いながら橋本がグラスをとる。水月は、ちいさな泡が立ち上る細長いグラスを上に持ち上げて乾杯した。

「ごめんね。仕事の話以外ほとんど話したことないのに、いきなりこんな話して。白石さん、入社したときから、なんだか気が合いそうって思ってたの。お客様の話も、清掃のスタッフの話も、いつも同じようにちゃんと聞いてるじゃない？お客様や上司にだけいい顔する人も多いけど、白石さんは裏表がなくて、信頼できそうって思ってたんだよね。」

橋本がそう言った時、BGM の音楽が止み、店内のざわめきが静まった。

腕時計を見ると、8 時をすこし回ったところだ。

ピアノの前に座った川井は、目を閉じてすこし天井を向き、何かに耳を澄ませているようだった。

おもむろに鍵盤に指を置き、単音で音を紡いでいく。すこしずつ音が増えていき、やがて大きなうねりになっていく。それはまるで、小さな川が流れていく内に次第に大きくなり、大海になっていくのを見ているようだった。

水月は、幼いころピアノを習っており、中、高、大学では、周りの友人たちと同じように、日本のポップスを聴いて育った。ピアノの教師からは、音大を受験することも薦められたが、家庭の経済状況を考えるとそれは無理だと考え、両親に言い出すことはなかった。ピアノは高校受験の前に辞めてしまったが、辞めた後も、たまに好きな曲の楽譜を買って家で弾くのが好きだった。しかし、今日聴く音楽は、それまで聴いてきた音楽とはまったく違っていた。川井は、楽譜を見ておらず、時々、自分の出した音に、驚きとも喜びともつかない声で反応していた。

音が、蒼いー。

水月は、心の中でつぶやいた。

音に色があるかどうかはわからないが、いま聴いている音は、黒でも茶色でもなく、夜中にふと目が覚めたときの、薄蒼い空気の色に似ていた。

寂しいとも、切ないともつかない感情が溢れ出る。

この感情に名前があるのだろうか。

どれくらい時間が経ったのだろう。あっという間のようにも、永遠のようにも感じられる時間。次第に音の海の波は優しく軽やかになり、最後は夜空のような静けさに戻った。

パラパラとまばらな拍手が起こった。何度か行ったことのある、大きなホールでのクラシックコンサートの拍手とは違っている。あまり音は大きくないが、ピアニストに寄り添うようなあたたかい拍手だった。

「1930 年代に書かれた、How Deep Is The Ocean という曲をお届けしました。恨み節みたいな歌詞がついていますが、タイトルを意訳すると、愛の海、みたいな感じでしょうか。僕の適当な和訳ですが。

続いて、僕のオリジナル曲を演奏したいと思います。

僕は、若い頃しばらく NY に住んでいたんですが、そのときに、黒人のミュージシャンたちと一軒家でルームシェアをしていました。みんな気のいい奴で、音楽について知っていることは惜しみなく教えてくれた。まあ、若かったから、卑猥な冗談を言って笑いあうことも多かったけど、こと音楽に関しては真剣で、夜通し議論することもしょっちゅうだった。僕の人生の中で、間違いなく宝物といえる時間です。そのときのことを思い出しながら書いた曲です。

”Tomorrow May Not Come.（明日は来ないかもしれない）”　聴いてください。」

さっきの曲とは打って変わり、出だしから激しく叩きつけるような音楽が始まった。
ずっと低音でリズムが打ち鳴らされ、右手はそのリズムに合わせて踊っているようだ。

音楽を聴きながら、水月は、大学時代に交際していた孝史のことを思い出していた。彼とは、演劇サークルで知り合った。一つ上の学年で、帰国子女だった孝史は、ネイティブのような発音で流暢な英語を話す青年だった。父親の仕事で、ドイツ、アメリカ、中国、といろいろなところを転々としたそうだ。フランス語は話せないから勉強したい、と仏文科を選び、サルトルの研究をしていると話していた。サークルの新入生歓迎会で、ゲームのペアになったことをきっかけに親しくなり、孝史のほうから交際を申し込んできて、しばらくつきあった。

話題が豊富で、自立した考えを持っている孝史と過ごす時間は楽しかった。政治についても、いつも自分なりの考えを持ち、歯に衣を着せずに意見を言うところも、頼もしく感じていた。しかし、その反面、水月はいつも「私なんかには釣り合わない人なのかも」と劣等感にも似た思いを抱くことが多かった。客観的に見れば、水月の家庭は、とりたてて裕福なわけではないが、生活に困っているわけでもなかった。ごく普通の暮らしをしているサラリーマン家庭に育ち、両親の仲も悪いわけではない。容姿も、モデルのような体型や絶世の美女というわけではないが、やや小柄で細身の体型で、「水月って、ちいさくて、細くて、”女の子”って感じだよね。かわいくて羨ましい。」と友人に言われることも多かった。名門と言われる外国語大学の英文科にストレートで入学し、留年することもなく卒業した。学歴もどちらかと言えば人に自慢できるものだろう。

それなのに、どうしても自信を持つことができなかった。

孝史には男友達も多かったが、女友達も多く、在学中から起業している友達、学業の傍ら、女優やモデルの仕事をしている他大学の友達もいた。華やかで、孝史と同じように闊達に意見を述べる彼女らと楽しそうに話している彼を見ていると、自分の居場所はそこにはない気がして、辛くなった。やがて、孝史に誘われても、彼の友達の集まる場所には、いろいろな理由をつけて行かないようになった。そんなある日、ひさしぶりに会ってドキュメンタリー映画を観に行った帰りに、彼のほうから別れを切り出されて、終わりになった。

ほんとうは、彼の友達といても、引け目を感じずにいられる自分になりたかった。でも、どうしても無理だという思いが先に立ってしまい、サークルでも、自分から裏方に手をあげ、黙々と小道具や大道具をつくっていた。化粧もほとんどしたことがなく、いつもシンプルなシャツとジーパン、スニーカーで通学した。孝史と別れてから、服装はさらに地味になっていき、やがて孝史に会う気まずさに耐えられなくなり、演劇サークルもひっそりと辞めた。

ホテルに就職を決めたのは、引っ込み思案な自分を変えたいと思ったからだ。きちんと化粧をして、制服を着れば、洋服のセンスに対するコンプレックスも持たなくて済む。人とかかわ

るのは得意ではないが、仕事は真面目だから、接客はできるのではないか、と思った。
　いま、自分を変えなかったら、一生うじうじしたままで終わってしまう。そんな気持ちで飛び込んだ仕事だった。
　ホテルの業務は、表向きは華やかでも、裏側はいつも慌ただしく、ピリピリしている。根がのんびりしている水月には、自分の不器用さに落ち込むことも多かったが、無理にでも笑顔をつくり、接客をする仕事をすることで、強くなれるような気がしていた。先輩の橋本も、厳しいが、褒めるときはきちんと褒めてくれる信頼できる上司だった。

　―激しい音楽が止み、またあの独特のあたたかい拍手が起こる。川井は、何曲か演奏を続けた。古い曲、川井が好きな、ビリー・ストレイホーンという作曲家の曲、オリジナル曲、マイルス・デイビスというトランペット奏者の曲。ゆっくりしたバラード、リズミカルな曲、明るい曲、爽やかな曲など、曲調も作った人もさまざまだった。まるで、さまざまな風景が移り変わり、光がそのなかを通り抜けて、短編映画を観ているようだった。
　やがて、「それでは次の曲で、1 セット目最後の曲です。」と川井が述べた。

　「次の曲を作った友人は、20 年ほど前に交通事故で亡くなりました。ものすごく才能のあるトランペッターで、いい奴でした。みんな彼のことが好きだった。まあ、よく奥さん泣かしてましたが。彼は、”人間はいつか死ぬ。だから、この瞬間を生きなあかん。”といつも言っていました。“いつか”とか言っておいて、かなり若くして死んでしまいましたが、彼の音楽は、ほんとにいつもその瞬間を生きていた。ちゃんと音楽の学校に行ったこともなくて、独学だったけど、すごい耳をしていて、ジャズを演奏するために生まれてきたような奴でした。天才は早く死ぬってほんまやなと思います。だから、僕はきっと長生きします笑
　聴いてください。橋本大介の作った ”Indigo Moments（インディゴのとき）”です。」
　川井が話し、やがて流れるような音楽が始まった。
　哀愁を帯びたワルツを聴きながら、水月は、隣の橋本の横顔を見た。鼻筋の通った横顔に店のライトで翳りができ、モノクローム映画の女優のように見える。
　橋本は、曲を聴きながら何か思い出しているように、川井ではなく、その少し遠くを見つめていた。
　亡くなったお父様のことを思い出しているのかな。
　水月は、そう思いながら、小学一年生だった橋本を想像した。
　きっと、その頃から聡明そうな顔立ちをした、美しい少女だったに違いない。
　しかし、愛する父親を突然失った悲しみや、住み慣れた家を離れて、突然祖父母のいる東京に預けられた混乱や不安で、暗い表情をしている橋本の姿が見える気がした。
　音楽を聴いて、こんなに、さまざまな想い出や感情を呼び起こされるのは初めてだった。きっとジャズという音楽の持つ力もあるだろうが、川井という人間の持つ想いの強さも、隣にいる

橋本という女性の生きてきた時間も、このお店自体の持つ磁力も、さまざまな要因が重なっているのかもしれなかった。

休憩時間になると、低い女性の歌声の BGM が流れ始めた。

橋本は、黙ってウイスキーの入ったグラスに口をつけている。

何か言わなければならない気がして、水月は口を開いた。

「ジャズって、とっても、素敵な音楽ですね。もっといろいろ知らないと聴いちゃいけないものなのかと思っていました。」

「気に入ってくれて、よかった。わたしも川井さんのピアノが大好きなの。さっきも話してらしたけど、川井さんは、20 代の頃アメリカで活躍されててね。でも、しばらくして原因不明の病気で右手が使えなくなって、帰国したそう。ピアニストとしては、再起不能と言われていたらしいわ。父が川井さんと知り合ったのは、川井さんが帰国したまもなく、左手だけで演奏しながら、リハビリされてる最中だったって聞いてる。わたしが物心ついた頃には、もう右手はだいぶ使えるようになっていたけれど、昔みたいに速いフレーズは弾けないってよくおっしゃってたのを覚えてる。絶望して、アルコール依存症だった時期もあるみたい。でも、父は川井さんのピアノが大好きだった。人間的にも好きだったんだと思う。よく、もっとうまい奴はいくらでもいる。でも、あいつのピアノは、ジャズなんだ。一緒にやると、アメリカにいる気がするんだって言ってたな。」

低い声で静かに答える橋本に、水月は、ジンジャーエールを飲みながら、おそるおそる尋ねた。

「ジャズって、どういう音楽なんですか。ごめんなさい。わたし全然知らなくて。」

「もともとアフリカからアメリカに無理矢理連れてこられた黒人が奴隷として働いていたときに労働歌のように歌っていたブルースと、ニューオーリンズのさまざまな文化発祥の音楽が混じって発展してきたって言われてる。ジャズの歴史の本には、ダンスミュージックを経て、芸術性を追求する音楽へと変化してきたって書いてあることが多いかな。さっき演奏されていたマイルス・デイビスは、ロックと融合させたり、電子音楽と融合させたりして常に新しい可能性を追求したジャズの帝王と呼ばれることもあるわね。

いまは、クラシック出身の演奏家も多いから、現代音楽とも融合されているし、世界中の民族音楽も取り入れられている。そのスタイルもほんとに多様で、何がジャズだと一言で定義することはむずかしいけれど、わたしは、父が川井さんのピアノをジャズだといっていた気持ちがわかる気がしているの。」

水月は、なんとなくわかるような、わからないような、不思議な感覚に捉えられていた。しかし、嫌な気持ちではなかった。橋本は続ける。

「わたしは、クラシックを学んだことがなくて、学校の音楽の時間に楽譜のことを習っただけだけど、クラシックだと、上級になれば、楽譜がどんどんむずかしくなっていくでしょう？」

「はい。」

「ジャズは、曲自体がむずかしいものもたくさんあるけれど、ブルースや、みんなが演奏できるスタンダードと呼ばれている曲は、曲自体はシンプルなものが多くて、ベテラン奏者も、今日楽器を持ったばかりの初心者も、一緒に演奏できるの。誰もが知っている童謡の、ちょっと大人の歌ヴァージョンみたいな感じかなあ。ミュージカルや映画の中の歌も多いんだけどね。みんなたいていその歌を覚えていて、楽譜がなくても演奏できることが多いし、歴史上の天才たちも、その曲をレコーディングしている。もちろん、初心者は上手な演奏はできないかもしれないし、ちょっと合わないような、変な音を出してしまうかもしれない。それでも、一緒に演奏することは可能なの。」

「初心者でも、ですか？」

「うん。わたしも、小さい頃は簡単な曲をセッションで歌わせてもらってた。英語の意味なんて全然わかってなかったんだけど、レコードから聞こえてくるまま、真似をして歌ったり踊ったりするの、大好きだったから、自然に覚えていたのね。」

そこまで話したとき、川井がまたテーブルに近づいてきた。

「結衣ちゃん、よかったら次のセットで一曲歌うか？僕、結衣ちゃんの歌ごっつ好きなんや。」

「最近あんまり練習できてないから、歌えるかなあ。」

橋本がすこし困ったように言うと、マスターも近づいてきて、「うちはプロ以外は飛び入りは禁止してるけど、結衣ちゃんは別や。何せ、三歳でセッションデビューした超ベテランやからな。結衣ちゃんさえよければぜひ歌ってな。」とたたみかけた。

「俺らも結衣ちゃんの歌ひさしぶりに聴きたいな。何か歌ってや。」

カウンター席にいた、常連客とおぼしき数名の男性たちにも、会話が聞こえたのか、声があがった。

結衣は、すこし考えてから、「わかりました。じゃあ、マスター、氷が入ってないお水を一杯いただけますか？」と答え、マスターがうなずいて奥に去って行くと、「ちょっと外の空気吸ってくるね。」と言って、店の外に出て行った。

ひとり残された水月は、あらためて店内を見渡した。青く塗られた壁には、モノクロの写真がたくさん飾られていた。ぎょろりと目をむいた、トランペット奏者の写真。シルエットだけになっている長身のピアニストの写真。眉間に皺を寄せて目を閉じている、ベース奏者の写真。白い花を髪に飾った女性歌手の写真。

小学校、中学校の音楽室にも、後ろに有名な作曲家の肖像が飾られていた。けれども、いま店内に飾られている写真とは何かが違う。黒人が多いというのも一つなのだが、なんだろう。うまくいえないのだが、これらの写真の人物たちも、一緒にこの空間にいて、音楽を聴いているような気がするのだ。写真からは、カミソリのような鋭い空気が伝わってきて、半端なことは許さない、と暗に言われているような気がした。

扉が開いて、外の明かりが細く差し込んだ。

橋本が中に戻ってきて、ピアノの川井のところに行き、低い声でなにかささやいている。

やがて BGM が止んで、川井がピアノの横に置かれたスタンドからマイクをとって話し始めた。

「えー。みなさん。では２セット目を始めようと思います。今日のお客様はほとんどご存じだと思いますが、さっき話した友人、橋本大介の愛娘、結衣ちゃんが遊びに来てくれてます。僕が初めて結衣ちゃんに会ったのは、たしか彼女が二歳の時、この店でした。大介と一緒にセッションに遊びに来て、音楽が始まると立ち上がってにこにこしながら踊ってました。その動きが、ばっちりリズムに乗ってた。この子は将来すごいミュージシャンになるで、と僕は大介によう言ったもんです。せっかくなのでさっきむりやり結衣ちゃんに頼んで、一曲歌ってもらうことにしました。曲は The Nearness of You,　あなたのそばにいれば、何もいらないというラブソングです。」

橋本がステージに立ち、すこしマイクの確認をすると大丈夫というように川井のほうを見てうなずいた。

川井が、神経を集中した様子でゆっくりと前奏を弾き始め、やがて低くハスキーな橋本の歌声が重なった。

聴いている水月の身体に、説明できない衝撃が走り、全身に鳥肌が立つのがわかった。

それは、普段知っている、先輩の橋本ではなかった。

まったく自分が知らない歌手が目の前にいる。すぐそばにあるステージがとても遠く感じられ、自分には手が届かないように思える。

昔、音楽をやっていた頃、ピアノの教師に耳の良さを褒められることが多かった水月には、音程が合っているかどうか、テンポが合っているかどうか、音楽的なレベルがどれくらいか、そういったことは、聴けばすぐにわかる。だが、いま鳥肌が立っているのは、歌がうまいから、という理由ではなく、もっと言葉にならない深いレベルでの感動なのだ。魂を素手で掴まれて、揺さぶられているようだった。さっき橋本が話してくれた生い立ちのことや、父親の話を知らなくても、その人の生きてきた時間が透けて見えるような、といえばいいだろうか。聞いたことはないが、橋本が過去に愛したであろう人との想い出も、歌の中に織り込まれているような気がするのだった。

気がつくと、水月の頬を、一筋の涙が伝い落ちていた。

やがて、音楽が終わり、橋本が静かに礼をした。

客席からは大きな拍手が起こり、川井は橋本の方に手を差し伸べ、握手をしている。

「結衣ちゃん、ありがとう。大介が生きとったら、三人で一緒にライブしたかったなあ。また遊びに来て歌ってください。」

川井はそう言って、優しい笑顔を向けた。

橋本は、ステージを降り、テーブルに戻ってきた。マスターがそっと近づいてきて、いつの間にか空になっていたウイスキーのグラスを下げ、代わりになみなみつがれたウイスキーの新しいグラスを橋本の前に置いた。橋本が目を伏せると、マスターはいいから、いいから、というふうに軽くうなずいて席を離れた。

橋本も、水月も、お互い黙って目を合わせようとはせず、川井の指先が奏でる音色に耳を傾けた。

その間、水月の中で、小さな決心が湧き上がっていた。

—ジャズピアノを習いに行こう。

時々好きな楽譜を買って弾いていたと言っても、就職してからはとくに、仕事で疲れていて、最近はほとんど練習できていない。ジャズのことは全然わからない。でも、あんなふうに弾けるようになりたい。

ライブが終わり、さっきまでとは打って変わった、激しいロック調の音楽が BGM で流れ始めた。水月は、橋本に「橋本さん、あの、わたし川井さんにジャズピアノを習いに行きたいんですけど、直接お聞きしてもいいですか。」と尋ねた。

「もちろんよ。川井さん、喜ぶよ。個人レッスンもされているはず。あとでこちらに来たときに繋ぐね。」

そう言って、橋本はふわりと微笑んだ。

そして、低い声で続けた。

「あのね。会社には伝えてるんだけど、わたし、来月いっぱいで仕事を辞めて、アメリカに行こうと思ってるの。」

「え？」

「ずっと迷っていたんだけど。川井さんが、NY の友達を紹介してくれると言っていて、安く住まわせてもらえそう。まあ、そんなにお金はないから、せいぜい居られるのは一ヶ月だけど、そのあとどうするかは、向こうに行ってから考えようと思ってるんだ。」

「ジャズの勉強に行かれるんですか？」

「うん。ライブ聴きに行ったり、セッションに遊びに行ったりしようと思ってる。でも、それだけじゃなくて、もっといろいろな人に出会って、これからの自分の人生について考えてみたいの。高校を出てから、祖父母に立て替えてもらった大学の学費を返すために、ホテルでアルバイトを始めて、そのまま社員にならないかと声をかけてもらって、関西の系列ホテルに就職して働いてきたけど、ずっと自分自身のことから逃げてきた気がするの。いつも、母のため、祖父母のため、と考えてきて、自分がほんとうは何をしたいのかなんて考えたことなかった。

プロのミュージシャンになればとずっと言ってくれる父の古い友人も何人かいるんだけどね。父は、音楽家としては才能や人気や運に恵まれていたかもしれないけれど、家庭生活は破

綻していたし、苦労していた母の姿を見ているから、どうしても足を踏み入れる気がしなくて。ずっとごまかしながらきたんだけど。でも、音楽やジャズがほんとに好きだし、このままホテルで働いていくのは、やりがいはあるけど何か違うのかなとも思う。今日は、そのこともマスターに伝えに来ようと思っていたの。ついでに、音楽が好きそうな顔をしてる白石さんも巻き込んできたってわけなんだけど。」

橋本はそういっていたずらっぽい表情をしてみせた。

川井がテーブルに近づいてくると、橋本が「川井さん、白石さんが、ジャズピアノ習いたいって言ってるんですけど、連絡先を教えてあげてもらえますか？」と話しかけた。川井は少し驚いたような表情をしたが、すぐに嬉しそうに頷いた。

携帯電話を取りだし、操作している川井の姿をみながら、

何かが、始まる―。

水月の胸に、わくわくするような予感が走った。

それは、幼い頃、魔法使いを夢見て空想していたときのような、淡く軽やかな予感だった。

（せら　あんじゅ）

真夏のあわいの淡い恋

茶園 敏美

日常生活の習慣から逸脱した行動は、ときに生涯忘れられない出愛（であい）を運んでくることがある。たとえば、いつもと違う道を通ったとき、あるいは、いつもと異なる時間に散歩をしたときとか。このような事象が起きるのは、場の力の為せる技かもしれない。

漆黒の美少女

蒼（あお）は朝起きるとすぐ、空模様を確かめる。晴れていたら朝散歩に出かける。マジックアワーの時間帯に、散歩を楽しむために。

マジックアワーは二種類ある。日の出前と日の入後の空が濃いブルーとパープルのグラデーションになるブルーアワーと、日の出後と日の入前の空がマーマレイド色に染まるゴールデンアワーだ。朝夕それぞれ小一時間かけて、魔法にかけられたような空の変化を堪能できる。

蒼はマジックアワーの空を愛でながら、時間をかけて歩くのが大好きだ。特に夏の早朝の散歩道に漂うひんやりとして静謐な空気を吸うと、蒼はなんともいえない幸せな気分になる。

自由業の蒼は、満員電車に揺られて決まりきった時刻に仕事場へ向かう必要はない。好きなときに寝起きできる生活も可能だけれど、蒼は早寝早起きの規則正しい生活を心がけている。生活のリズムを狂わせないためだった。自由業といっても蒼は経済的に不安定なので、心穏やかに暮らすために生活のリズムを大事にしている。生活のリズムが狂ってしまうと、なし崩しに生きる希望さえも潰えるような気がしてしまう。

その日蒼はうっかり寝過ごしてしまって、やむをえず朝散歩を夕散歩に切り替えた。なぜうっかり寝過ごしてしまったのか、蒼に心当たりはなかった。

夕散歩に出たのはいいけれど、真夏はゴールデンアワーになっても坂道の照り返しがきつい上に、この日の暑さはとりわけ厳しかった。

蒼は歩いて五分とたたないうちに、頭が痛くなって吐きそうになった。あきらかに熱中症だと蒼は思った。今ならすぐ引き返せば、大事に至らずに済む。

蒼は来た道を戻ろうとすると、心の中がざわついた。家を出るときに、散歩の途中で素敵なことが起こりそうな予感がしたことを蒼は思い出した。

「後悔先に立たず、だよな」

蒼は自分に言い聞かせるように呟くと、夕方の散歩をとことん楽しむことにした。

「それにしても、今日はなんて酷い暑さだ」

蒼が歩いている急勾配の坂道の両端は、高さ二メートルのコンクリート塀が続いている。容赦なく照りつける陽射しを遮ってくれる庇は、どこにもない。

立ちくらみを起こしそうになった蒼は、一瞬でもいいから涼が取れる場所はないかと、あたりを見回した。

突然蒼の目と鼻の先に、緑のトンネルが広がっていた。

蒼はよろけながらありったけの力を振り絞って、緑のトンネルに入った。その途端、蒼の全身にまとわりついていた熱気は、瞬時に蒸発した。

「助かった」

蒼は安堵のため息をつくと同時に、こんな苦しい思いまでして散歩を続けている自分のことが滑稽に思えて、大笑いした。

ひとしきり笑った後、蒼は辺りを見回した。緑のトンネルに見えたのは、塀からはみ出した小さなハート型の葉の茂みだと蒼は気づいた。青葉の茂みの蔓が塀の外の地面に着くほど伸びていて、緑のトンネルを作っていた。緑のトンネルは陽射しを遮ってくれるので、トンネルの中はひんやりとして気持ちよかった。

気力も体力も回復した蒼は緑のトンネルから出ると、いつの間にか空は鮮やかなブルーとパープルのグラデーションになっていて、家を出たときより外気も幾分ましになっていた。

蒼の目の前に西洋館が建っていた。

「こんなところに館があるなんて」

蒼にとって、初めて目にする館だった。

煉瓦造りの二階建ての瀟洒な館はジョージアン様式の建物で、蒼はずっと前に見た同志社大学のアーモスト館に似ていると思った。

館の正面玄関は通りに面していた。等間隔に並んでいる白い鎧戸のある縦長の上げ下げ窓は、二階の窓がひとつだけ開いていた。

急に突風が吹いて、開いている窓から白いレースのカーテンが靡いた。

カーテン越しに少女が佇んでいることに、蒼は気づいた。

漆黒の肌に金色の瞳の中学生くらいの少女は、ブルーアワーの空を眺めていた。

蒼は少女の凛とした佇まいに、目が釘付けになった。

しばらくして少女が部屋の中に消えると、蒼は我にかえった。

いつの間にか夜の帷が下りていた。

オバアと黒い秘薬

蒼が帰宅すると、姉の月（るな）が夕食の用意をして蒼の帰りを待っていた。

蒼はさっき見た少女のことが頭から離れなかった。漆黒の美少女が蒼の脳裏を専有していて、蒼は料理を味わうというより機械的に食べ物を咀嚼した。

食事が終わると、月は微笑みながら蒼に訊ねた。

「食事中、ため息ばっかりついていたね。もしかして、恋をしたのかな？」

蒼は目を見張った。

「ねえちゃん、どうしてボクの心の中がわかるの？」

月は大笑いした。

「誰だってわかるよ。蒼ちゃんの顔を見ればね」

蒼は慌てて両手で顔をこすった。

月は思わず吹き出した。

「わかりやすいねえ、蒼ちゃんは。相手はどこの子？」

「緑のトンネルの前の館の子」

蒼は散歩の途中で見かけた、漆黒の美少女のことを月に打ち明けた。

月は首を傾げた。

「あの館にそんな子、いたっけ？」

「いたんだよね。二階の窓辺にその子が立っていて」

蒼は少女の顔を思い出して、うっとりした。熱中症になってしまったけれど、無理をしてでも夕散歩を続けてよかったと蒼は思った。もし家に帰っていたら、彼女に出会うこともなかった。

漆黒の美少女に、蒼は生まれて初めて恋をした。

「一度でいいから、あの子と話をしたいなあ」

蒼の話を微笑んで聴いていた月は、急に真顔になった。

「話をするには大きな問題があるよ。それでも、その子と話がしたい？」

急に蒼は現実に引き戻された。蒼はさっきまで夢心地だったのが、一瞬で意気消沈した。

「どう考えたって、あの子と話をするなんて無理だよね」

月はしばらく宙を見てから、ゆっくりと言った。

「無理でもないよ」

蒼は不可解な表情を浮かべた。

「どういうこと？」

月は自信に満ちたような笑みを浮かべた。

「蒼ちゃん、善は急げ」

呆然としている蒼に構わず、月は直ちに出かける身支度をした。

「あたしに付いて来て」

月は足早に森の奥へ進んだ。

蒼も慌てて月の後に続いた。

満月が木漏れ日のようにいい具合に地面を照らしていて、森の中の小径は明るく歩きやすかった。

月は何度も行き来しているのか迷わず小径を進んで、古い丸太小屋の前で止まった。

「オバア、あたし。月だよ。ちょっと相談したいことがあって来ました」

「おはいり」

月は慣れた感じで居間に入ると、窓辺のソファに飛び乗った。

蒼も月に続いて、遠慮がちにソファに乗った。

蒼はソファの上から部屋を見回した。

――初めて来たのに、なんだか落ち着く部屋だな――

オバアは蒼を見た。

「誰だい？　その子は？」

「弟の蒼だよ」

蒼は、オバアをちらっと見た。「オバア」というほどの年齢でもない外見だった。

オバアは豪快に笑った。

「イケメンになったね」

蒼はオバアの言葉に引っかかった。「イケメンだね」ではなく、「イケメンになった」とオバアは言ったから。

オバアは蒼に会ったことがあるのか、蒼が確認しようとしたとき、月がオバアに真剣な声で話しかけたので、蒼は質問を飲み込んだ。

「蒼ちゃんのことで相談があるんだ、オバア」

オバアはニヤリとした。

「もしかして、蒼に好きな子ができたか？」

月が即答した。

「当たり！　オバアの勘は、相変わらず冴えてるね」

蒼は目の前のふたりの、阿吽の呼吸とも言うべきやりとりに困惑して、言葉が出なかった。

オバアは隣の部屋へ入ったかと思うと、何やら手にして戻ってきた。

オバアは蒼の前にグラスに入った水と、黒胡椒の粒みたいな丸い玉を一粒置いた。

「この薬を飲んでみな。この水でね」

蒼は半信半疑で、オバアに言われたようにした。

「鏡を見てご覧」

居間の隅に置いてある姿見に、上背のある両手脚の長いスリムな青年が映っていた。

青年は腰まであるストレートの金髪で、まつ毛の長い鋭い瞳はエメラルドグリーンだった。両手両脚はおしゃれなタトゥに覆われていて、パンクっぽい雰囲気を漂わせていた。

蒼は思わず見惚れてしまった。

「これ、ボク？」

振り返って月を見て、蒼は目を見張った。

月は明るいブラウンの髪の毛をポニーテールに結わえ、団栗の形をしたアイスブルーの瞳が利発そうに輝いていた。

蒼は、我が姉ながら月をキュートだと思った。

オバアは切れ長の瞳にショートボブのヘアスタイルでモデルのようなスリムな容姿だった。髪の色と瞳の色はパープルで、謎めいたオリエンタルな美女という感じだった。

「ねえちゃんも、オバアも素敵に変身している」

月は蒼の反応に驚いた様子もなく、微笑んだ。

オバアは、茶色のガラスの小瓶に入っている黒い丸薬を掲げて頷いた。

「この薬を飲むと、外見が変わるのさ」

オバアは掛け時計をちらっと見た。

「今回は一五分バージョン。短いから副作用はないけれど、アレルギーがあると、この薬は飲めないからね」

蒼は幸いなことに、薬のアレルギー反応は出なかった。

オバアから、少女の家に行く前にこの薬を飲みにおいでと言われた。

薬はオバアの調合した聖水で飲まないと、効力がなかった。

蒼は狐につままれたような気分で、オバアと別れた。

真夜中の訪問

翌日の午前零時に、蒼はオバアの丸太小屋にいた。

蒼は今回、五時間効力のある黒い丸薬を聖水で飲んだ。

「鴉が来たら、すぐ家へ戻るんだよ。鴉はいつも朝の五時前に集まってくるからね」

オバアは鋭い目で、蒼をジロリと見た。

「守らなかったら、とんでもないことが起きるよ」

蒼は緊張した。

「五時間経ったら、副作用で三時間昏睡状態に陥る。そのあと元に戻るからね」

蒼は姿勢を正して力強く頷いた。

木登りが得意な蒼は、漆黒の美少女が住む館の傍の、大きな桜の木を身軽に登った。

桜の木のすぐそばの二階の部屋に少女がいるはずだ。

少女の部屋の窓が少し開いていたことに、蒼は心から感謝した。
蒼は桜の幹から少し身を乗り出して、そっと網戸越しに室内を窺った。
漆黒の美少女は、ソファーでくつろいでいる様子だった。
蒼は少女に声をかけようとして、緊張のせいか気の利いた言葉が思い浮かばなかった。
蒼の鼓動は高鳴って、少女を眺めるだけで精一杯だった。
少女はついに、ソファの上で寝入ってしまった。
月明かりをたよりに彼女の寝顔を眺めるだけで、蒼は幸せな気持ちに包まれた。
空がうっすらと明るくなって、鴉が一羽、二羽とやってきた。
明けていくブルーアワーの空を眺めながら、蒼は後ろ髪を引かれる思いで急いで家に戻った。

「初デート、どうだった？」
蒼が目を覚ますと、月の顔が蒼の目の前にせまっていた。
蒼は慌てて飛び起きた。
「窓の外から彼女の寝顔を眺めるだけで終わった」
蒼は照れ臭そうに頭を掻いた。
「今夜は、彼女と話ができるといいね。食事にしよう」
月は微笑んで、蒼にたっぷりミルクの入った器を差し出した。

真夜中になって、蒼は昨夜と同じように館の桜の木を軽快に登った。
漆黒の美少女は窓辺に腰を掛けていた。
少女と目が合った蒼は狼狽した。
「あの、その。ごめんなさい」
蒼は慌てて桜の木から降りようとした。
「待って。あなたのこと、気になっていたの。昨日ここで、私を見ていたでしょ？」
蒼は向き直ってぎこちなく頷いたあと、おそるおそる少女のいる窓辺へ近づいた。
間近で見る少女のつややかな黒い肌と整った顔立ちに、蒼はあらためて心を奪われた。
少女は薔薇の刺繍が施された黒い絹のワンピースを着ていた。少女の首にかけているベビーパールのチョーカーが、少女の気品をいっそう際立たせていた。
少女は愛里珠（ありす）と名乗った。
「国はどこ？　日本じゃないよね。インド？　もしかしてアフリカ？」
愛里珠は可笑しそうに笑った。
「肌の色で判断しないでね」
「あ、ごめん。つい」
「肌のことを言われるのは、慣れているから大丈夫。私と同じ肌のパパとママは英国生まれ。

私は生まれも育ちもこの館で、英国に行ったことがないの。名前は『不思議の国のアリス』から命名されたんだけどね」

愛里珠のおどけた口調が愛らしくて、蒼は微笑んだ。

「あなたは大学生？」

「芸大生」

蒼は両親のことを覚えていない。早くに両親を亡くして月とふたりで生きてきた蒼は、学校どころじゃなかった。オバアの薬の効力で、愛里珠と会っている間だけでも現実を忘れることにした蒼は、芸大で油絵を学んでいることにした。蒼はスイス出身のパリで活躍した画家、テオフィル・アレクサンドル・スタンランの作品が大好きだ。スタンランは多くの貧しいひとたちが生活を営むモンマルトル周辺の日常風景を、終生描き続けた画家だった。蒼の家にあるスタンランの暖かな画集に、蒼はいつも励まされてきた。

想像上の学生生活や絵画創作の苦労話を、蒼は面白おかしく愛里珠に話した。

愛里珠は目を輝かせて、蒼の話に聴き入った。

「私、ずっと家で教育を受けていて、学校へ行ったことがないの。もっと大学の話をきかせてね」

話に花が咲いて、あっという間に鴉がやってくる時刻になった。

会話の途中でふとしたとき、愛里珠が寂しそうな表情を浮かべるのが蒼は妙に気になりつつも、明日も同じ時刻に来ると愛里珠に約束して、蒼はあわてて館をあとにした。

帰宅して興奮気味の蒼は、愛里珠といろんな話ができたと月に打ち明けるとすぐ、薬の副作用でエンジンが切れたように深い眠りに落ちた。

愛里珠の秘密と忘れがたい恋

その夜は霧雨だった。

いつものように、オバアのところで黒い丸薬を聖水で口の中に流し込むと、蒼は愛里珠に会いに行った。

愛里珠は既に窓辺に腰を下ろしていた。

「渡したいものがあるの」

愛里珠は首からチョーカーを外して、蒼の首にかけた。

その瞬間、警報器がけたたましく鳴った。

蒼も愛里珠も警報器の大きな音に驚いて、からだが固まって動けなくなった。

愛里珠のいた窓辺からいきなり箒の柄のようなもので、蒼は使用人に突き落とされた。

蒼は桜の木から足を踏み外して、館の外に落下した。一瞬の出来事だった。

蒼はオバアの居間のソファの上で目が覚めた。

オバアと月が安堵の表情で、蒼を覗き込んだ。

蒼が時間になっても戻ってこなかったので、月は心配して館へ行くと、館の外で蒼が倒れていた。

月はオバアに知らせると、オバアは蒼を抱きかかえてオバアの家に運んだ。

三日間、蒼はソファの上で昏睡状態だった。

蒼はゆっくりと起き上がって恐る恐る体を動かしてみた。体の節々に少し痛みを感じたけれど、幸いにも蒼の体は無傷だった。

蒼のそばにいるオバアが、あらたまった口調で蒼に言った。

「いいかい、よくお聞き」

蒼はゆっくりとオバアを見た。

「蒼。あんたの好きになった愛里珠はね、ネコだよ」

蒼は目を見張った。

「人間、じゃないの？」

オバアは、首を横に振った。

「ボンベイという種類の漆黒のネコ。『ブラックパンサー』という異名を持つ、気品のある美しいネコだよ」

蒼はスタンランの絵に登場する黒ネコを思い浮かべた。

「どうしてボクは、愛里珠を人間と勘違いしたの？」

「あの子と、どこで出会った？」

「いつもの散歩道と違った道を歩いて……ええと」

蒼は思い出そうと顔をしかめた。

オバアは蒼にホットミルクの入ったマグカップを差し出して、

「緑のトンネルはあったかい？」

蒼はホットミルクを一口飲むと蒼の脳裏に緑のトンネルが浮かんで、蒼は首を縦に振った。

オバアは、何度も深く頷いた。

「やっぱりね。蒼は、緑のトンネルをくぐりぬけただろ？」

蒼は散歩の途中で熱中症になりそうになって、緑のトンネルの中で涼をとったことをはっきりと思い出した。

近隣のネコ事情に詳しいオバアの説明によると、愛里珠のいた館はボンベイのトップブリーダーの女性が住んでいる。彼女は英国でブリードタイプのボンベイを二匹見つけて、日本に連れ帰った。二匹を交配させて生まれた子が愛里珠だった。

愛里珠は蒼が追い出された日の午後、愛里珠の夫となるネコが待つ札幌へ旅立ったと、オバアが教えてくれた。

愛里珠がふとした時に蒼に見せた寂しそうな表情は、愛里珠がじきに館を去ってしまうから

だったと蒼は思った。
　月が蒼の首元を見た。
「素敵な真珠の……」
「愛里珠にもらったんだ」
「蒼ちゃんによく似合っているね。あたしも二年前の夏、オバアの力を借りて、慎一郎さまと真夜中にデートしたんだよ。これは、三毛ネコの慎一郎さまからの贈り物なんだ」
　月は、いつも身につけている純金製の鈴のチョーカーを蒼に見せた。
「ねえちゃんにそんな恋愛話があったなんて知らなかった」
「あたしの大切な初恋。デートのときは、オバアに幼い蒼を預かってもらったんだよ」
　だからオバアの家に既視感があったと、蒼はオバアの居間を見回した。
「そのチョーカー、ねえちゃんにぴったり」
　シャムネコの月は、小首を傾げてポーズをとった。
　エジプシャン・マウの蒼も首を一振りすると、豹柄の毛並みの上で真珠の首輪が輝いた。
　オバアは、丸薬と緑のトンネルの秘密を語り始めた。
「蒼が飲んだ丸薬の原木が、緑のトンネルなんだよ。緑のトンネルのハート型の葉には、秘薬の効能がぎっしりと詰まっているからね。秘薬の効能はね、目に映るネコは全て人間に見えてしまうことなんだ。緑のトンネルをくぐっただけでも、ネコが人間に見えるからね。トンネルの中で休んでいたなら、効果は抜群だね。ただし、ネコにしか効果はないけどね。愛里珠の館は緑のトンネルの真向かいにあるから、あの館にも秘薬の効力は影響しているはずだから、愛里珠も蒼のことが人間に見えていたはずだよ」
　月は、はっとした表情を浮かべてオバアに言った。
「もしかして、愛里珠は自分が人間だと思っているのかも」
　蒼もオバアを見て、
「愛里珠はあの館で生まれ育ったって、話してくれたし」
　月は顔をしかめた。
「生まれたときから人間と信じて育った愛里珠が、実はネコだったことが今頃解るなんてショックかも。あたしが愛里珠なら、耐えられないな」
　蒼はしばらく考えたあと、自分に言い聞かせるように言った。
「確かに人間の姿の自分は幻想で、真実はネコという現実を突然突きつけられると、ボクも衝撃を受けるよ。でも愛里珠は、結婚のため札幌に行くのを解っているのだから、きっと愛里珠は自身のことをネコだと認識していると思うけどな」
　オバアは満足げに頷いた。
「蒼の推測どおりだよ。愛里珠の両親は英国生まれだから、あの館に来るまではネコの姿だった。愛里珠の両親は、愛里珠もネコだということを愛里珠に話しているよ。英国時代の両親の

写真を、愛里珠は見ているしね」

蒼と月はほとんど同時に叫んだ。

「オバアはどうして、そこまで詳しいの？」

オバアはすまし顔で言った。

「愛里珠の親が、アタシの初恋の相手だから」

月は驚きの声を上げた。

「愛里珠のパパ！？」

オバアは可笑しそうに否定した。

「はずれ」

蒼は躊躇いがちにオバアに訊ねた。

「もしかしてオバアの初恋の相手って、愛里珠のママ？」

オバアは頷いて、自身の首元でパープルの光を放つアメジストのチョーカーを、ロシアンブルー特有の光沢のあるシルバーグレイの被毛で覆われた前足で軽く撫でた。

「このチョーカーを愛里珠のママからもらったあと、愛里珠のママは愛里珠のパパと結婚して、愛里珠が生まれたんだよ。アタシは真夜中にときどき、愛里珠の子守をしに館にこっそり出入りしていたから、愛里珠のことはよく知っている。愛里珠が札幌に旅立つときにね、蒼が初恋の相手だってことを愛里珠はアタシに打ち明けくれたよ」

オバアはいたずらっぽくウインクした。

蒼は照れたあと、すぐ困惑した。

「じゃあ愛里珠は、ボクがネコだってこと、知っていたの？」

オバアは首を傾げた。

「そこまでは愛里珠に訊ねなかった。愛里珠は結婚する前に蒼と恋愛ができて嬉しかった、思い残すことなく札幌で暮らせるって、喜んで旅立ったからね」

愛里珠が納得しているなら、それで十分だと蒼は思った。

オバアは愛里珠のママから昔、囁かれた言葉を口にした。

「あんたたち、よくお聞き」

蒼と月は、オバアをじっと見た。

「マジックアワーの恋は、真夏のあわいの淡い恋。だけど忘れがたい恋なんだ」

（ちゃぞの　としみ　ジェンダー研究者）

黄昏亭

冨山 一郎

場を作ることを考えて続けている。それは既存の関係が新しく変わることと、その契機を確保することにかかわる。既存の関係が秩序として存在するなら、新しく変わることとは、その関係を成り立たせている前提である秩序に問いが立てられることであり、そのような問いが可能になるその可能性を確保することが、場という問題だ。それは、なにもかもが既に予定され、秩序付けられている世界に、変わるかもしれないという予感を引き込むことであり、必然の中に偶然を持ち込み、偶然を必然として見出すことでもある。

そのような可能性を確保するのが、場の使命だと考えてきた。それは、場に集う、傍らにとどまる、言葉を交わす、議論するといった、ごく普通の行為に未来を賭けることでもある。またそれは、研究や学知にかぎったことではない。

大学の近傍にそのような場をつくろうとしてきた。こうした場づくりは、これからも追及したい。しかし同時に、自分にとって毎日の活動の舞台である大学というところに、こうした場をみいだし、また日々の実践において場をつくることも重要だと考えてきた。すなわち大学の外といった瞬間、問われるべき秩序が安易な二分法において追認されると思ったからである。しかしそれはあくまでも、毎日の多くの時間が大学にかかわっているという私自身の事情に起因することであり、一般的に大学が重要だということではない。また大学とつきあう残された時間が見えてきた今、その後の場づくりをどうするかということを、いま考え始めている。

*

黄昏亭というバーがあった。それは古いビルの三階にあり、靴を脱いで入ると中はカーペットがひいてあった。店内は薄暗く、カウンターとその後ろには無理をすれば８人ぐらいは坐れるテーブルがあった。ビルには見事な書体の「黄昏亭」という文字がかかれた縦書きの大きな看板があり、開店時間になると点灯されて暗い道に浮かび上がり、遠くからでもよく見えた。大学院に入ってから、週に二回は、このバーに通いつめた。一人で行くことはまれで、たいて

いニ、三人で連れ立っていったが、多いときは事前にテーブルが空いているかどうかを電話で確認し、そこを陣取った。二階は焼き肉屋になっており、階段を往来するたびにいい匂いがした。

特集の「場」という言葉で思い出したのは、この黄昏亭である。そこは、文字通りお酒を飲む場所で、あえていえばもう飲めなくなるまで飲むような飲み場であったが、店主のヒロ子さんが作る料理はとびきり美味しく、最初にだされるつきだしは、旬の食材をつかったものだった。ときどき客からの豪華な差し入れも、ふるまわれたりした。

ヒロ子さんは、デパートの美術品担当だったこともあり、茶器や工芸品についての審美眼をもっていた。また確か観世流の能楽師でもあり、謡曲や雅楽についての知識も豊富だった。若いころは、京都府学連（京都学生自治会連合会）の委員長だったということも聞いたことがある。機動隊にこん棒で殴られた時にできた頭の傷跡を、見せてくれたこともあった。カウンターの中では、客の話に合わせるようなことはまったくせず、じっと話を聞いていることが多かったが、時折、割って入るようなこともあった。

いつだったか友人と東アジア反日武装戦線の闘いについてあれこれ話していた時、その友人が爆弾闘争に批判的な意見をいった瞬間、ヒロ子さんは介入してきた。「私たちが放置してきた責任をあの人たちは代わりにやってくれた、私はそう思っている」。それは未完におわった天皇爆殺も含めてのことなのだろう。またその時の「私たち」は、一般名称ではなく、私と友人をまずは意味していた。

客は、大学関係者だけでなく、行商で京都に来た人、書店や出版関係の人、出入りの業者の人、DV を逃れて逃亡中の人、いつも来ている正体不明の人など様々だった。だいたいサティの音楽が静かに流れていたが、しばしば客同士で激論が起こり、また合唱が巻き起こることもあった。そんな時は、サティはかき消されていた。世間からは「過激派」あるいは「トロツキスト」と他称される人々も、よく飲みに来ていた。ある夜、友人たちと飲み終えて階段を降りると、下に公安と思われる男二人が、待ち構えていた。顔のギリギリのところに懐中電灯を一人ひとり順に突き付け、「上で飲んでいたのか」といったような尋問を受けた。帰路の途中、この公安たちがなにかをするのではないかと心配になって黄昏亭に引き返し、何事もなかった様子のヒロ子さんを見てホッとしたことを覚えている。

そこは議論の場であり、新しい出会いの場所でもあった。また大学ではほとんど会話を交わしたことのない者同士が、関係を作り直す場所でもあった。昼には恥ずかしくていえない言葉も、薄暗い店の中ではいうことができた。時には密談調になり、またしばしば終わりの見えない激論になった。閉店時間は朝の２時ぐらいだったが、外に出ると明るくなっていたこともある。多くの提案がなされ、酔いがさめるとともに消えていったが、実現したこともある。大学の屋上で、「仰天映画祭」と称して「ア

ルジェの闘い」を大学当局の反対を押し切って上映した時も、その 16 ミリフィルムの手配（当時ビデオはない）を、黄昏亭でときどき見かけた東映の助監督をしていたヒロ子さんの弟さんに手伝ってもらったりした。この弟さんは、京都で映画の上映運動を続けていた人だ。「仰天映画祭」成功の打ち上げも、黄昏亭だった。

オーバードクターの時も含め大学院にいた８年あまり、ほぼ毎週黄昏亭にかよったが、その後は、年に数度になった。めったにいくことができなくなって気がついたことだが、久しぶりにいくと店の空間が自分をつつみこんでいるような感覚になる。黒くまた少し剥げたカウンターを手でさすりながら、自分が今の自分から次第に離脱していくような身体感覚を覚えるのだ。それは、過去に支配されていくような感覚といってもいい。だが、過去に戻ることでも、昔を懐かしむことでもなかったように思う。

毎週行くことがなくなって 10 年以上たったとき、ヒロ子さんから電話があった。相談したいことがあるという。すぐさま店に行くと、黄昏亭に来ていた人々をあつめて、大宴会のようなことがしたい、ついてはその幹事のようなことをやってほしいというのだ。お金は蓄えがあるという。また場所はすでに決められていた。歩いて５分もかからない銀閣寺近くにある白沙村荘である。そこは日本画家であった橋本関雪のアトリエとして作られたところで、現在は橋本関雪記念館になっている。そこの大画室と広い庭園で宴会をするというのだ。お客としても親交があったそこの館長である橋本妙さんが、この大宴会を快く引き受けてくれたという。名目は 27 周年のお祝いという、なんともいい加減な区切りだが、私が、黄昏亭に縁のある人々に向けて書いた招待状は、以下のようなものだ。

黄昏亭に縁のある皆様へ

私たちが酒を飲み交わした黄昏亭が、あのビルの最上階に出現してから、来年で二七年になろうとしています。闇に光る「黄昏亭」の文字に導かれて足を運び、焼肉の匂いを一瞬だけ味わいながら鉄の階段を登りつめると、サティの音楽と共に、いつもの談笑、あるいは激論の声が聞こえてきます。そしてドアを開けると、「ようこそ、おいでやす」というヒロ子さんの声。こうして始まるいつもの、あるいは新な出会いの中で、多くのことが話され、関係もまた、紡がれました。それは、今も続いています。

27 年ということで、黄昏亭で生まれた多くのことなどをもちより、いつもその場にいらっしゃったヒロ子さんを囲みながら、ゆるゆると時間をすごしたいと思います。それはきっと、「昔話に花が咲く」などということではなく、深夜あの最上階で話されたことや生まれた関係を、いま一度確認し、これからの為に確保するまたとない機会であるかもしれません。黄昏亭に縁のある皆様、ぜひともお集まりくださいませ。

日時　2008 年 3 月 29 日（土曜）3 時より
場所　白沙村荘　大画室

「黄昏亭」27 周年を祝う実行委員会

いま読み返してみて、あらためて黄昏亭は縁を生み出す場だったと思う。この大宴会には100名近い人々がやって来た。大画室の板の間で、あるいは庭園を散策しながら、話は続いた。それはまるで黄昏亭がそこかしこに生み出されているようだった。小さな空間で毎夜うまれた縁が、一堂に会したのである。縁たちが見えるのだ。それぞれがそれぞれの縁を持ち寄って、この大宴会に集まったのである。小さなバーの記憶は、何か別のところに動き出したようだった。もちろん全員を知る者は、ヒロ子さん以外にはいない。

会費は徴収したがとても足りない。ヒロ子さんは今までためてきたお金をすべて、この大宴会に使ったのである。会のあと数カ月たった京都の暑い夏、ヒロ子さんは手伝ってくれたお礼にと、何名かを貴船の床に招待してくれた。「これでお金はすべてなくなった」と笑っていた。

その後も黄昏亭は続いたが、ある時から遠くからでも確認できていた「黄昏亭」のネオンが、消えたままになった。しばらくして、またヒロ子さんから電話があった。ビルの天井が壊れ、雨水が流れ込み、店を続けることができなくなったという。関西地域を直撃した2018年の台風21号のことである。その相談ということで、私と大学院の時に、本当によく一緒に黄昏亭で飲んだキノコ研究者の吹春俊光氏と一緒に、久しぶりにヒロ子さんに会った。店を再建することも考えたそうだが、結局、黄昏亭は終わった。

＊

場とはやはり、記憶とともにある。それは、歩くとカンカンと音がする鉄の階段や焼き肉の匂い、店の前の小さな靴箱、サティの音楽、議論の喧噪やロシア民謡を歌う声、そして少し剥げつつある黒のカウンターに降り積もった記憶だ。こうしたモノや音、匂いや色の一つひとつが、場の記憶を作り上げる。こうして記憶が引き出されるときに、いつも場が立ち上がるといってもよい。黄昏亭は終わったが、黄昏亭の記憶は引き出され、場を作る。

場とは機能的な空間のことではない。その時だけあてがわれた教室でもなければ演習室でもないのだ。何よりもそこには記憶がたくわえられているのであり、そこに行けば何かが始まるという予感がある。あえていえば機能的連関は場において躓くのであり、思ってもみない歴史がそこから開始されるのである。黄昏亭は消えたが、あの時、白沙村荘に集まった100人の中には記憶がきっとあるだろう。その記憶たちは、そこかしこで場を作り上げているかもしれない。記憶がある限り場は継続し、拡張しつづける。

（とみやま　いちろう　MFE編集委員）

韓国浦項の「学徒義勇軍戦勝記念館」を訪ねて

ある歴史研究者の視点から

安 昭炫

1　入口

韓国南東部の東海岸には浦項（ポハン）という湾岸都市が位置している。多くの韓国の人々には浦項製鉄所がある工業都市として認識されているではないだろうか。この地域は約 70 年前、朝鮮戦争の激戦地であった。戦争初期人民軍の攻撃をかろうじて食い止めたのが、韓国南東部の大邱近郊を軸に洛東江に沿って南海岸までの縦の戦線と、浦項のある東海岸まで延びる横の戦線であり、これを洛東江戦線と呼ぶ。

洛東江戦闘の局面では、多くの学生が戦闘員として、後方支援員として戦争に関わった。彼らを学徒義勇軍と呼ぶが、一般には学徒兵という呼び方が知られている。学徒兵の戦闘でもっとも知られているのは、1950 年 8 月 11 日陸軍第 3 師団に配属された 71 人の学徒義勇軍部隊が単独で人民軍の浦項市内への進入を遅らせようとし、48 人が戦死した浦項戦闘である。

浦項では 1957 年戦没学徒忠魂塔を建立して以来、追悼式を行ってきた。また浦項出身の学徒兵参戦者たちは 1979 年から浦項市内の塔山の麓を活動の拠点とし、学徒兵戦跡物を保存し、追悼行事と安保教育を行ってきた。1996 年からは記念館設立推進委員会を結成し、政府に記念館設立を求めた。その設立案は国防部の朝鮮戦争第 50 周年記念事業の一つに採択され、国と自治体予算からの支援を得て 2002 年 7 月学徒義勇軍戦勝記念館が開館した。

私は朝鮮戦争に参戦した 10 代の少年兵士たちの実態に興味関心を持ち、現代の韓国において彼らがどのように記憶されているのかについて研究してきた。浦項の戦勝記念館も現地調査で 2017 年頃から 3 回訪問している。今回の文章は、2019 年 12 月に訪問したときのメモを元にしている。本稿は訪問記であるが、このメモをもとに私が訪問時に感じたことを述べ、この文章を書く時点でよみがえる記憶が混ざるという、記憶作業の混合物と言えるかもしれない。

2　順路に従って進んでみる

戦勝記念館は塔山という低い山の麓に建っており、記念館の入り口までは坂と階段が続く。階段を登りきると白い曲線の建

図１

図２

物の正面が見える。正面玄関の右側には「学徒義勇軍戦勝記念館」という看板がある。その横には「大韓民国学徒義勇軍会慶尚北道支部」の看板と「大韓民国学徒義勇軍会慶尚北道浦項市支会」の看板が順に並んでいる。戦勝記念館は、地域の学徒兵戦友会の拠点としても機能しているようであった。（図１）

玄関を入ってパンフレットを手に取り、まっすぐ展示室に入る。そこは、観覧客にまず追悼を求める空間となっている。周りは薄暗く、いくつかのピンライトの明かりが展示品を照らしていた。白い菊の花が飾られた四角の縦のボックスの中に、学徒義勇軍を象徴する模様が見える。月桂冠を背景に銃とペンが交差する中央に星があり、そのてっぺんに鷹が座って羽を伸ばしている。その下には全国の学校別学徒義勇軍戦没者の数と在日学徒義勇軍の戦死者名簿が並んでいる。追悼空間の左側には、学徒兵の顔写真がいくつか並んでおり、過去に存在した人々、という実感が湧いた。（図２）

順路に従ってさらに左に進んだ。記念館が語りたい学徒兵の紹介が目に入る。「祖国の危機に学業を中断し、ペンの代わりに銃を持って自由守護の隊列に積極的に参加した彼ら」は「先祖の自主的な義兵精神や幼い青少年で構成され臨戦無退の勢いで新羅軍に活気を与えた花郎道の精神を現代に具現したもの」だという。学生たちが自ら進んで参戦して国を救おうとしたことが、朝鮮半島の歴史の中の義兵や花郎に由来する精神であるという、民族主義的説明である。

なるほど、とさらに進む。朝鮮戦争の概要に簡単に目を通し、その次は在日学徒義

図３

図４

勇軍が参戦の前に書き込みを残したという、大きな太極旗が見えた。太極旗には参戦者の名前や出身大学、出征日の日付「1950.9.6」と「祖国愛」､「護国勇士」といった言葉が目立つ。　（図３）

次は学徒義勇軍がどうやって結成されたかを説明している。学徒兵は一つの部隊ではなく、戦争に関わった方式もそれぞれである。戦争勃発直後のソウルでは学徒慰問隊が組織され、第一線の部隊を訪問した。水原では非常学徒隊という名のもと学徒戦闘隊と学徒宣伝隊を結成し、前者は人民軍の漢江渡河を阻止する戦闘に参戦し、後者は街頭宣伝と避難民救護を担当した。7 月には南下する戦線に伴い、大田、大邱で後方治安を担当する学徒兵たちを募った。7 月 19 日には大邱と釜山において約 27 万人規模の学徒義勇隊が発足した。この時期に募られた学徒兵たちの多くは、洛東江戦線の戦闘に参加した。1951 年 2 月には学徒兵に対し復校令が出され、各地の学徒兵たちは解散したという。

説明を読みながら進むうちに、展示の内容とは関係ないようにみえる何かが目に入ってきた。腰の高さまである台の上には軍人の担ぐようなリュックサックと、「軍装体験をしてみてください」という案内だけがあった。韓国軍の戦闘時の装具を詰め込んだリュックサックだと、かなりの重さがあると聞いた覚えがあって、私が体験してみるのは抵抗があった。（図４）

その次に、学徒兵が使っていたという水筒、靴、戦時学生証などが並び、さらに進むと洛東江戦線の諸戦闘にかかわった指揮官の紹介パネルと、当時使われたという銃器類が並んでいた。銃身がかなり痛んでいて、本物の銃のように見えた。当時学生の制服、韓国軍の戦闘服、人民軍の戦闘服の

図５

図６

マネキン人形もあった。

　このあたりを見ていたとき、軍人の群れが展示室に入ってきて、列を成して観覧を し始めた。私は一つ一つ写真を撮って説明を読んで進んでいたため、すぐ軍人の列に追い抜かれた。で、彼らは何でこれを見に来たのだろう？色々湧いてくる疑問に押され、私は引率役と見える一人に声をかけた。「どこから来られたのですか？」彼は近くの士官学校から来たと答えた。軍の安保教育の一環で、この戦勝記念館を見学する日程が組まれているらしく、その軍人の群れは展示室を一周したらすぐ去っていった。

　私は残りの展示を黙々と記録しながら進んだ。順路の終わりの近いところで、浦項地域に住んでいる学徒兵参戦者のインタビュー映像があった。それぞれ朝鮮戦争に参戦した経験と感じたことを語っており、一人当たり１分程度の映像で構成されていた。タッチパネル上で名前をタッチすれば、その人のインタビュー映像が１分程度の分量で流れた。（図５）

　私はそこにずっと立ち止まって一人一人の映像をすべて見た。学徒兵参戦者たちは、学徒兵に志願したきっかけ、戦闘体験などを語っていた。未来世代の安保意識を懸念する内容も語られた。学徒兵参戦者が戦争後からこの映像を残すまでどのように暮らしたかが気になったが、１分あまりの編集された映像では確認することができなかった。

　次はこの展示の最後のパートであった。「命を国を救うことに使おうとする勇気」と題し、主要学徒兵参戦団体の名前と会員名簿が壁際のパネル画面に流れていた。その隣には、「君は祖国のために何をしたか？」という文章とともに正面を直視しながら指をさす老人の姿の絵があった。この記念館が言いたいことはこれだったか。（図６）

３　順路を逆戻りしてみる

展示室を一周し、あと一歩で展示室の出口（展示室の門は一つしかなかった。）だったわけだが、私は今度は順路を逆に進みながら、考えをまとめることにした。私に指をさしながら「君は祖国のために何をしたか？」という問いを前にして､何事もなかったように出口に向かいたくはなかった。あるいは、その問いから、少し遠ざかることを望んでいたかもしれない。

そうしているうちに、軍人たちの訪問に気を取られて見逃した部分があったことに気づいた。「母への手紙」という、ある学徒兵の手紙の内容であった。浦項戦闘に参戦していたソウル東星中学校３年生の李佑根という学徒兵は、戦闘の合間に母宛てに手紙を書いた。彼は戦闘で死んだが、その手紙は残ったわけである。手紙の冒頭の一部だけ引用しておきたい。

> 母さん、僕は人を殺しました。それも石垣一つを隔てて 10 人余りもです。僕は二人の特攻隊員と一緒に手榴弾という恐ろしい爆発武器を投げて一瞬で殺してしまいました。手榴弾の爆音は僕の鼓膜を破ってしまいました。今この文章を書いている瞬間にも耳の中は恐ろしい音で満ちています。
>
> 母さん、敵は足がちぎれ胸がちぎれ飛んでしまいました。あまりにもひどい死に方でした。いくら敵でも彼らも同じ人間だと思うと、また同じ言語と同じ血を分けた同じ民族だと思うと胸が痛みます。
>
> 母さん、なぜ戦争をしなければいけないのですか？このつらい胸の内を母さんに伝えるとなぜか僕の心は落ち着きます。僕は怖い気がします。今僕の隣では多くの学友たちが死を待っているかのように敵が襲いかかってくるのを待ちながら、熱い日差しの下で身を伏せています。僕も腹ばいになって書いています。敵は沈黙を守っています。いつまた襲ってくるかわかりません。敵はあまりにも多いのです。僕たちはわずか 71 人です。どうなることかと恐ろしいのです。母さんに手紙を書いていると少しは落ち着きます。（後略）
> （日本語訳は記念館側のものによる）

若者に国家のための献身を求めるこの記念館の中で、私が唯一見つけた戦争へのまっすぐな問いがそこにあった。手紙からは、戦闘で人を殺したことによる混乱、押し寄せてくる人民軍部隊をたった 71 人の学徒兵だけで足止めしないといけない状況に対する恐怖、それでも必ず生きて母の元へ帰りたいという決意などがうかがえた。学徒兵の残した文章からは、「なぜ戦争をしなければいけないのですか？」と、核心を突く問いがあった。私はこの問いが、「母さん」宛てになっているけれど、結局は国家に対して投げかける質問のように思えた。（図７）

さらにもう少し戻ってみた。先ほど見かけた学徒義勇軍の精神を紹介するパネルで、「若者は国家の未来であり、希望です。」という文章があったけれど、それは国家の

図７

図８

視点だったわけだ。国家の未来で希望だという若者は、結局命を国家のために捧げよ、と声をかけられる。その若者は、手紙の最後で、「サンチュ包みが食べたい」、「冷たい泉で歯がしびれるほどに冷たい水をいつまでも飲みたい」と述べていた。日常を暮らしたい若者を戦場に向かわせることで、国家の未来と希望はあるのだろうか。戦闘の勝利を記念する空間で、私は場違いな問いを投げかけたかもしれない。

4　出口

展示を逆順に進み、入口だった出口から出てきた。記念館の横に、塔山の頂上に続く階段があった。頂上には、浦項地区戦跡碑が立っていた。天に向かって銃を掲げるような彫刻を背景に、軍人と学徒兵が並んでいる銅像があって、韓国軍と学徒兵がともに参戦していた洛東江戦線の戦闘の勝利と、ここから北進が始まったことを記念していた。戦跡碑より奥のほうには、先ほどの「母への手紙」を刻んだ石碑が立っており、隣には英語、日本語、中国語訳が並んでいた。さらに奥のほうへ、坂を上ると戦没学徒忠魂塔があった。これは浦項戦闘の戦没者を追悼し記念するために 1957 年に建てられ、後にこの記念館のほうに移設されたのである。碑の位置関係からして、戦没者追悼のための碑より戦勝を記念する戦跡碑への接近が容易であることがうかがえた。戦争による死の記憶より、勝利の記憶が重視されていく過程が目に見えるようであった。（図８）

山頂からは浦項市内と海が見えた。冬の空は澄んでいて、思わず「平和だな」という感想が漏れた。そういえば、この記念館で「平和」という言葉を見かけたことがあったっけ？私は撮影した写真を確認して、一

か所見つけることができた。「我々が今の自由と平和を享受できるのは、多くの人々の犠牲があったからである。」という文章が、学徒兵を記憶すべき理由として述べられていた。そうしたら「犠牲」で得られた平和は、犠牲や献身でしか維持することができないのだろうか。また私は場違いな質問を浮かべてしまった。私はゆっくりと展望台と望遠鏡が設置されているところまで歩いた。望遠鏡をのぞき込んだら、浦項市内と海が見渡せた。視界の傍らには浦項製鉄所がみえ、工場の建物と重機が並んでいる様子まで見えた。私の中で湧いてきたさまざまな問いとは別に、工業都市は黙々と自分の仕事をしていた。

（あん そひょん　同志社大学グローバル・スタディーズ研究科助手）

わたしのための小さな場所で
アトリエとその周辺についての雑文

波多野　祐貴

だれしも今いる場所から離れてみたいと思ったことがあるだろう。私の場合は塞ぎ込んだ気持ちがふと一瞬、上向くときに多い気がしている。コロナの感染拡大の出口が見えなかった2021年の秋もそうだった。私は会社勤めをしながら写真の作品制作をしており、それまでは１年に3,4回ほどのペースで台湾へ撮影に通っていた。日本による統治時代の歴史に関心があり、かつての痕跡を追いながら人と街のポートレイトを撮っている[1]。 それが入国制限のために日台間の行き来ができなくなり、撮影は一時中断を余儀なくされてしまう。一方で普段の仕事は在宅勤務が中心になり日常生活が大きく変化した。広くない居住空間で夜遅くまでPCやスマホと睨めっこしたり電話対応を続けていると、脳が働きっぱなしで、次第に休むモードへの切り替えがうまくいかなくなり疲弊していくのが分かった。自分の領域と仕事の領域のあいだに線引きされていた境界が壊れてしまっていたのだと思う。

仕事だけではない。ステイホームが謳われてほとんどの時間を家の中で過ごすわけだが、仕事する時間、食事する時間、家族と会話する時間、一人で過ごす時間、本来はそれぞれの時間にあてがわれる顔、ことば、空間があり、お互いが緩やかに独立しつつ隣り合っている生活が当たり前だった。しかし在宅勤務が開始されるとそれらがすべて家という一つの空間に無理矢理押し込まれてしまったのだ。ニュースをチェックしてみても政治家の発言と日常生活の距離が急速に縮まったような気がして、政治までもがずかずか家の中まで入り込んでくるのかとひどく憂鬱だった。自分の私的領域が外部からじわじわと侵されていく。仕事の時間、政治の時間といった＜公＞の時間が、守られていたと思っていた＜私＞の時間に浸蝕してくる感覚。息苦しさの背景は結構切実だったのかもしれない。

いろんなもので飽和してしまった家の中では、写真のことを考えたり作業をしたりする余地など、時間的にも心理的にもない。外に部屋を持ちたいと思うのは自然のなりゆきだった。一度思い立ったら行動は速い。ネットで思いつく限りのキーワードを打ち込んで検索をして、気になる物件に問い合わせして見学した。その物件は、本来は日本で中長期的に滞在制作をする海外のアーティスト向けの部屋であったが、入国制限により利用の見通しが立たなくなったた

め、国内で広く募集をかけたところだったと言う。京都市内の観光地に近いながらも京町屋が残る閑静な場所。通りからは目立たない場所にあったその民家は推定築100年以上だと聞く。その２階の一室をアトリエとして貸してもらうことになった。繁殖せんとする植物が家屋の内部にまで触手のような蔓を伸ばし、ほとんど廃墟と言って差し支えないほどの状態だったところを、現在の運営人が一つ一つ手を加えて息を吹き返したそうだ。穴だけになって残っている井戸、漆喰の壁にアルミサッシの窓、不自然に外付けされた階段。戦後は１階に日本人の家族が、2階には進駐軍の家族が住んでいたと聞いたが、そういった歴史がいびつなディティールの中に残されていた。何よりも入居の決め手になったのは、部屋に入ってまず目に入る大きな窓と、窓から見える風景だった。窓は二面の壁を悠々と占める。全て開け切ると隣家の庭の借景が広がり、さらに向こうに目をやると五山の送り火で有名な大文字山が一望できるではないか。この伸びやかに拓ける景色に心を掴まれてしまって、帰り道ですでに借りることを決めていた。ただ今まで撮影対象を外に求めてきた者として、撮影するわけでもない、そうかと言って暗室もパソコンもない部屋で一体何をするのかについては、あまり考えていなかった。

実際、初めのころは休日に訪れてはみるもののすることがなかった。本を読んだり、スケジュール帳を開いてみたり、時には畳の上で昼寝をしたりと、思い返すと随分と呑気な時間を過ごしていたものだと自分でも呆れる。ただあの時の状況に疲弊していた自分はそうした時間と空間を切実に求めていたのだとも思う。唯一決めていたルーティンと言えば、部屋に着いたら真っ先にあの広い窓を開け、マスクを外して大きく深呼吸をすること。できる限り目一杯に開け切ると、向こうの山から吹く風が部屋から廊下へ通り抜けていく。時折、距離が異様に近い隣の家で洗濯物を干したり、風呂場で歌うような生活音が聞こえてくるが、完全な静寂よりもむしろ心地の良いノイズとして響く。

山側の窓からは隣家の広い庭が見下ろせたが、長らく誰も住んでいないようで家も庭も手つかずの状態だった。草木が繁茂し尽くした庭は簡単に人を踏み入れさせない。ただ上から眺めることができるだけだ。主が不在であっても、いつの間にか冬は過ぎ、春を迎えると名前の知らない白い花が咲きはじめる。初夏になると鬱蒼と茂りだす緑の中に柑橘類の果実の色彩が映え、鳥たちが啄みに訪れるようになる。人間の管理を逃れた庭は荒れるというよりは、それまで覆い隠されていた自らの秩序を回復しているように見えた。

たとえ部屋に行けない日でも自分のために確保された小さな場所や、主のいない庭のありさまを想像すると、不思議と気分が良かった。あそこに行きさえすれば騒がしい世と一時的にでも距離を置くことができる。こう思うこと自体が一種のセラピーになっていたのかもしれないが、それだけではないだろう。画家のデイヴィッド・ホックニーがコロナ禍でこんなタイトルの作品

群を発表していたことを思い出す。《絶対に覚えていよう。春だけはキャンセルされることはないのだ》。フランス北部のノルマンディーでロックダウン期間を過ごした彼は、iPad で身近な風景を過剰なまでの色彩を用いて描いていた。たとえ疫病で社会が混乱に陥ったとしても、もはや自分がいなかったとしても、いつもどおり風は通り抜け四季は巡る。それは美しく見える景色かもしれないし、文脈によっては無慈悲な景色に映るかもしれない。しかし当時の私はその揺るぎなさに救われる思いがした。

動き出す活力をじわじわと取り戻したとき、この部屋の中でポートレイトの撮影をしたいと思うようになった。採光が良い空間でありながらも、白濁した型板硝子が外の風景を朧げにする。室内に透過するのは柔らかく濾された陽光だけだ。特別な照明機材を用意しなくても部屋には淡い光が満ちていて、人物の肌が優しく浮かび上がることが想像できる。運営人の協力のもと、このアトリエに所縁のある若い学生や海外からの滞在者にモデルをお願いして撮影を始めていくことになった。

人物のポートレイトは一度じっくり腰を据えて取り組んでみたかった。台湾の街中で人物を撮影するなかで、知らない他者と視線を交わすことに、特別な感覚を伴うようになっていた。それは撮影するその場においても当てはまるが、あとで写真の中でその人物と再び出会う時においても感じるのだ。未だ関係性ができていない彼らをレンズを通して眼差し / 眼差される時、私は一体何を取り交わしているのだろうか。写真になった彼らと目が合うときなぜ心を捉えられてしまう感覚に陥るのだろうか。そのことをずっと不思議に思い、関心を抱いてきた。だから一度、場所性や歴史といった文脈から離れたところで、ポートレイトというものに焦点を当ててみたいと思っていたのだ。

それから 10 ヵ月が経ち入居してから 2 度目の秋を迎えようとする頃までに 15 名の方のポートレイトを撮影した。いずれも初対面で、撮影をしながら個人的で断片的な話をしたが、その後の関係を築いていけるかどうかはまた別の話だ。そのような未だ関係を結んでいない他者への通路を探るような写真にしたいと思っていた。同時期に撮影していた他の写真―身近な風景、生き物、そして生きていない物などと組み合わることで相互に共振する一つのシリーズになる予感がする。「接触と沈殿」というタイトルが自ずと浮かんでいた。

> あの時に見た山の名前を思い出すことができない。
>
> けれども山々が重なりながら描いていた稜線が、今は瞼の裏をなぞる。
>
> あなたと話した事柄は記憶のなかで朧げになってしまった。
>
> けれども口元から発せられた音や不規則なリズムが耳底に沈んでいる。
>
> 時間は多くのものをふるい落としていき、手元に残されるのは僅かな断片。
>
> 歪なそれらをまじまじと見つめて、そしてただの断片ではないことを知る。
>
> ――「接触と沈殿」ステイトメントより

他にも妊娠という自分にとって大きな出来事も重なり、冬が来る前には部屋を出ることになったので、それならばと最後に展示をする運びになった。会場になったのは同じ建物内の別の部屋。美術館やギャラリーのような整ったホワイトキューブと異なり、いびつな時間が堆積した空間で展示したことが写真の中の微細な気配を増幅させているようだとの反応もあり、ここを会場にして良かったと思っている[(2)]。

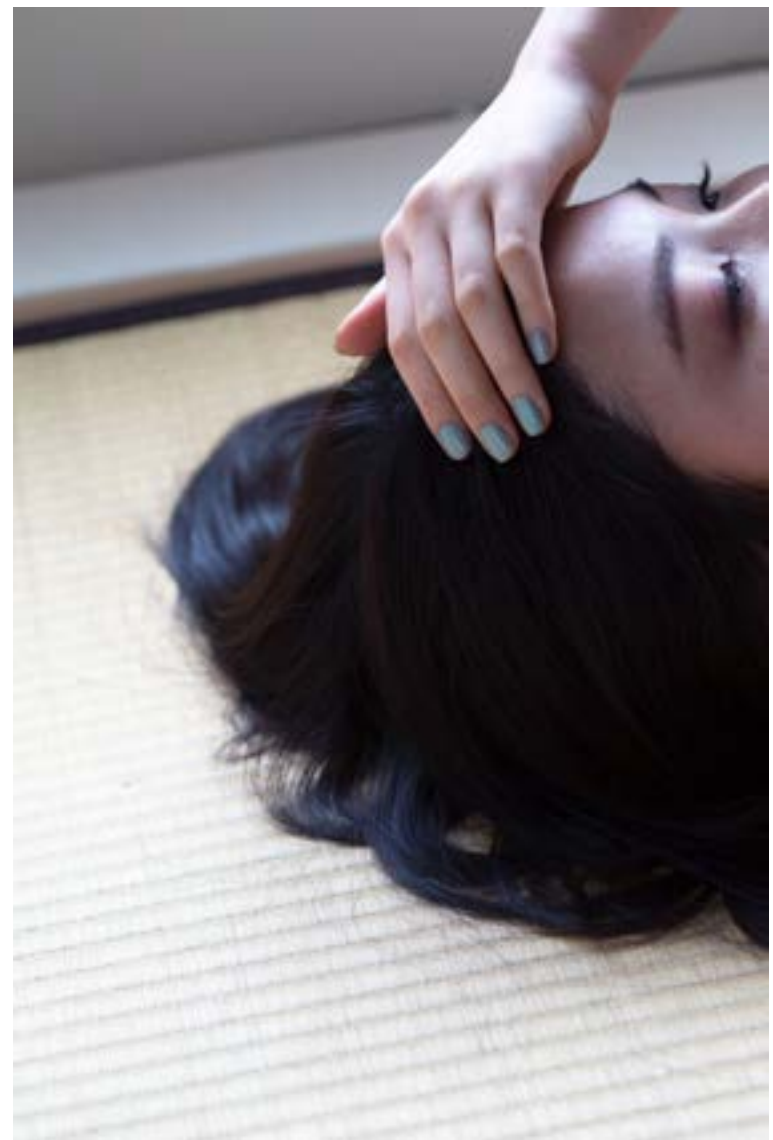
折しも主のいない庭の取り壊しが急に決まった。いつの間にかショベルカーの騒音が鳴り響くようになり、樹木がなぎ倒され、豊かに育まれた庭はあっけなく更地にされてしまった。こんなことなら写真を撮っておけばよかったと思うがもう遅い。白い花を咲かせる植物の名前もついに知らないままだ。柑橘類の果実を求めてやってきたあの鳥たちはどこへ行っただろうか。

小さな部屋とその周辺の在りようが、季節が一巡する間に変容していった。と言っても、それは私にとっての在りようが変化しただけで、その部屋はいつも同じ場所にあった。私がいても、いなくとも、朝が来れば柔らかい光が部屋に注ぎこまれ風が通り抜ける。夜になると窓硝子が宵闇のなかに溶けて外との境界が曖昧になっていく。私が居合わせたのは大きな時間のなかのほんの僅かな一瞬の時間で、その場所が有している一面を享受しただけだ。それは写真を撮ること、そして観ることにも通じているだろう。小さな時間の上に立って、決して見ることのできない広大な他者の時間について想像する。私は世界の豊かさについてもっと信頼してもいいのかもしれない。

注

(1) 作家 Website を参照
https://yukihatano.wixsite.com/photo/call

(2) 「接触と沈殿」スタジオ・ツキミソウ (京都市左京区) にて 2022 年 10 月 28 日～ 11 月 6 日のうち 7 日間開催した。会場写真は上記参照。



（はたの　ゆうき　写真家）

MFE= 多焦点拡張　第４号

まんのう町立図書館 10 周年に寄せて

豊嶋 和人

1　はじめに

競輪場に出かけるときは行き帰りに図書館に寄ることにしている。もし競輪場で運悪く負けてしまっても図書館で自分では買えない値段の専門書を借りればそのお出かけは「トータルでプラス」になる。勝てば本屋に寄って本を買う。

おおむねそんな二十代を大阪の郊外で過ごしたあと、郷里である香川県に戻った。そして同じような余暇生活を送ろうとしたのだが、満濃町（当時）には図書館がない。もちろん競輪場もない。高松競輪場に向かう道すがらに県立図書館や高松市立図書館に立ち寄ることになった。高松競輪場は高松市営だから、高松市民ではないわたしは高松競輪場で料金を払って高松市立図書館を利用させてもらっているようなものである。

2　田舎町と図書館の夢

自分が住む街にも図書館が欲しいとは常に願っていたことだったが、近隣の同規模の自治体を見ると図書館を持つ自治体のほうが少数派だった。うらやましいことに図書館を持つ周辺町村は、図書館をずいぶん昔、70 年代 80 年代に整備していた。普通に経済成長して増税せずとも税収が伸びていた時代だ。その後バブル崩壊で税収も落ち込み、自治体は何をしても税金の無駄遣いと責められるようになった。都市郊外のベッドタウンでもない田舎町が図書館など望むべくもないのだろうか。

ところが 2000 年代半ばから様子が変わってきた。ハード面では平成の大合併（1999 ～ 2010 年）と国からの合併のごほうびである合併特例債によって小規模自治体であっても新たな公共施設の建設が可能となった。他方、国も地方自治体も行財政改革真っ只中であり、公務員は削減される一方であったが、PFI 法（1997 年）と指定管理者制度（2003 年）が公立図書館の運営を民間に委ねることに道をひらいた[1]。

当初、図書館における指定管理者制度には都市部の図書館関係者を中心に批判的な見解が多かった[2]。確かに公共性の高い、

資料収集・管理の継続性が求められる施設で、雇止めのリスクが高く、専門性、専門職の軽視につながりやすい制度は好ましくないと言える。実際、郷土資料のレファレンスができないなど懸念されていたような事例は今でもネットニュースなどでときどき見聞きする。一方で、元々図書館で活動していた住民グループがNPO法人を立ち上げて指定管理者となり、従来よりもサービスを充実させていった例もある[(3)]。事例が積み上がってきた結果、要は制度の使い方次第という平凡な話に落ち着きつつあるのではないか。

しかし、元々存在していた図書館を自治体直営から指定管理者に移行する場合ならともかく、合併しても人口20000人に満たない、図書館運営のノウハウもない小さな町が図書館を持とうとすれば、よほど熱意のある町職員が他所から優秀な司書を引っ張ってこない限りは民間企業に任せるしかないのが実情だった。満濃町と仲南町、琴南町が合併してできた「まんのう町」の図書館は、改築される町立中学校に併設され、中学校ともども複数企業によるPFI事業として整備されることになった。図書館の運営は県外の図書館業務を専門とする企業が受け持つ。

3　開館まで

図書館開館まで半年となった頃、町民による選書ツアーが行われた。将来の利用者である町民が自ら蔵書にふさわしい本を選ぶという催しだ。町役場からマイクロバスに乗って１時間、高松の埋立地にある巨大書店に向かう。バスに乗っていたのは町役場の職員を除けば、ほとんどが公民館や小学校、幼稚園で活動している読み聞かせサークルの女性たちだった。そういうことであればと、児童書は彼女たちに任せて、選書の対象を自分の専門である農業技術や農業経営に絞ってカートに放り込んでいく。基本的な土壌肥料や作物の病害虫の本、町で多く栽培されている水稲や麦、ブロッコリー、ニンニクなどの栽培技術書を20冊ほど選んで、7割ほどが実際に蔵書された。

まんのう町立図書館に２ヶ月先駆けて開館したのが佐賀県にある武雄市図書館だ。開館前からそのあり方を巡って賛否が渦巻いた図書館である[(4)]。当時の武雄市長樋渡啓祐は図書館運営の実績がまったくなかった株式会社カルチュア・コンビニエンス・クラブ（以下CCC）を指定管理者として武雄市図書館をリニューアルする。CCCが運営する書店やスターバックスコーヒーを併設する今までにないと言えばない図書館として、全国的に視察、あるいは批判の的となった。

余談になるが、武雄市には競輪場もある。図書館の指定管理の前には市民病院を民間に移譲した樋渡市長だが、競輪場の経営には熱心だったようだ。関西のある競輪場職員にうかがった話によると、他の競輪場なら場長や課長級職員が行う、車券販売に協力してくれる全国の競輪場への挨拶を市長自らが行うとか。集客して収益をあげてなんぼの事業については意欲的なのだろう。年に一度の記念競輪最終日の市長挨拶でも

売上げが目標を上回った年は満面の笑みであったが、目標を下回り、露骨に不機嫌な年もあった。

そんな官僚出身らしからぬ樋渡市長によってこの年、図書館は集客施設の意味を色濃く持つことになった。それまでも無料貸本屋論争など図書館のあり方については様々な議論があったが、あくまで論点は図書や資料や司書の業務についてである。武雄図書館でも選書については議論になることはあったがそれは、ネット古書店からのとても選書と言えないような選書であったり、本の形をしたはりぼてを見栄えのよい高い書架の上に並べてみせる、といった演出の問題点が指摘されるというものだった。

それでも集客施設としての武雄図書館の（あくまでその時点での）成功は多くの地方首長や地方議会人に夢と希望を与えたようだ。まんのう町立図書館準備室のウェブログにも「新しい図書館は武雄図書館を意識してほしい」と町議会議員からの書き込みがあった。

開館直前、はじめて町立図書館に足を踏み入れたとき、まずは書架の低さに安堵した。ちゃんと書架にはこれから埋まる隙間がたくさんある。当たり前のことだ。隙間には未来と可能性が詰まっているのだから、ハリボテで飾る必要はない。飾り気のない外観と本が焼けることを考えた必要最小限の窓もいい。もっとも、図書館に見向きもしない同級生の農協職員は、その外観と後述するPFI事業の不祥事から、図書館のことを「サティアン」と呼んでいた。うまいこと言うなあ、がっかりだけど。

4　まんのう町立図書館開館

2013年6月、まんのう町立図書館が開館した。先述の不祥事は、図書館とともに整備された中学校の新しい体育館で発覚した内壁の強度不足から露呈した。供用されて早々、体育の授業中に生徒が壁に衝突したところ、コントのように壁が割れたのだ。仕様書と違う安い部材が使われていた。そういう箇所は他にも次々と発覚した。PFI事業のうち施設の建設を担うゼネコンに、事業をチェックする能力も人員もない田舎町は舐められていたのだ。われわれは身の丈以上のことをしようとしていたのだろうか。

PFIにしても指定管理者にしても、行政の側が丸投げでいいわけはなく、事業を理解しチェックする能力が行政や住民に必要なのだ。それはこの事件に関する町の報告書にもくどくどと書かれていることなのだけれども。しかし、その10年後にも子育て支援施設の指定管理者を巡る町のマネジメント能力のなさが露呈してSNSで大炎上することになる。

幸いなことに手抜き工事によって施設の図書館部分にケチがつくことはなかった。農村の図書館として農業支援をミッションのひとつとしていた図書館に有償ボランティアのような形でなんとなくかかわるようになっていたため、この事件をきっかけに奮起することになった…とたんに子育てが忙しくなったためになかなか思うような活動ができないもどかしさを味わった。

そんなある日、農業系出版社の若い営業さんが家まで訪ねてきた。

「今から町立図書館に見計らいに行くんですけれども一緒にどうですか？」

その営業さん―S さんとは２ヶ月ほど前に隣県で開催された研究会の出版社ブースで話をしたことがあった。天敵昆虫、いわゆる益虫の研究会で、直前にその分野の事典を出版していた出版社はブースで積極的な売込みをはかっていた。事典なので当然お値段は張る。しがない自営業ではとても買えないので、町の図書館に買ってもらいますわとその場は言い逃れていたのだった。

これは面白いことになった。図書館の会議室に一緒に本の詰まったダンボールを運び込み、S さんとともに職員さんの前でバナナのたたき売りのように本を売り込んだ。この町にいかに必要かという住民視点から農業書を勧めて何点か買ってもらった。

S さんにはその出版社の強みである農業の小ワザ講座を図書館で何度かやってもらった。出版社にとっては図書館営業の一環なので見計らいとセットになっている。そのたびに同席させてもらってバナナの叩き売りである。しかし毎回プッシュするものの事典の一桁違うお値段の壁は厚かった。結局 S さんが転勤で東京に戻ったあとで、仁義を通すために自腹を切って購入した。

S さんの後任の図書館営業の方にも小ワザ講座をお願いしていたのだけれども、小ワザ講座のあとに受講者に呼びかける雑誌の定期購読への反応が全くないことを理由に講座はすぐに終了してしまった。

5　コロナ禍と自由、そしてこれから

ならばと、わたしが講師となる講座をやることになったところで新型コロナウイルス禍がやってきてしまう。町は国や県のガイドラインより厳しい基準で公共施設の利用制限を行った。図書館も何ヶ月かは閉鎖され、その後も貸出返却利用のみに制限された期間が長かった。重症リスクの高い高齢者が多い田舎町だから仕方なかったのだろうか。公民館や図書館が使えないことで高齢者が孤立し、かえって健康を損ねるリスクもあるのではないか。

コロナ禍にあって次第に社会的に緩和の空気が広がるなか、ぼちぼちとわたしも活動を再開した。講座を再開し、農業書の棚に行政の配布物を置くコーナーを設置してもらい、調べ物に来た人が行政サービスと繋がりやすくもした。住民支援型図書館として名高い鳥取県立図書館の手法を真似たものだ[(5)]。うっかり農地を相続して困った今まで農業経験のない相続人が町役場の農林課にいきなり行くのは敷居が高い。近所の農家に相談する人もあれば図書館で調べようとする人もいるだろう。後者をさらに手助けしたい。自分もどちらかといえば後者のタイプだからだ。必要な知識を得た上でお客さんとしてではなく行政サービスを受けてほしい。

鳥取県では就農相談も図書館で行われるという。まんのう町でもそういうことがやりたい。相談のあと、熱意が冷めないうち

に技術書をたくさん抱えて帰る若者はきっといい農家になる。戦後すぐにはじまった農業改良普及事業のパターナリズムがいまだ色濃い、また良くも悪くも内輪な農村で自由になろうと思えば本を読むしかないと言ってしまおう。ほんとだよ。

注

(1) 高山正也『図書館の日本文化史』, ちくま新書 ,2022 年 ,281 頁
(2) 猪谷千香『つながる図書館』, ちくま新書 ,2014 年 ,42 頁
(3) 猪谷千香『小さなまちの奇跡の図書館』, ちくまプリマー新書 ,2023 年 ,37 頁
(4) 猪谷前掲 ,2014 年 ,118 頁
(5) 片山善博 , 糸賀雅児『地方自治と図書館』, 勁草書房 ,2016 年 ,5 頁

（とよしま かずと　農家、農ほん主義者）

競輪場私論

古川 岳志

競輪場に流れる時間

バンクと呼ばれる長円形の舗装された競走路を観客スタンドが取り囲んでいる。減速せずに走れるようコーナーには急角度の傾斜がついている。スタートとゴールは直線部の片側にまとめられていて、そのあたりでは、発走機に自転車を乗せスタートを待ち構えている選手達の様子や、ゴール直前の激しい攻防を間近に見ることができる。金網等で隔てられていて接触することは当然できないのだが、選手と観客との距離はとても近く、声なら直に届く。頑張れ、頼むぞ、勝て、期待を込めた声援、激励、懇願、その他、怒り、罵り、恨み言、ボヤキ、などなど、「賭けられて走る者」たちに直接メッセージを伝え、結果に何らかの影響を及ぼしたい、「運」への積極的関与を試みたい、という欲望を持つ観客が密集する場所でもある。

穴場と呼ばれる車券販売窓口、食堂、売店、手荷物預かり所、表彰式やインタビュー、予想解説会、時には芸人のショーなどちょっとした出し物が行われる仮設舞台、他に初心者向けの案内所などが設えられている。多少のバリエーションはあるが競輪場の基本構造はどこも似たようなものだ。入場料はどこも 50 円程度で無料にしているところもある。料金的には、ふらっと迷い込める敷居の低い娯楽空間だ。

日本全国に競輪場は 43 か所ある。改築されドーム型になった室内競輪場も３か所あるが、他は全て屋外型だ。夏は暑く冬は寒い。特別観覧席という空調の効いたガラス張りの施設を持つ競輪場も多いが、私はあまり利用しない。別料金がかかるし、せっかく生観戦しているのにガラス一枚で臨場感が削がれてしまうのも残念だからだ。屋外スタンドなら、観客の歓声はもちろん、選手たちが思わず漏らす、叫び声、呻き声、身体がぶつかり合う音、高速で走る自転車が発するシャーっという機械音などを、ストレートに聴くことができる。

ひとつのレースは３分程度で終わる。出走する選手は基本９人 (1)。スタートの号砲がならされると、選手たちはゆっくりと走りだす。まずは位置取りの駆け引きが行わ

れ、しばらくすると風よけの先頭誘導員の後ろに全選手が一列に並びそのまま静かに周回する。残り１周半のラインを通過するとジャンと呼ばれる鐘が鳴らされ、攻防が激しくなる。観客の声援も熱くなっていく。そしてゴール。歓声、ため息、怒りの声、高額配当が出た時などは驚きの声が場内にあふれるが、しばらくすると潮がひくように収まる。観客がレースに集中し興奮している時間は、余韻を合わせても一レースあたり 10 分程度か。通常、一日のレース数は 12 本。それが 5 時間以上かけて行われるので、開催時間のうち 3 時間くらいは観客達の意識が分散する比較的穏やかな時間ということになる。

私が競輪を見るようになって 30 年以上経過した。ファン歴としてはそろそろベテランの域に入るが、競輪への態度はなんとも中途半端なままだ。レースとレースの間は車券検討のための時間であり、真剣なファンならぼんやりなどしていられない。予想紙の情報を、自分の観戦記憶という最も信頼のおける資料と突き合わせ、刻刻と変わるオッズを確認しながら、何とか勝てる答えを導きだそうと集中しているはずだ。遊びは真剣にやってこそ面白い。それなのに私はといえば、確率的にどうせ勝てっこないんだから、と予防線をはり、適当な予想でお茶を濁して、小銭を張って遊んでいるだけだ。そして、だらだらと小さな損をし続けている。

というわけで私の場合、レースの隙間は、キョロキョロ観客の様子を観察したり、場内を散歩したり、無料サービスのお茶を飲んだり、イベントを覗いたりして、だらだら過ごすことが多い。時にはスタンドの見晴らしのいい席に座ったまま、バンクの上に広がる空を眺めたり、過去の競輪場での記憶を思い出したり、目下の心配事についてあれこれ思い悩んだり、「選手は一生懸命頑張っているのに自分は何をやっているんだろう」と自己嫌悪に陥ったり、本当に何も考えず無になっていたりすることもある。そうしているうちに、次のレースが始まる。競輪場に来たのを後悔したことはほとんどない。車券選択の後悔は、ほぼ毎回で、全く当たらず落ち込んで帰ることも多いが、そんな時でも、来るんじゃなかったとは思わない。競輪場という場所に流れる時間を体感することは、自分にとって、何らかの肯定的な効果があるようだ。

エキサイティングかつノスタルジックな空間

５年前、競輪の歴史をまとめた本を出した[(2)]。その序章でも触れたが、私が最初に足を踏み入れた競輪場は西宮競輪場だった。阪急神戸線西宮北口駅南東口すぐにあり、大阪市内の自宅から距離的にも交通費的にも一番近かった。競輪場はどこもだいたい似たような構造をしている、と先に書いたが、西宮は特殊だった。プロ野球阪急ブレーブスのホーム、阪急西宮球場のグラウンド内に、開催日だけ走路を組み立てて実施する日本唯一の仮設競輪場だったのだ。初の生観戦までに、テレビでレースを何度か見たことはあり、競輪に関する知識も少しは持っていたような気がするが、わざわざ競輪場に出かけてみようと思うに

至った経緯は忘れた。当時は、普段通学で利用していた阪急電車にも西宮競輪のポスターが掲示されていたし、何かのきっかけでふらっと出かけたのだと思う。最初は一人で行ったような気がする。

初めての競輪場には強烈な印象を受けた。子どもの頃、野球開催時の西宮球場には来たことはあったが、その時とは全然違っていた。たぶん大きなレースだったのだと思うが、客もかなりたくさんいて場内は混雑し活気があった[(3)]。ただ、客の様子は全体的に殺伐としていて、明るいとも言えるし暗いとも言える、とにかく、よくわからない不思議な雰囲気だった。選手が入場してくる時点から、激しいヤジが飛び交い、レース後には怒鳴り声をあげている客もたくさんいた。怒りは選手に、あるいはハズレ車券を買ってしまった自分自身に向けられていたのだろうが、近くにいる私が怒られているかのようで、目が合ったら殴られてしまいそうな雰囲気を醸し出している客もちらほらいた。普段、大人が怒っている姿を目にする機会なんてあまりないものだ。多くの人が日本の豊かさを疑いもしなかった 90 年代初頭、バブル景気全盛のころだった。なのに、歴史資料で見たような「敗戦後の混乱期」を思わせる、猥雑で危険な空気が競輪場には充満していた。これはどういう世界なのだろう。そんな素朴な疑問から、競輪をテーマにする「研究」的なものがはじまった。こんなに長期にわたるとは想像もしていなかったが。

このように、当時の競輪場にはかなりの活気があるように見えたのだが、それと同時に「終わり」の雰囲気を漂わせてもいた。競輪史の概要をちょっと調べると、競輪が敗戦後のどさくさの中で始まり、その時代の匂いをまとったまま、高度経済成長期を経て、緩やかに停滞しながら今まで生き延びてきたものだ、ということはすぐに分かった。上述のように、この頃でも大きなレース開催時には多数の観客が集まっていて、上品が売りの阪急電車には似つかわしくない灰色の身なりをした中高年男性競輪ファンが沿線の品位を下げ、周辺住人の眉をひそめさていたのだが、高度経済成長期の頃の記録写真を見ると、活気の桁が違っていた。西宮競輪場は、プロ野球の野球場として備えている内外野の観客席がそのまま流用されていたのだが、内野２階席の上の方まで満員の客が鈴なりになっていた時代があったのだ。私が通い始めた頃は、バンクの近くにはそれなりに集まっているが、スタンドの上の方はまばらだった。しばらくすると、警備の効率化のため最上階部分は閉鎖された。関係者に聞き取りをすると「昔はすごかった」という話ばかりで、競輪が斜陽娯楽であることは明らかだった。

友人知人にも中央競馬のファンは沢山いたが、競輪ファンは皆無だった。中央競馬は 80 年代以降、コマーシャル戦略で着実に若いファン層を広げていて「脱ダーティーイメージ」に成功していたが、競輪は相変わらず中高年男性の特殊な世界というイメージが強固だった。面白い世界だけど、近いうちに終わってしまうかもしれない。そう思った。そして、そのような印象

に一層ひきつけられもした[4]。大阪万博の年に生まれた自分には、戦後の混乱期も、高度経済成長も実際には経験していない過去だ。それでも、競輪場が持つ猥雑な雰囲気に、ノスタルジーのようなものを感じた。「当時の社会はこんな雰囲気だったのかな」と昔を幻視できるような、そういう不思議な面白さを感じる場所であり、文化だった。

競輪研究立志編[5]

90 年代の半ば、大学を卒業し何のテーマももたず社会学の大学院に進学した。学部生のころは差別問題に関心を持っていたのだが、それをより深めていきたいというより、もうしばらく勉強生活的なことを続けたいと思っていただけだった。いわゆる社会に出て働くのが嫌なだけだったのかもしれない。興味を持ち始めていた競輪を修士論文のテーマに選んだ。指導教官がスポーツ社会学やポピュラーカルチャー研究に関わっていたこともあり、そんなに突飛なテーマを選んだつもりはなかった。競馬に関する真面目な本はそれまでにも山のように出版されていたが、競輪についてまともに取り扱ったものはほとんどなく、自分が取り組めば第一人者になれるのではないか、という甘い見込みもあった。カルチュラルスタディーズという言葉をよく耳にするようになった頃だった。それがアカデミズムの歴史の中でどういう意味を持っているのか、正直まったく理解していなかったのだが「つまり大衆文化を研究対象にしても良いってことですよね」とお気楽に受け止めていた。一昔前の大学院ならこういうテーマはおそらく認められなかったのだろう、ということは一応知っていた。「自分の趣味の研究」だが、当時の自己認識はちょっと違った。競輪はまだそれほど好きなわけではなかったからだ。当時の私が一番好きな趣味ジャンルはプロレスだった。今では、全く見なくなってしまったのだが、学部生の頃はプロレス研究会に入るほど思い入れがあった。大学院の先輩の誰かから聞いた「一番好きなものは研究対象にしない方がいい」という言葉に「なるほど」と思い、今の段階ではまだそんなに好きなわけではないけど、研究対象としてはなかなか面白そうだという理由で競輪をテーマに選んだのだ。

かつて大人気だったが、今は人気を失いつつある競輪とはどういう世界なのか、調べて考えてみる、というような緩い問題設定で修士論文の構想発表会に臨んだ[6]。指導教官は、まぁ好きにやったらいいんじゃないですか、というような反応だった気がする。詳しくは忘れた。だが、先輩のひとりから次のような主旨で批判されたことは、今でもはっきり覚えている。人気がなくなっているから研究対象にする、なんて社会学としておかしいのではないか、人気があるのはなぜか、というならわかるが。そう言われて、なるほど確かにそうだ、と思った。今考えても当然の批判だったと思う。それに私は何と応答したのだったか。たぶん、何か適当な言い訳をしてしのいだのだろう。この批判に対して、正直、今でも何と答えたらいいのかわからない。屁理屈は言えそうだが、説得力のある反論を組

み立てる自信はないし、やはり、社会学としては先輩の言っていた通りかもしれないな、と思う。だから今でも頭の片隅にひっかかり続けている。その一方で、自分が面白いと思う「社会の中で行われているもの」を調べて考察して何が悪いんだ、学問的意味があろうとなかろうと知ったことか、というような反発心も生まれた[7]。

修士論文は一年余計にかかって何とか書いた。面白く読んでくれた先生もいてうれしかった。しかし､この後どういう風に「研究」を発展させていけばいいのか、全く分からなくなってしまった。博士論文は、年限が迫ってきていたので、修士論文の内容を公営ギャンブル全体にひろげ、膨らませて何とか書いたのだが、自分でも全然ものたりない出来になってしまった。長すぎる大学院生活を送っていた頃は、競輪のことを考えるのが義務みたいになってしまい、競輪が楽しめなくなってしまった。やがて、競輪場からも足が遠のき、運営組織が出していた『月刊競輪』という機関誌を購読してパラパラながめるだけ、というような状態が続いた。

競輪への興味がよみがえったのは、2010年前後、女子競輪が復活するかもしれないという話が耳に入るようになった時だ。戦後の「男女平等」を象徴するものとして、競輪誕生の当初は女子の競走も行われていたのだが、競輪人気がうなぎ上りだった高度成長まっただ中の1964年に廃止されていた。ギャンブルの対象としての人気が得られなかったためだ。女子競輪は、競輪史の中で失敗の歴史として総括されており、修士論文を書いた時には復活するなんて想像もできなかった。当然、ジェンダーの視点からも論じられるし、この動きは追っかけて調べるべきではないか、と久しぶりに興奮し､やる気が出てきた。フィールドワークとして競輪場や競輪学校に出かけるうちに、男子レースに関する情報もまた熱心に追いかけるようになり、ファンとしても競輪を楽しめるようになった。あんなに好きだったプロレスにも全く興味を持てなくなってしまったし、他に好きなスポーツもないので、今では競輪が一番好きなジャンルになっている。

予感の行く末

競輪は、近いうちに終わってしまうかもしれない。30年前の予想は、めでたくハズレたのだが、当たっていた部分もなきにしもあらずだ。

私を競輪世界に誘い込んだ西宮競輪場は、もうない。同じ西宮市内にあった甲子園競輪場と共に、2002年に廃止されたのだ。バブル崩壊後の売上低下に伴い赤字に転落し、施行者（自治体）は、あっという間に撤退を決断した[8]。身近な競輪場を失ったことも、私が競輪から疎遠になる大きな要因だった。実際には経験したことがない「昔」を懐かしく幻視できる場所だった西宮競輪場は、記憶の中にしか存在しない本当に懐かしい場所になってしまった。

この年には北九州の門司競輪場も廃止されている。競輪場の廃止というと、東京都の美濃部亮吉知事時代の公営ギャンブル廃止政策が有名だろう。革新政党の支援を受

け、大きな人気を獲得した美濃部は、初当選後に都営ギャンブルの廃止を宣言し実行した。競輪界最高の売り上げを誇っていた後楽園競輪場は 1972 年に廃止された。その跡地には今、東京ドームが建っている。高度経済成長期までには、いくつもの競輪場が廃止されている。それらの多くは、後楽園同様、黒字のまま廃止となった。公営ギャンブルの売上は、施行自治体の財源となる。中でも人気だった競輪は、自治体の財政を大きく潤してきた。つまり、この頃までの廃止は、ギャンブルによる収益は悪であるという倫理的判断に基づくものだった。

21 世紀に入ってからの廃止は、すべて赤字転落によるものだ。2010 年には神奈川県の花月園、翌 11 年は滋賀県の大津びわこ、12 年香川県観音寺、14 年愛知県一宮がそれぞれ廃止となった。売上げ低迷を受けて選手のリストラも進んだ。修士論文を書いていた頃には 4400 人もいた競輪選手は、今では 2400 人程度に減少している。00 年代後半は、次はどの競輪場が廃止になるか、ということが常に話題になっていた。

しかし、約 10 年前の愛知県一宮を最後に、撤退の波は一応ストップしている。その頃から、売上げが徐々に回復し、赤字だった競輪場も黒字に転換し始めたのだ。復活した女子競輪が新しいファンを呼んだからか、というと残念ながらそうではない。ガールズケイリンと銘打って 2012 年にスタートした新生女子競輪は、当初、短期で終わってしまうのでは、と危ぶまれたのだが、10 周年を向かえた現在も続き、確実にファンも増え売上げも悪くない。新企画として大健闘しているとはいえるが、競輪全体の売上を底上げするほどの人気はまだ獲得できていない。好転の一番の要因は、ネット環境の向上である。競輪場に行かずとも、レース映像を見ることや、車券の購入がとても容易になった。それと共に、売上げも増加しているのだ。

電話投票の仕組みは 80 年代にはすでに実施されていた。ただ、レースを見て賭けるためには、テレビ中継に頼るしかなかったのだが、90 年代以降、特別レース以外のテレビ中継はほとんどなくなり、CS 放送の専門チャンネルを契約して見るくらいしか方法はなかった。しかし、2010 年代以降になると、ネットさえあれば比較的きれいな映像で誰でも無料で楽しめるようになり、予想に関する情報も簡単に手に入るようになった。投票についても、民間事業者の参入が許可され、パソコンやスマホで簡単に登録・投票できるようになっている。

中でも 2011 年に小倉競輪が始めた「ミッドナイトケイリン」の成功は大きかった。他の公営ギャンブルでは難しい、深夜 21 時から 23 時半までの時間に、ネット投票のみ、無観客で行われる。観客を入れないため、場内警備や車券販売などの人件費も大きく削減でき純益をあげることができる。狙い通り、日本中の深夜のギャンブルファンを独占することに成功し、売上げを伸ばしていった。小倉の成功を受けて他の施行者も追随し、今では 30 か所の競輪場が、無観客・深夜レースを実施している。

ネット売上げに支えられ、競輪は命脈を

保った。そしてコロナ禍。外出が抑制された疫病の流行は、ネット販売が主流となっている公営ギャンブル全体に売上の向上をもたらした。競輪の場合、2020 年の日本選手権競輪が中止になり、選手控室の密をさけるという名目で開催あたりの参加選手数が制限され７車立てのレースが主流になるなど、マイナスの影響もかなり受けたのだが、売上げ自体は大きく伸び 2022 年の年間総売上はバブル崩壊後の最高値を記録している。リストラ開始以来、下げられてきた選手の賞金総額もアップした。競輪は、ネットによって生き延びたのだ。

私も、大きなレースが行われる時などは、仕事の合間の時間にスマホで結果を確認したり、ちょっと賭けてみたりするようになった。競輪に触れている総時間は、以前よりかなり伸びている。しかしながら、競輪場に出かける機会は減っている。

西宮・甲子園を失って以降、私のホームバンクは、京都向日町、奈良、岸和田になった。ちょっと電車賃も嵩む上、どの場もミッドナイト競輪を実施しているため、観戦可能な開催日が少なくなってしまったのだ。気分にまかせてふらっと出かけられる場所ではなくなっており、あらかじめスケジュールを確認して、年に数回のチャンスになんとか現地観戦ができるだけ、という感じになっている。競輪場を運営する側も、現地で観戦する観客を重視したところで売上げには関係がないという意識なのか、施設としての居心地は悪くなってもいる。

最初に書いたような、バンクの周りをぐるりと観客席が囲んでいるタイプの競輪場は減った。観客スタンドの老朽化を理由に一部を撤去したり、閉鎖してそのまま放置してあったりして競輪場の「終わり」感濃度は増している[(9)]。売上げは伸びているのに観客数は減り続けている。

良い変化もある。ネットを通してファン層が広がり、観客の年齢層がかなり若返ったのだ。また、女性の観客が増えたのも大きな変化だ。私が最初に出かけた頃の西宮競輪場は、99.99％以上が男性客で、男性が女子トイレを平気で使っているくらいだった。実際に女性などいないから文句も言われなかった。それが、近年では女性客も全然珍しくなくなり、スター選手が集まる大きなレースでは、ざっと見て１割以上を占めるなんてことも増えた。そういうレースでは、今でも、それなりの観客数が集まるし、以前と違って悪質なヤジもかなり減り、「怒る大人」を見る機会も減った。総合的に見ると、競輪場は娯楽空間として健全化している、と言えるのかもしれない。

西宮・甲子園もネット時代まで持ちこたえていれば、黒字に転換できていたかもしれない。今日は競輪場に行きたいな、とふと思った時に、ああ、西宮があったらなぁ、と寂しく感じることが時々ある。ギャンブルがしたい、というのとはまた微妙に違う、あの場に行きたいという気持ち。といいつつ、これだけネットで簡単に見られるようになっていたら、近場に競輪場があったとしても、実際に足を運ぶ機会はかなり少なくなってはいただろうとも思う。

公営ギャンブル場が存在すること自体、

社会にとって良いことなのかどうかは分からない。競輪が好きなくせに、大阪にカジノを誘致するのは反対しているなんて、矛盾してないか。もし自分が、美濃部都政下の東京都民だったとしたら、後楽園競輪廃止に賛成していただろうか、どうだったろう。近頃、そんなことをよく考える。そういう不要不急の思考をめぐらせるのに、競輪場の観客席ほどぴったりの場所を私は他に知らない[(10)]。

注

(1) 後述のようにコロナ禍をきっかけに７車立てのレースも増えた。2012 年に復活した新生女子競輪は７車が基本。

(2) 古川岳志『競輪文化～「働く者のスポーツ」の社会史』青弓社 2018。刊行までの経緯について出版社のサイトにやや詳しいエッセーを書いています。お暇な方はご一読ください。「原稿の余白に：構想 20 年『競輪文化「働く者のスポーツ」の社会史』を書いて」
https://yomimono.seikyusha.co.jp/yohakuni/blank161.html

(3) 競馬の G1 にあたる「日本選手権競輪」「競輪祭」などの特別レースや、競輪場毎に行われる「〇〇周年記念」レースなどを、本稿ではざっくり「大きなレース」と書いている。これらはトップクラスの選手が出走し観客も多く祝祭的色合いも強い。それ以外のレースは、普通開催、ヒラ開催などと呼ばれており雰囲気は全く異なっている。近年は特に観客も少なく、閑古鳥の鳴く競輪場の中で静かにレースが進んでいくだけ、ということも多い。

(4) 鉄道マニアに「葬式鉄」という表現がある。もうすぐ廃線になる路線とか、最後の運行になる列車の情報などに反応して集まる人たちのことだ。私も、新しく始まるもの、未来を感じさせるものより、「終わり」の方に心動かされるタイプなのだと思う。

(5)『競輪研究』は大阪に本社を置く 1957 年創刊の老舗競輪予想専門紙の名称でもある。現在、関西で生き残っている唯一の予想紙で、情報の信頼度は高い（私的印象）。
http://keirinkenkyu.co.jp/

(6) 競技自体はスポーツなのになぜスポーツ扱いされてこなかったのか、という「問い」も掲げていた。曖昧で稚拙ながらも、一応は持っていた問題意識について、上述の拙著で、ある程度は整理して触れているので、気になる方はご一読ください。

(7) 他の方が「このテーマで将来はどうするつもりなんだろうな」とつぶやいていたのも耳に残っている。本当に、どうするつもりだったんだろうな、当時の私は。先輩には、もっと大きい声で問いただしていただきたかった。

(8) 公営ギャンブルは地方自治体が施行者となって開催されている。西宮、甲子園競輪は、共に兵庫県市町競輪事務組合（西宮市、姫路市、尼崎市、明石市など兵庫県下２０の自治体で構成）が施行者で、管理は競輪場の所在地である西宮市が行っていた。競輪場の持ち主は、それぞれ（株）阪急電鉄、（株）甲子園土地企業で、それら企業に組合が使用料を払って運営する形だった。確かに売上げは低下していたが、大都市大阪から最もアクセスの良い立地条件を生かして、新規ファン開拓を図ろうという動きもあった。西宮競輪場の場合、廃止４年前の 98 年に競輪用の特別観覧席を新設している。89 年に阪急ブレーブスがオリックスに売却され、91 年からは神戸にチームの本拠地を移してしまったため、西宮球場は競輪専用施設にシフトしていたのだ。しかし、組合の中心だった西宮市は、努力に見合う見返りは期待できないと判断し、あっさり中止を決断した。ちなみに、関西は競艇王国であり、大阪市には住之江競艇場、兵庫県尼崎市には尼崎競艇場があり、今日でも、それぞれ年間 200 日弱も開催しており大きな売上げを誇っている。関西における競艇の意味については、いずれ改めて考察したい。

(9) 日本中の多くの競輪場で施設の老朽化が進み、耐震基準の問題もあるため全面改築に踏み切る所も出ている。ちょっと前まで存廃論議の続いていた向日町、奈良の場合、売上げが少々回復しても、そこまでの資金的余裕はなく、立ち入り禁止の区域を増やしながら、だましだまし開催しているのが現状だ。売上げの中心がネット投票になっている今、少数の来場者のために少ない運営資金を使うのは、経済的には非合理なのは確かだ。しかし、ネットを通して競輪を知った新規ファンに、生のレースをある程度快適な環境で見る機会を与えることは競輪の将来につながると思うのだが。

(10) ここに書いたことの多くは、他の公営ギャンブル場でも当てはまるだろう。ただ、競技の違いによって、場がもつ空気は当然違う。競馬場の場合は、馬という生き物の存在感、匂いを外して語れないだろうし、競艇やオートレースの場合は、エンジンが発する爆音が場の雰囲気を作り上げる大きな要素になっている。競輪場は、競走路の中も含め全空間的に人間が主役なのが特徴だ。高速の自転車が発するシャーという音も、あくまでも人間の筋力が生み出したものであり、機械音というより、道具の音、つまり人間的な音に（競輪贔屓の偏った感性には）感じられる。

(ふるかわ たけし　大学非常勤講師･文化社会学）

MFE= 多焦点拡張　第４号

馬と世相

コロナ禍の競馬場

西川　和樹

競馬は、一頭のドラマではなくて、群衆のドラマだということです

寺山修司「競馬論」

0. はじめに：競馬と記憶

競馬ファンにとってコロナ禍はどのような出来事であったか？本稿はこの問いをめぐるものであるが、その前に、競馬と記憶、この両者の関係性について探るところから始めてみたい。

個人的なことを書かせてもらうと、最も古い競馬の記憶は、今から30年近く前にさかのぼる。サクラチトセオーが勝った天皇賞・秋。この秋には、その妹にあたるサクラキャンドルがエリザベス女王杯を勝ったように、この頃は「サクラ」の冠名を持つ馬がほんとうによく走っていた。今はおぼろげなこの頃の記憶は、テレビ画面を通して得たものであろうが、不思議なことに、映像の記憶というよりはむしろ、新聞や雑誌を通した文字情報として頭に刻まれている。

初めて競馬場を訪れたのは、おそらくその翌々年のことだ。こちらはより身体的な感覚を伴ったかたちで記憶している。サクラローレルの勝ったオールカマー。その頃は祖父母が津田沼に住んでいて、ここを訪れたおり、父親が近くの中山競馬場まで連れだしたのだと思う。1996年の秋、まだ小学生の頃、自分の小さな体の感覚を思い出す。

幼少期より競馬に触れた者が往々にしてそうであるように、その出会いは家庭環境によるところが大きい。自分の場合、小学校に入学して字を覚え出すと、時をそう隔てることなく父親から競馬新聞や競馬ゲームを手渡され、競馬にまつわる基本リテラシーを身につけた。その頃は電話回線とファミコンを利用して家から馬券投票が可能になった頃でもあり、機械の扱いが不得手な祖父に請われて、馬券の種類や買い方も一通り覚えた。

趣味とはつまるところ、それにまつわる膨大なデータベースを頭のなかに入れて、その個々の要素が織りなす変化や重なりを楽しむものではないか。競馬のリテラシーを修得するまでに、（小学生にとってはということであるが）おびただしい数の新しい言葉を覚えなくてはならない。ターフ、マイル、フェブラリー、ノーザン、サイレ

ンスなどなど、次々と出現するカタカナ語を、意味もわからず頭に吸い取っていったことを思い出す。近年、英語の早期教育の重要性が叫ばれて喧しいが、自分にとってはこれが英語教育の始まりであった。

競馬ファンならば、一度はこのように自らの古層を探るようにして競馬との出会いを語ってしまうのは、一つには競馬自体が、記憶の織りなす芸術であると言うことができるからだ。季節のめぐりは競馬を成り立たせる重要な要素で、毎年毎年、同じ季節に同じレースがめぐってくる。桜が咲けば桜花賞、5月の終わりの日本ダービー、秋にはフランス凱旋門賞、年末の有馬記念・・・。だが同じレースがめぐってきたところで、競馬場を走る馬の隊列、声援を送る観衆たち、レース後の後味、どれ一つとして同じものはない。自分が手にする馬券の成否はもちろんのこと、レース展開、ひいきの馬のがんばり、勝者の弁、敗者の弁、そういうものが全て合わさって、一つのレースが出来上がる。その結果を前にして、歓喜や感動はそのままに、悔しさや哀しみや怒りなど、ネガティブな気持ちも受け止めながら、競馬ファンはまた新たな記憶を自らに刻みつける。

もちろん、毎週欠かさずに競馬を見るといっても熱の入れ方には濃淡があるから、記憶の残り具合にもばらつきがある。それでも、とりわけ年に数回の大レースのなかには、その時の身体の感覚や場所の空気感を含めて、時が経っても鮮明に思い出すことのできる場面がたしかにある。家電店のテレビ売り場でみた1999年有馬記念、台風直撃のなか京都競馬場に駆けつけた2017年菊花賞、入院中のベッドでみた2021年日本ダービーなどなど、まるで樹木が少しずつ育ちゆくように、競馬にまつわる記憶の幹は毎年新たな節を重ねるようにして大きくなる。自らの身に起こった出来事を一つのレースと結びつけ、古い記憶を再生するための参照軸とするのは、競馬ファンの持つ習性なのかもしれない。

本稿はコロナの時代を、競馬との関わりにおいて留めるために書き残したものだ。これによって、競馬場という「場」が危機の時代に応じていかなる変化を遂げたのか、と改めて問いかけ、この数年のあいだ世間を賑わせたコロナの時代を理解するための一助としたい。この問いを軸に筆を進める過程で、競馬場は、単に人々が熱狂し、賭博に興じる場であるのでなく、人々の集合的な記憶を留める想像／創造の共同体であることも示せればと思う。

1. 逃げ馬の時代、追い込みの時代

コロナ禍の競馬を読み解くに当たって、時代は少し古くなるが、馬と世相の関係をあまりにも独創的に語った寺山修司と虫明亜呂無の対談「競馬論」を紐解いてみたい。競馬論の古典として有名な同書は、ともに熱心な競馬ファンである劇作家の寺山と演劇評論家の虫明が、多様な角度から競馬について語ったものであるが、それだけでなく、これが語られた1960年代という時代を閉じこめて結晶にしたような一冊である。

「競馬は群衆のドラマ」から始まる対談

は、「競馬は抒情詩か叙事詩か」、「美しいウマが勝つ」、「英雄はつねに人工的という思想について」、「敗者に生まれる文化」などの見出しが並ぶ。現代の眼からすれば、飾った感じが過ぎるようにも映るが、それを割り引いたとしても、そこには競馬の深みを垣間見せる金言がちりばめられている。

それぞれ詳述できないのは残念だが（ちくま文庫にて入手可能なので、興味をもたれた方はぜひ原典にあたってほしい）、ここで取り上げるのは、「逃げ馬の時代、追い込み馬の時代」という見出しから始まる寺山の語りである。

競馬の基礎知識をおさらいする。競馬とは、定められた距離を最も早く駆け抜ける馬を予想する営みであるが、馬たちはスタートから全力疾走するわけではない。馬にまたがる騎手は細心の注意を払いながらペース配分を行い、ゴール板に至る最後の直線までは、それぞれの馬の適性に応じた位置取りを試みる。ゴール板を一番に駆け抜けるためには、相応のペース配分と戦術が必要であり、強い馬とは、すなわち騎手の働きかけに最もよく応えられる馬だということもできる。「逃げ馬の時代、追い込み馬の時代」で寺山が語る「逃げ馬」「追い込み馬」とは、そうした戦術のなかで、両極端なレース運びを得意とする馬のことだ。

「逃げ」とは、スタートダッシュを決めて後続を引き離し、そのままゴールまで駆け抜けようとするものである。群（むれ）を率いるリーダーにも、群から逃げる臆病者にもみえる。当然ながらリスクの高い戦術でもあり、レース序盤に体力を使いきって失速、大敗を喫することも珍しくない。その反対に「追い込み」は、先行勢の失速をねらって中盤までは後方で体力温存、最後の直線で形勢逆転を狙おうとするものである。他馬を一気に追い抜かす瞬発力と馬込みを駆け抜ける胆力が必要条件だ。

それぞれの戦術には一長一短があり、戦術とレース展開は、馬券を買う競馬ファンが一夜を明かしてしまうほど重要な要素である。ともあれ、一度も他馬を抜かせない鮮やかな「逃げ」切りと、ゴール目前数メートルの「追い込み」大逆転は、見た目が派手なこともあり、それだけ人気の出やすい戦術であったりする。

「競馬論」の寺山は、「逃げ馬」、「追い込み馬」に言及しながらも、こうした一般的な理解とは別の角度から切り込んでいる。寺山がまず注目するのは、数多いる馬のなかで、ひとはどのような馬に惹きつけられるのか、という本質的な問いである。その端的な答えは、ひとは自分と共通点のある馬に惹きつけられる、ということになる。この点を突いて寺山は「自分を買う。つまり競馬場へ、わざわざ一枚のカミになった自分を買いに行くわけだ。だからみんな自分によく似た馬を買ってくる」と述べる[(1)]。

競馬の「予想」というのは極めて複雑なプロセスである。「強い馬」を選ぶ者もいれば、「好きな馬」を選ぶ者もいる。データを重視する者もいれば、戦術や血統を大切にする者もいる。ラッキーナンバーやオカルト的な要素から予想を組み立てる者も

いる。そしてだいたい外れる。こうした「予想」という行為を下支えするものに「自分」が含まれている、と寺山は述べているのだ。

それが群衆的な行動様式となり、馬の人気となって表れた場合には、どのようなことが言えるだろうか。「逃げ馬」、「追い込み馬」に言及しながら、寺山は次のように述べている。

「ごく大ざっぱに、社会科学的に言えば、社会が相対的に安定している時は逃げ馬が評価される。これは現状維持で、どこまで逃げ切れるかという発想からきている[(2)]」。「逃げ馬」は安穏な生活をも乗せて走っている。「追い込み」はそれとは逆のことが起こっている。「反体制運動が盛り上がってくる機運の中で追い込み馬が評価されるのは、形勢逆転という感じが非常にあるわけですよ[(3)]」。

社会の勢いが、馬の位置取りと重なる。これに続く以下の語りは、この「競馬論」のなかでも最も勢いを増す箇所の一つで、競馬と世相を考える際に重要な示唆を与えてくれる。少し長くなるが、まとめて引用した上でコロナ禍の競馬について筆を進める契機としよう[(4)]。

> たとえば、安保闘争の年に、大衆は「逆転」のムードを待望していた。あの年はヘリオスという片目の逃げ馬がいて、すばらしい逃げ足を持っていたが、クラシックレースでは一勝もあげられなかった。あの年はスターロッチが有馬記念で大穴をあけたのをはじめ、キタノオーザ、クリペロなどの追い込み逆転の馬が活躍した。へんなものですよ。相対的に平和ムードがただよいはじめて、それぞれが家庭の中で電気冷蔵庫を中心に夢想しはじめると、メイズイのような逃げ馬への期待がたかまってくる。スタンドで「そのまま！」「そのまま！」と叫ぶでしょう。逃げているのはメイズイではなくて、自分たちの安定した家庭（マイホーム）生活なんですよ

2. ステイホームの競馬論

「逃げているのは自分たちの安定したマイ・ホーム」とは名言だ。これに倣ってコロナの時代の競馬を言い表すとすれば、「外からステイホームを押し返す」とでも言えようか。コロナ禍における競馬界の主な出来事については、次節で具体的にたどる。不要不急の外出自粛が呼びかけられたこの時期、観客は競馬場に入ることは許されなかったが、レース自体は予定通り施行されていた。ここでは、2020 年を画期的に印象付けるレースとして、春先に行われた二つのレース、桜花賞と皐月賞を取り上げてみたい。両レースとも、「家（うち）／内にいろ」と強迫的に叫ばれる世間に抗うようにして、勝ち馬がレースの終盤に「外」から豪快に進出し、圧倒的に差し切ったのであった。

まずは桜花賞から。檜垣立哉は、『哲学者、競馬場へ行く』という著書のなかで「桜花賞こそは競馬の華である。私は桜花賞が日本競馬の中心であると信じて疑わない」と断言し、以下のように描写する[(5)]。

> 狂ったように桜が咲き誇る、阪神競馬場のある仁川。私は大阪北部から、毎年桜吹雪のなかでクルマを西へと走ら

せる。大学のある（競馬ファンならおなじみの）待兼山を超え、左手に伊丹空港の滑走路をみながら猪名川を通過し、昭和初期の阪神間文化をよく伝える松林の生い茂った武庫川を抜けていく。眼の前には、阪神競馬場の位置を確認するランドマークのような甲山。それを目印に桜満開の仁川へと向かっていく。

十数年前から関西に住むことになった私にとって、仁川の桜と淀の菊に赴くことは、あたかも宗教的な巡礼儀式のようである。そこで私は、自分がいかんともしがたく、ひとつ年をとったこと、地球が一回りしたことを確認する。

桜花賞は、仁川の阪神競馬場で行われる。檜垣はここで、競馬の規則性を改めて確認しながら、桜花賞の美しき原風景を描きだす。だが 2020 年の桜花賞は､雨模様だった。先の見えない不穏な世相を反映したような天候であった。雨が降れば馬場はぬかるみ、これを走る競走馬にはいつもとは異なる適性が求められる。一般的に、消耗の激しい芝生を駆け抜ける馬力の強い馬が台頭するのだと言われる。当日の天候は、騎手の戦術やコース取りにも影響を与え、強い馬が勝ちに見放されることもある。

天候が競争に与える影響について一概に論じることは難しいが、この年の桜花賞に関して述べれば、レース展開は先行勢に利があった。芝の状態は折からの雨で水を含んで、見るからに走りにくそうだった。そのなかで序盤に先手を取った二頭の馬が、最後の直線でも先頭を譲らず、そのまま押し切るかとも思われた。後方に待機していた馬は、既に力尽きているのか、なかなか前との差が埋まらない。その中、ただ一頭、追い込んできたのがデアリングタクトだった。彼女は、最終コーナーのから直線の入り口のところで、「外」に進路を取る。後方集団から抜け出すとぐいぐいと距離をつめ、残り数十メートルのところで先頭に立った。外からの見事な差し切りであった。鞍上の松山騎手は、温厚な性格でも知られるが、この日は珍しく感情を露わにして力一杯喜びを表現した[(6)]。

桜花賞が、年若き牝馬の集う一戦だとすれば、翌週に行われる皐月賞は牡馬が集う重要レースで、翌月に行われる競馬の祭典日本ダービーを見据えてしのぎを削る一戦である。春から夏にかけてのこの時期は上半期の重要レースが集中していることもあり、季節の歩みに合わせて毎週ごとに満ち足りた気持ちが高まりゆく。そのため無観客のまま淡々と過ぎゆくこの年の競馬は、例年との落差も大きく、競馬場は違和感だけが振り積もるような不思議な雰囲気に充ちていた。

皐月賞の舞台は中山競馬場である。年末の有馬記念の舞台でも知られる同競馬場は、おにぎり型の形状と最後の直線の上り坂を持つ特徴的なコースで、馬を巧みに操縦する騎手の手腕が試される競馬場としても知られる。これに加えて皐月賞には、実力未知数の若駒が集うこともあって、毎年、波乱含みの結果がもたらされる。

しかしその年は、観客から最も支持を集

めたコントレイルが快勝。注目すべきはその勝ち方で、前の週の桜花賞とはまた違ったかたちで「外」からの差しきりを決めたのだった。この皐月賞でコントレイルが引いた馬番は１番枠、すなわち最も内側からのスタートだった。枠による有利不利も、馬券を買うファンにとっては大きな悩みの一つで、1番枠と18番枠では当然のこと騎手の進路取りが異なってくる。最内の１番枠は、ロスなくコースを立ち回れる点では優位であるが、外枠から馬が覆いかぶさってくることも多いので、馬に余計なストレスがかかりやすく、何よりも最後の直線で進路の開かない難しさがある。

皐月賞のコントレイルは、最内でスタートを切ったあと中団に待機、レース途中は予想通り「内」で我慢を強いられた。この馬を応援する陣営は、そのまま内に閉じ込められて力を発揮できない展開も頭によぎったことだろう。勝負所は最後の直線の入り口だった。ゴール板に向かって加速をはじめる多くの馬が、小回りのコーナーに対処しきれずに外側にふくれる瞬間を取り逃さず、鞍上の騎手は目にも留まらぬ進路取りで「外」へと進出した。絶妙なタイミングで「外」へと進路を開いたコントレイルは、追いすがる他馬の追撃を振り切って、そのままゴールへなだれこんだ。ジョッキーの巧みな進路取りの光る外からの差し切りだった。

その後、デアリングタクトはオークス、秋華賞を勝ち、コントレイルは日本ダービー、菊花賞を勝って、2020年は二頭の三冠馬の誕生した奇跡の一年となった。競馬史に名を刻む新たな名馬の誕生を目の当たりにして、競馬場に足を運ぶことができなかったことを悔やみこそすれ、多くの競馬ファンはあらん限りの喝采を送ったことだろう。桜花賞と皐月賞は、その端緒を告げるという意味で、後年にまで語り継がれるレースとなったわけだが、人々を強く惹きつけたのは、外側の進路取りによって現状を打破する、その軌跡にあったのではないか。こうした進路取りは、厳しい勝負の世界に身をおく騎手たちの一瞬の判断によるもので、決して意図的なものではないなだろう。だが、英語で「コントレイル(contrail)」が「飛行機雲」を意味することそのままに、皐月賞で彼がたどった筋道は、「家／内」に「家／内」にと、強迫観念のように唱えることを止めないステイホームの時代にあって、これを押し返す「外」への進路取りとして、いつまでも消えることのない一本の筋道になり、人びとの心に深く刻まれることとなった[7]。

3. あたらしい競馬様式

上でみた二つのレースは、コロナの時代に競馬界に生じた象徴的な出来事となった。それでは、より具体的な側面に焦点を当て競馬界全体を見渡した場合、人びとの活動に制限が加えられる特殊な状況下において、競馬界にはどのような事態が生じただろうか。主な出来事をここに書き留めておきたい。

主催者の発表や各種報道をたどると、競馬界隈で感染防止対策が呼びかけられ始めたのは、2020年2月下旬のことであった。

日本中央競馬界（JRA）は、2月28日より当面のあいだ無観客で競馬を実施することを決定、あわせて全国に点在する馬券発売所の営業休止も発表された。競馬が無観客開催となったのは初めてではない。先の戦争の末期、この頃には娯楽のために馬を走らせることはもうできなかったが、軍馬養成の必要と馬産の保護を名目に、無観客で競馬が行われたことがある。当然、この時は馬券の発売もなかったが、今回の場合は全く逆で、インターネットを通した馬券投票が広く呼びかけられ、本来ならば有料放送であるケーブルテレビの競馬中継が無料となるなど、自宅で競馬観戦を楽しむという態勢が整えられた。

3月になって世界的な感染の広がりがみられるようになると、競馬開催の是非を問う声も聞かれるようになる。スポーツ界では同月に予定されていた春のセンバツ高校野球が開催中止、プロ野球の開幕も延期が発表されるなど、重大な影響が出始めていた。競馬に関しても同様で、欧米諸国では次々に開催の中止や大きなレースの延期が発表されている。

その混乱のなか、3月28日に開催を予定されていたドバイ国際競争をめぐる一連の騒動は、当時の状況がいかに流動的であったかを示している。毎年この時期に行われるドバイ国際競争は、潤沢なオイルマネーを反映した賞金の高さでも知られ、この時期は他国の競馬の閑散期にあたることもあり、地元勢に加えて海外からも強豪が集い、日本馬も毎年大挙して駆けつけている。

遠くドバイへと運ばれた馬たちが、他にも遠路はるばる世界各地よりやってきた馬々と顔をあわせて馬場を駆け抜けるその様子は、一日のうちにいくつも大きなレースが行われる時間の経過――夕方に始まり、薄暮となり、やがては照明の煌めくナイター競馬となる――も含めて相当な見応えがあり、一度は現地に足を運んでみたくもなる春先の風物詩の一つとなっているが、2020年はその開催時期が良くなかった。未知のウイルスが広がりゆく最中、状況が刻々と変わりゆく不穏な日々の記憶は新しい。ことドバイ国際競争に関して述べれば、流行の広がりをみせた欧米を中心に、自国より出国できない関係者も現れるなど、状況は早い段階よりネガティブであった。状況の悪化とともに、関連イベントの中止や無観客開催が決定されたが、それでもレース自体は予定通り施行されるということであった。それが、結局、開催6日前になって中止が決定されたのであった。

日本からはおよそ20頭の出走が予定されていた。開催中止の影響は大きかった。出国直前の空港で中止を知らされた関係者もいれば、既に現地に渡航していた騎手や厩務員もいた。海外のレースに参戦する際には、現地の環境に慣れるため馬は早めに現地入りすることが通常であるから、ほとんどの馬は何も知らされないままドバイで準備を重ねていた。もともと海外のレースに出走することのリスクは高い。慣れない環境に身をおいた後、調子を崩し、そのまま勢いを取り戻せないこともある（その反対に、輸送の好きな馬もいたりするので面白いのだが）。今回、日本からはるばるド

バイに運ばれた一群の馬たちは、同地の競馬場を走ることなく帰ってきた。その馬の気持ちは、いかばかり推し量られようか。また、未知の感染症の広がりのなか、自分の身の安全も決して確保されているとは言えない状況で、早めに現地入りした騎手や厩務員の落胆も大きかったことだろう。既に現地に到着していた数名の騎手は、レースに乗ることなく帰国した。これらの騎手には帰国後の検査と隔離生活に加えて、2週間のあいだ競馬場とトレーニングセンターへの入構も禁止された。春のシーズンの大事な数週間を棒に振ったことになる。

ところで、コロナ禍の初期段階には、国境をまたいだ後の一定の隔離が、人間に課せられる新たな行動様式となったが、この点で特筆すべきなのは、こうしたことは、馬の世界ではむしろ通常のことであった。動物の国際移動には、国や種別によって細かく規則が定められている。国際レースに出走する競走馬の場合、現行の規則では、5日間の輸入検疫と3週間の着地検疫の課されることが一般的だ。どちらも所定の検査を受けながら一定期間の隔離が行われるが、着地検疫の期間に入ると、馬を牧場など関連施設に輸送することが可能になるため、輸入検疫のときに比べてある程度のトレーニングが許される。こうして一定の期間をおいたあと、疾病の発症がなければ他の馬との接触や次のレースへの出走が可能となる。こうした施策は、コロナに関係なく以前より行われており、この点で人間の世界が馬の世界の方へとわずかながら近づいたわけであるが、検疫に関わる諸規則が既に整っていたことは、感染症の流行のなか競馬を実施できた遠因の一つに数えられるのかもしれない。

その他にも、流動的な日々に対応するために様々な変化や混乱がみられた。それぞれ細かい出来事ではあるが、ここに備忘録として記述したい。緊急事態宣言の頃になると、人馬の移動を極力減らすような措置が取られている。騎手は土日をまたいで別の競馬場に移動することが禁止され、同一の競馬場で騎乗することになった（例えば、大きなレースに合わせて土曜は東京、日曜は京都と場所を変えることは普通であったが、それができなくなり、その影響として若手騎手にも有力馬が任される機会が増えた）。騎手は競馬開催の前日より定められた施設に滞在、公正競馬の観点から外部との通信が遮断されるが、三密防止の観点からそれも緩和され、当日の競馬場入りが認められるようになった。

また補助金に関わる関係者の不祥事もあった。事業の継続が困難になった個人事業主を対象とした政府の給付金を、騎手や厩務員を含む大量の競馬関係者が受け取っていたことが明らかになっている。詳しい経緯は定かでないが、競馬の開催はあったわけであるから、その大半が受給要件を満たしていなかったはずである。その後、給付金の返還、関係者の処分、関連組織の謝罪などがあって幕引きとなったが、他には不正受給により刑事事件にまで発展した案件もあるだけに、何とも後味の悪さを感じさせる。

競馬場の風景はしばし無観客の状態が続

いたが、感染症の流行に応じて取られた方策も時間の経過とともに緩和されていった。競馬場に少しばかりの観客が戻ってきたのは、2020 年の 10 月 10 日の開催であった。その後も観客の動員は事前申し込みによる抽選制となって、競馬場に入る観客の数は大幅に減らされた。その制限も徐々に緩和されたが、天皇賞や日本ダービーなど、年に数度の大レースでは、2023 年春の時点でも事前の申し込みが必要で、未だ完全復旧には至っていない。入場規制一つをとってみても、競馬場は、境界を閉じたり開いたりしながら現在進行形で姿を変えている。

４. 競馬のお金のまわりかた

このように即時的な対応を迫られながらも、途切れることなく週末の競馬ができたことは、鬱屈した世相に差し込む一筋の光であった。他の多くの大規模イベントが中止や延期を迫られたのとは対照的に、無観客ではあるものの、日本の中央競馬は年間のレースカレンダーを予定通り消化することができた。これが可能であったのはなぜだろうか。ここではその要因について経済的な側面から掘り下げていきたい。

まず押さえておくべきことは、競馬の開催は、馬券を購入するファンはもとより、馬を生業とする職業者にとって重要な意味を持つということだ。馬にまたがる騎手、競走馬の調教を行う厩務員、馬産に携わる牧場関係者、競馬場や牧場など施設の管理者などがこれに含まれる。競走馬の現役生活は短い。2 歳の夏より順次デビューを迎え、5 歳から 7 歳のどこかで引退を迎える。稀に息の長い活躍をする馬もいるが、3 歳の秋までに実力をつけなければ、出走できるレースがなくなってしまう。けがや競争能力の喪失により早く引退する馬も多いし、それどころか、育成段階での能力不足やアクシデントによって、競走馬としてのスタートラインに立てないことも珍しくない。すなわち競馬場でゲートに収まる馬たちは、既に数々の課題を乗り越えた稀有な存在であり、牧場関係者は、そうした馬たちの活躍を対価として生業を継続している。競馬開催の中止は、馬にとっては貴重な競争機会を逸することを意味し、牧場関係者や厩務員にとっては、生活の糧を得るほとんど唯一の手段を失うことを意味する。

では、競走馬の得る賞金がどこから出てくるかというと、そのほとんどは馬券の売り上げからである。そして、これがコロナ禍においても競馬の開催が継続できた最大の理由であろう。プロスポーツや他の大規模イベントでは、球場や劇場など、観覧のための入場料及び来場者の購入する関連グッズや飲食物が収益の重要な部分を占めている。競馬場には（席を選ばなければ）数百円で入ることができる。年に数回は無料で来場できる日さえある。主催者側の収益の大部分を占めるのは、レースに投じられる莫大な掛け金で、年末の大一番の有馬記念では、いまも 500 億円以上の馬券が売れる。これには当たり馬券に払い戻す配当分も含まれているが、レースがどのような結果であれ、全体の売り上げの 2 割以上は主催者の取り分となることが定めてられて

おり（改めてこう記すと、馬券に勝つことがいかに難しいかわかる）、一つのレースのわずか数分のうちに桁違いの金額が動いていることとなる。

この収益構造を下支えするのが、インターネットを通した投票である。先に、インターネット投票を通したステイホームの競馬環境が整えられた、と述べた。だがこれには注釈が必要で、これは、むしろ以前より多数派に属する楽しみ方で、コロナ禍はその流れを加速させたにすぎない。いまや銀行口座とネット環境がありさえすれば、全国どこにいても簡単に馬券を買えるようになっていて、（本稿で対象としている）ＪＲＡ主催の競馬は土日にまとまっているが、他に各自治体主催の地方競馬というものがあり、こちらは競合を避けるために平日や夜間にレースが設定されていることも多く、賭けるのをやめられない一部の者にとってこれはこれで問題含みの構造となっている。

コロナ禍でも以前と全く変わらずに馬券を買うことができた。だから無観客開催でも興行を続けることができた。というのが、なぜ競馬の開催ができたか、という問いに対する最も端的な答えだ。むしろ大規模イベントの開催や他の娯楽が制限される中で、競馬への注目度も増していった。主催者側の発表によれば、一年を通した馬券の売り上げは近年３兆円を上回る値で推移しているが、驚くべきことに、2020 年と 2021 年はともに前年を３パーセント程上回る売り上げを記録している。コロナ禍で競馬場の入場は規制されたが、馬券の売り上げは好調であった。

その一方で、事の成り行きを注意深くみていくと、コロナ流行の当初にはパチンコ店への執拗なバッシングもあったから、競馬界には公営ギャンブルであるが故の危機感もあったように思う。結果的には杞憂に終わったことだが、「不要不急の」娯楽への怨念がそのまま競馬界にも飛び火する可能性も充分にあったわけだ。

そうした懸念を反映してか、競馬界は対外的な支援策を積極的に表明していた。競馬開催の継続が既定路線になると、JRA 騎手クラブは騎乗数に応じて医療従事者に寄付を行うことを発表、これに続いて馬産や馬主など関係者の団体も寄付金による支援を表明した。また主催者の動きとして、6 月の後半に行われる宝塚記念の馬券の収益から 50 億円が感染症対策支援として拠出された。もともと馬券による収益の一部は、国庫納付金として国へ献上される。近年ではその額は年間 3000 億円を軽く上回る額だ。競馬開催の継続を望むファンのあいだでは、「馬券を購入して経済をまわす」、「競馬があるからステイホームできる」など、流行の語句を用いて競馬開催に支持を表明するということがインターネット上で行われた。

このように、コロナ禍の競馬開催を下支えした要因としてまず収益構造の点を指摘したが、前述のように、競走馬の現役時代の短さ、もともと感染症を想定した検疫制度の整備など、馬のバイオリズムに即した事情もあるだろう。他にも、農林省に連なる競馬関係者の政治的なつながり、各種

CM スポンサーとなっているメディアとの関係など、多面的な要素が関わっていると思われるので、まだまだ稿を改めて追求するべき余地を残しているように思うが、最後に文化的な側面をもう少し掘り下げて切り上げたい。

近年のメディア戦略が奏功した競馬人気の高まりも興行を支えた要因として重要だ。JRA はそれまで数年間、複数の若手人気俳優を起用したテレビ CM によって若い競馬ファンの開拓に動いていた。また、新たなファンの獲得といえば、2021 年にリリースされた「馬娘」は、競馬ゲームの枠を超えて社会現象と言えるような人気を博した。歴代の名馬を擬人化してアイドル文化を掛け合わせたこのゲームは、アニメ化やライブイベントの開催など多メディア的に展開して、競馬には疎かった層も取り込んだと思われる。

このゲームから得られた収益は、馬券とは異なるかたちで競馬界への循環構造をつくりだしている。「馬娘」の配信元の親会社にあたるサイバーエージェント社の社長は、熱心な競馬ファンとしても知られ、このゲームの大ヒットと時を同じくして馬主資格を取得、2022 年のセレクトセールでは合計 18 頭、総額 22 億円超の競走馬を購入している。牧場で育成した若駒を馬主に売り渡す競り市は、毎年初夏に各地の馬産地で行われているが、このセレクトセールには厳選された「良血馬」が上市されることもあって、二日間で気が遠くなるような金額が動く。2022 年には売り上げが 257 億 6250 万円と、過去最高に達した。三億以上で競り落とされた馬も数頭あった。これは好調な馬券の売り上げを反映していることもあろうが、今や日本の馬産も海外競馬と地続きであるから、コロナ後の世界を席巻した物価高騰を反映してか、競馬界に流れ込む金額も留まることを知らない。

5. おわりに：静かな競馬場と荒れる馬券

テレビを通してみるコロナ禍の競馬場は、普段とは違う異化された世界だった。誰もいない競馬場は閑散としていた。いつもは観客の声援に紛れしまう、馬が駆けるときの空気の揺れが間近に感じられ、レース中の騎手が安全のために周囲とコンタクトをとるかけ声も聞こえてきた。

馬は生得的に臆病な生き物だと言われる。馬の視野は 350 度もあるそうで、いつも周囲の様子を伺っている。馬はゴールを目がけて駆けているのではなく、後続から逃げるために走っているのかもしれない。逃げ馬とは、言い得て妙な表現でもある。

大きなレースでは、10 万人近い群衆が競馬場に駆けつけることもある。競馬場の熱気は新しい季節の訪れを告げる風物詩となり、レース前にはファンファーレと手拍子、スタートが決まれば大歓声、最後の直線では応援する馬や騎手の名前を精一杯に叫ぶ。

注意深い馬の方からすれば、競馬場の熱狂はとても迷惑なものかもしれない。大歓声におびえ、興奮し、これが原因で実力を出し切れない馬もいる。海外の競馬では騒音を抑える配慮も行われている。日本でも最近になってようやく対策を求める声も挙

がってきたが、興奮した競馬ファンの歓声を抑えることは容易ではなさそうだ。そうした環境でも見事に走り切る馬が強い競走馬なのだ、という見方もある。

だから無観客の競馬になって、次のことが起こりそうなことは容易に想像できる。

静寂に包まれた競馬場を走る馬たちは、いつもの騒音に悩まされることもなく、自らの実力を充分に出し切ることが可能となった。だとすれば実力のある強い馬がそのままレースを勝つ。予想する側は、難しいことは考えずに素直に実力を評価して馬券を買えば良いのだと。

だが、コロナ禍の競馬場では、これとは全く逆の奇妙な出来事が起こっていた。馬券が荒れに荒れたのである。競馬の配当の仕組みとして、ある馬の実力が評価されて馬券が売れると、その分だけ配当が低くなる。その反対に、実力がないとみなされた馬（＝人気のない馬）が、大駆けすると、配当が跳ね上がる。これを「穴をあける」とか「荒れる」という。馬券に勝ちたければ、人気のない馬の真の実力を見抜かなければならない。しかし狙いすぎると当たらない。

コロナ禍の競馬は、いつにもまして荒れた。とりわけ大きなレースほどそうであった。2020 年夏の函館記念は 15 番人気のアドマイヤジャスタが勝利。倍率は 77．3 倍であったから、1 着を当てる単勝であれば 100 円が 7730 円になる計算だ。だが夏の競馬が「荒れる」ことはよく知られていて、この程度なら想定内。それが 2021 年になり、初春の金鯱賞で最低人気のギベオンが勝つと（単勝 227 倍！）、何やら不穏な空気が漂った。最も格式の高いＧ１レースには、有力馬には細心の注意で調整が施されるため、実力馬が好走し、荒れることは少ない。だがコロナ禍のＧ１レースではとにかく１番人気（最も支持されて馬券が売れた馬）が勝てなかった。2021 年冬のホープフルステークスから 2022 年秋の菊花賞まで、1 番人気の連敗記録は 16 となり、それまでの記録を大きく更新した。手堅く配当を狙う堅実派にとっては地獄、波乱を好む一発逆転派には天国だっただろう。静かな競馬場で、馬券は大荒れだった。

馬券を買う競馬ファンたちは、競馬場から観客の騒音が消えるという突然の変化についていくことができなかったのだろうか？それとも、突然の変化に戸惑ったのは馬たちの方だったか。そもそも馬は静かな環境でこそ実力通り走れる、という見立てが間違いで、早く走る（逃げる？）ためにはそれなりの騒音を必要としているのだろうか？静かな競馬場で馬券が荒れる妙は、コロナ禍の競馬界に生じた一つの難問であった。

本稿では、2020 年から数年の競馬界の動きを振り返り、コロナ禍で起きた事象のいくつかに考察を加えた。その動きを網羅的に記せたわけではないし、一応の落ち着きはみせたとは言え、状況はいまも流動的で、感染症の新たな流行によって競馬場がまた異なる姿をみせる事態も十分に想定される。最後に、本文に上手く組み込むことのできなかったいくつかの出来事を書き残して筆を置きたいと思う。

2023 年 4 月、改修工事のため長らく閉鎖されていた京都競馬場が再オープンした。改修に入る前の開催では既に無観客となっていたから、これを含めると３年以上ものあいだ京都競馬場に入れなかったことになる。個人的に（競馬場のある）淀に通えない日常は、アルコールの抜けたビールのようなものだった。再オープンした京都競馬場は、予想されていたように、インターネットによる座席予約が優先され、有料座席の区画も増えてしまうなど、競馬場のゾーニングが進行していたが、それでも、ふらっと立ち寄る観客を受け入れる余地は十分に残している。「場」の魅力とはそのように分け隔てなく人を迎え入れる開放性によって担保されるのではないか。

また最近の出来事として、厩務員によるストライキがあったことも書き残しておかなければならない。労働者の待遇という点からみた場合、馬券の売り上げが好調であるにも拘らず、馬に最も近く接する厩務員の給与体系は改善されていないという。そうした状況のなか、2023 年 3 月、待遇の改善を求めて厩務員の組合はストライキを打った。当該の週末は、競馬開催が不可能となるはずであったが（実際にそのように報じられた）、組合に属さない厩務員の助力によって、レースは予定通り実施された。いつものように競馬のある週末を過ごすことができたのは、果たして良いことだっただろうか。今後の状況を注視したい。

最後に取り上げるのは、ドキュメンタリー映画『今日もどこかで馬は生まれる』（平林健一監督、2019 年）だ。この映画が描き出すように、その歩みは決して早いものではないが、近年の競馬界の取り組みとして、引退した競争馬の余生を支援する動きがひたと広がっている。毎年誕生する多くの競走馬のうち、現役を引退したあと、繁殖や乗馬など、セカンドキャリアに進めるものはごくわずかである。引退した馬について詳しく知る事はできないし、おそらくその余生は恵まれたものではない。『今日もどこかで馬は生まれる』には、馬に関わる様々な現場で、そのような現在の状況に疑問を抱く人びとが登場する。彼ら彼女らは引退馬を自ら引き取るなど、それぞれのかたちで支援を行っている。最近では競馬界の内部からもこの問題について声が上がり始めている。その声はまだまだ小さく、人間社会と動物との関わり、というより広範な主題に触れるため、議論すべき課題が数多くある。それでも、コロナという緊急事態において、馬という生き物が自らの生にとってどれほどかけがえのない存在であったか、改めて気づいた人も多いと思う。自分もそのなかの一人として、その声を受け止めたいと思う。

注

(1) 寺山修司・虫明亜呂無『対談 競馬論』筑摩書房、1993 年、p.29.
(2) 同上、p.29.
(3) 同上、p.29-30.
(4) 同上、p.30.
(5) 檜垣立哉『哲学者、競馬場へ行く 賭博哲学の挑戦』青土社、2014 年、p.21.
(6) 第 80 回桜花賞
https://www.youtube.com/watch?v=upETw4WKUbk
(7) 第 80 回皐月賞
https://www.youtube.com/watch?v=IHzE8_cVkWM

(にしかわ　かずき　競馬ファン駆け出し）

MFE= 多焦点拡張　第４号

「戦いの場所」としての記憶

「記憶の存在論」をもって『ゆきゆきて神軍』と『ゆんたんざ沖縄』を読む

李 啓三

1「記憶の存在論」との出逢い

私は帰れれば帰りたい、たとえ生涯のあいだ、ここにいようとわたしは幸福になれぬだろう。

(ゲルハルト・ショーレム、「天使のあいさつ」[1])

ヴァルター・ベンヤミンは彼の歴史哲学テーゼで「歴史の天使」を語る第９番テーゼを先の詩から始める。ベンヤミンは自分の時代に蔓延した思想的雰囲気、すなわち技術の発展を通じた進歩への信仰、大衆と国家機構への信頼、そしてこうした時代の波に乗っているという安定感が、ドイツの労働階級を決定的に堕落させたと主張した[2]。

堕落という言葉が持つ宗教的ニュアンスを取り除くことができれば、ベンヤミンの診断は、90 年が経った今日の世界にもほぼあてはまるのではないかと考える。したがって、私はベンヤミンが「記憶」に頼るしかなかったと考える。彼が最期の瞬間まで胸に持ち歩いていたというクレーの絵「新しい天使」で描かれた「歴史の天使」とは、未来に背を向けて過去を凝視している。天使は死者たち（そして、死者たちの記憶）を呼び起こしたいと思っている。しかし天国から吹いてくる「進歩」という嵐によって身動きができないまま、それにおいやられ、一歩一歩未来に向かって「後ずさり」している。天使はどこかでとどまりたいと思っている。実は、天使は、先の詩のように「帰れれば帰りたい」と思っていたかもしれない。

年齢的にやや遅くなってから私は念願の日本留学を決め、去年（2022 年）冨山ゼミに入り、論文集『記憶の存在論と歴史の地平』（京都大学人文科学研究所、2022）を通していわゆる「記憶の存在論」と出逢うことになった。そして、日本近現代における「ナルシシズム」と「歴史意識」の展開様相を取り上げる私の博論の構成を考える際、また、様々なテキストに接するとき、「記憶の存在論」を思い出す。

私はなぜ記憶の存在論に着目することになったのか。私は韓国で修士課程を修了し

てから、かなり長い間、高校の国語教師として働きながら教育運動、脱原発運動など様々な社会運動にたずさわってきた。その運動のあと、研究者になろうとした時、私はすでに韓国社会を含めて世の中の進歩に対する信頼をほとんど失っていた。それからは、思想の居場所を考えつつ、いままでの経験を通じて気づいたことをまとめてみた。らんぼうに言えば、これは、話せることよりは話せないこと、話になることよりは話にならない側、意識よりは無意識、現在の秩序よりはこれを形成してきた過去、理性よりは身体の領域が持つ圧倒的な力への目覚めに収斂されるようであろう。そして、「話せないこと、話にならない側、無意識、過去、身体」という５つの全領域にかかわる「記憶」の力。要するに、私は自分自身を含めて、個人にせよ、社会にせよ、記憶の統治下にあると考えるようになったのだ。

「記憶の存在論」は、こうした記憶が「主体の統治下にはない、固有の力と動きを持って主体に成り代わって過去を証言する[3]」モノであると主張する。記憶は単なる観念ではなく、主体と別の領域に存在する「モノ」として、ある「物質性」持つと「記憶の存在論」は主張する。さらに、記憶は主体の身体に残した自分の痕跡に触れ、自分の命令に従うことを主体に要求する。いわば、記憶の暴力なのだ。

ところが、「記憶の存在論」は、個人にせよ、集団的主体にせよ、ある「救い」にもかかわると考える。過去からの傷に苛まれる人々や、過去を捉え直すことで変革の認識論を定めようとする側に、記憶の存在論は、「過去における人間の行為の不確定性」(Hacking1995=1998: 316) に基づき、「新しい記述が手に入るようになると、新しい (意図的な) 行為が可能となり、行為は――それが過去の行為であっても――新たな記述の下での新たな行為となる」(Hacking1995=1998: 291-292) [4]」と教えてくれる。

だからこそ「記憶」の領域とは、「新しい記述を手に入れる」ための激しい戦闘が行われる戦場であり、一方では「予めの排除」（ジュディス・バトラー）を通して思い浮かべることさえ自らあきらめさせる暴力が作動する空間でもあるが、暴力が作動しているからこそ、いつも揺れ動いており、「主体が危険にさらされていると感じる時, 同時に何者かが登場し始めている[5]」、要するに「戦いの場所」でもあるということだ。

私は本稿で、記憶が現れる際絡み合うさまざまな様子を、ドキュメンタリー映画『ゆきゆきて、神軍』（原一男 監督、1987）と『ゆんたんざ沖縄』（西山正啓監督、1987）を通して分析し、そこから、記憶が主体の外側に実在する「モノ」であること、また、記憶とは絶え間なく戦闘が行われる「場所」であることを語ろうと思う。

２『ゆきゆきて、神軍』と記憶の存在論

『ゆきゆきて、神軍』は、太平洋戦争の時にニューギニアのジャングルに派遣され、飢餓地獄を生き残った奥崎謙三の物語である。彼は神戸市で妻とバッテリー屋を

営みながら、全国各地を標語だらけのトラックで走り回り、殺害された二人の兵士の処刑（そして、人肉食い）に関与したとされる元上官と部隊員たちを訪ねて真相を追い求める一方、なくなった二人の遺族を訪れ、慰霊の儀式を行う。元隊員たちは、奥崎を避けるのはいうまでもなく、なかなか口を開こうともしないし、口を開いても「上官の命令にしたがっただけだ」というばかりだから、奥崎は時には、暴力をふるって証言を引き出そうともする。

この映画で明示されるのは、やはり主体の外側に位置する「記憶の存在」である。奥崎は記憶に振りまわされる。彼が記憶を領有することなく、記憶が奥崎を領有し、戦後 36 年が経ったその時にも、彼の人生を振りまわす。では、記憶が奥崎や、これをひたすら想起しないとする元上官と同僚たちの外側に実在するとすれば、一体どこにあるのか。記憶は場所を持つ。奥崎は記憶が存在する場所を作り出すため、必死に努力する。狂ったものとも見えるが、奥崎はこの映画で出てくる全ての場面を元上官と同僚たちと出会う場所として設定し、そこで記憶を遍在させ、呼び出そうとするのである。慰霊の場所であっても、元上官と同僚たちと出会う場所であっても、殺された人も、殺して食ったと見える人も、一言も言わないが（あるいは言えないが）、記憶はその場所に遍在し、時には呼び出され、現れる。

この映画には奥崎の饒舌とも言える「雄弁」が溢れているが、興味深い点は、彼の長い、なかなか分かりにくい話のなかで、奥崎のトラウマの核心をなすと言えるもの、たとえば、飢餓や処刑、人肉食いにまつわる具体的な描写は登場しない。これは、トラウマ体験の表象不可能とも言える、ラカンの概念を借りれば、「象徴界（言葉）にいささかも及ばない刻印（Prägung）、現実界（トラウマ）が想像界に、そして想像界のみにもたらす「刻印」[6]」の無意識的作用であろう。記憶は、彼が元上官と同僚たちを訪ねた場所に「もう」座り込み、奥崎にして自分のトラウマの核心をなすものをひたすら避けさせつつ、彼の溢れている饒舌の器からこぼれ落ちているある「モノ」として、たまには、相手の「天皇陛下」という言葉にまるで引き金が引かれたような激怒として、またみっともない揉み合いに入る身振りとして、自分自身を現す。

トラウマ記憶は、基本的に「表象不可能」であろう。表象できるかどうかの問題において、主導権は主体の側ではなく、記憶の側にある。ここで、現れた記憶の言葉をどう受け入れるかという「記憶の解析学」が登場する。私がこれに関して論じようとするのは、記憶と言葉のズレ、あるいは、実在と言葉の「隔たり」である。ここには暴力の問題が介在する。

トラウマ理論家のキャシー・カルース（Cathy Caruth）は、トラウマの本質を「死に直面したこと」ではなく、「われ知らずのうちにその危機を生き延びてしまったことにある」と喝破した。言い換えれば、極限的な出来事から日常生活に生還したからこそ日常と地獄という二つの世界の臨界領域に生きることになり、トラウマ体験にな

るのである[7]。

トラウマ体験者の証言のなかでよく見るものとして、たとえば、奥崎のように長い話のなかでも具体的核心は避けようとする態度、あるいは沈黙、狼狽の身振り、意味のない言葉や脈絡が構成されない乱れた話の重なりがある。そして記憶は危機を生き延びてしまい、日常と地獄という二つの世界の臨界領域にいる彼に対して暴力を振るうようにさせる。映画の結末で、奥崎が元上官を再び訪れ、改造拳銃を持って押しかけ、その場でたまたま応対に出た元上官の息子に向け発砲し、殺人未遂罪などで逮捕されたことが字幕で紹介される。奥崎は懲役 12 年の実刑判決を受けて服役したという。

記憶が奥崎にして振るわせたこの暴力をどう受け入れるべきのか。ヴァルター・ベンヤミンは「暴力論批判」で「（暴力という）手段の適法性と目的の正しさについて決定をくだすのは、けっして理性ではない」と喝破する。すなわち、多くの人々によって信じられているある普遍妥当な正義とは「根強い習慣」に支配されているものにほかならないと論じる。ベンヤミンは、「予定された目的に手段として関わるのではない暴力の明白きわまる爆発」を、手段ではなく「宣言」と名付ける[8]。むろん、奥崎が振るう暴力がこれに当てはまるかとうかは、まだわからない。また、彼の暴力を擁護するつもりもない。しかし、彼が振るった暴力を手段の適法性や目的の正しさなどの物差しをもって判断されるべきではないということであろう。すなわち、これら手段の適法性や目的の正しさは理性が作り上げたものでもない、ただの「根強い（社会的）習慣」にほかならない「任意的もの」であるから、これらをもって奥崎の行為を判断するのはできないということである。エドワード・サイードは、投石するパレスチナ人は、入植地を作り上げるために行使されるイスラエルの暴力に利用された石を、象徴的に投げ返していると言う。彼によれば、それは、イスラエルに対する攻撃目的ではなく、良かれ悪しかれ、イスラエルをそれ自身に向けて投げ返すためだと言う[9]。もしかすると、奥崎の暴力とパレスチナ人の投石もベンヤミンがいった「宣言」としてまとめられるかもしれない。

それでは、記憶によってなさせられた「宣言」としての暴力が、取り上げられるもう一つのドキュメンタリー映画『ゆんたんざ沖縄』を通して記憶の現れについて述べてみよう。

3『ゆんたんざ沖縄』と記憶の現れ

この映画で描かれているのは沖縄の読谷村（よみたんそん）で沖縄戦のさなかに起きたいわゆる「集団自決」である。ガマと呼ばれる自然洞窟に 139 名の村人が隠れ、そのなかで 84 名が自決した。言うまでもなく自決とは、日本軍が住民を総動員することと同時にスパイ視して、多くの住民を虐殺したことが背景にあり、また、自ら命を絶ったというよりも近親者同士が殺し合ったことを意味する[10]。

映画の前半部、彫刻家の金城実の話以降、チビチリガマで生存者たちが 42 年前の洞

窟の中に入り、その時の「自分」と再び出会う姿は、短いが強烈な印象として残る。真っ暗な洞窟の中でかすかなライトに映った彼らの顔は、表現できない複雑な感情を浮かび上がらせ、生きてはいるが、まるで生きていない「漂う生霊」のように感じられる。これは、また、ドキュメンタリー映画『 沖縄のハルモニー証言・従軍慰安婦』（山谷哲夫 監督、1977 年）で、自分を訪ねてきたカメラの前で、時には「演技」しているかのように努めて平静を保っていたペ・ボンギさんの、安らかな食事と久しぶりに飲んだビールによって何かが揺れ始めて作られた、激しい動揺が感知される複雑極まりない表情を思い出させる。これは主体の外側であった記憶が、ようやく身体に付着する時の様子と言えるのではないか。したがって、その時、真っ暗な洞窟のなかを漂っている彼らの顔たち、また、暗い照明の下でささやかに揺れているペ・ボンギさんの顔を、「記憶の現れ」として、あるいは、「記憶が顔に写されたもの」として受けとめることもできるのではないか。

記憶の存在論から見れば、主体の外に存在する記憶は、したがって体験の当事者でない人にも接続できる。さらに、民話や宗教など集合的記憶の視座から見れば、自分が経験しなかった過去を自分の記憶といて受け入れるのは常にあることである。これは、『ゆんたんざ沖縄』に出てくる「平和の像」をめぐった「記憶の分有」にかかわる。また、ベネディクト・アンダーソンが「無名勇士の墓」をもって言った「ナショナリズム」にも関わるのではないだろうか。自分が体験しなかったことを自分の記憶として受け入れる、いわゆる集団記憶としてのナショナリズム。そして私はこの地点が、記憶の存在論が集団的ナルシシズムと接続するところだと考える。

ベネディクト･アンダーソンが言うように、無名勇士の墓はナショナリズムの魅惑的な碑である。このような記念物に公的で儀礼的な敬意を捧げる理由は、それが意図的に「空いていた」ということで、その中に誰が横になっているのか「誰も知らない」ためである。 そうであることで、その中にはナショナリズム的想像で「いっぱいになる [11]」。

『ゆんたんざ沖縄』の主なモチーフと言える金城実を中心に生存者と沖縄の子どもたちが共に作っていく平和の像は、ベネディクト･アンダーソンが見破った無名勇士の墓の正確な対極点に置かれる。体験したことではないが、沖縄の子供たちが基礎となる土を固め、生存者たちが自分自身の記憶に基づいて具体的な形象を作っていく。その平和像のすぐ後ろの洞窟の中には、今も犠牲者の整理されていない実際の痕跡がぎっしり埋まっている。 記憶は、このような「具体的な形象」に基づいて分有になり得るものであろう。

岡真理は、レバノンのパレスチナ難民キャンプで生起した虐殺事件のルポルタージュであるジャン・ジュネの「シャティーラの４時間」を取り上げながら、記憶の分有について語る。虐殺事件の３日後、現場となったシャティーラ・キャンプにフランスの作家ジュネが入る。そして、惨たらし

く殺された夥しいパレスチナ人たちの死体のなかを４時間にわたって彷徨する。ここで岡は、ジュネの側にいる案内役の人が繰り返す「ご覧なさい、こちらをほら、ご覧なさい」という言葉に注目する。ジュネはこの言葉に促され、徐々にこの言葉が指し示すものを証言することになる。岡は、記憶が人を領有するわけであるから、人にとってできることは記憶の分有だけであり、これは、「ご覧なさい、ほら」という他者の呼び掛けの声にその無能さと受動性において応答するものにほかならないと語る[12]。

それでは、話を「平和の像」と「無名勇士の墓」に戻してみよう。「ご覧なさい、ほら」という他者の呼び掛けに応答しようとした時、実際の痕跡で「ぎっしり埋まって」いる「平和の像」と、「実は、空いていて、ナショナリズム的想像でいっぱいに」なっている「無名勇士の墓」はどのようにして分けられるのか。私は、想像されたもので「空っぽのシニフィアン」が、あたかもその中に何もない「無名勇士の墓」のように、その空虚さこそナショナリズムとナルシシズムが接続するエネルギーの源になり、そこで二つのものが接続することを成し遂げると考える。フロイトが言ったように、「ナルシシズムとは倒錯ではなく、むしろいかなる生命体にもいくらかは備わっている自己保存欲動のエゴイズムをリビーどによって補完するものでもあるが、（何らかの理由で）外界から引き剥がされたリビードが自我に供給され、他者と切り離されたもの[13]」とは確かであろう。「空っぽのシニフィアン」であるナショナリズムは、こうして他者と切り離された自我を舐めてくれるものとしてナルシシズムと接続することであろう。

『ゆんたんざ沖縄』のクライマックスはナショナリズムの表象であり、この集団的ナルシシズムの象徴的ものでもある「日の丸」をめぐる女子高生たちの戦いで構成されている。1987 年の沖縄での国体が決定されたのをきっかけにして、沖縄では、ほとんど行われていなかった学校行事における国旗掲揚を、国は強く推し進めてきた。また、日の丸の強制は、国体出席のために天皇が初めて沖縄を訪れることを、想定してのことであった。こうした中、「平和の像」の除幕式が行われた 1987 年４月の１ヶ月前、読谷（よみたん）高校の卒業式では、女子高生によって日の丸が引き剥がされ、路上に捨てられた。ドキュメンタリーはその光景をしっかりととらえている[14]。

雑巾になって学校の外に投げられた日の丸。そして彼女たちの行動によって卒業式はまったく別の空間になってしまう。 卒業式の垂れ幕に掲げられた文句とは、「広がる未来への憧れ、明日への旅たち」ということである。これは、学校教育が織り込んでいるイデオロギーであるが、この言葉は、私たちは歴史的存在であること、そして亡くなった人たちの墓の上に私たちが立っていることを隠している。「無名勇士の墓」のように空っぽのシニフィアンなのである。彼女たちの行動によるパフォーマンスにより隠しているものが暴かれたとき、突然卒業式で行われる行為、卒業証書授与と別れ

の奏楽は空虚なものになってしまう。自分の名前が呼ばれ、「気をつけ」の姿で体制が与える証明書を受け取り、感謝の気持ちを込めて深く頭を下げることなどに「これは、一体どういう意味を持つのか」という問いを投げかける。そして、卒業式壇上の日の丸を差し込むところが空いている。それは彼女たちの短い勝利の一方で、日の丸の復讐を予感させる。すなわちそれは、この体制が「だからといって黙っているわけではない」というということを、無言のうちに雄弁に語るのである。映画に付け加えた映像にも出てくるが、「平和の像」は右翼のテロによって壊れてしまう。

４戦いとしての「行動」

『ゆんたんざ沖縄』での彼女たちの行動により、記憶という「モノ」をめぐる「戦線」が現れ、それが暴力が作動するからこそいつも揺れ動いているということを、彼女たちの行動は見事に浮かび上がらす。

彼女たちの行動についてこの体制はこう語っているかもしれない。「国旗掲揚なんて、沖縄だけがいままで行っていなかっただけだよ。これは、教育現場の日常的儀礼的行為に過ぎないのだよ。それが何で、こんなに命をかけるのか」というふうに。 ところが、興味深いのは彼女たちの行動を阻止する教師は「国旗がなければ卒業式にならない」と話す。

知らないうちに、彼たちは「記憶をめぐった戦いの大事さ」に抱え込まれた真実を漏れ落としたかもしれない。記憶ではなく「記憶をめぐった戦い」に勝つことが大事だからこそ、彼たちは日の丸を必死に守ろうとしたのである。

この映画で心が一番熱くなる部分は、国旗を持って彼女たちと教師がもみ合いをする時、彼女たちが涙を流してしまう部分であろう。彼女たちはなぜ泣き出し、それを見る私たちはなぜ涙が出るのか。彼女たちの行動を阻止するこの体制は圧倒的な力を持っている。卒業取り消しという代償をかけてやっと戦いができたが、一体この小さな行動に何の意味があるのかという疑問は、彼女たちを途方に暮れさせたかもしれない。そして、教師たちの背後には、あの41年前の集団自決の現場にまで遡る莫大な力が漂っている。しかし彼女たちは、「ご覧なさい、ほら」という記憶側からの呼び掛けに応答することによって、死んでいった84人のチビチリガマ犠牲者たちとつながっているという事実を、そのもみ合いの過程でふと「身をもって」悟ったかもしれない。記憶は現れ、分有され、生きものとしてこの「場所」にこぼれ落ちていたのである。記憶が彼女たちを泣き出させ、これを見ていた観客も短い瞬間でも、記憶を分有することができたのであろう。教師たちは、ついには「反対する生徒たちもおりますよ」とか、「あなたの考えが皆の考えではありません」など話すが、相互性や多様性といった他者をただ理念的に尊重するような言いやすい言葉で、その時、その「場所」を漂っている記憶の力には手におえないであろう。

ついには、教師たちは、「後で後悔する」という威嚇までなげかけるが、「いま、こ

れをやってもやらなくても、後悔するのは同じです」と彼女たちの一人は答える。 弱者はこうでもやられ、ああでもやられる。だからこそ、勝つためではなく、耐えるためにも、行動をおこした方が弱者自身にとっては、「合理的」なのだ。

私が参加した韓国ミリャンの送電塔闘争の当時のおばあさんたちも、驚くほど同じ話をした。韓国電力に対抗し、闘っても、そうしなくても、どうせ送電塔は建てられると彼女らも分かっていた。闘いは負け、ついには、送電塔が建てられた後、あるおばあさんはこのような話をした。「もし、何もせずにいて、あの送電塔が建てられたのを見た時、どんな気もちになっただろうか。それでもできるだけバタバタしたから、今はあんまり辛くない。」いかに賢いことか。これがまさに行動に出る人間の「打算」であり、強者の暴力にさらされ続けてきた人々の「体の予感から出た知恵」かもしれない。

注

(1) ヴァルター・ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」『ヴァルター・ベンヤミン著作集 1』、高原宏平 野村修 編集解説、晶文社、1969 年、119 頁
(2) ヴァルター・ベンヤミン、前掲書、121-122 頁
(3) 直野章子「記憶を擁護するー「あり得ない出来事」の記憶を追いながら」『記憶の存在論と歴史の地平』、『人文学報』第 119 号、京都大学人文科学研究所、2022 年、1 頁
(4) 直野章子、前掲論文、10 頁
(5) 冨山一郎「記憶が現れる」、前掲書、53 頁
(6) 立木康介「トラウマ記憶とトラウマ体験のあいだ」、前掲書、45 頁
(7) 直野章子「出来事とトラウマの在り処ートラウマ論が示す歴史の方法論をめぐって」『トラウマを生きる』、田中雅一・松嶋健 編、京都大学学術出版会、2018 年、106 頁
(8) ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」、前掲書、29 頁
(9) エドワード・サイード『フロイトと非ーヨーロッパ人』、長原豊 訳、平凡社、2003 年、12 頁
(10) 冨山一郎「運動が現れる」、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科『近現代の日本』講義資料、1-2 頁
(11) ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』、白石隆・白石さや　訳、書籍工房早山、2007 年、32-33 頁
(12) 岡真理『記憶／物語』、岩波書店、2000 年、95-98 頁
(13) フロイト、「ナルシシズムの導入にむけて」、『フロイト全集 13』立木康介 訳、岩波書店、2010 年、118-119 頁
(14) 冨山一郎、前掲資料、2 頁

（いげさむ　研究者）

コロナ禍と劇場

岐路に立つ宝塚歌劇

浜 恵介

宝塚歌劇のキャリア形成のメディア戦略の変化

2019 年から始まった世界的なコロナ禍によって、劇場でのエンターテイメントも大きな影響を受けている。例えば、日本を代表する舞台芸術である宝塚歌劇では、2020 年２月末より約４ヶ月にわたって公演が中止となった[1]。このため、2020 年は公演日程が見直され、スケジュールが大幅にずれ込むことになった。このことは人事にも影響し、既に発表済みであった雪組トップコンビの望海風斗と真彩希帆、月組トップコンビの珠城りょうと美園さくらの退団が、数か月延期となった。また、宙組トップスターの真風涼帆は、2022 年中の退団を目標としていたが[2]、2023 年６月までずれ込んだ。このため、真風の下で正二番手を務め、次の宙組トップとなった芹香斗亜は、二番手在任期間が通算８年となり、宝塚歌劇のスターシステムが安定的に確立した平成以降では、最長の二番手となった。

宝塚大劇場公演や東京宝塚劇場公演では、入団７年目までの若手による新人公演が上演されるが、コロナ禍により１年近くにわたり計６演目の新人公演が休止された。宝塚歌劇では、新人公演の主演が登竜門されるが、新人公演の休止により若手の人事が停滞してしまった。将来を嘱望された有力なトップスター候補（歌劇ファンの間では「御曹司」と呼ばれる）は[3]、新人公演主演３回以上というのが通例である。コロナ禍の影響を受けた現在の各組の三～五番手格の御曹司（通称「アンバサダー」）[4]を見渡すと、極美慎 (100 期)・風間柚乃 (100 期)・風色日向 (102 期) が２回の新人公演主演に留まっている。また宝塚歌劇では、凡そ各入団年次で１～２名のトップスターを輩出するが、現トップの 95 期からアンバサダーの間が、いささか空白となっているのも異例である。空白の 96 ～ 99 期で明確に御曹司と目されているのは、花組･永久輝せあ（97 期）と星組･暁千星（98 期）に過ぎない。要するに人事が停滞しているから、スキップするのである[5]。

宝塚歌劇は、花・月・雪・星・宙の５組でトップスターを頂点に男役二番手→男役三番手→御曹司というピラミッドが[6]、凡

そ入団年次順に形成される。ところがコロナ禍の 2019 年以降で、トップスターより上級生の正二番手という異例の逆転人事が３例続いている[7]。正二番手スターは必ずトップスターに就任するという不文律があったが、コロナ禍以降の３名の上級生正二番手のうち、２名が二番手での退団となっている[8]。娘役に目を転じると、トップ娘役においても、雪組・朝月希和が入団 12 年目で史上２番目の遅咲き就任（任期 2021 ～ 2022 年）、月組・海乃美月が入団 11 年目で史上３番目の遅咲き就任（任期 2021 年～）となっている。これらの上級生に比重を置いた近年の人事は、劇団の方針であると同時に[9]、コロナ禍による若手人事の停滞の影響も否めないであろう。

その一方でコロナ禍により、劇場以外のツールで宝塚歌劇を気軽に観劇できるようになったメリットもある。映画館等で宝塚歌劇の公演中継が始まったのは 2000 年からで、トップスターのサヨナラ公演が中心であった。その後、2016 年の雪組公演『るろうに剣心』から東京宝塚劇場の千秋楽が中継されるようになった。2020 年以降はコロナ禍により、全国ツアーや中・小劇場公演にも中継が拡大され、2021 年からはネット配信も開始され、自宅で宝塚歌劇をライブ観劇できるようになった。また 2021 年の雪組公演『CITY HUNTER』からは、新人公演もライブ配信されるようになった。2021 年以降は公演の全日程中止こそ無くなったものの、一部日程の休止という状態が断続的に続いている。

ベルばらアニバーサリーと宝塚歌劇の展望

さて来年 2024 年は、宝塚歌劇で『ベルサイユのばら』が上演されて 50 周年となる。宝塚歌劇というと、いつも『ベルサイユのばら』をやっているイメージの方も多いと思う。しかし、いまの宝塚歌劇ではロングラン公演はやらないので、『ベルサイユのばら』は、10 年に１度くらいのメモリアルな時にしか上演をしない。宝塚歌劇では年間約 30 演目を上演するが、前回の【ベルばらイヤー】は宝塚歌劇 100 周年前後の２年間（2013 ～ 2014 年）に６演目が上演された。宝塚歌劇は意外に多彩なジャンルを上演しており、海外ミュージカルからは『ME AND MY GIRL』『ファントム』、オペレッタからは『こうもり』、女性向け漫画からは『ポーの一族』『天は赤い河のほとり』『はいからさんが通る』、男性向け漫画からは『銀河英雄伝説』『ルパン三世』、ゲームからは『逆転裁判』、ドラマからは『相棒』などを舞台化している。宝塚歌劇の魅力は、スターシステムもさることながら、幅広い舞台を観劇できることにあろう。

来年はベルばら 50 周年にあたり、2024 年７～ 10 月に雪組での再演が発表された。実は多彩な作品を堪能しているコアな歌劇ファンにとっては、【ベルばらイヤー】は【ベルばら嫌ー（いやー）】ということが多い。要するにベルばらは見飽きたということである。といいながら、ご贔屓のベルばら出演が決まると、せっせと喜んで通う。私も含めてそういう習性があることは否めない。

宝塚歌劇は今年で創立 109 年になるが、

劇場でのエンターテイメントがこのように長く続いた秘訣は、飽くなき変化を追求していく姿勢である。当初は阪急電鉄の温泉遊園地の無料の余興で桃太郎（『ドンブラコ』）から始まった宝塚歌劇が、スペイン風邪の逆境を経てヨーロッパのレビューショーを莫大な予算をかけて輸入して大成功を収め、軍国主義体制下を生き延びた。娯楽のない戦後直後は一大ブームとなるが、やがて下火となり、少女漫画を宝塚歌劇で上演するとは何事かと批判を受けた『ベルサイユのばら』を果敢に舞台化させて代表作として復活を遂げ[10]、海外ミュージカルの『エリザベート』を輸入して日本にハプスブルクブームを席巻させ、女性の世界と思われがちの宝塚歌劇で男性向け漫画やゲームを舞台化して２．５次元ミュージカルを先取りした。

2024 年に再演される『ベルサイユのばら』は、宝塚歌劇にとっては集客面において、絶対にハズレることのない作品である。コロナ禍はウィズコロナへと変化しつつあるが、もはや宝塚歌劇は「劇場」という枠を飛び出して、舞台芸術として新たな挑戦をしている。宝塚歌劇が代名詞とも言うべきドル箱作品の『ベルサイユのばら』の 50 周年イヤーを、ウィズコロナの時代にどのようなかたちで捌いていくのか。宝塚歌劇のこれからのチャレンジとチェンジに注目していきたい。

注

(1) 例えば、宙組公演『FLYING SAPA』は、３～４月の東京公演が全日程中止となり、８月に大阪公演・９月に東京公演として仕切り直された。宙組公演『壮麗帝』も、３月の東京公演・４月の大阪公演が全日程中止となり、８月に大阪公演として上演された。また雪組公演『NOW!ZOOMME!!』も４～５月の東京公演・５月の神戸公演が全日程中止となり、９月に宝塚大劇場公演・東京宝塚劇場公演として改めて上演された。雪組全国ツアー『炎のボレロ』も５月の全国公演が全日程中止となり、８月に大阪公演として上演された。

(2) 宙組トップスター・真風涼帆 退団記者会見
https://kageki.hankyu.co.jp/news/20220928_001.html

(3) トップスターへのキャリア形成は、新人公演主演→バウホール（宝塚大劇場併設の小劇場）公演主演→東京での中規模劇場公演（通称「東上公演」）主演→正二番手就任→トップスターとなる。新人公演主演３回以上、早々にバウホール公演主演に抜擢されると御曹司と目される。

(4) 花組・聖乃あすか（100 期）、月組・風間柚乃（100 期）、雪組・縣千（101 期）、星組・極美慎（100 期）、宙組・風色日向（102 期）は、「2025 年日本国際博覧会アンバサダー」として宝塚歌劇団を代表して関連イベントに出演することが決定しており、スポンサー付きの有力な御曹司とされている。

(5) 人事の停滞によるスキップは、例えば 2000 年に各組の二・三番手 11 名を、各組とは別枠となる専科に異動させた新専科制度において、５名をトップに就任させずに退団させている。また、大劇場公演１作任期の通称「ワン切り」の、花組・匠ひびき（任期 2001 ～ 2002 年）、雪組・絵麻緒ゆう（任期 2002 年）、宙組・貴城けい（任期 2007 年）や、大劇場公演２作任期の通称「ハログバ」の雪組・高嶺ふぶき（任期 1996 ～ 1997 年）や月組・彩輝直（任期 2004 ～ 2005 年）は、トップの通常任期が３年程度に対して、人事調整によるスキップ（早期退団）とされ、ファンから批判されている。ただし、匠は病気により１作しか務められなかった。

(6) 二番手、三番手スターに誰が就任したかという明確な発表は宝塚歌劇団からは無いが、フィナーレでの階段降りの順序や羽根飾りの大きさによって暗示される。特に正二番手は、二番手羽根を背負うこと、公式月刊誌『歌劇』の表紙に掲載されること、フィナーレにおいて銀橋（エプロンステージ）でソロの主題歌を歌うことなどの諸条件を満たすこととされる。

(7) コロナ禍以降の上級生正二番手は、花組・瀬戸か

ずや（任期 2020 ～ 2021 年）、星組･愛月ひかる（任期 2020 ～ 2021 年）、月組･鳳月杏（任期 2021 年～）の３名。平成以降コロナ禍以前の３０年間において上級生正二番手は、月組・久世星佳（任期 1993 ～ 1995 年）、花組・大空祐飛（任期 2008 ～ 2009 年）、月組・美弥るりか（任期 2016 ～ 2019 年）の３名のみである。

(8) 平成以降コロナ禍以前の 30 数年間において正二番手退団の例は、花組・朝香じゅん（1991 年退団）、雪組・彩吹真央（2008 年退団）、月組・美弥るりか（2019 年退団）のみであり、いずれもファンからの反発を呼び、物議を醸している。コロナ禍以降の正二番手退団は、花組・瀬戸かずや（2021 年退団）と星組・愛月ひかる（2021 年退団）と続いている。

(9)『産経新聞』2015 年８月３日「宝塚理事長は体育会系（１）舞台は生徒の人格を投影する 「謙虚」「品格」「お行儀」が大切　宝塚歌劇団理事長・小川友次さん」

(10) NHK『アナザーストーリーズ「ベルサイユのばら」オスカルになりたかった私たち』2022 年７月 15 日放映

(はま　けいすけ　法政大学大原社会問題研究所･大阪大学大学院文学研究科博士課程後期)

劇場とパンデミック

増渕 あさ子

2020 年 2 月 28 日、私は自分の「推し」の主演公演の突然の打ち切りを劇場に向かう道すがら聞かされて呆然としていた。その前日に初日を迎えた同公演は当初、3 月 3 日まで 6 日間、全 12 公演上演される予定だった。それが、公演が行われていた劇場の入る近鉄百貨店の要請により、その日の２回目の公演を持って打ち切りになるという。出演者にとっても突然の知らせだったようで、急遽「千穐楽」となってしまった最後の公演は、舞台上にも客席にも、困惑と緊急事態がもたらす独特の高揚感の入り混じった一種異様な空気が流れていた。その時、客席で私が漠然と感じていたのは、もしかしたら二度とこうやって劇場で舞台作品を見ることができなくなってしまうかもしれない、という恐怖だった。

2020 年 2 月より始まった演劇や音楽コンサートなどのイベント中止は、2 月 26 日に政府から突然発表された新型コロナウィルス感染拡大防止に向けた「イベント自粛要請」に従ったものである。おそらくは、3 月に予定されていた東京オリンピックの聖火リレーを何としても実施するための取り決めだったのであろう。「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後２周間は、中止、延期又は規模縮小等の対応を要請する」という、この「自粛要請」を受けて、国立劇場や東京芸術劇場などの公共劇場、東宝・松竹・宝塚歌劇といった大手商業演劇が 2 月 29 日からの公演を一斉に中止とした。4 月 7 日には特別措置法に基づく緊急事態宣言が発出。5 月 25 日に一度は解除されるも、その後も度重なる緊急事態宣言の発出と、感染拡大によって、幾多のイベントが中止に追い込まれた。同年 4 月 22 日に放送された NHK「クローズアップ現代」によれば、その時点で、中止・延期となった音楽コンサート、演劇などのイベントの数は少なくとも 81,000[(1)]。2020 年の国内ライブ・エンターテイメント市場規模は、前年比 82.4% 減と、エンターテイメント産業全体が大打撃を受けた[(2)]。

もともと収入の安定しない多くの舞台関係者が、生計を立てる術を奪われて、生活困窮に追い込まれた。公演が再開されてからも、各劇場で収容人数が制限されたために、また「人の集まる場」に出向くことを自粛する風潮が続いたことから、動員数の回復には相当な時間がかかった。新型コロナウィルス感染症が５類に移行した2023年６月現在でも、感染症による公演中止は相次いでおり、今やイベント興行は常に中止のリスクと隣合わせのものとなっている。

早稲田大学演劇博物館では2020年に上演が叶わなかった公演のチラシやパンフレット、台本を収集し、「失われた公演　コロナ禍と演劇の記録／記憶」としてオンライン展示を行った[(3)]。特設サイトには、アマチュア劇団を含む中小劇団を中心に、200近いチラシとともにそれぞれの公演関係者の思いが寄せられている。例えば、2020年４月８日から12日まで上演予定だった9 PROJECTの『二代目はクリスチャン』（原作：つかこうへい、脚本・演出：渡辺和徳）を中止した経験について、演出の渡辺和徳は「毎日毎日「今日が最後かもしれない」と思いながら稽古に臨み、日を追うごとに作品は良くなるのに、危険は高まる…。その苦しい葛藤の日々は生涯忘れることはないと思います」と綴っている[(4)]。舞台は上演に至るまでに莫大な時間と経費と労力を要する総合芸術である。たった数日の公演のために１ヶ月以上、時には数ヶ月、稽古に時間を費やすことも珍しくない。役者だけではなく、照明・美術・小道具・衣装から宣伝に至るまで、綿密に計画・準備され、本番に向けて練り上げられていく。上演中止はその全てが無に帰することを意味する。

だが失われたのは公演だけなのだろうか。最初の緊急事態宣言で、世の中が一気に自粛モードになると、「劇場に行く」「演劇を観る」という行為そのものが「不要不急」とされ、作り手も観客も身勝手であると、激しい批判の言葉が投げかけられた。「炎上」のきっかけとなったのは、劇作家の野田秀樹が、自身が主催するNODA・MAPの公式ホームページに掲載した「公演中止で本当に良いのか」と題した意見書である。

> 演劇は観客がいて初めて成り立つ芸術です。スポーツイベントのように無観客で成り立つわけではありません。ひとたび劇場を閉鎖した場合、再開が困難になるおそれがあり、それは「演劇の死」を意味しかねません。[中略] 劇場公演の中止は、考えうる限りの手を尽くした上での、最後の最後の苦渋の決断であるべきです。「いかなる困難な時期であっても、劇場は継続されねばなりません。」使い古された言葉ではありますが、ゆえに、劇場の真髄をついた言葉かと思います[(5)]。

野田の意見表明の背景には、生計をたてる術を絶たれた舞台関係者への憂慮と同時に、「自粛」の「要請」をすぐさま受け入れてしまう思考停止状態の演劇界、ひいては日本社会への憤りもあったであろう。「世

間の空気」なるものの滑稽さとその暴力性は、野田の戯曲でも度々描かれてきたモチーフの一つでもある。しかし、この意見書は、（スポーツを引き合いに出したことから余計に）「なぜ演劇だけを特別視しなくてはいけないのか」と否定的にとられ、かえって演劇に対する社会的評価・関心の低さを顕にした。同時に、一連の出来事は、舞台関係者や愛好者に対して、演劇とは何か、社会の中でどうあるべきなのか、という根源的な問いをつきつけた。

私にとっては、劇場は幼い頃から常に身近にある「非日常」だった。習い事の発表会から始まり、親に連れていってもらったミュージカルやバレエ、クラシックコンサートの公演。中学から大学にかけては、舞台は観るだけではなく自分自身も役者として立つ場所になった。観客を前に、自分でない何者かを演じることは、なかなか世界と折り合いをつけることができずにもがいていた自分にとっては、強烈な解放の経験であり救いだった。そして今は、「推し」を観るために同じ公演に何度も通う「現場」である。

おそらくスポーツと異なるのは、この「観る」「観られる」という経験、それによって情動的に結び付けられる役者と観客の関係性こそが演劇の根幹にあるからであろう。劇場は、生身の人間同士の関係性が充満する空間である。フランスの演劇家アントナン・アルト―は「演劇とペスト」と題したエッセイの中で、ペストの病魔に侵された身体と演劇を重ねて描いてみせている。いずれも「ひとつの錯乱」であり、「伝染性」があり、様々なイメージを喚起し、人々を熱狂へと駆り立てる。

> 演劇もペストもひとつの危機であり、死か治癒によって解決される。そしてペストは卓越した病であるが、なぜならそれは完璧な危機であり、その後には死か極限の浄化以外に何も残されてはいないからだ。同じように演劇はひとつの病であるが、なぜならそれは至上の均衡であり、破壊なしにそれは獲得されないからだ。演劇はそのエネルギーを高揚させる錯乱へと精神を誘う。そして最後に、人間的観点からすれば、演劇の活動はペストのそれと同じく恩恵をもたらすものであるのを見てとることができる、というのもそれは人間たちを駆り立てて自分たちにあるがままの姿を見させ、仮面を剥ぎとり、嘘や、無気力や、下劣さや、偽善を暴くからである[6]。

演劇がこのようなものであるとすれば、感染者＝観客がいて、劇場中に「病」が蔓延することで、初めて成立することになる。そしてまさにこの点において、劇場はパンデミック下で危険視され、閉鎖されなければならなかった。

コロナ禍が始まり３年が過ぎ、演劇イベント業界には「ライブ配信」という新たな上演形態がすっかり根付きつつある。例えば宝塚歌劇では、大劇場での千穐楽公演や、中規模劇場での公演など、これまでチケット入手が困難だった公演が、全てライブ配信されるようになった。2023 年 6 月には日

本国外ファンに向けて、8 言語字幕に対応した「全世界配信」が始まる。OSK 日本歌劇団も、2020 年 7 月、ライブ配信に対応した「次世代型エンターテイメントスペース」として 203 インチの LED パネルを備えた専用スペースを大阪・心斎橋に開場。当初は無観客で上演を行っていたが、現在では有観客で全ての公演を配信している。配信によって、これまで興味をもたなかったり、劇場に足を運ぶことのできなかった新たなファン層の獲得にもつながった。一度は閉鎖された劇場が、オンラインにつながれて、無限に拡がりを持つことになった、ともいえる。

けれど、配信が常態化したことで、何かが決定的に変質してしまったようにも感じている。劇場にいても、配信カメラの向こう側の見えない「目」にさらされているような、居心地の悪さを覚えることがある。劇場が持つ感染力が、何か別のものに取って代わられつつあるのかもしれない。微かな違和感を抱きつつ、それでも、きっと私はあの熱狂を求めて、劇場に通い続けるのだろうと思う。

注

(1) NHK『クローズアップ現代』「“イベント自粛”の波紋　文化を守れるか」2020 年 4 月 22 日放送

(2) ぴあ総研『ライブ･エンタテイメント白書 2020 年』
https://corporate.pia.jp/csr/pia-soken/pdf/pia-soken_summary202105.pdf (last accessed, 2023 年 6 月 7 日)

(3) enpaku オンライン展示『失われた公演　コロナ禍と演劇の記録／記憶』
https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/

(4) 9PROJECT vol. 12『二代目はクリスチャン』
https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/flyer/0002/

(5) 野田秀樹「意見書　公演中止で本当に良いのか」2020 年 3 月 1 日、NODA・MAP 公式ホームページ
https://www.nodamap.com/site/news/424 (last accessed, 2023 年 6 月 8 日)

(6) アントナン・アルトー、鈴木創士訳『演劇とその分身』河出文庫、2019 年、47 頁

（ますぶち あさこ　沖縄占領研究／舞台愛好者）

連載

石と証（四）

館から場へ、そして、場という館で

沈 恬恬

1

沖縄県普天間基地に隣接する佐喜眞美術館から持ち帰った石ころたちを、ときどき行く和歌山県白良浜で拾った貝殻たちと一緒に、ゆず茶の空き瓶に入れている。何げない日常のなか、何の気なしに、瓶を揺らすことがある。ドロップ飴のレトロデザインの缶を揺らすときのような、ジャラジャラという音がする。旅の物語も、寄せる波の音も、この小さくて透明な空間に収まっている。そして、そのガラス瓶を、ごちゃごちゃしたエキゾチシズムに溢れる自慢の世界土産コレクションに並べる。2003 年ベトナム・ハロン湾で買った石膏の仏頭、2005 年中国・敦煌で買った夜光杯、2010 年フランス・パリで買ったルーブル美術館名画入りのカレンダー、2013 から 2015 年にかけて集めた「西国三十三所」の御朱印帳、2016 年タイ・バンコクで買った象さん柄のポーチ、2017 年香港・九龍で買った金メッキの観音像、などなど。

時空間はこれらの寄せ合わせたモノが置かれた距離の間に凝縮する。もちろん、有名人でも大家でもないうえ、場合によって持ち家と賃貸マンションの二拠点生活をしないといけない筆者は、そろそろこの資産価値のない雑多なコレクションを「断捨離」でもしようかな、と全く考えていないわけではない。ただ、いざ行動に移そうとすると、これらのモノから何かしらのざわめきを聞こえるような感じがして、しばしば、手放す決意それ自体が空振りになってしまう。いわゆる蒐集の楽しみとは、モノたちを遠い場所から連れてきながら、幾つもの過去を「ここ」に幽閉させることによって呼び起こされる、一種の悠長な恍惚感なのだ。

まさしくベンヤミンの示唆の通り、コレクションとしての無秩序と時空間としての秩序の両極の間に、筆者は位置し、蒐集物よりも蒐集者の蒐集行為そのもののありようが、蒐集者の蒐集物に対して持つ関係を反映しているかもしれない [1]。つまり、筆者は、死者を記念する集合的象徴の文脈から、大自然の運動法則の一端から、各国の土産店にあった（値札はあるが、）名のないありふれた商品の陳列棚から、個々のモノを持ち帰った瞬間、これらのモノ自身の

個別の「運命が展開される舞台」[2] の立会者となる。この舞台で次々に異なる「劇」のなかに連れて行かれる感覚は、筆者自身のコレクションを眺めるときだけではなく、ほかの蒐集者たちの感性によるコレクションが置かれた博物館・美術館・資料館・文学館や、水族館・植物園・動物園などといった様々な囲まれた空間という「場」を眺めるときにも湧き上がる。多くのコレクションは主にオブジェ（資料か植物か動物）によって構成されているため、私たちの慣れ親しんだ言語では何も語らない。にもかかわらず、私たちはこれらについて身勝手な思いでこれらを囲い、これらが発しているメッセージを私たちの言語体系のなかにおいて捉えようとする。

囲いのなかにいると、人は安心感を覚えるのは間違いないことだ。囲む行為もまた人の征服欲を満たすことができる。東京上野動物園のシャンシャン、白浜町アドベンチャーワールドの永明・桜浜・桃浜のパンダたちの帰国日程が報じられたとき、筆者も「パンダさまありがとう！」という「世間の思い」の囲いに囲まれて、動物園のなかにあるパンダらの暮らしの館を、人の群れに参列する一員として囲みに行った[3]。

悠々自適に笹を食べるパンダたちの姿は

図１　白浜町アドベンチャーワールド

図２　上野動物園のシャンシャン

なんと愛おしいことか。しかし、シャンシャンよ、あなたたちパンダは（ガッツリ稼げる）「外交」の使命を担っているのを知っているのか。また、永明よ、あなたは世界初の「ブリーディングローン制度」による日中共同繁殖研究のために来日したのを知っているのか。あなたたちを可愛がる人々にとって、あなたたちがそこにいれば十分だ。だが、あなたたちが代表している「パンダ・コレクション」は、あなたたちの存在とは全く別の次元において、価値体系という枠組みとして構築され、定義づけられていく。かつてヘーゲルが厳めしく言った。個物としてある物の「所有は、じかに手でつかむこと、形にすること、ただしるしをつけること、の三種にわかれる」[4]。ヘーゲルの言う「ただしるしをつけること」とは、定義・概念を通じて登記・登録させ、法的な拘束力を生じさせることなのだろうか。あなたたちは、数字を書き込むことで印づけられた沖縄のどの海辺にもありそうな石ころと同じように、人間らしい名前と多くの人間社会に通用しやすいしるしが付けられ、歴史に、政治に、文化に、所有される。ところで、筆者の本音は、一度、あ

なたたちとハグし、その白黒のシンボルをじかに手でつかみ、そのふたつの色に間に囲まれたいのだ。

2

囲いや囲まれることに絶大な魅力を覚える筆者にとって、最近のひとつの関心事は、2023 年 4 月 1 日から施行する改正博物館法（博物館法の一部を改正する法律・令和 4 年法律第 24 号）をめぐる議論である[5]。「70 年ぶりの大改正」という大袈裟な見出しに「自治派」的な「推し」である「学びの権利」や「博物館の自由」[6] といったキーワードも絡んでいるため、議論のスケールは「上下五千年」[7] 感を醸し出している。

確かに、今回の改正は、日本のこれまでの「博物館等」[8] の性格を定義し直すことになった。オーソドックスな法制史の解釈によれば、（図書館法も含め）博物館法の制定は、戦後のアメリカ教育使節団 GHQ の『報告書』による勧告[9] がきっかけで、日本国憲法→教育基本法→社会教育法→博物館法の順に、それぞれの精神に則って制定されているという流れを受けている。このため、昭和 27 年 3 月 1 日より施行された博物館法に基づく博物館等の施設は、長らく社会教育が掲げた理念に「軟禁」されてきた[10]。その軟禁期間において、2019 年 6 月までに 26 回に及び博物館法に対する改正はあったが、「そのほとんどが行政財政改革や地方分権等に伴う一括法による改正であり、これ以外の改正はほとんど条文を削除される一方の改正であったと言っていい」[11]。一方、地域振興論の盛り上がりとともに、2013 年に地方独立行政法人法施行令が改正され、博物館等の「自治」は継続されつつも、「公共的な施設」としての役割は高度化していった。そして、今回の改正によって、これらの施設は、社会教育法の文脈に限らず、文化芸術基本法・文化観光推進法の文脈にも接続され、文化観光推進努力義務が課せられ（第 3 条 3 項）、自力で自由に稼ぐ許可が与えられた[12]。また、この自力と自由を実現する重要な保証は、登録博物館の設置者要件の撤廃ともいえよう。非営利団体に限らず、民間会社等も含め、登録申請ができるようになり（第 2 条第 1 項及び第 13 条第 1 項）、税制上の優遇を受け、文化観光の振興策の（助成）対象となりうるのだ。

この「文化観光推進努力義務」に対する強い反発を示さずにいられないのは、博物館や文化財の商品化、観光化、資源化への危惧を抱く、「文化財の守り人」とも称すべき人文学系の論者であろう[13]。彼らがあげた理由のひとつに、観光化商品化資源化されていく文化財は複合体的な歴史を語れないということがある[14]。頷いてもいいように思う。なぜなら、ベンヤミンの歴史的唯物論者の弁証法に立ち戻って考えると、そもそも文化財の運営方式を問う以前に、神社仏閣聖蹟皇陵古墳名園史跡鉱山石垣石蔵石器刀剣彫刻絵画[15]、それから熊猫＝パンダ（！）といった「文化財」の性質そのものは、「戦利品」に過ぎないからである[16]。統治階級や産業企業の圧迫を受け、人権の侵害や労働力搾取がなされてはいるものの、その文脈から切り離された

「結晶」が、なお人々をノスタルジックな「郷土的な根源感情」[17] へ再回帰させることに役に立つ。複製技術を媒介としながら、「戦利品」は何かしらの「絵になる」ような、オブジェのレプリカにさえ「アウラ」を持たせ、礼拝価値と展示価値の両方を勝ち取る[18]。

しかし、断固として商品化観光化資源化させないという執念もまた「社会教育」、「学問研究」の硬い椅子に座れたがゆえの支配者的な発想ではないだろうか。「学知」という名づけの権利を有していた支配者は、文化財が絶対的商行為に支配されるようになったこととともに、被支配者の地位に転落しつつあるなか、学知権威を維持するために、学芸員制度という語り部の養成しか主張できない最後の叫びをあげているかもしれない。あるいは、「欠けたものの不条理さこそがアートである」というモダンアートの信念の洗脳に抗い、真っ白の壁のある展示部屋の真ん中に適当に置かれた一本の箒によって一掃されないために、声高らかに「歴史」という決まり文句を念仏のように繰り返さざるを得なくなったかもしれない。もっとも、「歴史という構成物」[19] が複合的に構成された理由は、その都度の支配者によって考え出された商品化観光化資源化政策といった触媒があったからではないだろうか。そうすると、閉ざされた館の扉をガーンと開く日、外から一気に差し込む眩しい光に、主人公が扉の前に佇み―ただ、未来が全く見えていない、というような映画のシーンを認めることはなぜダメなのだろうか。いわゆる（市）民を、（市）民とともに育てる地域において、（市）民たちに複合体的な歴史を本当に感知させたいのであれば、それはきっとひとつの「館」の存否、「戦利品」の運営方式を巡る戦いを挑発することではないだろう。要するに、どのようにして、蒐集物の運命が展開される舞台そのもののシナリオを描いていくのかが問題ではないだろうか。

舞台のシナリオに関する実に興味深い点はこうである。文化（教育）政策も商業政策も政治である。「社会教育の目的を果たす文化施設」の枕詞という囲いがあると、博物館等の元来の姿は見えない。どちらかというと、商品化観光化資源化されなくても、設備利用を客にさせるという利用形式からすれば、博物館等は、商法のなかで列挙された営業的商行為のうち、「公衆の来集に適する物的・人的設備を設け、客に一定の設備を利用させる行為」（大判昭和 12 年 11 月 26 日）という場屋取引（商法 502 条 7 号）に該当してもおかしくない。もっと突き詰めて考えると、仮に社会教育のため入館料の無料化が（再）実現されたとしても、来客に「戦利品」を囲ませる行為は、当該「戦利品」という物的設備を「利用」する行為であろう。また、仮に「戦利品」たちが「常設設備」ではなく、世界一周の旅までできる宝であるとしても、これらの至るところに公衆が来集すれば、宝の移動軌跡もまた「場」として広がるであろう。逆に、洪水のように「おふらんす」のわかりやすい自然景観文化財を拝みに行く人々は多分同じ「館」を構成しているといっても過言ではない[20]。要するに、「戦利品」

が商品化観光化資源化されていくことの是非を論じるより、商行為を媒介して初めて、「戦利品」は聖なる公的空間から俗なる私的空間への移行が可能になる点に着目すべきである。そこに着目すると、私的に所有されるプロセスのなかで付与された「交換価値」（多分、「アウラの喪失」によってこそ可能となるかもしれない）が、再び公的空間の言説を形成していくという謎を見つけることができるかもしれない。

3

この頃、筆者が繰り返し考えているのは、蒐集家は唯物論的歴史家となりうる[21]というベンヤミンのテーゼである。恐らくこの観念の前提は、「蒐集家は蒐集物を確実に私的空間において所有できる場合に限っている」ということではないだろうか。「学知」によって規定されてきた大文字の歴史文脈から、個々人がそれぞれにとっての何かを「手でつかみ」、コレクションという「形にすること」で、しるしを上書きしていく。歴史や秩序を再構成する理念も、人文学的革命の意義も、飽くまでこのような私的文脈をより数多く作ることで成し遂げられる。さもなければ、言説は、その外延を拡張できず、大文字の歴史に対抗することもできず、あっけなく公的空間に回収されてしまう。ただ、この私的空間はどんな空間であろうか。さらに、もっとも厄介な問題は、いつまで私的空間を保持できるか、ということである。これに関して、経緯を辿ればちょうど40年が経過したが、思い出すたびに躓きを覚える、公的空間へ私的コレクションを寄贈したある蒐集家についての物語がある[22]。

日本の児童文学研究者・批評家の鳥越信は、1979年3月20日、自らが30年以上にわたって集め続けてきた約12万点の児童文学に関する資料等を無償で寄贈したいとして寄贈先の公募をし、同年10月頃、大阪府を寄贈先とすることを決めた。その後、当時の知事及び教育委員会等との間で、寄贈及び児童文学館設立に向けた協議を開始した。大阪府は1980年7月1日、財団法人大阪府国際児童文学館を設立し、1983年5月5日大阪府吹田市内の千里万博公園内に大阪国際児童文学館を開館させた。2008年6月5日、当時の大阪府知事は大阪府の財政再建、文学館の所蔵資料の活用方法の見直しなどを理由とし、文学館の廃止に向けて動いた。また、所蔵資料は大阪府立中央図書館に移転するという計画を発表した。大阪府のこの統廃合の決定をうけ、2009年3月16日、資料を寄贈した鳥越信たち児童文学研究者・文学者29人は、寄贈資料約1200点の返還を求め、大阪地方裁判所に提訴した。原告らは、「継続的資料を集めること」及び「資料を整理し公開すること」は寄贈の「条件」であると主張していた。大阪地方裁判所は、「贈与契約の際、法律上の拘束力を与える意思で負担や解除条件の合意をしたことを認めるに足る証拠はない」とし、2011年8月26日、原告らの請求を棄却した。また、控訴審において、控訴人らは大阪府の信義則違反も主張していた。これに対して、大阪高等裁判所は、「本件資料等の贈与契約の解除若

しくは失効、無効又は合意による返還請求権があるとは言えないし、府は２５年間にわたり、文学館を設置、運営してきたものであり、その事業内容を財政状況や住民の要望等に応じて見直す広い裁量を有すると解されるので、原告らの寄贈の際の期待を裏切られたと憤りを覚えたとしても無理からぬ面はあるが、寄贈の撤回を認めなければならないほど著しい背信行為に当たるとは言えない」として、2013 年９月５日、控訴人らの請求を棄却した。

このような地方自治体の「財政難」によって、統廃合された「公的施設」は、もちろん大阪国際児童文学館だけではない。いわゆる運営費・維持費の「財源不足」は、地方自治体の専売特許でもない。民間法人や家族・個人も常に直面する現実問題であるから、この物語の背景は理解しやすいように思う。また、寄贈契約にあった「条件」の継続的達成と経営主体の変更（すなわち、資料を大阪府立中央図書館へ移転すること）とは大きな矛盾がないということも判旨の通りだと思う。しかし、本稿の２のなかで述べた、2023 年４月１日から施行された改正博物館法の設置者要件の撤廃と合わせて考えると、仮に原告らが求めた 1200 点のコレクション、若しくは、寄贈した 12 万点の資料等全部が返還されたとして、これらをもとに、民間法人を設立し、新たな「稼げる観光地」の登録ができるかどうかという仮説が浮かび上がる。それこそ、この一部の「文化財」を大阪府立中央図書館から分離させ、特に、コロナ対策が緩和された今日の「異次元的少子化問題」という絶好のチャンスのなか、国際教育という名のもとで、海外の子供たち（を連れてくる家族連れ観光客）を呼び込める「助成」を得られるのではないだろうか。きっと、文学館を構想した「故人の遺志」[23] もこうだったのではないだろうか。子供たちに本を手でつかませる場という文学館で、まだ言葉にならない極秘の私的な記憶体験を積み重ね、手垢や染みのような素朴なしるしをつけ直すことである。ただ、この「文化財」の語り部の学芸員はいずこに。そして、事業助成の財の源を誰が拠出し、どの部分の歳入から支出されるのだろうか。

私的コレクションの返還を求める控訴審の時期、筆者は一連の署名運動に参加せず、主にフランス・パリに滞在（逃避行を）していた。晴れ渡る日も雨の日も、フランス国立図書館・リシュリュー館の前を通っていた。この石造りの館を、かつてパリ亡命中のベンヤミンもしばらく通っていた。また、この石造りの館に、ジョルジュ・バタイユがベンヤミンの遺稿を隠していた。今日、これらの遺稿は、印刷され、編集され、アーカイブ化され、多くの公的空間に開示されるようになった。思い起こせば、パリ滞在のとき、薄っぺらの「ベンヤミン論」にならないようにと、論文を書けずにパリの石畳で躓いた日々もあった。しかし、それらはただただ様々な故人が居ていた町での静かで幸せな日々だった。ともあれ、「躓く石も縁の端」である。筆者がここで様々な石（や遺志）の話を書けることも、モノは人より長く残る、ということのおかげではないだろうか。そして、これらの残されたモノに「運命」を感じる。　（つづく）

注

(1) ベンヤミン（浅井健二郎ほか訳）「蔵書の荷解きをする」『ベンヤミンコレクション２：エッセイの思想』（筑摩書房、1996 年）15 － 16 頁の部分の趣旨の転写である。

(2) 前掲注（1)、16 頁

(3) それぞれ、上野動物園へは 2022 年 11 月 26 日、白浜町アドベンチャーワールドへは 2023 年 2 月 17 日に訪れた。ちなみに、ここの「パンダネタ」は、京都大学人文科学研究所「家族と愛共同研究班」に参加していたある日、急に思いついたものである。今後、もし何かの機会があれば、「パンダ外交」や「ブリーディングローン制度」といった切口で稿を改めたい。

(4) ヘーゲル（長谷川宏訳）『法哲学講義（新装版）』（作品社、2022 年）122 頁。

(5) 本連載の全体的なスタンスないし主旨とは、編集部の特集テーマの呼びかけに応じつつ、絶えず蛇行しながら、ベンヤミンを読む筆者自身の考え方を読み直すという「やわらかいベンヤミン論」である。文体のリズムの統一感を維持するため、本稿では博物館法の一部について触れるものの、法解釈としてのガチ法学系の理論展開はしない（例えば、筆者の「本業」である「税制優遇の意義」など)。なお、この段落の以下で言及する関連法律規範の歴史形成や論点整理は、岩崎奈緒子「博物館はどこへ行くのか：博物館法「改正」の意味」『歴史研究』（2023 年 4 月）57 － 64 頁、博物館法令研究会編著『改正博物館法詳説・Ｑ＆Ａ：地域に開かれたミュージアムをめざして』（水曜社、2023 年)、栗原祐司『基礎から学ぶ博物館法規』（同成社、2022 年)、栗田秀法『現代博物館学』（ミネルヴァ書房、2019 年）根木昭・佐藤良子『文化芸術振興の基本法と条例：文化政策の法的基盤Ｉ』（水曜社、2013 年)、文化庁『文化財保護法五十年史』（ぎょうせい、平成 13 年)、椎名慎太郎・稗貫俊文『文化・学術法（現代行政法学全集)』（ぎょうせい、1986 年）などに学んだところが多い。

(6)「特集：博物館法改正の論点と市民と共に歩む公立博物館」『住民と自治』（2022 年 3 月）11 － 31 頁を参照。

(7)「中国 5000 年の歴史」がいまや中国では定説である。このため、このフレーズは長さや広さといったイメージを持つ。

(8)「博物館等」には、水族館、動物園、植物園、美術館、文学館、科学館も含まれると解されている。

(9) ５項目からなる勧告の第４には、「科学・歴史・美術の公立博物館を整備すること」と明記されている。

(10) 犬塚康博はこの軟禁のプロセスを巧みに描いている。『反博物館論序説：20 世紀日本の博物館精神史』（共同文化社、2015 年)。他方、博物館法令研究会が強調したのは、固定資産税や入場税などの税制優遇の獲得といった税制改正の問題が当時のそれぞれの館にとってもっとも切実な課題であるため、法制定に向けたうねりを巻き起こしていたという視点である。前掲注（5)、15 － 16 頁。

(11) 栗原裕司ほか『ユネスコと博物館』（雄山閣、2019 年）154 頁

(12) 渡部友一郎「博物館法の一部を改正する法律（令和 4 年法律第 24 号）の法的考察：博物館の文化観光推進努力義務を新設した第 3 条第 3 項のソフトローとしての考察」『観光研究』（2022 年 9 月）59 － 64 頁を参照。

(13) 岩城卓二･高木博志『博物館と文化財の危機』（人文書院、2020 年)、青木豊ほか編著『博物館が壊される！：博物館再生への道』（雄山閣、2019 年）

(14) 前掲注（13）岩城・高木、192 頁。「京都の歴史の研究は、観光化され商品化されがちである。多くの大学の講演会や講座では、雅で貴族文化の京都しか取りあげない。しかし京都の上京・下京の周縁地域には、かつて遊郭や花街の性、あるいは被差別部落や、墓所であった鳥辺野周辺の死や病気への差別といった問題群があった。歴史を見るときには常に複合的な見方が必要で、バラ色の歴史だけでは不十分である。京都にやってくる外国からの観光客は、京都に日本文化の優越性を見出すのではなく、そのなかに自国の文化との普遍性や差異性を見出すだろう。内に閉じたナショナリズムの京都文化論は、外に開く説得力をもたない。」

(15) 鉱山は、岐阜県のストーンミュージアム博石館をイメージしている。(https://www.hakusekikan.co.jp/［最終確認日：2023 年 5 月 31 日]）。石垣石蔵は、那須芦野の石の美術館をイメージしている。(http://stone-plaza.com/information/story.html［最終確認日：2023 年 5 月 31 日]）

(16) ベンヤミン（浅井健二郎ほか訳）「歴史の概念について」『ベンヤミンコレクション１・近代の意味』（筑摩書房、1995 年）「今日に至るまでそのつど勝利をかっさらっていった輩はみな、いま地に倒れている者たちを踏みつけて進んでゆく今日の支配者たちの凱旋行列に加わって、ともに進行している。この凱旋行列のなかをいつもそうされてきたように、戦利品が伴われて進行する。戦利品は文化財と呼ばれる。…この文化財と呼ばれるものが文化の記録であることには、それが同時に野蛮の記録でもある。」651 頁。

(17) 新井重三は「博物館とその役割」のなかで、大正昭和期、郷土博物館を通じて行われた郷土教育が戦争に加担したことについて触れている。古賀忠道ほか監修『博物館学講座１博物館学総論』（雄山閣、1979 年）55 － 57 頁。

(18) ベンヤミン（浅井健二郎ほか訳）「複製技術時代の芸術作品」「ベンヤミンコレクション１・近代の意味」（筑摩書房、1995 年）のなかの「アウラ」の用語を意識している。レプリカ像は、筆者が 2023 年１月 21 日に見に行った上野の森美術館の「兵馬俑と古代中国：秦漢文明の遺産展」の展示物をイメージしている。

(19) ベンヤミン（浅井健二郎ほか訳）「歴史哲学テーゼ」『ベンヤミンコレクション１・近代の意味」（筑摩書房、1995 年）「歴史は構成の対象であって」659 頁。

(20) 例えば、このような記述がある。「世界中から毎年 250 万人の観光客が押し寄せるモン･サン･ミシェルは、世界で最も人気の高い文化遺産が、現代において「保存と活用」を叶えている好例である。過剰利用の危機に幾度となく晒されつつも、数世紀にわたって世界中の人々に愛され続けたことが、モン・サン・ミッシェルを人類最高峰の文化遺産に変貌させた。つまり、文化遺産を観光地として活用し続けることが、保存につながっているのである。」久末弥生『都市災害と文化財保護法制』（成文堂､2020 年）33 頁。

(21) ベンヤミン（浅井健二郎ほか訳）「エードゥアルト・フックス：蒐集家と歴史家」『ベンヤミンコレクション２・エッセイの思想』（筑摩書房、1996 年）555 － 633 頁。

(22) 事実に関する資料は、大阪地判平成 23 年８月 26 日（LLI/DB：L06650962)、大阪高判平成 25 年９月５日（LLI/DB:L06820462)、山岸郁子「〈資源〉としての文学」『産業経営プロジェクト報告書 (35)』（2012 年３月）16 － 29 頁を参照。

(23) 鳥越信は 2013 年２月 14 日に亡くなられた。「石」と「遺志」のもじりは、筆者の連載を取り上げていただいた前号の編集後記のコメントへのひとつの返答である。

（しん　てんてん　求道者）

連載

監獄の空から

猫の後ろ姿からゾンビ的状況へ：DJ 風に（5）

川村 邦光

監獄の壁

「みんなは悪い人だというが／私にゃいつも 良い人だった／ちっちゃな青空 監獄の壁を／ああ 見つめつつ 泣いてるあなた」（古茂田信男他編『新版日本流行歌史 下』社会思想社、1995 年）。松尾和子の歌う「再会」（歌詞：佐伯孝夫、作曲：吉田正、1960 年）、二番の歌詞です。かつてよく歌ったものです。この時代、監獄ではなく、もはや刑務所と呼ばれています。1922 年（大正 11）から刑務所に改称されます。刑務所では語感が軽く、監獄は厳しくどっしりとして、陰惨かつ陰鬱なイメージを喚起させます。

私は宮城刑務所と旧奈良刑務所（前奈良少年刑務所；現在：廃止）を見たことがあります。後に話しますが、小菅の東京拘置所には、ある死刑囚の面会に行ったことがあります。宮城刑務所は正面と塀を見たにすぎません。門前には差し入れする物を売る店屋があったように記憶しています。かつて伊達藩の若林城のあった敷地に建てられ、大規模なものです。この若林地区には、年長の知人の医院があり、そこに行ったついでに何とはなしに見にいったのだろうか。1977 年頃、丸正事件で無期懲役囚だった李得賢（イドクヒョン）さんが宮城刑務所から仮保釈されて、仙台市八木山のアパートに住み、再審請求運動が行なわれていたことによるだろうか。パチンコの大好きな李さんでした。このアパートでよく酒盛りをしていました。45 年以上前のことで、かなり忘れていますが、暢気に過ごしていました。

旧奈良刑務所、奈良監獄は 1908 年竣工、当時のままの建物が残っています【図１】。この奈良監獄を含め、鹿児島、長崎、金沢、千葉の監獄が明治五大監獄と呼ばれ、設計者は山下啓次郎、ジャズピアニストの山下洋輔の祖父になります。表門には監獄とは思えないほどのイスラーム風、もしくはディズニーランド風の二つの塔がそびえ、何やらメルヘン的なのどかな景観を醸し出しています。門から入れませんでしたが、この鉄柵越しにはゴシック風の城館のような堅牢な庁舎が見えます【図２】。実に見事な建物です。

この周囲を囲んでいる煉瓦塀は味わいが

【図１】旧奈良監獄の表門：筆者撮影

【図２】旧奈良監獄の庁舎：筆者撮影

あります。私も含めて４人で、長い塀沿いに一周してきました。極めて広い運動場もあり、少年たちは野球やサッカーをやったのでしょう。監獄の舎房はハビランド方式といい、中央の監視所を起点に、五棟の舎房が放射線状に配置されている、フーコーの言う一望監視施設、パノプティコンです。

この元奈良少刑は改装して博物館とホテルに鞍替えされる予定ですが、いつになるか解りません。博物館はいいとしても、ホテルになると、誰が泊まりにいくのか、奈良市内からでもけっこう遠い。この監獄・刑務所という名をもつ奇想天外な建物、なかなか見られませんので、奈良にお越しに際には、ぜひ見にいってください。入獄と下獄の際、ファンタスティックな表門はどのように仰ぎ見られたのだろうか、想像してみるに値します。

ジョーン・バエズは歌う

前置きが長くなりましたが、今宵、皆さんに聴いていただく歌は、ジョーン・バエズ。*Joan Baez: Super Selection*（Echo Industry）からです。ボブ・ディランがノーベル賞を取った頃、ジョーン・バエズがボブ・ディランと一緒にいて姉のように語っているシーンがテレビで放映されていました。マーティン・スコセッシ監督 *No Direction Home* 、1963 年。キング牧師の演説したワシントン大行進の際、ディランの歌う‘When The Ship Comes In’にバエズが加わって、一緒に歌っていました。ジョーン・バエズは声がいい。哀切さを湛えているのだが、情緒的に湿っぽくならないで、５月の真昼の草原のようにさっぱりして、爽やかな決意を潜めた歌い方をしています。最初は「ドナドナドナ」、‘We Shall Overcome’など 18 曲続きます。それでは、

ジョーン・バエズの発揮した歌の力を味わってください。

沈黙の塔

「沈黙の塔」、これは森鷗外が 1910 年（明治 43）に発表した短篇です。奈良県立図書情報館には、これを収めた『烟塵』（春陽堂、1911 年）の初版本があります。表紙にはエジプト壁画の女人もしくは女神がヒエログリフとともに、縦長に描かれています。いい装丁です。この図書館は、戦前に「奈良県立戦捷記念図書館」と称されていました。「戦捷」とは日露戦争を指しています。郡山市にあった時期もあったようです。戦後あたりに奈良県立図書館と改称され、県庁近くに移り、現在は佐保川沿いの大安寺西小学校近くにあり、どういうわけか「情報」という字を入れています。市街から離れて、アクセスが悪くなった人が大半だったでしょうが、私の自宅からは歩いて 15 分ほどで、極めて都合がよく、散策しながら、かなり頻繁に通っています。のどかな佐保川では大きな鯉の群れや亀、また白鷺や鴨、鶺鴒、時には川蝉を見かけ、土手には桜並木が長く続き、コロナ前には韓国や台湾、中国から多くの見物人が来ていました。

この「沈黙の塔」が出された年、大逆事件が起こり、日韓合併条約が調印されています。その前年、安重根（アンジュングン）に初代統監の伊藤博文が射殺されました。安の記念館がかつて朝鮮神宮のあった南山（ナムサン）にあり、旗を手にした銅像の両側には桜の木が立っています。私は南山の桜を見にいたったことがあります。幸徳秋水の逮捕時の差押え物件のなかに、安の肖像写真入り絵葉書がありました。それはサンフランシスコ（桑港）平民社の岡繁樹が作製したものです。この絵葉書には、「秋水題」と署名した詩が記されています。「舎生取義　殺身成仁　安君一挙　天地皆震」（生を舎（す）てて義を取り身を殺して仁をなす　安君の一挙　天地皆震う）。自己を犠牲にして仁をなし、天地を震えさす、と安の義挙を讃えています。

『烟塵』は秋水らの死刑の一ヵ月後に出版されました。「沈黙の塔」は社会主義と自然主義の書の禁止、その主義者の弾圧・処刑・虐殺を描き、大逆事件をモデルにしています。〝沈黙の塔〟とは、インドに住むイラン系のゾロアスター教徒・パルシーの死体処理場、死体はこの塔に置かれ、鳥葬や風葬にされます。〝沈黙の塔〟は幸徳秋水をはじめとする 12 名が処刑された東京監獄のメタファであり、鷗外は「沈黙の塔の上で、鴉のうたげが酣（たけなわ）である」と、東京監獄での秋水らの死刑を比喩して表現しました。

鷗外は秋水らに同情し、社会主義者や無政府主義者、無政府共産主義者を擁護しようとしたと言えるのか。鷗外は大逆事件を画策・捏造した山縣有朋派であり、そう単純ではなさそうです。「どこの国、いつの世でも、新しい道を歩いて行く人の背後には、必ず反動者の群がゐて隙を窺つてゐる。そして或る機会に起つて迫害を加へる」と記すように、文芸、芸術、思想、学問、いわば「危険なる洋書」の弾圧に異を唱えたことは確かです。

監獄という場

ここでは、戦前の監獄・刑務所という場について、おもに社会主義者のケースを踏まえて見ていきましょう。監獄・刑務所という館は、端的に生と死、そして再生の場です。死なずに生かされ、生還する、あるいは殺されます。出獄しても、前科者のレッテルが貼り続けられ、監獄にいる時よりもひどい情況に見舞われるかもしれません。死刑に処せられた遺骸は埋葬されて、お終いかもしれません。だが、新たに再生するかもしれないでしょう。故人の志が引き継がれたり、伝記が記されたり、伝承が生み出されたりして、故人物語が広まり、〝故人史〟が生み出されることもあります。

とはいえ、まずは監獄内の生死です。監獄内の囚人・受刑者は監禁され、娑婆・世間から隔離されています。息を潜めて、死んだかのような状態を強いられます。まさしく監獄はゾンビ的場、監獄内はゾンビ的情況、囚人・受刑者はゾンビ的存在です。過去でも現在でも、ゾンビ的存在の代表者としてあげることにできるのは、監獄に監禁された囚人でしょう。ここでは、ゾンビ的存在がゾンビ的場・情況をどのように生きるのかについて考えてみたい。監獄以上に、過酷な強制収容施設はハンセン病者のそれです。孤島などに生涯にわたって監禁され、死してもなお、社会に復帰することはなく、施設内に埋葬され、肉体ばかりではなく、記憶までも遺棄されてきました。

アサイラムのスティグマ化儀礼

監獄などのアサイラム（強制収容施設）については、E・ゴッフマン『アサイラム』（石黒毅訳、誠信書房、1984 年）、アサイラムのような監禁施設での処遇についてはH・ガーフィンケル（“Conditions of Successful Degradation Ceremonies”, *American Journal of Sociology*, vol.61,1956.）が論じています。ゴッフマンには『スティグマの社会学』（石黒毅訳、せりか書房、1973 年）もあり、私はこれらを使って、「スティグマとカリスマの弁証法―教祖誕生をめぐる一試論」（『宗教研究』153 号、1982 年）という、虚仮威しの題の文章を書いたことがありました。もう 40 年も前になります。

アサイラムに監禁される際には、身体を拘束され、裸体にされて検査され、名前を奪われて番号化され、獄衣を強要されて、拘置の場に閉ざされることになります。徹底して人格を貶め、剝奪するスティグマ化の儀礼が行なわれます。この世・娑婆から遮断され、異界・別荘に隔離されるのです。穴蔵に閉じ込められ、沈黙を強いられ、言葉を奪われて、非人間化され、獄死と背中合わせに、死体のように取り扱われます。まさしくゾンビ的存在になるのです。世界また世間の普通の人々の状態を転倒させたのがゾンビ的存在＝囚人、その場がゾンビ的情況＝監獄となります。囚人・監獄をメタファと解するなら、どこにでも見出せるでしょう。

このゾンビ的存在は強権的な管理の体制下にありますが、決して孤立していません。監獄内外での繋がりがあり、新たに構築されることもあります。雑居房は別にして、監房内でゾンビ的存在は群れることができ

ませんが、監視されながらも、運動場では群れて集まり、浴場では少々群れています。獄外ではゾンビ的存在の親戚とも言うべき、妻／夫や同志などの縁故者・支援者がゾンビ的存在に寄り添っています。ゾンビ的存在は孤独ではないのです。隔たっていようと、連帯のなかで生きています。夢想であれ、いわば同志的・コミューン的なアソシエーションが生まれる、あるいはその可能性があるでしょう。

理想郷

第一次共産党創設者の一人、堺利彦は『楽天囚人』で監獄を「理想郷」と呼んで、おどけてみせています。初版は 1911 年（丙午出版社）、1921 年に再版、1927 年に増補版（改造社）、戦後、1948 年に売文社から復刊されています。奈良の図書館にはこの復刊本があります。「監獄は一種の理想郷である。予が休養のため理想郷に入るといつたのも、またけつして嘘ではなかつた。しかしながらまた、この理想郷を他の一面より見るときは全く別種の観が眼前に現はれて来る」と記しています。

「理想郷」は堺が週刊『平民新聞』に抄訳して連載していた、ウィリアム・モリスの著書（*News from Nowhere*, 1892）の題名です。1904 年に平民文庫として出版されています（『堺利彦 平民社百年コレクション第２巻』論創社、2002 年に収録）。これはいくつか翻訳が出され、近年、『ユートピアだより』（川端康雄訳、岩波文庫）の題で出ています。モリスはＥ・バックスと共著で『社会主義』（1893 年）を著わし、幸徳秋水は『社会主義神髄』（1903 年）で引用し、参考文献にあげています。だが、これまで日本では翻訳されず、最近、『社会主義―その成長と帰結』（大内秀明監修、川端康雄監訳、晶文社、2014 年）として訳されていています。

ここに、労農派の宇野弘蔵の弟子、大内秀明が「モリス＝バックスの「社会主義」思想と日本」の題で解説を書いています。大内には『賢治とモリスの環境芸術―芸術をもてあの灰色の労働を燃やせ』（時潮社、2007 年）という著書もあります。私が学生の頃、教養学部の先生でした。学校は無期限ストライキで休講ばかりだったのですが、授業に出て、勉強すべきだったと今さらながら思っています。

堺の監獄印象記を少し見てみましょう。監獄の建物は堅牢・広壮・清潔、「棟割長屋に住むものより見れば、実に大厦（たいか）高楼の住居」、衣服・夜具はほぼ整頓、冬期は非常に寒いが、ボロをまとう者、それすらできない者から見れば、「実にありがたき避寒所」、食べ物は悪いが、「塵だめをあさる人間」があると思うと、不平は言えない、ともかく「何にせよ、監獄は衣食住の平等と安全とにおいて、遙かに社会より優つてゐる」、「監獄の住民はこの平等にして安全なる衣食住の間に（中略）その才能性情に応ずる分業をなし、ほぼ共同自治の生活をなしてゐる」、「心身の疾病」のためには病院も教会もあり、「ほとんど何不足なき別社会」、国家・獄吏の管理・支配がなければ、コミュニズムでしょうか。堺は５回入獄、通算約５年間、当然「他の一面」もあり、

後で見てみましょう。

監獄は世間一般ばかりではなく、囚人にとっても、やはりディストピアでしょう。だが、堺の言うように、監獄はアジール的な空間と呼べるかもしれません。全面的にではないにしても、ユートピアに変貌しないこともないでしょう。獄中、アジール的な時空のなかで空想・妄想の世界への耽溺を続けること、想像の領分を拡張していくこと、それは自己の内的な運動となり、監獄内にいわば想像／妄想の王国を築きます。王は囚人自身、だが裸の王様かもしれません。とはいえ、この自己内的運動こそ、監獄の現実、ひいては現実そのものの変革を構想し推し進める運動になるかもしれません。閉ざされた情況ながらも、こうした自己の内的運動こそ、監獄内の囚人が未来に向かう方途になっているのではないでしょうか。

たとえば、獄中であろうとなかろうと、読書は個人の営みです。だが、それは言うまでもなく、著者や編集者、校正者、出版社、印刷会社、書店、図書館・司書など、そして書物を貸したり、贈ったりする人々などに依存しています。こうした媒介やネットワークのなかで読書という営みは成り立っているでしょう。資本制社会であれ、これもまた緩やかなアソシエーションを構成して発展させていくと考えられます。ゾンビ的存在の囚人を取り囲んでいるのもそれです。監房のなかで孤立しながらも、こうしたアソシエーションを媒介にして群れなして繋がっているでしょう。それは人、あらゆる生き物の存在の原型のようなものとも言えます。とすると、それは誰もがなりうる境遇だと言えるでしょう。

ジョーン・バエズは‘There but for Fortune’という曲を歌っています。“Show me the prison, show me the jail ／ Show me the prisoner whose life has gone stale ／ And I’ll show you a young man with so many reasons why ／ There but for fortune go you or I”「俺に監獄を見せろ、俺に牢屋を見せろ／俺に人生の腐りかけてしまった囚人を見せろ／そうしたら俺はお前に大いにふさわしい若者を見せてやろう／運がないなら、お前も俺もあんな風になっていよう」、一応、訳してみました。誰か直してみてください

監獄のイニシエーション

監獄という場の生活空間がどのようなものか、懲役囚を念頭に置いて、交通・交流という視点から見取り図を描いてみます。収監当初の隔離・剝奪・服従という一連のスティグマ化儀礼は、通過儀礼･イニシエーションのようなものとみなせるでしょう。監獄に隔離され、身ぐるみ剝がされて、囚人という新しい状態にいたり、それを起点にして、隔離された密室の場で汚辱となるスティグマを強化していくプロセスを辿ることになります。他方で、スティグマを自ら引き受けて反転させていく、自己スティグマ化のプロセスもあるでしょう。

囚人と看守の間での命令と服従という日常生活を通じて、社会のハズレ者、ヤクザ者、ならず者、札付き、前科者として、スティグマを心身に染み込ませ、自ら構築してい

くことを強要される一方で、主体的かつ自発的に自分を成型していくこともあり、こちらのほうが一般的でしょう。そして、改悛することもあり、犯罪者と悔悛者という二重の自分・アイデンティティを生み出し、その両極で葛藤し揺れ動くことになるでしょう。

他方、監獄内での主体的かつ自発的なスティグマ化を通じて、対抗的により一層自分を構築・成型して強固にすることもあるでしょう。汚名を自ら引き受けて、自分を解放するのです。いわば主義者、犯罪者としての自立です。左翼であれ、右翼であれ、大方の主義者はそのようにしてアイデンティをより強固に構築していくでしょう。もはや戻らない、あるいは戻れないという境地です。だが、後に転向することもあるでしょう。

『寒村自伝』によると、入獄の翌朝、看守部長が監獄規則や囚人の心得などを訓示しています。監獄は信賞必罰、犯則者は減食から書籍の看読禁止、重屏禁（懲罰房への監禁）まで諸種の懲罰、獄則の遵守者や作業の精励者、品行方正で顕著な改悛者には善行賞や作業賞金を与え、特別食を許され、仮出獄の恩典にも浴するというものです。

刑期の多寡によって異なるが、囚人同士は平等、看守の評価を別にすると、世間から隔離された獄内では人として無価値、零よりもマイナスだといえます。いわば囚人機械として、規律正しく、効率よく労働・生活することが課されています。そして、生活態度や労働の首尾、それを表わし象徴する改悛の情に応じて、評価が看守によってなされ、無価値の存在に評価が加えられます。

こうして見ると、囚人とはＭ・フーコーの言う、国家権力の生命・身体の徹底した管理・支配による生政治のもとで、閉鎖空間での強制労働者または奴隷の典型でもあることが解ります。カインの末裔といったところ。ただし生活・居住費はただで、税金で賄われ、労賃は収奪されずに貯蓄されて、わずかではあれ出獄後に支払われるという、パラドキシカルな好運に浴しています。ただより高いものはないのだが、生活用品は支給され、買うという消費活動がないところが特徴と言えます。

監獄の労働

囚人が監房内で強要された懲役による物品生産は、一応、資本制経済とは別次元で行なわれています。労働力は商品化されませんが、無賃労働ではありません。ノルマが課されているようですが、仕事の成果が多ければ、何か特典が与えられるようなことがあるようです。労役製品はどこかに卸されるが、刑務所が囚人の労働力を収奪し、恣意的な奴隷労働を囚人に強制して、製品が作られている点で、資本制経済の埒外にあるという、かなり奇妙な製品もしくは商品のようです。

後でも述べますが、堺や大杉栄、荒畑寒村らが警官隊と衝突した赤旗事件で、懲役刑を課され、千葉監獄に下獄し、そこで麻をよって下駄の鼻緒作りをします。『寒村自伝』によると、看守が囚人の作業課程表

と帳簿に、一日の出来高を記入します。季節によって作業時間の長短に応じて異なるが、出来高は一日４、500 足から 800 足の間、作業時間は平均して日中 10 時間、夜業２時間。なお、堺は一日 178 足、工賃は 100 足６、７銭、その 10 分の１が「賞与として下賜」、上手な人は月４、50 銭以上、堺自身は月５、６銭だろうと記しています。

一番早くいい仕事をするのが大杉で、品評会に出すと褒められたくらい、早く仕上げて語学の学習や読書に専念、一番遅く出来の悪いのは堺。一日の半分くらいが作業労働です。寒村は房内で一日課程の５分の１を仕上げるのに努め、「獄中読書」に熱中しています。午後４時から６時までが休憩で、読書になります。ちなみに、大学入試の問題用紙は刑務所で印刷されていましたが、今はどうなのでしょう。

堺たちは衣食住・生活の場は限定されながらも、ともかく安泰のようです。囚人にとって、懲役労働は強制、監獄だけのための無価値な労働、非生産的な労働であり、当座の賃金が払われません。労賃は貯蓄され、出獄の際に渡されますが、利子を生みません。資本制下の賃労働が廃棄されているようです。煙草や何らかの稀少な物品は獄内だけで貨幣のような役割を果たすことがあるでしょうが、資本になるような剰余価値を生み出さず、象徴的貨幣です。懲役は奴隷労働のようでもありますが、奇妙な特権的な労働です。言うなれば、最低以下の賃金だが、貨幣による交換や消費もない、資本制社会の空隙に設けられた、ゾンビ的と言えるほど、極めて特殊な労働情況です。資本制経済・社会の片隅もしくは余白に位置していると言えるでしょうか。

そこでは監獄法を貫徹させる国家体制が包囲して背後に控えているが、生活のために、必要に応じて働くといったことはなく、非社会的に原子化された個人が人格・人権を剝奪・否定もしくは制限され、非人間化されて生きている、あるいは生かされています。国家・監獄の虜囚にされて、あるいはその保護の下で延命しています。近年、入管施設で起こったように、時には病気になっても放置され、殺され死にいたることもあります。

囚人の交流

このアサイラムは世間から隔離され、孤立を余儀なくされていますが、何らかの縁、たとえば共通した思想・イデオロギー、泥棒や詐欺、殺人などの犯罪行為で連繋・連帯することもある社会、かなり奇妙な非社会的な個別的グループ社会を形成しています。囚人たちは社会主義・アナキズムであれ、凶悪さ・狂暴さであれ、国家権力からすると、犯罪性とでも言うべき体臭を発散させています。それは面構えや眼つき、挙動、いわば思想と実践を複合したイデオロギーとなって現われ、少々大袈裟にいうなら、国家やナショナリティを超えた、トランスナショナル、コスモポリタン的なのかもしれません。

他方、囚人は獄内だけで生きているのではありません。獄外との交流があります。囚人が獄外の人に向けてできるのは、弁護士と縁故者、つまり夫／妻子や同志・友人

との交流以外にありません。面会・差し入れと手紙、それに裁判での主張くらいです。社会・世間との交流は断たれています。囚人が社会主義者なら、社会との交流がないという致命的な境遇に陥ります。非常なディレンマと言うべきでしょう。社会と無関係な社会主義者あるいは共産主義者、それは存立するでしょうか。主義を堅持して獄中何年、そんなことを称讃しても仕方がないでしょう。

面会は夫／妻子や親戚、同志との直接の対面です。家族内と同志間の繋がりや連帯の証となる人間的かつ社会的・イデオロギー的な関係が現われてきます。連帯、極小の協同体的な関係、アソシエーションがアサイラムのなかに、それを超越して構築される類稀な瞬間、そのような時が、面会では生み出されるのではないでしょうか。身体の健康や身辺の雑事を話すだけで言葉がなくなってしまうかもしれません。言葉を失った沈黙、それが占めてしまうことがあるでしょう。それでも、社会主義者の場合、窃盗犯や殺人犯でも言えるかもしれないが、世間のしがらみに縛られながらも、それを超出した、共に苦楽を分かち合う協同性、コミュナリティを表出していると言えるでしょう。

囚人と読書

獄中であろうとなかろうと、読書は個人の営みです。だが、それは言うまでもなく、著者や編集者、校正者、出版社、印刷会社、書店、図書館・司書など、そして書物を貸したり、贈ったりする人々などに依存しています。こうした媒介やネットワークのなかで読書という営みは成り立っているでしょう。

資本制社会であれ、これもまた緩やかなコミューンナルなアソシエーションを構成して発展させていくと考えられます。ゾンビ的存在の囚人を取り囲んでいるのもそれです。監房のなかで孤立しながらも、こうしたアソシエーションを媒介にして群れなして繋がっているでしょう。それは人、あらゆる生き物の存在の原型のようなものとも言えます。とすると、それは誰もがなりうる境遇だと言えるでしょう。

縁故者の書籍の差し入れは贈与、手紙の交換は互酬的な贈答となるでしょうか。当人とっては労役として無価値な非生産労働を課せられる一方で、読書は知の蓄積ばかりではなく、孤独な営みであり、それ自体に自己充足的な価値があり、すぐれて主体的な純粋労働です。将来何ら役立たないかもしれない。とはいえ、著者に援助され、自分の何らかの資質を発展させていくという、著者と読者の間で生成される、将来の期待をモティーフとするような予期的な行為となるでしょう。さらには世界の拡張、想像力の私有化から想像力の協働化へと展開していくことになるでしょう。本は天下の回りものというわけです。

この読書作業は他者との連繋で初めて成り立つ協働作業ですが、とりあえずは監房内でのみ実行される限定的なものにすぎません。だが、それは獄外の外部の関係者を介在させることによって、少しは広がりのある運動へと展開するかもしれません。流

通・交通の拡張へと連なるかもしれません。それは面会、そして何よりも文通によって達成されるでしょう。読書によって培われる力、読書力と呼んでおきますが、それは自分の教養や見栄のために重要なのではないでしょう。監獄内であれ、その外部に対してであれ、読者がその労働を通じて読書力を蓄え、それをやがて発揮する可能性、あるいはその外在化の欲望を少しでも秘めているかもしれないという点で重要になるでしょう。

本の差し入れ

差し入れ、ここでは書物に限っておくが、それは面会とは異なった、眼に見えぬ他者との出会いになろう。差し入れされる書物は本人や関係者の蔵書のこともあれば、関係者に依頼して購入されることもあります。本の購入という消費がある一方で、無償の贈与という側面もあるでしょう。ここにも、数少ないながらも、書物を介した、他者との共同性が培われ、主義・イデオロギーの発展を予期できるでしょう。

そして、不可視の著者との出会いがあります。批判であれ、賛意・啓発であれ、囚人と著者との対話があり、想像の共同性が築かれるのではないでしょうか。そこから、想像力の私有化・孤立化を超えて、想像力の協同化・公共化への進展を促すかもしれません。

囚人に対する無償の贈与が関係者への応答となって返ってくることもあるでしょう。それは監獄という場を超えて流出していき、外部の世界を組み替えていくようなことが起こるかもしれません。想像力の越境、そして想像力の協同化、拡張・膨張ということになります。話を少し飛躍させますと、こうした想像力を媒介にして、資本制経済から脱落した監獄内の営みが拠り所になり、国家秩序を食い破り、資本制経済の貫かれた監獄外の世界を変えていく要因として働くことがあるかもしれません。それを可視化して流通させるのが言葉・文字ということになるでしょう。

囚人は自分の矜持や使命感のゆえに、獄外の縁故者、ことに妻に対して、書籍、特に洋書の注文・購入の際に、費用を度外視した過剰な要求をすることが間々あります。妻や縁故者の大方は貧しく、慣れない仕事をして、糊口を凌いでいますが、借金して、本代を工面することになります。囚人の我がまま、思いやりのなさが如実に現われる場面です。これは一方的な贈与ではありえず、資本制社会のもとでの過重な負担にほかなりません。

囚人も縁故者も孤立させないためには、救援会の組織化が大切になります。政治犯の救援会ができたのは、1928 年に共産党が弾圧された３・15 事件あたりからで、救援カンパを呼びかけることが情宣にもなります。金と本は天下の回りものです。

獄中の文通

獄中と獄外との文通、手紙の交換、それは囚人にとって書物の眼に見えない著者ではなく、直ちに面影の浮ぶ知人たちへと想像力を馳せていく、ダイアローグとなるでしょう。恐らく独り言とは、自分に語りか

けたり、誰かに話を聴いてもらいためにしたりする、孤独の、あるいは孤高のダイアローグでしょう。

このダイアローグは普遍的で、誰にでも根底にあるでしょう。言葉を話すことも読むこともそうですが、あるいはそれ以上に言葉を書くことへの止みがたい欲求が湧き上がってきましょう。隔離・監禁はその大きな要因になるでしょう。前に書いたはずですが、ゾンビの呻きはその原初的なものであり、言葉また文字への切迫した希求の現われでしょう。

時の止まったような空間から、止みがたい言葉がほとばしることでしょう。まずは文字を通じた身近な者への便り、音信・通信です。便りは頼りに通じます。音信は言葉の訪れ、便り。通信は言葉の行き交い、言葉の交わり・交換です。こうしてみると、手紙にはあらかじめ言葉による交わり、言葉の交換、来信への返信が期待されています。それは贈答、互酬的な贈与であり、連絡、連繋、そして連帯の協同性の確認・補強・再編を志向する営みということになります。時には絶交を宣告することがありますが、同志としての友愛も告げます。

獄中よりの手紙は同志の間で回覧されることもあれば、雑誌に載せられることもあり、広く流通することになります。親密な協同性を超えて、シンパシーやエンパシーを懐いた、あるいはそれを喚起した未知の者へ、いわば伝道されることもあり、〝伝道の書〟となります。一極的にであれ、多極的にであれ、寄せ集めるのです。巻き込み、巻き込まれ、集合させ、集合する。そこから新たな結社、同志のアソシエーションの拡張へと向かうことにもなるでしょうか。まさしく〝連帯を求めて〟孤立のうちから発せられ、連帯する友愛のウイルスに感染していくとでも言えるでしょう。

著者と読者

先に読書について述べましたが、文通はそれ以上に著者と読者との関係をもっと密接にしています。対面的で対話的であり、互に著者としても読者としても書き伝え、共にいるという、互酬的な関わり合い、相互扶助が直接に成り立っています。相互の止揚を予期させる、あるいは期待できると言っていいかもしれません。

獄中では世間や同志から遮断されて断絶されますが、言葉・文字を介して、同志たちを再編していきます。とりあえずは、囚人と同志・関係者の間に、来信・返信を通じた読み・書きの環、サークル、通信協同体のようなものが生み出されていくでしょう。獄中書簡が活字になって新聞や雑誌に公表されると、小さな通信協同体は拡張され広まっていきます。検閲もあろうが、囚人の主義・イデオロギーが読まれ議論され、通信・読者協同体を樹立していくようなことになるかもしれません。

獄内や獄外では、単に権力／反権力、国家／反国家、あるいは支配／服従といった、二項対立した要因が強権を通じて作用し貫徹していることは確かですが、それだけではなく、囚人同士、囚人と看守の関係には錯綜した要因が重なっているでしょう。相互扶助という倫理的な理念と実践、それが

獄内・獄外を貫いています。そこから、国民国家体制・資本制社会を超えるパーソナリティ、インターナショナリティが実践的なテーマとして現われてくることが期待もしくは予期されるでしょう。

囚人の行方

監獄は一種の磁場、囚人は磁極となり、磁力を発して誘引もしくは反撥を生じさせる厄介者であり、監視・管理されねばなりません。今風に皮肉ると、ケアされる人、要介護者です。閉ざされた獄内で獄吏に手酷く扱われながら、パラドキシカルにも国家によって税金でケアされています。その閉ざされた身体は時には獄死する時もありますが、数少ないながらも、面会者や同志、友人、書物、その著者に切実に開かれ、ケアされています。前者は社会福祉、後者は無償の贈与と言えるでしょうか。

このアジール的な時空で、国家と同志たちの間に厳然として屹立する壁、断絶を刻印する境界線、それを思索するのが主義者です、あるいはあらためて主義者を形成して、より強固にしていこうとするかもしれません。思想・イデオロギーの変容・発展、転換も起こってくるでしょう。この監獄というアジール的な時空間のなかで、現代社会の通過儀礼を転倒させた、非人間化プロセスを通過する囚人は変身していきます。いわばゾンビ的存在へと変貌し、資本制社会を攻撃する怪物となるかもしれません。

忌み嫌われ恐れられるモンスターになり、普通の隣人たちの世界へ侵入していこます。ゾンビは血縁・地縁や市民、国民・臣民、民族とは無縁であり、誰に対しても開放的、開かれています、逆に言うと誰からも排除され閉ざされています。ゾンビ的存在も同じで、コスモポリタンもしくはインターナショナリストいう名こそふさわしいかもしれません。

ゾンビは時々のイデオロギーによって奴隷として酷使されますが、ゾンビ自身はイデオロギーと無縁です。だが、ゾンビ的存在は禍々しいイデオロギーを吐きまくり、実践して感染・汚染させます。アナキストだと言えるかもしれません。ゾンビ的身体の蔓延、ゾンビ的存在への世界の拡張、ゾンビ的存在に埋め尽くすのが世界戦略です。獄中ではそのイデオロギーを構想するだけでも十分実践的な運動になるでしょう。その運動は人々を染めていき、〝アカ〟と名付けられています。いずれ、ゾンビ的身体は殺されないかぎり、安穏かつ苛烈な監獄のアジール的な時空から解き放たれることになります。

日常へ復帰するか

刑期満了の釈放、それは自由なのだろうか、日常に復帰するのだろうか、アジール的な時空から追い払われるだけではないか。これもまた、経費不要の獄内生活と同じく、パラドキシカルであろう。だが、無際限の自由が約束されているのは、監視体制のなかで窮乏生活に喘ごうとも、確かだろう。世の片隅で、逼塞して生きていくのは、獄中のゾンビ的身体と同じです。世界は巨大な監獄と喩えられよう。獄内で培った作法で生きるしかありません。資本制社

会の国家のなかに善良な国民として統合されてしまうか。微妙なところであり、それもあろう。だが、転向したところで、懲役囚・犯罪者、監獄帰り・ムショ帰り、〝アカ〟のスティグマ、札付きは消えずに負わせ続けられます。

震災にしてもそうでしょうが、日常への復帰などありえなでしょう。より一層過酷な情況に立ち合わせられます。食い扶持が極めて限られ、住む所も限られるかほとんどなくなります。運動も立ち行かなくなります。復帰どころか、劣悪な日常を迎え、四面楚歌の渦中となり、大逆事件後は〝冬の時代〟と呼ばれています。それでも、か細い希望を懐いた冬籠りの間、監獄で蓄えた糧を元手に、新たな日常の再生を期しています。

囚人は札付きの主義者として再生します。資本制社会・国家のもとでは、監視され排除されるゾンビ的存在のままです。日常の生活世界のなかで、主義者は群れなして再結集、あるいは再組織されるでしょう。大監獄の透き間に孤立しつつ、孤高の砦を築き固めなければなりません。たとえ、しばらくは主義の旗幟が鮮やかではなくとも、時節を待ちつつ、死に体のままゾンビ的身体を抱えて、主義者の構えを持続しなければなりません。旗幟を鮮明にして、決起する日はいつか訪れるのだろうか、それは解りません。

ともあれ、ゾンビ的身体の監獄体験は記憶される、それに値するものして心に刻まれ、心性のなかに堆積されます。そして、書き留められます。監獄内の時は自己を突破して、他者へと向かい、他者と共にあることを希求し、その回復する未来へと向かう時を志向することでしょう。そこに読者が介在することにもなるでしょう。読者こそが、協働して主義を実践する担い手となり、主義者の世界の構築を継承するかもしれません。

かつてゾンビ的身体として、囚われた者たちの蠢きを顧みるのは、生権力の貫徹／迎合を色濃くした現在でこそ貴重でしょう。未来を切り拓く喜ばしき福音、あるいは奈落へと落とす禍々しい呪言とでも言えるものが告知されているかもしれません。

ある死刑者

私には死刑に処せられた知人が一人だけいます。オウム真理教事件の早川紀代秀です。もはや忘れ去られていますが、私自身の備忘録として話し留めておきます。早川の獄中手記と私の論考を収めた、『私にとってオウムとは何だったのか』（ポプラ社、2005 年）と題した本を共著で出しました。早川の死刑は 2018 年７月、もう５年も経っています。テレビや新聞の報道があったが、一人の人間が抹殺されたという事態に何やら気の抜けたような想いがしました。

2016 年、平成天皇明仁が天皇を辞めるという、録画を通じた〝玉体放送〟後、18 年３月にオウム死刑囚 13 名のうち７名が小菅から５ヵ所の拘置施設に移送されました。兵庫県の能勢の妙見山に生まれ、神戸大、大阪府立大学大学院を出た、早川は大阪拘置所でもよさそうだが、終焉の地を一番遠い福岡拘置所とされました。

この際には、翌年の新天皇徳仁の即位によって、恩赦の対象にならないように処刑されるのは予想されました。13 名の処刑が東京拘置所だけでは一日で終わらないと踏んだのでしょう。大逆事件の 12 名の死刑は二日かかっています。それにしても、国家は死刑を躊躇することなく、きちんと執行するものだと、ややあっけに取られたことを覚えています。

早川の死刑が確定した際、『東京新聞』から電話があり、コメントしました。新聞には「裁判で麻原死刑囚に責任を押しつける信者が多かった中、早川被告は麻原死刑囚を信じて「正しい」と確信してやってきたことを認め、自分を問い直し続けている。もっと自分を問い直すことを続けさせ、生きて償わせるべきだと思うので死刑が確定するのは残念だ。彼の贖罪の祈りが被害者や遺族に届くことを祈るばかりだ」（2009 年７月 18 日付）という言葉が載せられています。

麻原彰晃の処刑後、『読売新聞』（2018 年７月７日付）に私のインタビュー記事が載せられました。「論点スペシャル　死刑執行オウム事件の教訓」というタイトルで、元検事総長、元警視総監と一緒で、かなり長い記事です。

「オウムの危険な教義は、松本死刑囚一人の思い込みによるものではなく、信者や教団幹部との関係の中で作り上げられていったといえる。……犯罪への加担には躊躇もあっただろうが、高いステージにいくための修行だと思い、信者らは広い意味で自主的に犯罪にかかわっていた。修行と称してテロを行ったのは、世界的にも特異なケースといえるだろう。……イスラム国によるテロなど宗教テロが続いている。国内でも、差別や偏見による排他的な言動が、事件を生む可能性も大いにある」。あらためて読んでみますと、こんなことを言ったのかと思う個所がいくつかありました。

証人尋問と面会

早川の手書きの原稿が手元に残っています。原稿用紙でかなりの枚数です。どのようなことを想いながら書き続けたのか、慙愧の念だったか、それとも忸怩たる想いだったか、ノスタルジーは懐かれたのか、恍惚とした境地が甦ったのだろうか、それは解りません。早川の送ってくる原稿に私が少し手を加え、早川自身が書き加えたり、書き直したりするのに少々途惑い、あせりながら、オウム真理教事件 10 年目に出版しようと、せかしもしました。そして、2005 年３月に『私にとってオウムとは何だったのか』が出版されました。早川が死刑に処せられたのは、それから 13 年後です。最高裁で上告棄却され、死刑が確定したのは 2009 年、死刑囚として９年間、獄中にいました。私が最高裁に証人尋問のために行ったのは、2003 年９月。以下のような文面の書状が届きました。

「平成 13 年（う）第 339 号／証人召喚状／住所（略）／証人 川村邦光殿／被告人早川紀代秀に対する麻薬及び向精神薬取締法違反、建造物侵入、犯人隠避教唆、殺人予備、殺人、国土利用計画法違反、公正証書原本不実記載、同行使被告事件について、

証人としてお尋ねしたいことがありますから、平成15年9月24日午後1時30分に当裁判所刑事第725号法廷（7階）に出頭してください。／正当な理由なく出頭されないときは、それによって生じた費用の賠償を命じられたり、過料又は刑罰に処せられ、かつ、勾引されることがあります。／平成15年6月24日／東京高等裁判所第3刑事部／裁判長裁判官　中川武隆（印）／注意（略）」

一般には受け取ることも、眼にすることもほとんどない文書であるため、引いてみました。慇懃さをことさらに露にした文体であるとともに、尊大さ、横柄さを色濃くにじませた語調です。権力はそつなく呼びかけ、法の名のもとに規律を強い、脅す、威嚇するというところでしょうか。

私が最も奇妙でいぶかしく思ったのは、「証人」という言葉でした。まっとうな裁判を期待できない裁判所・国家権力にある程度は迎合したとしても、何らかのことを言うのは無駄であるばかりではなく、その権威・正当性を少しは認めることになるのではないかということです。私自身が証人になることを引き受けたわけだが、私には早川に関して明かしたいことも、明かすべきこともない。あるとするなら、ただ裁判期間をできるだけ長く引き延ばすことだけにすぎません。早川も、弁護士もそうだったでしょう。

ささいなことですが、学生の頃、縁のあった黒田純吉弁護士から依頼されて、手助けになるなら、やらないよりもやったほうがいい。〝義理がすたればこの世は闇だ〟というわけです。露見したいくつかの事件後は別にして、オウム真理教にはさほど関心を懐いていなかったのは確かです。とはいえ、宗教団体の事件としては戦前の二度の弾圧に見舞われた大本に比べると思想上は劣るだろうが、オウム事件、それも同年代の早川被告に関わるのは、それなりに意義深いのではないかと考えました。

早川に会ったのはこれが初めてでした。被告席にいた早川を見た程度でした。麻原や早川自身の本、また新聞・雑誌で見た写真とはまったく異なった面立ちでした。気迫に満ちた精悍さはなく、企業の恰幅のいい穏やかな部長さんといった感じでした。その後、小菅拘置所に面会に行きました。二度目の出会いです。面会所の一階には、差し入れ用の物品を販売する店があったように記憶しています。廊下を歩いて、エレベーターに乗って、何階かに行き、面会所に行きました。何とはなく、迷路のような感じでした。

円形に穴の開いている透明のアクリル板の仕切りを前にして椅子に坐っていると、早川が現われました。何を話したのか、まったく忘れています。身体の具合や近辺の雑事を聴いたり、話してもらったりし、あまり聴くことがなくなり、沈黙が訪れ、しばらくして送っておいた本の感想を聴いて何やら話したことでしょう。この言葉がなかなか出ないわずかな沈黙、気まずいというのではなく、最後の別れのようで、何やら充実したものだったような気がします。それから瞬く間に面会時間の終了、一期一会といった感じでした。

処刑を眼前にして、自分の境涯を凝視し振り返ったことでしょう。そうした営みのなかで、いまだ達成できないというよりも、もはや達成の途を断たれようとしている終局の心残りは何だったのかと考えてしまいます。早川が他者に対して無惨にも強いた理不尽な痛みを、あらためて自分自身が強いられることをどのように思ったのだろうか、あるいはどのような覚悟を獄中で日々培っていったのか、今さらながら知りたいと想いました。

ノスタルジーと読書

死刑の確定した2009年までは、早川から手紙や年賀状が送られてきました。そこにはいつも色鉛筆でイラストが描かれていました。いくつか種類がありましたが、多かったのは富士山の絵でした。それは早川の根深いノスタルジーが表象されているとすぐさま思いました。

富士山に桜、富士山にコスモス、季節に応じた、花を添えています。年賀状では、干支に合わせて、擬人化した動物を描いています。手紙や年賀状の幾つかはある放送局のディレクターにオウム真理教事件の特番を制作する際に貸したのですが、戻ってきませんでした。放送局職員は新聞記者以上に、杜撰で傲慢のようです。

富士山はオウム真理教の富士山総本部道場・サティアンあった場。早川はその用地取得や道場建設を中心になって担い、後に建設大臣になっていました。早川にとって、富士山麓は殺人の行なわれた禍々しい場であった以上に、故地を捨てて出家した後、自ら創出した故地になっていたのでしょう。かつてを懐かしみ、夢にも現われてきたのでしょう。帰りたい場、もしくは帰るべき場は、富士山麓ほかになかったのではないでしょうか。「夏草や兵(つわもの)どもが夢の跡」といった感じがしみじみとします。

早川は獄中２年ほどで、700冊を超える、ヨーガやチベット密教の本を差し入れてもらって読んでいます。デビッド・ニールの『チベット魔法の書』を読み、呪殺をすべきでないと記されてことに衝撃を受けて、暗澹たる想いに陥っています。これらの書物から「自分に合った」瞑想法を探し出し、やがて瞑想すると「すぐに頭頂から冷たい甘露」が溢れる状態になり、「深い瞑想状態（サマディー）」になったと、麻原の修行法から離脱していったようです。このようなことを先の本に記しています。

この瞑想は恐らくオウム時代の瞑想とは異なっていると思います。自分だけのステージを上昇させるという独善的でエゴイスティックなものではなく、自分の内奥に迫るとともに、他者また外の世界へと繋がっていく慈悲心を志向するものへと変わっていったと想っています。世界のほとんどの人々は真心と良心をもって義理人情に篤く、シンプルに市井の人として暮らしていると、いわば理想化され、そこから外れていた一人が自分だったことにあらためて気づかされたと言えるでしょうか。

獄内は読書と瞑想の場になりました。恐らくこれは死刑直前まで続いたことでしょう。どのような本を読み続けたのか、知りたかったところです。ともあれ、塞翁が馬、

あるいは吉凶はあざなえる縄の如し、ということでしょうか。それでもやはり、本を読み、瞑想をし続けるなかで、絞首刑にされたくない／処すべきではない、生き続けたい／生き続けさせるべきだ／生き続けるべきだ、と受刑者自身も少なからぬ人も思うのではないでしょうか。獄内では、よく眠れたのだろうか。早川は死刑を目前にして、またその直前にどのような想いが脳裡をよぎったのだろうか、さらには何が末期の眼に映ったのだろうか。

2005 年に共著を出版して以降、早川どのように考え続けたのか、何かしら変わるところがあったのか、知りたいと思っていましたが、その術はありませんでした。この印税は折半することにし、オウム関連に寄付などしないように、生活費の足しに妻の方に渡るように手配しました。早川の獄中手記の執筆がオウム真理教事件の未完ではあれ、総括となり、遺言として生かされることを今でも願っています。

死刑を問う

昨年 11 月、大阪拘置所に収容されている死刑囚が大阪地裁に絞首刑を違憲とする訴訟が起こしました。画期的です。死刑に関して、1948 年の最高裁大法廷判決は「時代や環境に照らして、人道上、特に残虐だと認められない限り、憲法 36 条が禁じた残虐な刑罰には当たらない」として合憲の判断、55 年の同廷判決は「他の方法に比べて特に人道上、残虐とする理由は認められない」というものです（『朝日新聞』2022 年 11 月 30 日）。憲法 36 条では「拷問及び残虐な刑罰は、絶対これを禁ずる」です。

政府の５年に一度の世論調査では 04 年以降、４回連続で死刑制度について「やむを得ない」が８割を超えているとのことです。疑わしい数値ですが、死刑を報復の最良・最高手段として認めるとともに、死刑囚や死刑者が身近にいる人はそうざらにいない結果でしょう。死刑のハンコを押すだけの法務大臣に職務として命じられた、刑務官が執行するが、国家の肩代わりした復讐・報復によって、少しは溜飲を下げることができるのでしょうか。攻撃されたらやり返せ、さらに攻撃される前にやれ、という姿勢や風潮が空威張りする威勢のいい人たちによって演出され作り上げられています。

私もそうですが、人権侵害のリアリティはなかなか実感できません。死刑を廃止し、無期懲役もしくは終身刑にして、そのうち仮釈放といったところがいいのかと私は思っていますが、まずは死刑廃止を是とする２割弱の間で、異同を明確にして合致点を共有していくような、丁寧な議論を熱く盛り上げたほうがよさそうです。それが３割近くになれば、内実をともなった死刑廃止の論陣を築きあげることができるのではないでしょうか。それから、死刑廃止に向けて、絞首刑が残虐か否かを問うアクティヴな議論・活動を積み重ねていったほうが着実だと考えています。

堺の初入獄

荒畑寒村の評伝を書くために、堺利彦、幸徳秋水、大杉栄、山川均などを読みまし

た。秋水を除いて、三人は自伝を書いています。この５人とも獄中生活をし、それはすこぶるおもしろい。獄中は特異な場であるがゆえに、ゾンビ的情況のなかで、特異な転回を生み出すような思索や体験をとりわけ読書を通して培っていくようです。評伝では、この５人の獄中での読書も初めは書きましたが、余りにも長くなり、やむをえず削除しました。だが、もったいないと思い、ここに載せる次第です。烈しい怒りや硬直した正義の蔓延している閉塞した今日、少しは冷静になって考えてみるのに役立ちそうです。

堺は獄中体験を『楽天囚人』（売文社、1948 年）にまとめています。堺は生涯に５回の投獄。1904 年（明治 37）夏、新聞紙法違反で軽禁錮２ヵ月、巣鴨監獄。08 年春、屋上演説事件により治安警察法違反で軽禁錮１ヵ月半、巣鴨監獄。08 年夏から 1900 年秋まで、赤旗事件により官吏抗拒罪で重禁錮２年、加えて新聞紙法違反で軽禁錮２ヵ月、千葉監獄。23 年（大正 12）夏から冬まで、共産党事件により市ヶ谷刑務所の未決監、６月５日に拘留、12 月末に保釈出所。26 年６月、禁錮 10 ヵ月の刑期確定、豊多摩刑務所および巣鴨刑務所。通算約５年に及びます。

1904 年夏、日露戦争の始まった時、秋水の社説「嗚呼増税！」により、新聞紙条例違反として、週刊『平民新聞』発売禁止、発行兼編集人の堺は軽禁錮二ヵ月に処せられました。これは日本での「社会主義者入獄の皮切り」であったと自慢しています。

堺は『平民新聞』24 号（４月 24 日付）に「告別の辞」に「花見には少し後（おく）れたれど、小生は本日より二箇の間、面白き『理想郷』に入りて休養致します」と記して、巣鴨監獄に下獄しました。秋水は送別記に「監獄の入口にて、枯川は、送れる人々を見送りて「ここからは本人だけしか入れないよ」と呵呵大笑して、フロック着たる影は、ツカツカと小暗き廊下に没し去れり」と書いています。枯川は堺の号、「フロックコートを着用して入獄した私自身の心理が、今の私にはほとんどわかりかねる」と記します。後に、入獄記念として出版したのが『楽天囚人』であり、飄逸な枯川なのです。

『楽天囚人』の最初は「一空々零記」、1990、これは獄内での堺の番号です。ここに、当時の入獄の次第について記されています。まず東京監獄で「種々薄気味悪き身体検査、所持品検査等」後、夜具と膳椀を渡され、監房へ。一泊した翌日、巣鴨監獄へ護送。

入獄イニシエーション

巣鴨監獄に着いて、「サアいよいよ奈落の底に落ちて来たのだと思ふと、あまり気味がよくない」。まず玄関のような一室で、素裸にされ、次の一室で「口を開けい」「両手をあげい」「四ん這ひになれい」などの命令の下で身体検査を受け、そこで着物、帯、手拭、褌が渡されます。いずれも柿色染、手拭と褌は縦に濃淡のある染め分けになっていて「多少の美をなしてゐるからおかしい」。

入獄して２日目、「無雑作にグルグルと頭を刈られた」、坊主頭にされたわけです。

着物は綿入れの筒袖で、襟に白布が縫い付けられ、それに番号が書いてあります。「堺利彦はこれより千九百九十号といふものになり了つた」。以後、獄内ではこの番号です呼ばれることになります。

この前後に姓名、年齢、原籍、罪名などについての煩雑極まる取り調べ。褌（ふんどし）、靴下、風呂敷、ハンカチ、財布、ボロボロの股引（ももひき）などの所持品を明細に記す。頭を平気で殴るくせに「事いやしくも財物に関するときは、一毫（ごう）の微一厘の細といへども、決して粗略にはせぬのである。財産神聖の観念はずゐぶん深くしみこんだものだ」と皮肉っています。

それから柿色の鼻緒の庭下駄を履かせられて外に出ると、「そこにシャガンで待つてろ」と命令され、しばらくして、今度は「立て」「進め」と命令されます。二歩三歩進むと、「待て待て、帯びの結びやうが違ふ」と叱られ、「帯は蜻蛉に結んで、そしてその輪の方を左に向けるのだとのこと」。直して歩くと、「オイオイ手を振つてはいかん」、歩くこと半町（約 54 メートル）、赤レンガの横長い建物の正面入口に到着。鉄柵の扉に錠が下ろしてあります。堺の体験した入獄イニシエーションです。

「新入が十五名」と看守が叫び、内の看守に引き渡され、素足になって、鉄扉のなかへ入った。長い石畳の廊下が続き、その廊下の片側に板のようなものが並べてあり、筵に置かれた膳の前に坐らせられ、看守の礼という号令のもと、箸を取り、食事になります。「予は僅かに二箸三箸をつけたのみで、ほとんど何物をも食ひ得なんだ」と言います。

獄中生活

好奇心旺盛な観察者の堺、獄内生活を詳しく記しています。初めは懲役囚の「恐ろしい男ども」７、８人一緒の雑居房、窓は外と廊下に向かう二つ、高くて手が届かない、「朝早くなど、その窓から僅かの光線の斜めに射し入るのが、何ともいはれぬほどうれしく感ぜられる」。夜具は幅広い布が一枚で、それを「柏餅にして木枕で寝る」。

10 日後、10 棟の本監とは別にある別監に移されます。古風な木造の「チョット京都の三十三間堂」を思い起こさせる建物、房内は 12 畳、「芝居の牢屋の面影」、便所のある所は広々とし、障子や窓を開けると、空や雀、猫も見え、煉瓦と石でできた本監と比べると、「居心地のよいことは何倍か知れぬ」と、いわば有頂天になっています。

食事は「ずゐぶんひどい」。東京監獄は挽き割り麦だが、巣鴨監獄は安く色の白い南京米で「味の悪いことは無類」、最初は飲み込めなかった。味噌汁は「そこらの溝のドブ泥をすくうて来たやうなもの」。夕飯の菜は沢庵に胡麻塩、「これはなかなかサッパリしてよい」。時々、唐辛子をすり込んだ味噌菜、案外うまくこしらえているとの感想。

昼が「一番の御馳走で毎日変つてゐる」。日曜日が豆腐汁、油揚げと菜、大根の切干、そら豆、うずら豆、馬肉、豚肉。この豚肉は「菜か切干かの上に小さな肉の切が三つばかり乗つてゐる」だけ、「それでも豚だ豚だとみなが大喜び」。堺が菜のなかで一番閉口したのは「輪切大根と菜葉（なっぱ）のとき」

で、嘆息するのが常だった。三度のおかず代が平均１銭７厘だったが、戦争開始後は１銭２厘、「戦争はヒドイところにまで影響するものだ」と、非戦宣言をした堺は記しています。当時、２月に日露戦争が始まったばかりだったのです。

監獄の一日、まず午前５時、６月以降は４時半に鐘が鳴り、飛び起きます。布団や蚊帳を畳み、板の間を掃き、雑巾をかける。そうするうちに、看守が「礼ッ！」と号令をかけると、正坐して、頭を下げる。囚人番号が呼び立てられ、「ハイ」と返事して、顔を上げる。号令と服従、この永遠に渡るかと思われる反復は当初煩わしかったろうが、身体に染み込んでしまうでしょう。その後、塩で歯を磨き、顔を洗います。歯を磨く習慣を堺などの受刑者は身につけたのでしょう。しばらくすると、朝飯。それがすむと、小楊枝を使いながら、一時間、正坐。板張りの上に筵を敷いただけのために、足が痛くなります。その後、「安坐」と言い胡坐をかきます。

重禁錮の者は仕事に、軽禁錮の者は本でも読みます。朝から晩まで読み続けられるものではなく、退屈し、欠伸が出てきます。ヒソヒソ話、馬鹿話をし、悪戯をし、便所に行き、屁を垂れ、鼻唄を歌い、逆立ちし、「いろいろな妄想空想で僅かに自ら慰める」。昼飯は 11 時、天気がいいと、11 時半から 12 時まで運動、桐の木の下などをグルグル回るのだが、これが「一日中の一大愉快」。そして、夕飯、その後に点検があり、「安坐鈴」が鳴り、薄暗い電灯が灯る。それから２時間ばかり、「また退屈すると」、８時に「就寝鈴」が鳴り、一枚の布団にくるまり「大騒ぎで柏餅がゴロゴロと並ぶことになる」という次第。

入浴は獄中生活の「愉快の一つ」、およそ１週間に１度、あるいは４、５日に１度。浴場は煉瓦造り、浴槽はかなり大きく、湯は蒸気で沸かしています。寒暖計まで備えています。堺のいた監房は最初に入らせられ、清潔、「脱衣！」「入浴！」などの号令のもとに５，６人ずつ列を作って、20 人ほど一緒に入ります。

散髪も「チョットよい気ばらし」、２週間に１度くらい、囚人が散髪します。髭も剃るが、髭を生やすのは許されています。「獄中ではただ無事（或は単調）に苦しむのであるから、手紙、面会、入浴、散髪、運動等、何でも少し変つたことがあれば非常に愉快に感ずる」とまとめています。限られながらも、人との交流があります。

堺は「夜中に目がさめて左のごとき寝言ができた」と、俳句を 20 句列挙しています。「隣室の鼾に和して蛙鳴く」「行く春を牢の窓より惜しみけり」「夕ざれば監房ごとの屁連発す」「正坐して自慢の放屁連発す」堺は根が悲観の天使ではなく、楽観の天使です。

獄中読書

堺が一番困ったのはメガネを取られたことでした。メガネは渡され、「眼鏡の待遠かつたよりも、更に一層待遠かつたのは書籍であつた」。一週間あまり過ぎて、規約で２冊だけ渡されます。ハイドマンの *Economics of Socialism*（『社会主義経済学』、

これは 1905 年に『直言』に抄訳を掲載)、『王陽明伝習録』（第一巻）です。独房の者には冊数に制限がないとのことで、持ってきた本がすべて渡されました。

ブリスの *Encyclopedia of Social Reforms*（『社会改良百科字典』)。*Nuttall's English Dictionary*(『ナッタル英語字典』)。ヘンリー・ジョージの *Progress and Poverty*（『進歩と貧困』)。ゾラの *Truth*（『真理』)、ドレフュス事件を論じ、カトリックを批判し、初等教育制度の改善を説き、「シミジミと泣かされた」。*The Twenty Century New Testament*（『二十世紀訳新約聖書』)、「キリスト教に現はれたる共産制度の面影」が印象深かったとしています。『王陽明伝習録』（第二、三巻)。これが堺の持ち込んだ書籍です。社会主義の研究書、教養・処世の漢籍を主としています。

1903 年に秋水の『社会主義神髄』が刊行されて大きな影響を及ぼしていたが、日本語の社会主義に関する文献は数少なく、英語文献が主です。堺などが翻訳し教宣していきますが、社会主義はインテリの研究領域にすぎなかったようです。

出獄の前日、「獄中の音楽」と題した詩を作っています。「囚人半月天を見ず。／囚人半月地を踏まず。／されど自然の音楽は、／自由にここに入り来る。朝は朝日に雀鳴く。／わが妻来たれ、チウ／＼／＼」、以下、牛や蛙の鳴き声が続き、「晴には空に鳶の声、笛吹くかとぞと思はるる。／羽衣の袖ふりはへて／舞ふや虚空の三千里。／舞ひすまし、吹きます。／ピーピョロリ、ピーピョロリ」、そして雨水の音が続き、「ああ面白ろの自然かな。／ああ面白ろの天地かな」で終わります。

雀は獄中で窓から見るのを楽しみにし、蛙は鳴き声を聞いたでしょうが、牛は自然の代表として想像したのでしょう。とりわけ鳶に我が身を託していると言えるでしょう。堺は生き物の声を介して、市井では気にすることのなかった、その躍動する「面白ろの天地」、美しき天然に感じ入っています。とはいえ、エコロジーや自然保護に目覚めたわけではありません。マルクス主義の唯物史観を強固に身につけ、自然と社会は二項対立した概念になっていくことでしょう。

出獄

６月末、秋水の言う「鬼が島の城門のやうな」巣鴨監獄の厳然と構えた大鉄門が開き,「予を物々しげにこの社会に吐き出した」、「この早朝の冷気のなかに、浮びて動かんとするがごとき満目の緑に対して、まづ無限の愉快を感じた」と解放感を懐いています。出獄の迎えには、平民社や社会主義協会のメンバー 20 人あまりが押し寄せています。福田英子に手を引かれて、１歳５ヵ月の娘・真柄も迎えに来ますが、堺の顔を忘れていました。家では病妻の美和子が豆飯を炊いて待っていましたが、まずは病床の秋水を見舞っています。美和子はこの年の８月に死去しました。

６日後、出獄歓迎園遊会では男女合わせて、150 人を超えたが、下痢が続き、疲労のために、写真を撮って、すぐ帰宅。社会主義者はけっこうよく写真を撮っていま

す。翌日、堺は風通しのいい秋水宅に行き、枕を並べて二人して寝ています。「相顧みて憮然たるところ百穂君か芋銭君かに写してもらひたいやうな心地がした」と記しています。平福百穂、小川芋銭ともに『平民新聞』創刊号（1903 年）などに挿絵を描いた画家で、秋水の友人、「他にちょっと真似のできないぜいたく」と『寒村自伝』は記しています。

二度目の入獄

1904 年、『平民新聞』創刊 1 周年記念号に、秋水と共訳で『共産党宣言』を載せて、直ちに発禁。翌年、『平民新聞』廃刊。1906 年、日本社会党を創立し、電車賃値上げ反対運動を起こし、翌年に月刊『平民新聞』を創刊しますが、３ヵ月後に廃刊。

1908 年、屋上演説事件。平民書房の二階で開かれた講演会が解散を命じられ、堺や山川、大杉らが２階の窓から屋根の上に出て、演説したという事件です。検挙され、本郷警察署に拘引され、拘留所に。東京監獄に送られて、未決の「青服」を着せられ、禁錮１ヵ月半の刑が確定。巣鴨監獄に送られ、赤色（柿色）の服になります。

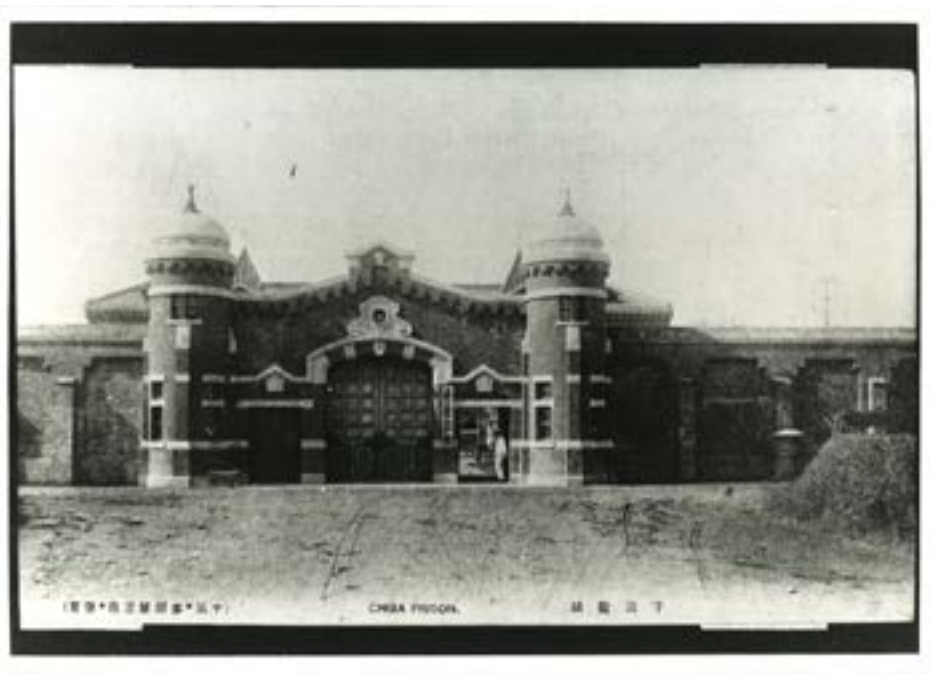
筆記が許可され、退屈しのぎに小説『白頭の恋』（『楽天囚人』所収）を書いています。読書については「獄中日記抄」に、ジーツゲンを「面白く読む」とあります。『白頭の恋』はこのジーツゲンの伝記に想をえて書いています。また、カウツキーの『倫理と唯物史観』を読み、マルクス主義の唯物史観の要点を『日本平民新聞』（08 年３月 20 日付）に載せています（岡本宏『日本社会主義史研究』成文堂、1988 年）。マルクス主義の研究・摂取・普及に余念のない堺です。すぐ後に堺は「マルクス派」を自称しています。

「社会党牢に入つては貴族なり」と句作しているように、「囚人中の貴族」で夜具も衣服も多く渡され、運動も毎日２度、ペンやインキ、手帳などの請求も許可され、「すべて優待」。食事は前回と比べて、非常によくなっていて、健康に何らの異状なかったが、体重は若干減っています。高血圧気味の堺にとって、獄中の粗食、規則正しい生活は体調を整えていったのでしょう。

赤旗事件で千葉監獄へ

巣鴨監獄から出獄して、３ヵ月半ほどして、６月、赤旗事件により官吏抗拒罪・治安警察法違反で懲役二年、加えて筆禍による新聞紙法違反で軽禁錮２ヵ月の判決を受けました。赤旗事件とは、当時の社会主義運動で分派していた直接行動派（硬派）と議会政策派（軟派）とが合同して、山口義三（孤剣）の出獄歓迎会を開催した際、前者が後者を挑発して、「無政府」「無政府共産」「革命」と白く記した３本の赤旗を担いで振り回し、「革命歌」を歌いながら、会場内から街路にデモを繰り出して、警官隊と衝突した事件です。大杉栄が提起し、それに乗った寒村と山川均が首謀者とされます。内閣が西園寺から山縣系の桂に変わり、政府の社会主義者弾圧策動のために、逮捕者は重刑を課されています。

堺は警官隊との衝突を仲裁したにすぎな



【図３】1910 年代の千葉監獄：千葉市郷土博物館所蔵

かったが、首魁として連累しました。堺が「二、三ヵ月、避暑にいったつもりでいるサ」と笑って言うので、寒村などは気楽に構えていたが、九名に重い判決です。堺は「これから二年二個月！ 大ぶんシッカリしないと、やりきれないぞ。さう考へると、妙なもので、気分がスット引きしまつて来た。勇気が出た、といふよりはむしろ、落ちつきが出て来た」と赤衣になり、「雀踊りを見るやうな、チョット小洒落た編笠を着せられて」、東京監獄から千葉監獄に護送されました。

千葉監獄は 1907 年に竣工、奈良監獄と同じように、山下啓次郎の設計、『寒村自伝』によると、「ゴシック風建築の中央区と兵営を想わせるような獄舎」です【図３】。独房制で、４畳半の板敷きに１畳の蓆敷き、扉の反対側にやっと手の届くくらいの高さに３尺のガラス窓、その外には鉄棒が嵌まっています。堺は３度目の入獄とはいえ、長期であり、それなりの覚悟を要した一方で、初入獄の若い寒村などには冗談を言って、萎縮しないように気配りをしています。

堺は千葉監獄から、その所在地名を冠した、獄中通信「貝塚より」を妻の為子宛に出しています。ここから、堺の獄中読書を中心に見てみましょう。妻の為子は幼い真柄を抱え、女髪結師になって生活費を稼ぎ、まさしく糊口を凌ぎながら堺を支えています。

９月、「重い本包」を抱えて、千葉監獄に到着。まだ本は許可されていません（第１信、1908 年９月 21 日付）。ドイツ語の勉強を始めています（第２信、同年 10 月 19 日付）。

東京監獄では渋柿の小説『淀殿』、クロポトキンの『相互扶助』を読んでいました。従弟の志津野又郎に *Leiden des Jungen Werther*（『若きウェーテルの悩み』）、秋水にルソー『コンフェッション』（『告白』、1912 年に『赤裸の人』の題で出版）、医師の加藤時次郎にカウツキーの Karl Marx, *Ökonomische Lehren*（『カール・マルクスの経済学説』）を依頼（第３信、同年 12 月９

日付)。後に大逆事件に連坐する医師の大石誠之助にジーツゲンの *Positive Outcome of Philosophy* と エンゲルスの *Feuerbach*（『フォイエルバッハ』）を依頼。トルストイの『復活』を二度目に読んで面白かったという感想（第４信、1909 年２月 12 日付)。

志津野にバーナード・ショーの *Quintessence of Ibsenism*（『イプセン主義神髄』）を丸善へ注文依頼（第５信、同年４月 13 日付)。妻・為子へ、『財産論』（*What is Property*)、『神と国』（*God and State*)、ラブリオラ『哲学論文集』（*Some Philosophical Essays*)、『個体進化と社会進化』（*Evolution, Organic and Social*)、『古事記読本』『国民経済原論』など依頼（第６信、同年６月 14 日付)。

入獄して、早一年、「あと一年に胸算だけの本が読めればいいがと、そればかり気遣つてゐる」、体重が増えたが、暑さで少々弱っている堺です。妻へ「ウェルテルの独英対照の合本ができなければ、本郷の南江堂に行つて *Der Rückblick* といふ本を買つて、うちにある *Looking Backward* と合本にして」郵送依頼。差し入れ冊数を少なくするために、合本にしています。『フランスの内乱』『科学界の革命』『産業進化論』、朝永三十郎『哲学綱要』、北沢定吉『哲学史要』、河上肇訳『新史観』の差し入れ依頼。

昼飯の時間になり、手紙書きを中断、昼のお菜は泥鰌汁という珍しいご馳走、と健啖家の堺は喜んでいます。石川三四郎の差入した『倫理講演集』（４月分）の次号、前後の数号を合本に。大石誠之助に *Capital*（『資本論』）第２・３巻、エンゲルスの *Landmarks of Socialism*、ワールズ（Worlds）の *Revolutions*、マルクスの *The Eighteenth Brumaire*（『ルイ・ボナパルトのブリューメール十八日』）の５冊（合計代価５ドル 75 セント）依頼。英訳『資本論』を読むと、「必ず眠くなつた」と後に記しています。加藤に再度、カウツキーの *Karl Marx, Ökonomische Lehren* 依頼。「宅下げした『人類学』は、婦人の裸体の挿画があるといふので不許」、その挿画を抜いて差し入してほしいと依頼。さらに、『農業雑誌』の合本の借用依頼（第７信、同年８月１日付)。

夏は「存外楽にすごして」、百舌の鳴く秋となった、花園にはコスモスが咲き始めた、と 10 月の書信は始まります。「世の末をワシワシ蝉の詛(のろ)ひ哉」「カナカナと蜩なげく亡び哉」「我恋のソーシャル姫や秋の空」。坂口徳次郎の形見の衣類を売って、ウェッブの *History of Trade-Unionism*（『労働組合主義の歴史』）を買えば、それが形見になる、丸善に注文してほしい。志津野に、Deville, *People's Marx* を丸善に注文依頼。加藤の送ってくれたマリー・ホフ『獄中日記』、「中々面白い」（第８信、同年 10 月８日付)。

志津野にオットーの *French Conversational Grammar*（『フランス語会話文法』）、古本で見つけてくれ、「少しばかりかぢつておきたい」。次に、『万物同根』（*Universal Kinship*)、元良(もとら)勇次郎『心理学綱要』、黒板(くろいた)勝美『国史の研究』、福田徳三『経済学講義』を合本にして送るよう依頼（第九信、同年 12 月 21 日付)。

1910 年、暖かい正月後、雪と雨が多く、

２月は風が強く、「手厳しく責めつけられた」が、霜焼けもひび割れもできなかった、２月末になり、「春らしい日光が監房にさしこんで、今この紙の上をも照してゐる」と時候の挨拶。仏英辞書を依頼。ドイツ語にもっと集中しなければならないが、「ただ何か新しいことを先から先に思ひ立つのが、その日を暮すためにすこぶる面白い」ということで、フランス語の勉強を始めています。

三宅雪嶺『宇宙』、最も深く敬慕する人だとし、夢を見るようなことばかり言っているドイツ流の唯心論ばやりの世の中で、「英国流の唯物哲学」で、その「科学的宇宙観は、平明で、着実で、洒落で、恬淡で、夏の夕に砂糖の入らぬ氷水を飲んでゐるやうな心地がする」一方で、「少し空想がすぎてゐる」と記します。雪嶺が霊魂不滅説を手軽に否定しているところから、バーナード・ショーが『イプセン主義神髄』で霊魂不滅説を痛快に論じて否定していることを思い起こしています。

さらに、ショーに触発されて、次のようなことを論じています。「一体この監獄などいふところに来てゐると、人が大抵精神的になる。宗教的傾向を帯びて来る。（中略）外に向つてなんらの満足も得られぬときまつた境遇だから、自然誰でも内に向つて多少の満足を求めることになる。（中略）少々殊勝になるくらゐなら、誰のためにも監獄は薬だが、もしその薬が利きすぎると、自分のことが自分にわからなくなつて、籠の中にゐることを天職だと思つて無限の満足を感ずる鸚鵡のやうに、おめでたい人になつてしまふおそれがある」と、監獄という隔離・閉鎖・監禁空間の精神作用について記します。科学的な唯物主義をより強固にしようと努めています。後に共産党員の多くが日本精神主義へ転向していったのを思い起こさせます（第 10 信、1910 年 2 月 24 日付）。

池田藤四郎へ、境野黄洋『印度仏教史綱』『支那仏教史綱』、新渡戸稲造『農業本論』、ラブリオ『哲学論文集』（*Some Philosophical Essays*）、『マルクス学大系』（*Theoretical System of Karl Marx*）を依頼。「合葬式の志し」として、小判型の饅頭が囚人一同に配れたことを伝えています。堺は「実に夢かとばかり嬉しかつた」、山川などはあまりに旨すぎて、その晩に熱が出たと看守に告げたといいます。糖分が欠乏しているためか、甘いものを食う夢を見る、「こんな要求を嚙殺して、自然忘れてしまふやうに心身を躾けるのが、証信坊（しょうしん）らのごとき精神的玉乗連の誇りとする」が、「情にしたがつて情を抑へ、欲を達して欲を制す」という儒学者の佐藤一斎の言葉で、無我苑の伊藤証信らの宗教的な精神主義者を茶化しています。

「すべて獄中生活において、食欲が如何の状を呈してゐるかをしめすために」、「残汁」のトピックを提供しています。汁は毎朝、一監に一桶、それを看守が柄杓で公平の大盛りにして配ります。汁はお膳の上にこぼれ、囚人たちはお膳に口を付けて、そのこぼれ汁を啜りますが、それが「残汁」ではありません。それは桶に残った汁のことであり、それが囚人たちに２杯目として

順番に配られ、楽しみにしている「非常な事件」なのです。彼岸の中日に団子、お盆に素麺、天長節（明治天皇の誕生日：11 月３日）に小豆飯、冬至に南瓜がご馳走に出ます。堺は「迎ひのときのおみやげには、栗饅頭か、羊羹か、鹿子餅か、ワップルでも願ひたい。ハゝゝ」と、甘味に飢えた堺は記しています。堺は生の欲動に促され、ただただ健全だったようです（第 11 信、同年４月 14 日付）。

５月、監獄内の花園には芥子が花盛り、菖蒲も「明るい水彩画を見るやうなその景色が目のさめるほど美しかつた」、芥子は「装ひ凝らした半玉の、金扉銀燭の間に輝きわたる舞の姿」、菖蒲は「器量よし……お歯黒つけてを眉剃つた女房姿」などと、暇に任せて、想像を逞しゅうしています。梅雨になり、運動場に出られず、咲いている石竹や撫子を見られません。伊藤証信の差し入れた『我生活』の１・２号を読んでいます。「たうてい無我にはなれぬといひ、『煩悩具足の泥凡夫』をもつて自ら居るに至つたのは大きな進歩だ」と、親しみを込めて皮肉っています。『実業の世界』『仏語初歩』は差し入れ不許可。池田へ、物理学、化学、生理学、人類学の本を一冊ずつ、「なるべく新刊ので、然(しか)るべきもの御見立てを乞ふ」と頼む、勉強に余念のない堺です。

飯の分量が減らされたお蔭で、腹具合が大いによい。山川などの経木編みは「イン五」といい一食１合５勺、堺たち鼻緒作りは少し骨が折れるため「イン七」といい一食１合７勺、最初は食い切れなかったが、少し経つといくらでも食えるようになった反面、下痢気味、嘔吐気味になったが、浅ましくも飯を控えるのはむずかしい。懲罰処分らしいのだが、「イン五」に減らされて、腹具合の調子がよくなっています（第 12 信、同年６月 15 日付）。

千葉監獄からの最後の手紙。「保養と学問とをさせて貰つたやうなもの」と総括しています。妻は生活苦のなか、周囲から白眼視されたようです。「性欲発動などといふ現象はパッタリと消えてしまつた」と、性欲と食欲について「殊に食欲といふ最大の要求がつねに甚だしく不満足を感じてゐるのだから、性欲など頭をもたげる余裕がないのであらう」などと考えめぐらしています。出獄後の同志たちも含めた生計のために、売文社の構想を伝えています。堺は暢気に明日への希望を構想しています（第 13 信、同年８月 20 日付）。

９月２日、東京監獄へ移送。新聞紙条例違反の残りを服役。検事局に呼び出され、千葉監獄で「社会にある同志友人の消息を聞いたか否かなど」について訊問されています。６月に逮捕されていた秋水らの大逆事件のことです。「何か大事件があつて大勢未決にゐるとやら」と記しています。千葉監獄から送られた書籍は多すぎて整理されず、新たに差し入れられた「あんまり有難くない本」、中村正直の『敬宇文集』を読みながら、暇に任せて「蟻の研究」をしています。

大杉と添田啞蝉坊の弟子の不敬罪を加えられた佐藤悟が残るのを案じて、出獄まであと 22 日と記します。「前から考へておいた出獄句」二首、「見よやあのイガから落

ちた露の栗」「撫でて見る蚤のくひあと今朝の秋」（第 14 信、同年９月９日付）。

監獄内での下駄の鼻緒作りの工賃は１円 30 銭。妻の為子は大逆事件が起こり、雲行きが怪しく、堺が帰らないかもしれないため、娘の真柄に帰らなかったなら、コウモリ傘を買ってやると約束したので、工賃全部を使って、奇麗なコウモリ傘を買ってやっています。

1910 年の大晦日、堺は大逆事件後の凄まじい弾圧の嵐が吹きすさぶなか、大杉や寒村などの「放免後の生計を案じ」売文社を設立して、糊口を凌ごうとします。ベンヤミンは「歴史哲学テーゼ」（『ヴァルター・ベンヤミン著作集１』野村修訳、晶文社、1969 年）で「まず食物と衣類をもとめよ、そうすれば、神の国はおのずから、きみたちのものとなるだろう」というヘーゲルの言葉を掲げて、次のように述べています。

「階級闘争とは、繊細な精神的なものの不可欠の前提である粗笨（そほん）な物質的な物をめぐっての、闘争である。とはいえ、階級闘争のなかにも、繊細な精神的なものは登場するし、それも、勝利者の手にころげこむ戦利品のイメージとして登場するのではない。それらのものは、確信や勇気やユーモアや策略や不屈さとして、この闘争のなかに生きている。……それは、支配者たちがこれまでにつかんだ勝利という勝利に、くりかえし、疑問を投げかけずにはおかない。花が太陽のほうへかしらを向けるように、過去は、ひそやかな向日性によって、いま歴史の空にのぼろうとしている太陽のほうへ、身を向けようとつとめている。あらゆる変化のうちでもっとも目だたないこの変化に、歴史的唯物論者は、対応できなければならない。」

解りにくい訳文もしくは文ですが、「繊細な精神的なもの」を継承し継続させていく途上に、闘争を位置づけることに意義があるのでしょう。堺にとっては、獄中で確信とユーモア、そして勇気が一層根深く培われていったというところになるでしょうか。

ジョーン・バエズの歌は‘We shall overcome’になってきました。“Would you like to sing ‘We shall overcome’?” と呼びかけています。“We’ll walk hand in hand, We’ll walk hand in hand ／ We’ll walk hand in hand someday ／ Oh deep in my heart I do believe ／ That we shall overcome someday”

拙著『荒畑寒村』には、当時の運動の雰囲気を知ることのできそうな「社会主義の歌」をあげておきました。〝歌は世につれ世は歌につれ〟で、ゾンビ的な歌ばかりですが、甦ることはあるのでしょうか。

共産党事件

赤旗事件から 15 年後、1923 年（大正 12）６月５日、堺は「日本共産党秘密結社事件」で検挙。非合法の日本共産党は前年７月に山川や寒村らと創立しましたが、１年足らずで、ほぼ瓦解します。夏から冬まで約７ヵ月、市谷刑務所の未決監に 20 数名とともに拘留。保釈後、「震災の獄中」を記しています。

関東大震災後、獄中で、大杉栄･伊藤野枝、

南葛労働組合の川合義虎や水沼辰夫などが虐殺されたと聴きます。「「大杉がやられた」のはすなはち私がやられたのである。少なくとも、私の肉体の一部がやられたのである」と、マルキスト・ボリシェヴィキの堺が主義の違いから対立したアナキストの大杉を「肉体連結の感」を懐いて悲嘆しています。

言論の自由も団結の自由も、自ら防衛すべき武器もない、大臣も富豪も殺される世の中、「我々のごときものが生命の安全を期しようとしても、それはできないのが当然」という情況で、「ただ我らの運動の歴史的必然性を確信してゐるので、運動が如何に絶望的に見える場合があつても、それはみな一時的の反動現象にすぎないと目する。一時的の運命や、個々人の運命は、運動全体の終局にくらべるとき、大した問題とするには足りない筈である」、これが堺の達した唯物史観のもとで個人の辿るべき運命、歴史的必然性としての革命では問題とするには足りない個人の位置です。

獄中では、消化不良の持病のために静坐深呼吸や室内運動をして、病気というほどのものにはなっていません。読書はもちろんのこと、絵葉書展覧会を開いたり、猫の写真を板壁に立て掛けたりして、独り楽しんでいます。

川崎憲二郎が病監に入っていて病死し、「また一つ蕾が落ちた。／大きくふくらんだ、／頼もしく見えてゐたその蕾が。／戦ひの虜となつて、／赤茶けた着物を着て、／病監の一室で寂しく死んだ。（中略）ああ、あの義憤に燃えてゐた心よ、／竹のやうに真直ぐかつた心よ、／強く堅く勇ましかつたあの心よ」と、詩を捧げて弔っています。

堺は「十一月二十五日の歌」を作っています。「目出たい獄中の誕生日よ」で始まります。母が「あづきめし」赤飯を炊いて「めざし鰯の膾（なます）」を添えてくれたことを思い起こしています。妻と娘が懐かしい赤飯を差し入れします。「鯵の膾が飛びあがるほどうまかつた、／鯛の味噌漬が震ひつくほどうまかつた、／大きな樽柿と栗きんとん、／これがまた気の遠くなるほどうまかつた……可憐な幸運な堺老人よ、／満五十三歳の禿頭病の親爺よ」。実に100年前、当時は老齢でした。食い物に意地汚いわけではなく、幼い頃より慣れ親しんだ味が好ましいのでしょう。ゾンビは食い意地を張り、選り好みをしません。

円谷幸吉と小原保

東京オリンピックの銅メダリスト円谷幸吉の遺書を思い起こさせます。これは橋本克彦の『オリンピックに奪われた命：円谷幸吉三十年目の新証言』（小学館文庫、1999年）に全文が載せられています。「父上様 母上様 三日とろろ美味しう／ございました、干し柿、もちも美味しうござい／ました、／敏雄兄、姉上様、おすし美味しうござい／ました、／勝美兄姉上様、ぶどう酒、リンゴ美味／しうございました」と遺書は始まります。

幸吉は1940年生まれ、六男一女の末子。遺書では兄とその妻たちへのお礼の伝言が続きます。「しそめし、南ばんづけ」「ぶどう液、養命酒」「モンゴいか」と食べ物が

続きます。これらは幸吉が67年12月30日に須賀川市の実家に帰り、68年１月１日の新年宴会で食べたものです。７日夜、幸吉は朝霞駐屯地内の自衛隊体育学校宿舎のベッドの上で、剃刀で頚動脈を切って自殺しました。私はこの時、高校２年生、前年に羽田闘争で山﨑博昭が死去したせいか、よく覚えています。

私の生地は青森県中津軽郡千年村、現弘前市生まれてすぐに福島県南会津郡田島町、現南会津町に移ったため、出身地は福島県にしています。福島県出身者では野口英世は別にして、円谷幸吉、特撮の同じ須賀川出身の円谷英二、それに東京オリンピックの前年に起こった吉展（よしのぶ）ちゃん事件の犯人小原保の三人が有名人です。三人とも福島県中通り地方。小原については本田靖春の『誘拐』（ちくま文庫、2005年）があります。石川郡石川町（旧母畑村）の山間部の開拓地生まれ、須賀川市に近い。６男５女の第10子。

1971年12月23日、東京拘置所から宮城刑務所に移されて、死刑、享年38です。一周忌の際、獄中で詠んだ378首は『十三の階段』にまとめられました。「刑架より堕ちたる我れに息のある／不思議さ気づき夢は醒めたり」「われも亦農の子ゆゑに稲を焼く／公害記事に義憤覚ゆる」、「明日の死を前にひたすら打ちつづく／鼓動を指に聴きつつ眠る」、ほとんど眠れなかったでしょうが、これは八首の辞世のうちの一首です。

そういえば、死刑囚の坂口弘も獄中で短歌を詠み、『歌稿』（1993年、朝日新聞社）を出しています。「生ごみを蜥蜴の食める音聞かん事件を書きて倦みたる夜は」「面会の往き来に見遣る刑場は常磐線の脇にあるなり」坂口は西行の『山家集』を読み、作歌するようになっています。

堺の禁煙

堺の獄中生活に戻りましょう。堺に人類学や民族学に精通させたいと、安成貞雄が人類学に関する英文の本３冊、差し入れ。たいして新知識は得られず、また母権制の最新研究の程度がそれ程でなかったと安心しています。丸善に注文して、ヴントの『民族心理学』が届けられますが、「多くのブルジョア学書と同じやうに、むしろ読み損の感じ」。安成が丸善に注文した大冊の『上古の文明』が届き、「ヴントよりも一層気の抜けたビール」という感想です。堺はすでにモルガンの『古代社会』やエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』を読んでいて、それを補強する人類学や民族学の知識を得ようとしていたのでしょう。秋水もそうだったが、大杉や寒村もこうした研究書や自然科学や天文学の書物をよく読んでいます。

ベーベルの自伝を読み、その獄中生活を記しています。カナリヤを飼い、子を産み、孫を産み、一大家族になったこと、同囚のリープクネヒトと野菜栽培をしていたことなど。堺は野菜作りや草花の世話が好きで、草取りは得意とするところ、獄中でそんなことができたなら「どんなに嬉しいだらう。……羨ましがらせること夥ただしい」。

堺は「今度の市ヶ谷行きの、第一の私の

おみやげは、煙草をやめたことだ」と自慢しています。18 歳頃から煙草を吸い始めて、27、８歳頃にはニコチン中毒症状を呈し、たびたび禁煙しようとして失敗を重ねたが、初子（はつご）が２歳で亡くなった時、禁煙に成功、30 歳の時です。「予の禁煙の歴史」まで書いて、得意になっていました。だが、10 年あまり後、「戯れに」吸って、元に戻り、「敷島」や「朝日」の３箱以上を煙にするにいたります。

遠い地方から客人が訪れ、堺が煙草を吸っているのを眺めて、先生は煙草を吸うのですかと尋ねました。この客人は「嘆息して」、私も「大の煙草のみ」だったが、先生の「予の禁煙の歴史」を拝見して、ぷっつりと止めましたと言います。堺は「顔から火が出た。腋の下から冷汗が流れた」と、笑うに笑えないエピソードを記しています。

「右手にペンを持ち、左手に巻き煙草を持たなくては原稿が書けなくなつてしまつた」。獄中では煙草を吸えず、余儀なく禁煙に成功しています。獄中で相馬御風（ぎょふう）の『大愚良寛』を読み、良寛が皆と一緒に酒・煙草を飲むことを楽しみにしていたことを知ります。出獄後、禁酒はしませんでしたが、禁煙は続けたようです。

与謝野鉄幹からの葉書に「謹呈戯作一首」と題して、「行半逢孤寺、令尹開口看、山山重畳下、両犬対而言」とあり、解らなかった。これは第一句が待、第二句が君、第三句が出、第四句が獄、君獄出待、君が獄を出でるを待つ、と解します。堺は負けぬ気になって、「一宇伽藍聳、幾人乗輿還、只是二文字、牛角自直垂」と書いて返信しました。与謝野が「この苦しい謎を解いてくれたかどうかは、まだ聞かない」。堺は「ウキヨこひし」と読んでもらうつもりだったといいます。「こひし」はすなわち「二つもじ、牛の角もじ、直ぐなもじ」であると堺は解いています。教養の断絶、素養のなさだろうが、私には全く解りませんでした。

成行宗の決意

大震災の１ヵ月後、書信の禁止が解け、10 月１日、妻の為子に手紙を書いています。日暮れになると、窓の外の木の葉越しに宵の明星が見える。夜中に目を醒ますと、月の光が射し込んでいる時もある。「黒がねの窓にさしいる日の影のうつるを守りけふも暮しぬ」という幽月（管野すが子）の歌を思い出しています。

妻に対して、「ズット高処に立つて大体の大方針」を提起しています。「先（ま）づお互ひ余すところの生命幾許（いくばく）ぞ。かりに外部からおしつけられる急激な変化がないものとして、十年内外といふところが動かぬ相場だ。それをできるだけ有効に、できるだけ愉快に消費せねばならぬ。といつて、無理な、こしらへたやうな、不自然な生活はしたくない。君子にも英雄にもなりたくない。ただ誰が見ても、自分から見ても、誠に自然な、当然な、普通の人間らしい生活がしたい。僕は従来、ただ成行宗の信者をもつて自任して来た」、入獄と地震の「二つの刺戟を利用して、従来ややもすれば惰弱に傾きかけてゐる、我々の気分をこの際一つシッカリと引締めるのだね。そして大体の時間割にしたがつて大切りの一幕を演ずる

のだ」と。この時、1923 年、堺が脳溢血で倒れて亡くなるのが 33 年。堺自身、このようなことを書いたのを忘れていたかもしれないが、ちょうど 10 年です。

メーリングの『マルクス伝』を読んでいます。メーリングが貧乏生活のなかで、実際運動と著述を両立させたことを同情も感服もしていると記します。「いつも楽天観で、来年サライ年、大いに面白いことがあるだらうと思つてゐる。足下も一つ最後の一幕に女ぶりをあげるやうに考へてくれ」と妻に奮起を促し、大杉・野枝などの虐殺、非合法共産党の弾圧を契機として、最後の一花を咲かそうと自らを鼓舞しています。

娘の真柄宛、「お前は今朝出たな。いい気持だらう。……あの赤い着物の姿がなかなか可愛らしく見えてゐたのに、あれを脱ぎすてたのは惜しいことだ」と冗談めかしたことを書いています。真柄は暁民共産党事件で入獄していました。

「獄中で得た好い習慣は必ず持続するやうに勉めることだ。朝早く起きること、本を読むこと、しやべらぬことなど、その最たるものだ。……お前は今いろいろ変つた世間の事態に面して驚いてゐるだらう。驚くべきことは今後なほ続々と出現する。いつも静かに落ちついて考へよ。お前の今後の仕事は容易に方針が立つまいと思うふ。急にあわてて見ても仕方がないから、少しユックリ考へて見ることにせよ」。真柄は 21 年 11 月から 23 年 11 月まで、ほぼ二年にわたって獄中にあり、父の堺はまだ獄中。珍しいケースですが、親子そろって入獄していました。妻・母親の為子は極めて苦労して大変だったでしょう。

「僕の今度の読書は殆んどすべてドイツ文ばかり、英文はホンの少し、日本文はいくらも見ない。そのほかに漢文漢詩を大ぶん読んだ。これはちやうど、旧友と出くわして昔話をするやうな趣味を感じた」と、勉学熱旺盛な堺はのんきに記しています。当時、まだ余震が続いており、「甚だ気味がわるい。どうもいま一度大きな奴が来やしないかといふ気もする。楽天家にも悲観がある」と妻に伝えています。50 年ほど前、大量に入獄した、全共闘・新左翼たちはどのような本を読んだのか、比べてみたいものです。

最後のお務め

共産党事件の上告を取り下げて、26 年夏から冬まで、禁錮 10 ヵ月、未決通算 120 日、豊多摩刑務所に下獄し、巣鴨刑務所に移っています。巣鴨はすばらしい馬肉の味噌煮があり、昼に薩摩芋、好物の豆が出ると「大変うれしい」。祭日には紅白の重ね飴餅あるいは飴パン２個、それに冷たい番茶、「これほど風味があるものかと、今度初めて感心した」。鮎の干物の「柔かく煮た奴の味が思ひ出される」。

山路愛山の『孔子論』、久し振りに『論語』『孟子』『孔子家語』などを読み、「帰るまでには主なる漢書一とほり読むつもりだ」と記します。四書（大学・中庸・論語・孟子）の次に、古文真宝、三体詩、唐詩選、唐宋八家文を読み、韓退之の名文が昔ほど面白くなく失望。蘇東坡（そとうば）（蘇軾（そしょく））「赤壁の賦」は「堪らぬほど嬉しい」。「韓退之大根くさきあくび哉」「蘇東坡の音読に腹すかす秋」など

の「駄句」を作っています。孟子が「一番いい」。大学･中庸は「読むに堪へなかつた」。これからは詩経、老子、荘子、荀子、韓非子が面白いだろうと期待。文人趣味にはならない漢籍の教養、それは私（たち）にはなく、残念と言えば残念です。

松村介石の『欧州近世史』は「万ざら悪くもなかつた」。加藤咄堂（とつどう）の『日本風俗志』では「日本全国を漫遊した」、その口絵に平福百穂の東北地方の馬子姿、伊勢節・間（あい）の山節を歌い踊ったお杉・お玉、京都の大原女があり、「大いに目を慰め」、石井柏亭の画もよかった。姉崎正治『新時代の宗教』、波多野精一『宗教哲学』、吉野静致『道徳の原理』、「いづれもありがたいものばかり。我々マテリアリストはどちらを向いても叱られてばかりゐる」。だが、国家主義だった姉崎が「国民道徳主義の固陋（ころう）を罵り、軍国主義、帝国主義の頑冥無智を嘲つてゐるのは少しく愉快だつた」と記しています。

12 月 9 日、29 日の出獄前、すごい木枯らし。朝日新聞社の杉村楚人冠と土岐善麿（哀果）に「テンプラヨウイタノム（天麩羅用意頼む）」の電報を依頼しています。あくまでも健啖家の堺です。「寒い寒い」と「木がらしの窓をのぞけば星一つ」「生き残るこほろぎ抱いて寝る夜哉」の句を並べています。桐の木がたくさんあり、その間に一本の大きな桜があります。「その広がつた枝振りから察するに、花時はさぞ美しいだらう。その花盛りを見て帰りたいものだなどと、飛んでもないことをチョット頭の中に浮べた。人間といふ奴、変な執着を起すものだ。猫が家になじむのと大差はない」。出獄の時、「息白く命の窓に名残りかな」、12 月 29 日、堺は無事、出獄し家に帰りました。帰宅の後、「冬ごもり外は火の雨血の吹雪」の句、さらなる弾圧・惨禍を予期したのでしょうか。

1924 年、堺や山川は寒村が反対するものの、共産党の解党を決定。26 年 12 月、共産党が再建されますが、三者とも加わらず、翌年に『労農』を創刊します。同年『改造』２月号に「獄中問答」を載せています。私本の看読禁止について、「もし刑の目的が、なるたけ多くの苦痛を囚人に与へるにあり、またなるたけ囚人を阿呆にするにあり、そしてまた、なるたけ囚人の出獄後なるたけ世間の役に立たない廃物にするにあるとするならば、私本看読禁止は実に適切有効の策に相違ないが、それだけに、長期の囚人にとつては、実に致命的な打撃だよ」と語ります。苦痛、阿呆、そして廃物、その産出がアサイラムの隔離・監禁プロセス、ゾンビ的存在から本物のゾンビ化ということになるでしょう。

堺は翌年 27 年に出獄した寒村と連れ立って、鎌倉の山川を訪ね、３人して江ノ島に出かけています。海岸を散策したり、水族館を見たり、３人で写真を撮ったりしたり、帰りの電車では穏やかな笑顔で暖かい親しみを見せた「本当の新しい女」に出会ったりして、「全くユトピアの国に遊んだ心持」に束の間浸っています。堺たちは挫折を繰り返しつつも、ユーモアと策略と不屈さを発揮して、ユートピアへの希望を懐き続けていきます。それは監獄という場と時で培われたのでしょう。　　（つづく）

（かわむら くにみつ　文筆業）

「落書き的論文」のすすめ（下）

《人類史＝ヨーロッパ的世界史像》の外側へ

小島 潔

上原専禄の 50 年代

東京商科大学における「民主化の闘争」に敗北した上原は、1949 年 1 月、苦労に苦労を重ねた新制一橋大学への移行を目前にして、学長の職を「免ぜられた」。戦後の大学改革に、日本の学問の新生を賭けて全力を傾けた上原にとって、この「敗北」は、自分の属する東京商科大学が、「大学の客観性・公共性・普遍性」を自ら否定した出来事として、深い挫折感と失望を味わわせるものであった[1]。それは上原に、大学を辞めることさえ考えさせるほどの痛手を与えたが、「自分とともに大学を公共的なものとしたいと願った少数の教授たち」のことを考えると、「身勝手が過ぎる」ように思われて、思いとどまった。同時に、大学の「民主化」闘争には敗北したが、客観性・公共性・普遍性を求める闘いは大学の中に限定される話ではない、「『勝負』はもっと広い場で」、つまり戦後日本社会のなかで「客観性・公共性・普遍性」を確立する闘い――学問を通しての闘い――は継続されなければならない、とも考えたのであった。

実際、それ以後、上原は社会的発言の幅を一挙に広げ、1960 年の新安保条約成立の時期まで、平和について、教育について、また民族について、世界史について、縦横の論陣を張っていくのである。その意味では、1950 年代の十年間は、上原にとっても、また後代の私たち読者にとっても、まことに「豊饒」な時期であったといえる。

本稿では、まず、上原の 50 年代の諸論点の概略とその連関を示し、それらが彼の 50 年代の思索において最も注目すべき「世界史像の自主的形成」というプロジェクトに結晶していくプロセスをたどることに論述を限定したい。

その前提として、ここでまず注目しておきたいのは、50 年代の諸活動の基礎となった彼の根本の問題意識である。

1949 年 1 月に学長を退いた上原は、東京商科大学商学専門部教授に復帰し、新制一橋大学発足（5 月）直前の 3 月に、『独逸中世の社会と経済』を刊行して、20 年余にわたるヨーロッパ研究に区切りをつけた。それ以降、ヨーロッパ中世史研究に戻ることはなく、大学でも、「歴史認識における主体性を育てるのに最も適わしい講義内容をと考え、それに焦点をしぼって、毎年『歴史学の歴史』を講じ……また『経済史研究

の歴史』を扱った」（⑰290頁）。それらはいずれも、専門的歴史研究者の養成のためというより、すべての学生が備えるべき一般的な歴史意識・歴史感覚の涵養をめざすものであったと、まずは考えてよい。当時の学問が日本社会の近代化や民主化をめざして一斉に走り出しているときに、上原は自律的な歴史認識を行える歴史意識、歴史的主体性の確立という基礎作業に打ち込んだわけである。

もともと、「歴史学の歴史、歴史意識の歴史」の検討は、戦後の上原にとって、自己の知的根柢を確認するための「自己省察」として始められたものであった（「歴史的省察の新対象」1946年）。いわば「私」のための作業であったものが、ここでは、戦後世界を創造する課題を背負った若い世代を含めた「私たち」の教育へと拡張されたのである。しかし「歴史学の歴史」「歴史意識の歴史」の探求は、上原にとってそれ以上の意味を持っていた。

彼は1958年に『歴史学序説』（大明堂）を刊行した。これは「歴史学とはどういう学問なのか」という問いを正面に据えた彼の唯一の歴史学概論であったが、その中心をなす「歴史学の概念」（1954年執筆）のなかで次のように述べていた。「〔歴史学の概念を明らかにするためには〕歴史的形成物としての『歴史学』の歴史を究明することが、どうしても必要になってくる。いや、『歴史学』の歴史を究明するその手続きのうちに、あの三点〔歴史学の概念、研究課題、研究方法〕の考察がもりこまれてゆくのが、『歴史学とはどういう学問か』という問題を考えるための、最も正しい仕方だ、といわねばならない」（『序説』33－34頁）。これは、「歴史学の歴史」「歴史意識の歴史」の探求が、歴史研究のたんなる前提（研究史としての扱い）ではなく、それ自体が彼の学問の方法をなしていたことを示すものであろう。あらゆる人間事象、社会事象の真の意味は、それが歴史のなかで形成されて来るプロセスのなかに現れる、という考え方は、戦後の上原のすべての思索を貫くものであった。

しかし同時に、この歴史認識の方法は、上原個人の方法に止まってはならないものでもあった。後に見るように、講和問題においてさらけ出された日本国民の歴史認識の惨状を前にして、この方法を身に着けることは、研究者や学生のみならず、今や日本国民全体の課題として自覚されるようになったのである。講和条約・安保条約の発効後、上原は次のように書いた。「大胆な言い現し方をするならば、少くとも日本の国民大衆には、本来の意味における歴史意識というものがない。……歴史意識を総じて備えておらない国民大衆に、いかにして歴史意識なるものを持たせるか、が問題なのである」（「歴史教育の問題点」1952年、⑫91頁）。「歴史学の歴史」「歴史意識の歴史」の探求から「世界史像の自主的形成」にいたる上原の50年代のすべての活動は、このような日本国民の現実を変えるための闘いであったと言ってもよいのである。

教育の「発見」

学長職を解かれたのち、上原が一般に向

けてまず発表したのは、学問論であったが[2]、50 年代の上原の一般向け活動として第一に注目すべきは、教育との出会いであったと考えられる。

上原の教育問題への具体的なかかわりは、50 年 9 月に行われた教育シンポジウムへの参加から始まり、彼が民間の教育研究機関である国民教育研究所（民研）を離れる 1964 年まで続いた。戦後の知識人の思想的活動において、教育の占める位置は概して低く、考察も乏しい。まして学校教育も含めた教育全体を射程に収めた教育論となると、皆無に等しい。そんななかで、上原の長期にわたる、きわめて密度の濃い教育へのかかわり方は、例外的なものであったといえる。それは大学教育に止まらず、教育という領域そのものが、上原の思索において決定的な位置を占めていたことを示すものである。

しかしそれは、上原が教育をも自己の専門領域とみなすようになったことを意味しない。1958 年の時点でも、彼の自己認識は、「今もって、全体としての日本の教育を取り扱う能力や資格など、私にあり得るわけはない」というものであり、「教育学の文献研究をやったことがなく……教育の現場というものについて無知に近いので、私の思索方法は、どうしても超越的であったり、観念的であった」（⑫ 237 頁）というものであった。しかしそれゆえに、教育について、専門家なら問うこともない疑問――「教育は、いったい、誰のために、また、なんのために行われるのか」というようなことも「いく分自由に考えてゆくこともできた」と言っているのは、謙遜な物言いだが、言わんとしていることははっきりしている。すなわち、自分は教育の専門家でも実務家でもなく、あくまで国民の一人として、その責任において教育について発言している、だからこそ教育の本質を考えることができた、というのである。上原にとって「教育の本質」とは、ヒューマニズムやデモクラシー、自由といった価値観を植え付けることではなく、「平和な世界の創造に主体的に寄与しうる国民の形成」という、歴史的・現実的な課題を意味した。朝鮮戦争や核戦争の危機を目の前にして、「平和な世界の創造」以上に生々しい課題はなかったのである。

ここではまず、上原を教育問題に引き込んだ上記のシンポジウムとはどういうものであったかについて一瞥を投じておきたい。それは、1950 年 9 月 16 日・17 日に、出版社の弘文堂が主催したものである。弘文堂は、戦前から学術出版を中心とした老舗出版社で、戦前・戦中の上原の論文集はすべてここから出版されていた。戦後、弘文堂はシンポジウム形式による学問諸分野の入門書シリーズを企画し（「現代のシンポジウム」というシリーズ）、『哲学とは何か』『科学とは何か』『社会主義とは何か』などと並んで、教育についても一冊作ることにした。そのさい、そこに、戦前以来自社と深いつながりがあり、新制大学の発足にも深く関わった上原に参加を要請したものと考えられる。その点では、上原の教育へのかかわりは、他律的な偶然に発していたといえるだろう。しかしその偶然が、彼の受

け止め方によって抜き差しならぬ必然へと深化させられたのである。これは、ウィーン大学留学のさいの専攻の選び方などにも通じる、彼の特殊な性向――重大な選択ほど「受動的」になされ、それが後に主体化され、必然的なものへと深化させられる――が、ここでも発揮されたように思われる。

シンポジウムの参加者は、上原以外に、上飯坂好実（杉並区第四小学校校長）、細谷恒夫（東北大学教授、教育哲学）、正木正（東北大学教授、教育心理学）、宗像誠也（東京大学教授、教育学）の四名である。上原は「日本の教育の背後にある世界観」についての報告を担当している。シンポジウムは翌1951年４月に単行本『教育とはなにか』として刊行された[3]。

このシンポジウムをきっかけに、上原は教育学者の宗像誠也と交流を深め、1952年１月３日の読売新聞紙上では対談（「新しい人間像のために」を行い、同年６月には、『日本人の創造――教育対話篇』[4]という対談本を刊行するまでになる。

ここで注意を要するのは、上原の教育論が、朝鮮戦争の勃発からサンフランシスコ講和の時期にかけての、戦後史の激動を背景としてなされていたという事実である。彼の教育論には、国民の「精神革命」を求めるなみなみならぬ危機感と切迫感が流れているが、それはこの時代状況と無関係ではあり得ない。その点で、戦後改革のアジェンダの一つとして日本人の「精神革命」[5]を掲げた戦後啓蒙の流れに上原も掉さしていたことは間違いない。しかし彼らの多くが、その主張を知的読者を対象とした「論壇」で発表するにとどまったのに対して、上原が「精神革命」のもっとも初歩段階の学校教育の現場に触れて発言したことは、彼の「精神革命」にユニークな特質をもたらすこととなった。後述するように、彼は、民主主義や自由、あるいはコミュニズムといった特定の価値観や知識を若い人々に注入する（教え込む）よりも、彼らがどのような思想や価値観にさらされても、それらにたいして自律的に向き合い、主体的に判断しうるような「意識の構造」（『創造』121頁）を「青年や少年たちのうちに……芽生えさせ、それを亭々たる大樹にまで育て上げる」（⑫258頁）ことを教育の課題としたのである。その点で、大学で、学生たちに「歴史認識における主体性」を自覚させることを目的として指導したことと全く同一線上の問題意識に立っていたといえよう。

なぜ「歴史的・社会的問題意識」が欠如するのか

占領期に始まった戦後の新教育が、その出発の時から種々の問題を抱えていることは、周知の事実であった。「新教育」が施行されてから五年あまりがたった50年代に入っても、「教員の量的不足」と「質的弱勢」や「校舎や施設の不足と不備」など、深刻な状態が続いていた。一方、「政府与党筋」からは、「修身科」が廃止されたために「新教育」には道徳性が欠如しているとの批判も寄せられていた。

新教育が反省期に差し掛かっていることは誰の眼にも明らかであった。上原も「新教育」は大きな欠陥を抱えていると感じないわけにはいかなかった（『なにか』249頁）。

しかしそれは、多くの人々が指摘する上記のようなものとは異なっていた。彼は、「新教育」の一番の問題点は、それが「歴史的・社会的問題意識」すなわち、問題を歴史的・社会的なものと捉える「意識の構造」を欠いていることにある、と見ていた。後年のことになるが、彼は、「第二次世界大戦後の激変した、そして激動をつづける現代世界のまっただ中に投げ出された日本が背負わされた、大小の歴史的・政治的諸課題にどうこたえるか、というきびしい問題意識」が欠如していることが「『新教育』全体の原理的欠点」であると指摘している（⑫97頁）。問題は、新教育に民主主義や自由・平等の言説が不足していることではなく、それらを現実のものとなしうる「意識の構造」が形成されていないことなのである。もちろんそれは、新教育だけの問題ではなく、日本社会全体の問題でもあるのだが、青少年の教育現場におけるその欠如が、上原にはとりわけ危機的と思われたのである。

戦後の新教育には、戦前の反省を踏まえて、児童生徒の間に適切な民主主義的社会意識を育てることを目的に、「社会科」という新しい教科が小中学校のカリキュラムに組み入れられていた。上原はそのような事情を踏まえたうえで、新教育には「歴史的・社会的問題意識」が欠如していると批判したのである。それはなぜか。

戦後教育における「社会科」は、占領軍によって廃止された「日本史」と「地理」に代わって、文部省によって新たに設置された教科である。戦時中の日本の教育が「生徒を現実社会に適するよう育てることに失敗した」[6]との指摘を踏まえて、「〔児童に〕日常生活における基本的な事がらについて、身をもってその関係を理解し……直ちに自分たちの生活を改善し進歩せしめようとの心」を起こさせることを目的とするものであった[7]。しかし教育現場では、「〔社会科は〕日本の教育史はじまって以来」のことなので、なにをどう教えるのか、皆目見当もつかないありさまであった。「大学の先生は、小学校の社会科にたいして見むきもしてくれない」と小学校長の上飯坂は嘆き（『なにか』21頁）、宗像誠也は、「社会科がどのくらい実際に行われたかは疑問で、八分九分までは社会科は行われなかった……社会科教科書を読ませるだけ」のところもあったとの報告を披露した（『創造』102頁）。

上原は、「社会科は日本の子供にはじめて、自己を社会の能動的担い手の一員であるという知識と観念を与えた。……このことを子どもたちに自覚させたということは、日本の教育史はじまって以来最初のことである」（⑫182頁）と、その意義を高く評価していたが、同時に、大きな限界をも指摘しないではいられなかった。すなわち、「社会科によって現実にはたされつつあるところのものは、最良の場合においてさえ、単に歴史的・社会的知識の附与であって、その問題意識の育成ではない」（⑫258頁）。言い換えると、「社会科における社会は、なるほど変化してきたもの、変化していくものと考えられてはいる。しかしその変化には一定の枠がある。その枠のなかにおける認識がギリギリ一杯で、枠自体をも変え

ていかなければならないような変化」があり、そのような「変化の動きの担い手になっているものは、また担い手にならなければならないものは、社会科を学んでいる児童、若い人それ自体だ、という意識が育てられていない」（『創造』129 頁）という、根本的な欠陥があったのである。その欠陥の前提には、児童生徒の社会認識は「日常卑近の基本的なものに限られる」[8] とする浅い児童観があった。

それに対して上原が「歴史的・社会的問題意識」という言葉に託した意味は、すでにみたように、はるかに大きな射程を備えていた。別の場所では次のようにも言っている。それは「日本社会の後進性と日本文化の局地性」について「知的認識」を持つことであり、「人類協同体の空前の苦悩」と「人類の不幸」を、「実践的に克服すべき問題として意識すること」（⑫ 256 － 257 頁）である、と。もちろんこのような態度は、子どもたちが自然に持つものではなく、教師による指導が期待されたであろうが、上原の狙いは、なによりも、児童生徒の視野を身の回りに限定せず、世界と世界の中の日本を考える習慣を身に着けさせることにあったと考えられるのである。

しかし、「歴史的・社会的問題意識」がそういうものであるとして、それでは私たちは、具体的にどうやって、そのような意識を教師たちに、また「青年や少年たちのうちに……芽生えさせ、それを亭々たる大樹にまで育て上げ」（⑫ 258 頁）るなどということができるのだろうか。そのためには、彼らが、自分たちが日々の生活を営んでいるこの日常世界が、世界全体と緊密につながっていることを実感させられなければならないであろう。それを考えるヒントを、このとき、上原はドイツの哲学者ハイデガーの中に見出した。

「世界像」への教育

上原が「世界像」という言葉を特別の意味で使いはじめたのを確認できるのは、先の教育シンポジウムに参加する三カ月前の 1950 年 6 月に行った講演「近代的歴史意識の形態」[9] においてである。

「世界像」という日本語は、今日では一般的に使われることも多くなったが、本来は Weltbild の翻訳語であり、決して一般的な言葉ではなかった。Weltbild の概念が特別なものとして注目されるようになったのは、ハイデガーがそれに独特の解釈を加えたからである。上原は上記講演のなかで、ドイツで刊行されたばかりのハイデガーの論文集『森の道』[10] に収録された「世界像の時代」（1938 年）を取り上げ、この言葉に対するハイデガーの独創的な解釈を次のように紹介している。

「近代の世界像という言葉はおかしい、本来世界像というものを持とうとするようになったのは、近代のことなのであって……古代的な世界像とか、中世的な世界像というものはない」、なぜなら、「認識の対象として、またはそれに働きかける対象として自然像とか人間像というものを意識的に作り上げてゆこうとすること、そうして作り上げた自然像や人間像を前提としてその中で生き、またはそれに働きかけてゆこ

うとすること、そのような意識というものは、まさに近代のもの」だからである（⑦60 頁）。自然や人間を（つまり世界を）対象化するとは、それらを「像」としてとらえることである。それが近代の学問（近代科学）の本質なのである。私たちなりに敷衍すれば、人間はあらかじめ世界に属しているにもかかわらず、近代になって世界を「像」としてとらえるようになり、それによって世界を対象化し、支配する（働きかけて改変する）主体性を手に入れた。近代人は、だれもがこうして作り上げられた「世界像」のなかに自分を据えて、世界に主体的に働きかける存在となっている、というのである。上原はハイデガーのこの考えを、「非常に示唆に富んでいる」（⑦58 頁）と高く評価する[11]。

上原は、教育シンポジウムのなかでもハイデガーに触れ、彼が指摘したような、近代科学による「世界像」の形成という事態は「西欧近代の特産物なのであって……〔世界像の形成は〕日本人は不得手であり、不得手であるのみならず、なんのことかわからない」と指摘する（『なにか』221 － 222 頁）。まして、「静止的な世界像だけでなしに、動いてゆく世界像を描きだして、その世界像のうちに自分自身を適当に位置づけ、適当な仕方で動く、そういう態度に出ることは、少なくとも今までの日本人、大部分の日本人は、非常に不得手であったし、また無関心であった」とも指摘する（『なにか』222―223 頁）。

ここでもうひとつ重要なことは、「世界像」というものが、上原において、描く人間自身を含みこんで「動いてゆく世界像」として捉えられている点である。ここに、ハイデガーの「世界像」と上原の「歴史意識」との交錯と乖離が生じる。

上原は、上記講演のなかで、ハイデガーの「世界像」の考え方を、彼の「歴史意識」にそのまま適用して次のように言う。「近代人は今日……歴史意識というものを持っています、又は持とうとしています。それは古代的、或いは中世的という風なものに対して考えられるところの近代的歴史意識というものとは違うと考えられます。そもそも歴史意識ということ自体が近代的な一つの重要な精神現象であり、文化現象である、こういうふうに私自身は考えているのであります」（⑦58 － 59 頁）。世界を歴史的な形成物として見るということを近代特有のの見方だというのである。それは、言い換えると、「世界像」は不変のものではなく、それに働きかけて生きる人間によって絶えず変化させられるものであるから、それ自体歴史的なものであり、その変化をとらえて絶えず「世界像」を描きなおす必要が生じる。そこに近代的な歴史意識が生れ、近代科学の一部としての近代歴史学が生れた、と考えたのである。つまり上原にとっては、近代において形成された「世界像」は、本来的に「歴史的世界像」（⑦60 頁ほか）とならざるをえなかったのである[12]。

このように見てくると、「日本社会の後進性と日本文化の局地性」について「知的認識」を持つと同時に、「人類協同体の空前の苦悩」と「人類の不幸」を、「実践的に克服すべき問題として意識する」とい

う「歴史的・社会的問題意識」のあり方は、歴史的に言い直せば、「今の日本の世界史的な地位」と、「横にいえば、国際社会における日本の地位」、つまり「そういう今の日本の歴史的・社会的なシチュエーションというものを把握する」ということ、言い換えれば日本国民の立場から「世界像」を描くという行為と、結局は一致するものであることは、明らかであろう。

だから上原はまず、教育の場において、具体的な「世界像」を描く教育を提起したのであり、大学教師には「〔学生に〕世界像を与える使命」があると言ったのである。「与える」といっても、もちろんそれは、あくまで教師自身が「学生に自己の世界像を示すことによって、それをひとつの素材にして、学生自体が世界像をクリエートしてゆく媒介的な仕事」としてであって、特定の世界観を押し付けるものとしてではなかった（『なにか』278 頁）。もっと低年齢の子どもたちに対しても、「上原は同じ態度で臨んだ。最初に自分というものを考えさせ……それから家庭というもの、環境というもの、やがて日本か世界というものを考えさせる」ことは好ましくない、なぜなら、現実にはそれらはすべて「同時に与えられるもの」だから、「〔小学〕一年から六年まで同じことを簡単な構図から複雑な構図へという方法でくりかえす仕方がいい」（『なにか』247 頁）と、拙くとも始めから「世界像」を描かせるという独自の提案をしたのである。

しかし、上原をして教育にさらに大胆に踏み込ませる契機が出現した。1949 年秋ごろから日本国中を揺るがしていた講和問題がそれである。

講和問題 ――「日本国民は自ら好んで安易な道を選んだ」

上原が教育学者宗像誠也との対談『日本人の創造』を行ったのは 1951 年 4 月から 7 月にかけてであった。まさに日本中が、対日講和会議をめぐる論議に大きく揺れていた時期にあたる。対談の直後にサンフランシスコで対日講和条約と日米安保条約が調印されたことを踏まえ、翌年 4 月の条約発効の直前に、もう一度追加の対談を行って、6 月に刊行されたのであった。

注目すべきは、上原がこの教育対談と並行して、講和問題に対する見解や日本国民の講和に対する対応について、立て続けに四篇の時事的論評を発表したことである（51 年 8 月「講和と日本人の立場」〔以下「立場」と略称〕、同年同月「講和問題の本質を見落としてはならない」〔以下「本質」〕、52 年 1 月「教育に最大の期待を」〔以下〔期待〕、52 年 4 月「日本の運命と教育への期待」〔以下「運命」〕）[13]。

条約調印前に発表された二篇は、「講和問題」は条約の方式〔全面講和か単独講和か〕や内容〔非武装中立か再武装＝米国との軍事同盟か〕に尽きるものではなく、講和の本質に沿った解決が全面的に果されるまでは解決されえない、と述べたもの。調印後に発表された二篇は、対日平和条約と日米安全保障条約の締結が日本にもたらした不幸と困難は長く国民を苦しめ、その解決は将来世代の教育に待つしかない、と述べたものである。

1951 年 7 月、英米が講和条約の最終草案と称するものをもって日本および対日交戦 49 か国に講和会議への招請状を送付した[14]。「このような事実が報道せられると、国民の多くは、あの『最終草案』の方式と内容における講和を何か抜きさしならぬもの、動かすことのできぬもの、必ずそのように実現するであろうところのものと思いこむにいたったばかりではなく、動かしてはならないもの、そのように実現されねばならないもののように、考えるに至った」(⑥ 86 － 87 頁)。上記「立場」のなかで、条約草案にたいして諸外国から寄せられた疑念や異論を丁寧に紹介するのも（⑥ 89 － 99 頁)、報道された条約案が、多くの矛盾や問題点を孕む不完全なものに過ぎないことを明らかにして、国民の既成事実化への無抵抗ぶりに警鐘を鳴らすことが目的であったと考えられる[15]。「会議そのものの成否や成りゆき」などたいした問題ではない（⑥ 100 － 101 頁)。なにより重要なことは、講和にたいする「われわれ日本人の基本的立場と根本的態度」を揺るぎなく打ち立てることなのだ。

では上原は、なにをもって「講和問題の本質」と考えていたのか。

上原によれば、それは三点ある。「第一に講和問題は日本と戦争状態に入った全連合国――もとより中国も含めて――との和親を恢復する問題である。そして……和親を恢復するために、太平洋戦争以来の日本の対外行動や態度についてはもとより、中国との関係においては満州事変以来のそれについて峻厳な自己反省を行い、その反省を可視的なかたちで世界の前に表現してゆく、という問題である」(『世界』78 頁)。

「峻厳な自己反省」が「可視的なかたちで世界の前に表現」されること、というのが重要であろう。

「第二に講和問題は、日本の主権を恢復する問題である。他国の主権や領土を侵害したことへのきびしい自省は、そのまま、自国の主権や領土の、完全且つ純粋なかたちにおける恢復への強い主張に通ずる」(『世界』79 頁)。外国軍隊に自国領土を自由に使用させることなどありえないのであある。

「第三に講和問題は、単に太平洋戦争を終結させる問題であるだけではなく、戦争そのものの終結を志向する極東及び世界平和の創造の問題である」。講和条約締結が終わりなのではなく、それを「世界平和の端緒たらしめる」ように行動しなければならない。それが、憲法が日本国民に命じる唯一の安全保障のありかたなのである（⑥ 10 － 11 頁)。

にもかかわらず、ソ連や中国、インドなどとの戦争終結・和親の回復は実現せず、国土の一部（沖縄、小笠原等）は引き続き米国の占領下に置かれ、日本の再軍備や米軍の日本全土への駐留が規定されることになった。平和憲法の規定、その精神に違背するのは明らかであり、上原が「講和問題の本質」と考えた三点はなにひとつ実現しなかったのである。

これで日本は「独立」したといえるのだろうか？　主権を本当に回復したといえるのだろうか？

講和条約がこのようなものになってし

まった理由は明らかである。講和会議を主導した米国にとっては、もともと「講和」は二の次で、当時米国がアジアに築きつつあった反共軍事同盟網のなかに、「独立国」の体裁を整えた日本を組み込むことが、なにより急がれたからである。対日平和条約は、日米安保条約の露払いに過ぎなかったのである。

しかし、何より上原を失望させ苛立たせたのは、このような会議の結果を、多くの国民が歓迎し、これをもって日本は独立＝主権回復を果たし、「講和問題」は終了したと捉えたことである。日本国民における「歴史的・社会的問題意義」の欠如は、ここでも無残なまでに明らかであった。上原は、「本質」のなかで次のように書いている。

「日本の国民は講和そのものによって困難にせられた問題情況の下に、二つの条約の課題の解決のために、悲痛な努力を傾けざるをえず、またその際、容易に架橋しがたい矛盾と断ち切りがたい錯乱とを同時に経験せざるを得なくなるであろう。しかもそれは、自ら好んで安易な道を選んだ国民の、自ら招いた運命というべきものであろう」（「本質」79 － 80 頁）。

これまた、なんと激しい言葉であろうか。実際、上原の生涯を通して、この時期ほど、国民に厳しい目を向けた時期はほかにはないと言ってよい。

「教育に最大の期待を」は、「本質」を『世界』に寄稿した三カ月あまり後に同じく『世界』に寄稿したものである。その内容は、「本質」にもまして激烈な国民批判に満ちている。

彼はまずそこで、今回の条約締結によって「講和問題」はなにひとつ解決されていないどころか、「その解決を一層困難ならしめる事態を新しく作り上げるのに貢献するもの」であったことを確認する（「本質」139 頁）。そしてその「根本的原因」は、「今の日本国民に問題の本質的理解の能力がなく、本質的解決への志向と緊張がなかった」ことにある（同前）。「そのような国民に今述べたような能力や志向や緊張が新しく備わることを期待しうるであろうか。……そのような国民に何ごとかを期待しうるためには、一種の奇蹟の出現か、超人によるところの誘導か、その何れかを想定しなければならないであろう」（同前 140 頁）とまで極言する。

条約の発効が目前に迫った 52 年 4 月に執筆された「期待」での国民批判はこうである。彼は、「講和問題の本質」を「『独立』というものの実質的内容」と「それが日本民族にどう影響するだろうかという実質的作用」という点に絞りこみ、講和条約は日本を「アメリカに密着」させるものであり、「独立」とは名ばかりの「隷従」にほかならなかったと指摘する（⑫ 271 頁）、そして、そのような事態を招いたのは、政治家だけでなく、「広く国民一般」の「政治知性の欠如、主体的な政治意識の貧困」にほかならないと、やはりここでも国民を批判した（⑫ 274 頁）。

同時期に執筆した「日本文化の運命」[16] というエッセイに目を向けると、怒りはさらに激烈となり、「架空の『独立』に伴う再軍備によって平和憲法の精神と条項にそむき、かくて大戦誘発の一素因を作り出し、

しかもそれを平和への道だ、と思いこんでいる」国民、「政治、経済、社会、文化のあらゆる方面で自主性が再獲得せられることをこそ『独立』と呼ぶべきであるのに、そういうことは何もなく、しかもそれを独立だ、と勘違いしている」国民、「錯覚か、しからずんば自己欺瞞かの『独立』」に浮かれている国民、等々、日本国民の独立意識の低さ、「隷従」への無抵抗ぶりに焦点を当てた批判は止まるところを知らない（⑦114 頁）。ここにいたって講和問題の本質は、日本人の独立意識の問題へと引き絞られたといってよい。

しかし上原は、たんに怒り、批判を繰り返すだけではなかった。条約調印後に発表した「期待」と「運命」は、このような事態を招いた日本国民の「政治知性の欠如、主体的な政治意識の貧困」をいかに克服するかについて、具体的な提言を含むものでもあった。この状況のなかで、いま緊急に必要なことは、「その困難な新しい事態のもとに、依然として存続する講和問題……をその本質において解決してゆく」ことを「自己の責任として意識し、その意識において解決に努力する有能な国民を新しく創り上げる教育」を実行することだ」（「期待」139 頁）。しかしその教育は、現在の社会を形成している無能力で問題意識も緊張感もない大人たちに対してのものではない。「期待はむしろ未来の国民を育て上げる教育にかけらるべきであろう」（「期待」140 頁）。（もちろんこれは、上原の怒りのレトリックであって、問題は幼少年たちだけでないことは明らかであろう）。そしてそのためには、幼少年たちに「人類の世界も民族の世界も不動のものとしてかれらに与えられているものではなく、彼ら自身によって再構成せらるべき問題的なものとして横たわっているのであり、またかれら自身によって再構成せられうる素材的なものとして存在しているのであることを教えられねばならぬ」（「期待」140 頁）と言うのである。

ここで私たちは、再び彼の「世界像への教育」を想起してよいだろう。ここで求められていることこそが、日本国民全体に欠如している「歴史的・社会的問題意識」であり、「近代的歴史意識」であり、世界史感覚・世界史感情なのである。講和条約の調印後に日本の青少年が味わうことになる困難に立ち向かうのに必要なのは、なによりも「歴史教育」でなければならないのである。もちろんそれは社会科の一教科としての「歴史」ではなく、「近代国民の精神素質として欠くことのできない歴史意識と歴史的自覚」（「歴史教育の問題点」1952、⑫収録）すなわち世界史の意識を育てる「歴史教育」である。

しかし、1952 年当時、「政府や政党方面」で高まる「歴史教育（国史教育）」への関心は言うまでもなく、「民間諸団体や現場の教師の間」で高まる関心もまた、上原の期待するようなものではなかった。同じ敗戦国であるドイツやオーストリアにおける歴史教育の模索と再建の試みと比較するとき[17]、日本における歴史意識の欠如、その結果としての歴史教育への意識の低さは覆いようのないもので、上原の焦慮は深まるばかりであった（同前）。

このとき上原の選択したのが、高校生の

世界史教科書の編纂に自ら乗り出すという、これまで距離を取ってきた学校教育の現場に直接介入するという行為であったことは、ある意味で皮肉としか言いようがない。しかし、講和条約体制が固まり、危機が長期化して見えにくくなることでより深刻化した状況においては、「歴史教育」へのより直接的で実効性のある介入が必要だと判断されたのである。

上原の狙いは、新教科書を 1956 年に待ち受けている教科書検定に間に合わせることであった。戦後の世界史教科書は従来の東洋史と西洋史の混交にすぎなかった [18]。そして 56 年の改定でも、事態は何ら変わらないことが予想された。そのような貧しい世界史認識を続けていてはならない。上原を中心とした教科書編纂チームは 52 年の盛夏から、56 年のゴールをめざして走り出した。

「世界史像の自主的形成」というプロジェクト

上原が「監修者」となった高校用教科書『高校 世界史』[19] が刊行されたのは 1955 年５月、教科書として現場で使用された期間は、1956 年度から 58 年度の三年間であった。執筆者として、江口朴郎（東京大学助教授、当時。以下同）、太田秀通（東京都立大学助教授）、西嶋定生（東京大学助教授）、野原四郎（中国研究所理事）の四名、そこに協力者として、吉田悟郎（都立広尾高校教諭）と久坂三郎（都立本所高校教諭）の二名が加わった。四人の執筆者は全員が歴史学研究会（歴研）と深い関係にあり、当時の上原と歴研との距離の近さを示すものであろう。執筆者の一人西嶋定生の回想によれば「〔教科書として〕使用された部数はかなり多かった」[20] という。

「最初の編纂企画がはじめてたてられたのは、一九五二年の盛夏のころであった」[21]。ここから、以下に述べるような上原と執筆者四人、協力者二人による厳しい研究会が始まったのである。対日平和条約と日米安全保障条約が発効し（4 月）、それまでの上原の教育論の集大成ともいうべき宗像誠也との対談『日本人の創造』が刊行された（６月）直後のことであった。それまで上原は、日頃から「教科書と辞引はお家のご法度」と口にしていた（⑲ 744 頁）。どちらも、かかわったものが精力を使い果してしまう事業であることを熟知していたからであろう。にもかかわらず上原は、このときに教科書編纂に乗り出したのである。

その経緯について、教科書執筆者の一人江口朴郎は、後年、「そのスタートは多分、吉田悟郎氏や久坂三郎氏などの歴史教育者の側からの発意ではなかったかと思う」と回想している [22]。あるいはそうであったかも知れない。しかしそれだけでは、上原に「お家のご法度」を破らせることはできなかったであろう。最初のきっかけはそうであったかもしれないが、むしろ、それを受けた上原の側に、すでに述べたような強烈な意欲が熟していなければ、とうてい成り立つ話ではなかったはずである。

実際、上原のこの事業にかける覚悟・意欲は熾烈なものであった。先の西嶋定生は、『日本国民の世界史』が刊行された 1960 年 10 月に、「八年間のゼミナール」[23] と題し

た一文を草し、そこで1952年以来の共同作業が、上原のイニシアティヴのもと、どれほどきびしくも充実したものであったかを語っている。少し長いが、臨場感あふれる文章なので、当該部分を全文引用する。

「『まず現在の日本の直面している危機の分析からはじめましょう。』わたくしはこの上原専禄先生の最初の発言を聞いて、率直にいうと『しまった』と感じた。それは世界史の編集をはじめるというのに、そのような心がまえを迂闊にも失念していたからである。最初の編集会議だというので、いくらかは内容構成のことなど準備して出席したわたくしは、このことばによって完全にふりだしに戻らざるをえなかった。そしてその日から、われわれの仮称する『上原ゼミ』が開始された。……世界史を学ぶということはどういう意味をもつことなのか、われわれはどういう立場で世界史を学ぶべきなのか、日本国民の立場から考えるべき世界史というものはどのようなものであるべきなのか、というような根本問題が、現実の社会情勢と結びつき、国際関係と関連して、とめどもなくひろげられていった。そして宿題が与えられて次回にはそれが検討された。一回の会合時間は五－一〇時間〔『日本国民の世界史』「まえがき」では「十数時間も珍しくはなかった」とある〕、年間平均二〇回。必ず七人全員出席。それが八年間続いた。……正直なところ、わたくしはこのゼミで、歴史を学ぶということの厳しさを身をもって学ぶことができた。問題の討論、整理、原稿作成、プリント印刷〔謄写印刷のこと〕、一字一句につき検討、書き直し、ふたたび検討、書き直し、という具合に、わずか数行の段落の本文が最終決定されるまでには数回の『ゼミ』が必要であった」[24]。

おそらくは上原自身にとっても、このような緊密な議論の中で、世界史の教科書を実際に編纂することは、決定的な意味を持ったと思われる。なぜなら、「世界史像の自主的形成」という、歴史研究と歴史教育にまたがる彼の独自の世界史プロジェクトが固まったのは、まさにこの期間を通じてであったからである。

この時期に、彼は、歴史教育について、また歴史教育と歴史研究との関係についても、次々と論考を発表しているが、それらを集約的に表現したものとして、「世界史を学ぶために」と題した一文をまとめ上げた。これは、「上原ゼミ」が始まってから一年あまりたったところで書かれたもので、もともとは、教科書が完成した時に序論として掲載するためのものであった（1953年10月成稿）[25]。高校生に読ませることを前提にした文章であるだけにきわめて平明だが、この時期以降に展開されていく上原世界史の基本的骨格がうかがえる重要な文献である。

このなかで上原が提起した注目すべき論点は二点ある。第一は、世界史を学ぶとはどういうことか、そして、なぜ世界史を学ぶ必要があるのか、ということである。ここで上原が問うているのは、世界史認識一般の必要性ではない。1950年代年代の日本の高校生たちが今の日本社会を生きていくにあたって必要とするであろう具体的な世界史認識とはどういうものなのか、という

ことである。

第二は、そのような問題意識に立つこの教科書が描く世界史像はどのようなものか、ということである。

まず第一の点について見てみよう。

この問題における上原の最大の強調点は、「世界史を学ぶ」とは、学習者（高校生）自身が自分の手で世界史像を描き上げることだ、という点にあった。文章化にまで至らなくとも、自分の「脳裏に人類生活の歩みと在り方をいきいきと構想すること」ができるようになること、「これもまた世界史像の創造的構成と呼ばれてよい」（⑲ 471 頁）。それが「世界史を学ぶこと」だと、上原は言うのである。

「世界史を学ぶ」とは、世界史の教科書や定評ある世界史文献を読み、世界の歴史についての客観的な知識を蓄積することだと考える私たちの常識からすると、これはずいぶん奇妙な考えであろう。しかしそれは、上原が、講和条約後の日本にとってもっとも必要な教育の内容を、次のように考えていたことからくるものであった。すでに引用した文章であるが、再度引用する。「人類の世界も民族の世界も不動のものとしてかれら〔青少年〕に与えられているものではなく、かれら自身によって再構成せらるべき問題的なものとして」、また「再構成せられうる素材的なものとして存在しているのであることを教えられねばならぬ」。つまり、日本の高校生にとっては、世界の過去についての客観的な知識を蓄積することよりも、世界が私たちによる介入と解決を待っている「「問題的なもの」であること、私たちが介入し作り直せる「素材的なもの」であること、それを実感するためにこそ、世界史学習が必須となるのであった（「期待」140 頁）。

しかし、高校生が自分で描いた世界史像では、あまりに不完全かつ恣意的なものになるのではないか。上原はこの疑念をもっともなことだと考える。しかし、このもっともな疑念が、高校生を受動的な知識の受け手にとどめてよい理由にはならないとも考える。なぜなら、彼らにも世界史像を描く基本的条件は過不足なく備わっているからである。なぜそう言えるのか。上原の説明は次のようなものである。

「われわれ自身の眼で人類生活の歩みや在り方を見きわめるというのは、現代の日本人としてのわれわれ自身の生活意識にがっしりと立脚して、過ぎ去った人類生活の歩みや在り方の中から、われわれの生きた生活意識にとって意味があると思考せられ判断せられただけの事件や状態を選び取り、意味があると考えられたその内容との関連にしたがって、一幅の歴史像へと創造的に組み上げてゆくこと」（⑲ 467 頁）だからである。つまり、世界史像というものは、歴史学者によるものであれ、高校生によるものであれ、すべて、記述者の生活意識が要求するところに生まれ、その生活意識を堅固なものにし、また豊かなものにするためのものなのである（⑲ 176 頁）。この点において、歴史学の専門家と非専門家の間の区別は原理的に否定されるであろう。

たたし、この生活意識のおおもとをなす実際問題を、日常卑近の事象とのみ理解し

てはならない。そもそも、それらの「実際問題」はどれも日本一国で解決できる問題ではなく、「ことごとく世界史の問題」であり、「世界史の歩みと在り方のうちで生じてきた問題」であるがゆえに、「それが解決せられるのは世界史の歩みと在り方のうちにおいて」（⑲ 467 － 468 頁）でしかないからである。そこに世界史像の自主的形成という世界史教育の必要性が生れるわけである。

重要なことは、上原が「古今のすべての世界史記述は、このようにして出来たものである」（⑲ 468 頁）と考えていたことである。「そういうと、生活意識の構造や内容が違えば、記述せられた世界史のそれにも違いが起こるではないか、という疑問」（⑲ 468 頁）がなお残るだろう。「まさに、その通りである。世界史記述というものは、これより他にありようはない。世界史記述は、他の歴史記述の場合と同様に、全く生活意識に対応するものである」（⑲ 468 頁）とまで上原は言うのである。

ところで、すでに私たちは、「世界史像の自主的形成」は高校生の世界史教育に止まるものでないことに気付いているのではあるまいか。54 年に入ると、上原は、「日本国民には、『世界史像の自主的形成』と呼んでいい仕事がどうしても必要だ、と考えるのです」（⑧ 63 頁）とか、「国民全体でやってゆかねばならない『世界史像の自主的形成』という大きい仕事」（⑧ 69 頁）、あるいは、それを「国民的習性」（⑬ 10 頁）にまでしなければならないというように、それが日本国民全体の課題であることを確信していたのである。講和条約締結の際にあらわになった日本国民の世界への無知無関心、独立意識の低さに驚き、怒り、一時は、相手にしないとまで突き放した日本国民を、今や「世界史像の自主的形成」の主体として再び設定し直したのである。ここに「国民教育」が、単なるスローガンとしてでなく、「世界史像の自主的形成」という確かな内容を備えた概念として、リアルに立ち上がってきたのである。

「世界史の起点」と時代区分

「世界史を学ぶために」の第二の論点は、第一の論点を踏まえて、ではこの世界史教科書は、どのように描かれているのかという問題である。

この点でまず前提として押さえておくべきは、この世界史教科書は、これ自体が、五人の編纂者による「世界史像の自主的形成」の実践、すなわち、彼らなりの世界史像の試作品であったということである。「この世界史の編者たちは、本書を編述するという仕方で、世界史を学ぼうとした」（⑲ 471 頁）というのは、この教科書は教えるために編纂されたのではなく、編者自身が世界史を学ぶために編纂された、というわけである。高校生に自分たちの世界史を学ぶ姿をひとつのサンプルとして、あるいは「実物教育として提示することで、彼らの参考に供しようとしたのである。

このような執筆姿勢が編者たち全員に共有されていたことはまちがいない。『日本国民の世界史』が刊行された後に行われた執筆者たちによる座談会 (26) のなかで、太

田秀通は次のように述べている。「世界史を我々が構成してみたら、こういうふうになったのだけれど、どうだろうかということで、一つ、みなさんも独自の世界史をつくってみたらどうか、というわけです」。野原四郎も「ある意味でこの本は、相当積極的な問いをだした一つの試みで、試作的な性格を相当もっているから、決してこれは完成しているのではな」い、と述べている。

では上原たちは、この教科書においてどのような「自主的試作」を行ったのであろうか。上原によれば、それは二点あった。

第一は、この教科書が世界史をどの時点から、どの地域から書き起こすことにしたか、という点である。それはまた編者たちが、自分たちの考える「世界史」がいつから始まったかを示すものでもある（世界史の起点）。第二は、この教科書はどのように時代を区分しているか、という点である。

まず「世界史の起点」がなぜ問題になるのか考えてみたい。「世界史」というからには、人類世界の起源や先史の世界がその出発点として想定されていると考えられるであろう。実際にそこから書き起こされてはいない場合でもそうであろう。日本では、1949 年に刊行された最初の高校世界史教科書である『世界史概観』（史学会編）や 1952 年の世界史学習指導要領でも、あるいは 21 世紀の今日の世界史教科書でも、その点は何ら変わらない [27]。

しかし、上原たちにとって、「世界史の起点」は、人類世界の始まりを意味しない。それは、時代区分と同様、世界史像を描く者の問題意識によって決まるものである。人類の起源や先史の社会を扱わないのは、「それらについての研究が充分に成熟していないためでもなければ、それらについて知ろうとする関心がもともとわれわれに欠けているためでもない。……何十万年にわたる人類の悠久な歩みを展望しようとする意図と、現代日本の生々しい生活現実についてその発生経過と歴史的特性を明かにしようとする意図とは、何か別のもの」(⑲ 478 － 479 頁）と思われるからである。

同様に、「世界史の起点」となる地域として、人類文明発祥の地とされるオリエントを選ばず、東洋文明（具体的には中国文明）を選んでいるのだが、その点について次のように説明していることにも注目したい。「それは、世界史を学ぼうとし、世界史を書こうとしている我々日本人の歴史というものが他ならぬ東洋文明圏における歴史であったからである。それは、われわれの祖先たちが造り出した文明というものが中国を中心とした東アジア世界の歴史の動向のうちに形成されたものであるからである」。だから「われわれ日本人の歴史的自覚の確立は、これらの根本事実の認識から始められなければなるまい」(⑲ 483 頁）[28]。つまり、「現代日本の生々しい生活現実についてその発生経過と歴史的特性を明らかに」するための出発点は、その生活現実を問題と考える問題意識の持ち主によって発見されるしかないということである。

時代区分についても同様のことが言える。「世界史の起点」ほど一義的なものと考えられては来なかったが、それでも、世

界史を古代・中世・近代という三つの時代に区分することは、今日に至るまで、日本の世界史教育の抜きがたい骨格として残り続けている。上原はこのような時代区分法は、15･16 世紀のヨーロッパの知識人（ヒューマニスト）の生活意識から生れてきた世界史理解のあり方であって、ヨーロッパ史の理解には役立っても、それを他の地域の歴史の理解に持ち込むことは、便宜的以上の意味を持ち得ないと考えた[29]。

にもかかわらず、日本の歴史教育のように、ヨーロッパ世界以外の文明圏の歴史についても、これらの三時代を想定するのはなぜだろうか。上原は、「そこには、ヒューマニスト以来の歴史把握の方法を、意識的にかまたは無意識的に模倣しようという意味が含まれていることが多い」（⑲ 487 － 488 頁）からだ、と看破し、現代日本人の立場に立った世界史の時代区分を考えるべきだとした。

では、このようなヨーロッパ的な三時代区分法に代わって上原たちはどのような時代区分を法を試みたのだろうか。

現代の生活意識や問題意識を踏まえた時代区分では、世界史の最初の画期は、15 ～ 16 世紀であって、それ以前の「20 ～ 30 世紀においては、東洋文明圏の歴史と西洋文明圏のそれとが独立して平行的に展開して」いた。古代・中世の区分は重要な意味をもたず、むしろこの時代には、世界の諸地域で独立して（ただし決して孤立してではなく）多様な文明が多様に形成・発展させられていたことが重視される。

しかし 15・16 世紀から「ヨーロッパ世界の内部において……近代化が行われ始めたその時期において、ヨーロッパ諸民族を能動因として東洋と西洋との密度の高い交渉が始まり、東洋の西洋への従属を条件として、ヨーロッパ諸民族を中心とする全地球的世界秩序が形成される」（⑲ 490 頁）。思想的に言えば、近代以前の非ヨーロッパ世界が持っていた多様性を専制や野蛮とみなし、世界史をヨーロパ文明を頂点とするヒエラルキーとして表象したのが、17・18 世紀の啓蒙の世界史であり、その後のヘーゲルやランケであった（次節を参照）。

しかし第二次世界大戦後、ヨーロッパを中心とした世界の秩序が次第に動揺し、東洋諸民族が自己の主体性と自主性とを確立し始めた時期となる。「現代日本の生活現実と諸問題とは、ことごとく、世界史の展開におけるこの基本的動きに促されて生じたのだ、といってよかろう」（⑲ 490 頁）。

15・16 世紀を、それまでばらばらだった世界諸地域が一つにまとまり始める画期と捉えるのは、今日から見て、常識的かも知れない[30]。にもかかわらず、今日まで、多くの世界史教科書は、15･16 世紀以前の、多様な諸文明が相対的に独立して存在する世界を、なおも古代や中世という枠組みに引きずられて、奇妙な混乱に陥っているように見えるのである。

この点に関わって、もう一つ興味深いのは、この世界史像では、日本が一貫して東アジア文明世界のなかで自己形成を遂げてきた文明として捉えられていることである。これは、戦後も一向に変わらない日本史の一国史的把握を突き破るものであり、

歴史学界では、60 年代になって初めて遠山茂樹らによって提唱された「東アジアの中の近代日本」というスキームの先蹤をなすものであった[31]。しかし上原にとっては、この問題もまたたんなる学的認識に止まるものではなかった。講和条約によって中国から、またアジアから切り離された日本が、実は紛れもなく東アジア世界の一員として歴史的にも中国文明と切り離すことはできない存在であったことを意味したのである。

《人類史＝ヨーロッパ的世界史像》の外側へ

ところで、以上のような「世界史の起点」論と時代区分論のなかには、実はもう一つ、きわめて興味深い論点が孕まれていた。それは上原の言うところの「人類史」の問題である。すでにみたように、「世界史を学ぶために」のなかでは、上原は、「人類の発生、原初の社会と文化の形式、その後における一体としての人類のいわば運命的な歩み、それらを記述しようとする」(⑲474頁)「人類史」と、「現代日本の生々しい生活現実についてその発生経過と歴史的特性を明かにしようとする……世界史」とは区別されるべきであると指摘していた。このように言えば、確かに両者は別物だが、後者は前者の一部と考えることもできるのではないか。わざわざ両者を区別する意味はどこにあるのだろうか。上原がこの問題に立ち入った考察を加えるのは、「世界史を学ぶために」から一年ののちに執筆された「世界史像の問題」においてである。

「世界史像の問題」は、1954 年 12 月に刊行された『西洋史研究入門』（東京大学出版会）のなかの一つの章として発表された。全体は六章に分れており、第一章は「古代」で、西洋史と称しつつも、オリエントがギリシアの前に置かれている。ギリシア・ローマの地中海文明の源流としてオリエントを重視するというヨーロッパ中心主義がよくうかがえる構成となっている。第二章は「中世」。第三章は近代の「各国史」で、英独仏露米の研究状況が、それぞれの専門家によって紹介される。第四章は「国際関係」と題して、第一大戦以後を扱う現代史である。そのあとに第五章として、編者林健太郎による「現代歴史学の諸問題」が置かれ、その前半ではヨーロッパ史学史を、後半では歴史主義の問題について、マイネッケを中心に紹介している。

「西洋史」の研究入門としては、以上で十分に首尾は整っていると言わざるを得ない。にもかかわらず、その後に上原の力篇「世界史像の問題」が付載されているのはなぜなのか。そもそもなぜこのテーマが選ばれたのか。なぜなら、当時の「世界史」はせいぜい高校の教科目として認知されていたに過ぎず、専門の西洋史研究ではまったく問題にされていなかったからである。さらにこの論文は明らかに「中断」されたものであった[32]。

これらの不自然さの背後に、私たちは、編者たちが充分に制御しえなかった、執筆者（上原）の強引なまでの意志が存在したことを推察することができるであろう。この論文は、タイトルから想定されるような「世界史像」一般の問題を扱ったものでは

ない。当時の上原にとって、講和後の日本人が、世界のなかを確信をもって歩んでゆくためには、自律的な世界史像を持つことが一刻の猶予も許されない差し迫った課題であった。そのために、彼は自らも『高校世界史』の編纂を皮切りに世界史像の試作に取り組んだのだが[33]、同時に、世界史像の豊かな伝統を持つヨーロッパにおいて、どのような世界史像が、どのように形成されてきたのかを具体的かつ系統的に検証することも、ヨーロッパの模倣ではない自分たちの世界史像を形成するためには、必須の作業と思われたはずである。つまり「世界史像の問題」という論文は、まさにこのような切迫した実際的な要請にこたえるべく執筆されたものと考えられるのである。そしてそこに見えてきたのが、これから述べるように、ヨーロッパ的世界史像の典型的な姿ともいうべき「人類史」だったのである。

この論文で上原がまず注目するのは、ヨーロッパにおける世界史像の基盤を築いたと彼の見るところの「キリスト教歴史哲学」のそれである。取り上げられるのは、教父アウグスチヌスの『神国論』、12 世紀の司教フライジングのオットーの『二つの国の年代記』、そして 17 世紀のモ－の司教ボシュエの『普遍史論』である。それぞれの作品が描き出す世界史像の構成原理や特徴について分析を加えたうえで、上原は、これらの世界史像に共通する「思考契機」として以下の点を指摘する。

第一は、人類は「神の統一的意志の所産であるがゆえに……先験的に一体的存在」である（⑧ 36 頁）、という確信である。同時に人類は、「連続する時間を貫ぬいて一つの一般的〔＝普遍的〕意味を担っている、とされる。そしてその「一体的存在性」と「一般的意味」は「連続する時間における、人類動向の過程を通じて実証され・実現する」ものであると考えられている（⑧ 34 頁）。別の角度から言えば、「人類というものはそれに一体としての存在性が付与せられ、その動向が一般的意味を担いはじめたその瞬間から、一体的存在性を実証し終り、一般的意味を実現し終るその瞬間までの、意識的な・また無意識的な動きの主体として、想定されている」。

このことは、「人類というものがある意味の『歴史』において表象されている、というにひとしい」。このようにとらえられた「人類の歴史」（人類史）は、当然「発端と終末」を持つ。両者は「連続する時間で結合され……その中間が『歴史』の場である」（以上、⑧ 33 － 34 頁）。つまり、人類の誕生という「発端」から、人類の一般的目標の達成という「終末」に至るまでが「歴史」ということである。（冷戦終了後、自由民主主義の最終的勝利が実現したとして、「歴史の終わり」が喧伝されたことは記憶に新しい。それは、この思考契機が米欧においていかに根強いものであるかを物語るものであろう）。

以上が、4 世紀から 17 世紀にいたるキリスト教歴史哲学にもとづく界史像形成の「思考契機」として上原が挙げた第一のものである[34]。

もう一つの思考契機は、「連続する時間における人間の動向は、つねに一定の超越的ファクターを動因とした・規則的型式に

よるところの、窮極目標への接近行為である」という見解である。もちろん人類は、その歴史的現実において、「超越的ファクターや規則的型式をつねに自覚しているとは限らない」。それどころか、「人類の歴史的動態は、人類の主観的意識や主体的志向がどのようなものであったとしても、客観的にはそうしたファクターを動因とし、そうした型式にしたがった」ものなのである（以上⑧36頁）。これがキリスト教歴史哲学に基づく世界史像形成の第二の「思考契機」である。神の摂理（あるいは普遍的な価値）が、個々の人間の自由な主体的行為を通して、法則的に実現されていくという、いわば歴史は一つの方向をもって進んでいくという確信であり、進歩史観も解放史観もこの類型に属する。

しかしこれは中世から17世紀までに限られた話ではない。「十八世紀以後における歴史哲学……のうち実に多くのものが、……キリスト教歴史哲学におけるあの特徴的な思考契機のいくつかを、時にはそのほとんどすべてを、継承し、その思考契機をまさしく構成の基本構造として世界史像の新形成を企てているのである」（⑧37頁）。世界史像の外形は変わっても、その構成原理である思考契機は変わらなかったというのである。

上原がここで例証として挙げるのは、ヘルダーの『人類史の哲学のための諸理念』であり、コンドルセーの『人間精神の進歩に関する歴史的図表の素描』であり、ヘーゲルの『世界史の哲学についての講義』であり、さらにマルクスの『経済学批判』の序文である（さらに敗戦後の日本でに盛んに読まれたヤスパースの『歴史の淵源と目標』もそこに含めている）。

しかし、近代の歴史意識の根底にキリスト教の枠組みがあり、いわばその世俗化だという指摘は、すでにヨーロッパにおいてなされていた[35]。しかし、重要なことは、「キリスト教歴史哲学における思考諸契機が世俗化され思考の型に転化したというのは、前者が形骸化され、無意味化されたことを意味するのではな」い。それどころか、「あの思考諸契機が世俗化され、思考の型に化されてゆく過程の内実に立ち入って検討するならば、その過程はあの思考諸契機が新しい生命を獲得し、その存在理由を新しく実証するために経験しなければならなかったメタモルフォーゼに他ならなかった」（⑧38頁）という事実なのである。その結果として、「近代ヨーロッパの歴史哲学が、その歴史的展開の諸時期において、『人間性』〔ヘルダーの場合〕、『生産力』〔マルクスの場合〕のごとき全く新しい思考諸契機を発見し、それを世界史像形成の新しい原理として導入することによって、世界史像の革命をつぎつぎに遂行してきた」ことを、上原は近代のヨーロッパ歴史哲学の「偉大な事実」として認定する。このことは裏返していえば、もはやキリスト教の残滓すらとどめず、それどころか「キリスト教の教義や信仰を意識的に否認した」（⑧33頁）ような近代ヨーロッパの「偉大な」歴史哲学もまた、やはり「人類史」のパターンのひとつであったということを意味するであろう。

しかし上原が上原であるのはここからである。彼は、ヨーロッパ「人類史」のこのような「偉大な」達成をただ受け取るのではなく、さらにその先に進もうとする。すなわち、「新しい歴史哲学が、人類史として安んじてキリスト教歴史哲学の古い思考諸契機のあれこれを世界史像新形成の基本原理や基本構造として受けとっているというその事実……を、どう評価すべきであるか、という問題がある」と言うのである。どういう意味か？

この問題は、ヨーロッパ人の研究者にとっては、キリスト教歴史哲学が十八世紀以降にどのように変容していったかを究明する問題（世俗化の問題）であろう。その限りでは、ヨーロッパ精神の自己革新という、ヨーロッパ内部の問題にすぎない[36]。

しかし現実には、それはキリスト教歴史哲学に基づく世界史像が、ヨーロッパの拡大に応じて 18 ～ 19 世紀の「メタモルフォーゼ」をへて、キリスト教の建て付けを脱して「普遍化」し、世界史そのもの（唯一の世界史）として自己を表象するようになるプロセスであった。それゆえに、19 世紀末にヨーロッパから近代歴史学を移植した日本のような国では、近代歴史学とともに「人類史」的世界史像も入り込み、それがまさに世界史そのものとして受けとられるようになったのである。

上原は、すでに述べたように、あらゆる世界史記述は、その製作者が、自己の生活意識や問題意識に立脚して描き上げた歴史像であることを知っていたので、ヨーロッパ的世界史像に過ぎないものを日本の歴史研究者のように、世界史そのものと思い込むことはなかった。それは近代ヨーロッパ人の生活意識や問題意識を結晶核として形成された世界史像であり、「人間観察〔歴史観察と言っても同じであろう〕の一つのヨーロッパ的方法」と上原は見た。すなわち人類の諸文化がもつ多様な世界史像の諸パターンのなかの一つに過ぎず、彼のように歴史や人間をとらえることの価値を「評価」することは、真偽の問題であるよりは、むしろそのような世界史像の「存在理由」（「存在の権利」）を確認する問題として理解されるべきものと見たのである。

ここに私たちは、教父たちのキリスト教歴史哲学に始まって、啓蒙主義をへて近代科学のメタモルフォーゼにいたるまでの千数百年のなかで確立されたこの世界史像（人類史像）が、ヨーロッパ固有の歴史意識として、「地方化（プロヴィンシアライズ）」されたことを確認しうるだろう。上原は今や「人類史」の外側に立っていると言ってよい。それはしかし、「人類史」の思考契機を否認することでも否定することでもない。むしろ彼は、ヨーロッパの歴史哲学を「地方化」することによって、その外側に広がる広大な非ヨーロッパ世界のもつ多様な世界史像への視野を切り開き、それぞれの世界史像がその「存在理由」（存在の権利）を相互に承認しあう「世界史像の世界史」へと歩を進めていこうとするのである[37]。

以上、「世界史像の問題」において中心論点をなす「人類史」像に焦点を当てて紹介してきたが、しかしこの人類史像の問題は、実はこの論文の本来の構想の一部に過

ぎない。上原はこの論文において、もう二つの論点を準備していた。ひとつは、ヨーロッパ歴史哲学における世界史像のキリスト教的なそれとは別の系譜の問題であり、もうひとつは、歴史哲学に基づく世界史像ではなく、近代歴史科学における世界史像はどういうものであるか、という問題である。しかし先に触れたように、いずれについてもこの論文で展開する時は許されなかった。

ところで、このような論文が、「西洋史研究入門」と題された書物の一章として収録されているのは、やはり奇妙なことと言わざるを得ないだろう。なぜならそれは、この本の編者や執筆者たちがアプリオリな存在としている「歴史」や「西洋史」というものを、ひとつの「立場」に過ぎないと見るものだからである。本書の編者たちがそこまで理解していれば、この論文は掲載を拒絶されたかもしれない。しかし、ヨーロッパ人によるヨーロッパ研究を後追いし、紹介し、そこに少しばかりの補遺や修正を加えることをもって日本の西洋史研究とは考えることのできなかった上原にとって、ヨーロッパ人による歴史研究を、その存立の根底から相対化（地方化）し、世界的な比較可能性の中に置くことこそが、日本人の（あるいは非ヨーロッパ人の）なすべき西洋史研究の第一歩（入門！）であると思われたのは間違いないであろう。

世界史において先駆するアジア・アフリカ

さて、ヨーロッパ的世界史像（人類史）の相対化という問題にかかわって、本節の最後に、もう一つ触れておきたい論点がある。それは、上原に以上のようなヨーロッパ的世界史像の「地方化」を可能にさせたのは、机上の思索の結果だけではなかったということである。すでにこの時期、ヨーロッパ的世界史像が世界史そのものであると僭称することを許さない世界史の現実動向が生じていたのである。世界史の舞台へのアジア・アフリカの登場という事態がそれである。むしろ、第二次大戦後にとりわけ顕著になったそのような動向こそが、上原の思索をここまで導いてきたと考える方が正しいかもしれない。ヨーロッパ的世界史像では、この新事態の意味、その決定的新しさをとらえることはできないと上原は見ていたのである。

「世界史におけるアジア・アフリカ」という問題は60年代にかけて上原の世界史論の重要なモチーフの一つとなるものなので、詳しくはその時期を扱う別稿に譲り、ここでは、「世界史像の問題」と同年に書かれた「世界史における現代のアジア」[38]と、翌1955年のアジア・アフリカ諸国会議（バンドン会議）後に書かれた「世界史の構造と今日のアジア」[39]、さらに両篇を踏まえて、この新事態の意味を、歴史的にも理論的にもさらに深めた「平和的共存」[40]に拠って、上原の論ずるところを追ってみよう。

1954年の四月に、インド･中国の間で「チベット通商交通協定」が結ばれたが、その前文の中に「平和五原則」が初めて現れたことに上原は注目する[41]。それは、難航していたチベット地方とインドとの間の通商

と交通問題を打開するという、局地的な外交課題の中から生み出されてきた外交方針であったが、それが６月の周恩来のインド訪問に際して発表された両首脳の共同声明で、「もしもこれらの原則が各国間においてのみならず、国際関係一般において適用されるなら、それは平和と安全保障にとって、確実な基礎となり、今日存在しているごとき恐怖と憂慮にかわって信頼感が生れるであろう」と、普遍的な外交原則へと拡大しうることが宣言されたのである（「平和的共存」295 頁）。この声明の背景には、当時ジュネーヴで進行中のインドシナ休戦交渉において、中国の調停努力によって休戦が実現されようとしていた現実があった。

ついで同年 10 月には、今度はネルーが「平和五原則の使徒」と自らを任じて、ネパール、ビルマ、ヴェトナムを歴訪したのち北京を訪れた。ネルーは北京で演説し、現代世界の最大の課題である戦争の防止には「平和的解決の道」以外にはないこと、そのような解決方法に基礎を与えたのが、アジアが創り出した「平和五原則」にほかならないことを指摘し、世界戦争の危機を招き寄せるばかりでなすすべを持たない米欧に、平和への道筋を指し示した。

しかしヨーロッパ的世界史像にとらわれている米欧諸国は、このような新しいアジアの動向の意味と可能性をとらえることができず、インドと中国の接近も単に偶然的なもの・周縁的なものと見なすばかりであった（その具体例として、上原は、公正を標榜する『ニューヨーク・タイズム』がネルーの中国訪問に下した否定的見解を取り上げる。⑬ 17 頁）。

それに対して上原は、このようなアジアの新動向のなかに、「現代の全人類的な歴史的課題〔戦争の防止〕の解決のために先駆するアジアの姿」を認めるのである。

「平和的共存」という論文は 1956 年に執筆されたが、その背景には、55 年から 56 年にかけて、フルシチョフらソ連首脳が、外交政策として、「平和共存」を国際舞台で盛んに主張し始めるという事情があった。日本国内でもソ連の「真意」をめぐって喧しい議論が巻き起こっていたが、上述したようなアジアの新動向に注目していた上原にとって、平和的共存という「現代におけるもっとも重要な思想現実」(291 頁)を、たんにソ連の外交政策の問題としか見ることのできない日本人にたいして、この「思想現実」のもつ世界史的な意味を明らかにしなければならないと考えたのである。

もともと「平和共存」の概念は、第 19 回ソ連共産党大会（1952 年）におけるマレンコフ報告に発するものである。それはあくまで、資本主義経済体制と共産主義経済体制との間の「平和的競争」に基づく「共存」であって、理論的には、真の平和は両体制間の「競争」が共産主義の勝利に終わったのちにやってくるとするものであった。その意味では「単数主義的・一元論的価値観にたつもの」（323 頁）であった。

それに対して、上原は、「ソヴェトにおける平和共存論とアジアにおけるそれとは、発想において、構造において、また、世界史の未来像において、同一でもなければ、等質でもない」（293 頁）と言う。ではどう違うのか。

私たちはすでに、ネルーと周恩来が、「平和五原則」はすべての国々が平和的に共存するための一般的外交原則たりうると宣言したことを見た。彼らの考える平和共存は、体制としての共産主義と体制としての資本主義との間に限定されるものではないのである。上原は平和五原則の最重点は「共存」それ自体よりも、「共存」の絶対条件としての相互の独立の確保にあると見ていたが（299 頁）、そのことは、「社会体制や政治形態の違いというものをそのままに肯定する」という、「一種のプリュラリズム（複数主義）」（304 頁）あるいは「多元論的価値観」（305 頁）に立つことを意味した。上原は、それは「諸々の現実を根本的に変更することなく、あるがままに承認することを含意するところの、国際関係に他ならない」（303 頁）とも言う。しかしそれは、現状の固守を意味するものではない。変化が必要と思われる場合でも、それは当該社会の人々が主体となって、自分たちにふさわしい方法とスピードで行われるべきであって、たとえ善意であっても、特定規範を外部から超越的に強制したり煽ったりしてはならない、ということなのである。

平和五原則が切り開いたこのような「平和的共存」の精神に基づいて、1955 年 4 月、アジア・アフリカの全独立国を招待してインドネシアのバンドンで開かれたのがアジア・アフリカ諸国会議であった。ここで、平和五原則を拡充した「平和十原則」が採択され、「平和的共存」の精神は国際社会の規範としての地位を固めることになったのである[42]。

上原に、ヨーロッパ的世界史像（人類史）の外側に出ることを可能にさせた現実動向とは、以上のようなものであった。その点について上原自身は次のように言っている。「思想は思想であって、その説得力には限界がある。ヨーロッパ人およびアメリカ人の世界史像の独善性と独断性を放棄させ、それぞれの民族、それぞれの世界の独自性と固有の価値をみとめた世界史認識の構造を窮極的に承認させるものは、思想そのものでもなければ、哲学そのものでもないだろう。それは一つの新しい歴史的現実でなければならず、特に現代アジアのそれでなければなるまい」（⑬ 23 頁）。そして上原は私たちアジアの人間に向けて次のように言うのである。

「現代アジアの歴史的意義は、ヨーロッパ人やアメリカ人によって構想せられてきた世界史像のわくの中にあって、何ものかをその世界史像につけ加えることではなく、かれらの世界史像の全構造をその根柢においてくつがえし、それに代わる新しい世界史認識の基本構造を築き上げつつあることに存するのではあるまいか」（⑬ 23 頁）。

上原が 60 年代に入ってから、世界史形成の主体としてアジア・アフリカを必須の要素として組み込んだユーラフロアジア（ヨーロッパ・アフリカ・アジア）の世界史像の制作に没頭するようになるのは、まさにこのような課題にこたえるためであったと考えて間違いないであろう。

「落書き的論文」とはなにか――結びに代えて

ここまで、東京商科大学学長を退任して

からの上原の十年間の歩みを学問意識の面からたどってきた。学問職分論から、教育との出会い、講和問題の衝撃を経て、「国民的課題」としての世界史像の自主的形成という実践課題の提示まで、それはまさに「世と喜憂をともにする」学問を創造しようとする努力にほかならなかったと言えるだろう。ほかにも、「民族」や「生活意識」をめぐる問題など、論じ残した重要問題も少なくないが、上原の学問意識を主題とする本稿では、「世界史像の自主的形成」にまでたどり着いたことで、とりあえず「よし」としたいと思う。

しかしここまで読んできた読者は（そんな奇特な人がいればだが）、表題になっている「落書き的論文」については、まだ一言も語られていないことを怪訝に思うのではあるまいか。そこで最後にこの問題に触れて、三回にわたった連載を結ぶることにしたい。

私がこの言葉を取ってきたのは、1956 年 9 月に行われ、雑誌『歴史学研究』の同年 10 月号に掲載された座談会「歴史と人間――とくに現代史の問題を中心に」における上原の発言からである。この座談会は、前年に刊行されてベストセラーとなっていた岩波新書『昭和史』（遠山茂樹・今井清一・藤原彰著）が、評論家の亀井勝一郎から「人間不在の歴史である」と批判されたことをきっかけとして、歴史学において人間を描くとはどういうことか、また多くの人が当事者であり評価の定まらない現代史を、歴史学はいかにとらえることができるのか、等をめぐって論壇の大きな話題となっていたのにたいして、歴史学として正面から向き合おうとして企画されたものであった。上原を含む専門の歴史学者以外に、作家や評論家も加わった大座談会であった[43]。

「落書き的論文」という言葉は、この座談会のちょうど中ほどのあたりに出て来る。従来のマルクス主義的な考え方では現在の日本は捉えられないのではないかという議論の流れの中で、作家の野間宏が、すでに新しい文化の芽は出始めているとして紹介した「らくがき運動」（29 頁）に触発されて上原が提案したものである。「らくがき運動」とは、1954 年の近江絹糸紡績の大争議のあと、労働者の間に自発的に現れた表現運動であって（57 頁）、野間はこの運動のなかに、従来のプロレタリア文学の形式ではとらえられなかった労働者の意識が、形式を破ることで（落書き！）労働者自らによって表現されていることを発見し、注目していたのである。

上原はこの野間の理解を踏まえて、次のように言う。「〔歴史研究者は〕歴史学の方法とか、歴史学研究の理論とか、そういうものに制約されまいと思っても制約される」不自由な存在である。「だから歴史研究者は落書き論文を書くことをけいこしたらどうか。今までの方法、スタイルというものを破って、思い切って自分自身の勝手なことを書いてみる。……こうやりたいと思うことを思う通りにやってみる、ということです」（40 頁）。これを上原は戯れ言として言っているのではない。すでに見てきたように、彼は、日本の歴史学が学問制度として整備され洗練されるにつれて、国民が直

面する実際問題から遠ざかっていくことに強い危機感を抱いていた。「庶民的感覚でいえば、学問などは実はどうでもよいわけです。大事なことは日本の国民が仕合せになっていき、世界が平和になっていく、という結果が出てくればそれでよいのであって、一般法則などというものがあろうがなかろうがどうでもよい」(37 頁) と言うのも、今日の学問（歴史学）が、高度経済成長のなかで、あたかも隆盛に向かっているように見えながら、実は魂（庶民感覚＝生活意識）を喪失していのではないか、ということの指摘なのである。

この座談会のなかで上原は、自分は学者を廃業した、インテリを辞職したと繰り返し述べているが (34 頁など)、それもまた、今日、「落書き」ではない立派な論文を書いていていては、学者としても知識人としてもその本来の責務を果しえないという逆説的な状況に学問が置かれていることの、痛切な自覚の言葉なのである。

考えてみれば、本稿で触れてきた上原の 50 年代の諸論篇は、「学問の職分」論であれ、講和問題の本質」論であれ、「世界史論であれ、いずれをとっても「落書き」――既成の伝統からはみ出したもの――でないものはなかったと言ってよい。そして「世界史像の自主的形成」こそは、「落書き」のすすめの白眉をなすものだったのである。

注

（1）この件について上原の言はこうである「私が学長を免ぜられたのは……学内民主化の『闘争』に私が敗北したからだ、と考えている。この『闘争』を、『学内民主化の』と呼んだのは通念にしたがったもので、私自身の問題意識からすると。投げかけられた小さい事件の処理に即して大学の客観性・公共性・普遍性というものを樹立してゆくべきだ、と考えての行動でそれはあったわけだ。しかしその結果は、閉鎖性・群居性・癒着性の強い同僚たちの反撃による私の惨敗というものであった」(「本を読む・切手を読む」⑰ 288 頁)。

（2）それらは 1949 年後半から 50 年前半に集中的に発表され、ただちに『学問への現代的断想』としてまとめられた（1950 年 10 月刊、弘文堂、⑤収録)。主題は大別して、学問の社会的職分と、人間の生一般にとって持つ学問の意味、のふたつであるが、学問論としてウェーバー等の社会科学方法論の全盛時に、このような学問論を展開したことは、上原における学問論の位相の生々しさを物語るものであろう。

（3）弘文堂編輯部編、弘文堂刊行、1951 年。以下、本書からの引用は（『なにか』116 頁）のように表記する。

（4）東洋書館刊行、1952 年。以後、本書からの引用は、（『創造』23 頁）のように表記する。

（5）丸山眞男「近代日本の知識人」(『後衛の位置から――『現代政治の思想と行動』追補』所収）のなかの言葉（同書 116 頁)。

（6）『アメリカ教育使節団報告書』(村井実訳、講談社学術文庫、1979 年）28 頁。

（7）昭和 22 年度版学習指導要領による。。

（8）昭和 22 年度学習指導要領社会科編（1）の表現。

（9）1950 年 6 月 15 日に、関東学院大学特別講義として行われた講演。『季刊理論』2 月 5 日号に掲載された（⑦収録)。

(10) 創文社版「ハイデガー全集」では第 5 巻『杣径』として収録されている。

(11) ここで注意しなければならないのは、上原の解釈がハイデガー理解として正しいかどうかは本稿においては問題にならない、ということである。重要なことは、上原がハイデガーからなにを読み取ったかである。

(12) ここに、上原の苦心の造語である「世界史像」が誕生する条件が整ったことになるのだが、実際にこの言葉が姿を見せるようになるのはまだ数年先のことである。とりあえずここで確認しておきたいのは、「世界史像」という言葉が、「世界史」と「歴史像」をたんに足し合わせただけの便宜的な造語で

はない、ということである。それは「世界像」という世界把握が、近代においては必然的に歴史的なものにならざるを得ないことを表現したものなのである。この言葉については、著作集の編者上原弘江が、第８巻の「編者あとがき」のなかで上原の次の言葉を紹介している。「『世界史』という言葉はあったよ。『歴史像』という言葉もあった。だけど、『世界史像』という言葉はおとうちゃんがつくったの」（⑧199 頁）。このことから、「世界史像」がたんに「世界史」と「歴史像」の組み合わせと誤解されるかもしれないが、そうではない。

(13)「立場」は 1951 年８月５日成稿、『改造』９月号掲載、⑥収録。「本質」は 51 年８月 15 日成稿、『世界』10 月号掲載。「希望」は 51 年 11 ～ 12 月成稿、『世界』52 年１月号掲載、「運命」は 52 年４月８日成稿、『教育』５月号掲載、⑫収録。「本質」と「希望」からの引用出典は、掲載誌の頁数で示した。

(14) 中国に対しては、台湾の国民党政府に対するのと同様に招請状は送られなかった。米国が、北京の共産党政府を認めなかったからである。日本政府は、講和会議後すぐに、米国の要求に従って台湾とは講和条約を結んだが、北京の中国政府とはその後 20 年間、米国にならって国交を結ばず、中国の国連加盟にも、米国が拒否権を行使し続けたのに同調して、中国の国連加盟に反対し続けた。

(15) そこで紹介されているのは、ソ連、中国（中華人民共和国）、イギリス、フランス、オーストラリア、フィリピン、インドネシア、ビルマ、インドからの疑問や異論である。

(16) 1952 年４月９日成稿、『東京学芸大学新聞』４月 22 日号に掲載された。⑦収録。

(17)「歴史教育の問題点」1952 年 11 月 30 日成稿、⑫収録。

(18) たとえば『世界史概観』（東京大学文学部内財団法人史学会編、昭和 24 年４月 15 日）参照。山川出版社の復刻版による。

(19) 実教出版株式会社刊行、1955 年５月 25 日発行。

(20) 西嶋定生「世界史像について」『岩波講座 世界歴史』月報３、岩波書店、1997 年。しかし 1956 年に学習指導要領の改訂が行われ、この教科書は 59 年度からは使用できないことになった。そこで使用が始まった後ただちに改訂の作業にとりかかり、1957 年の検定に提出したが、不合格となった。そこで、指摘された「誤記・誤植の類を徹底的に訂正して」、翌年、再度検定に提出したが、再び不合格となった。検定官から説明された不合格理由に納得できない執筆者たちは、検定意見にそってさらに改訂することは断念し、もう一度全体を見直したうえで、一般書として刊行することにした。これが 1960 年 10 月に岩波書店から出版された上原専禄編『日本国民の世界史』である。

(21)『日本国民の世界史』「まえがき」iii 頁。

(22)「教科書問題にそくして上原専禄先生を憶う」「歴史評論」1982 年５月号。

(23)『図書』（岩波書店）1960 年 10 月号。

(24) この点について、前掲江口朴郎の回想ではこうなっている。「筆者の四人は、文字通りそれぞれ自分の手で執筆し、数回にわたって合宿を重ね、そして言わば、上原先生の前で素稿を読み上げ、先生の批判あるいはコメントを受けながら進められたものである」。これならば上原の役割は普通の意味での「監修者」であるが、西嶋の証言とは大きく食い違う。西嶋の方を採るべきであろう。

(25) これは未発表。著作集⑲に初めて収録された。そこでは「世界史を学ぶために その一――『高校世界史』序説」と題されている。実際に教科書に収録されたものとはいくつかの点で異なるが、ここで扱う論点については、異同はほとんどないので、ここでは上原のオリジナルによる。

(26)「世界史像形成のすすめ――『日本国民の世界史』をめぐって」『歴史評論』1961 年４月号。

(27)「1952 年学習指導要領」の「参考内容」として例示された「世界史」編成項目（文科省 HP より）、および山川出版社の『詳説 世界史』など参照。

(28) このように考えた時、現代の私たちの世界史教科書が、今なお、文明世界の記述をオリエント地域から始めていることの意味を反省せざるを得ない。それはヨーロッパ中心主義の残滓だからである。

(29) この点については、拙稿「上原専禄における現代史と世界史――昭和史論争をめぐる或る座談会から」（『思想の科学研究会年報』第三号、2021 年）において詳しく検討した。

(30) 上原は 1960 年代の初頭には、モンゴル帝国に世界史成立の最初の契機を見出すようになる。これによって、「世界史の起点」もまた 13 世紀にまで遡らされることになる。この点については、60 年の新

安保条約体制成立以後をあつかう別稿で触れる予定である。

(31) 古代史については、中国史の西嶋定生も東アジア世界論を展開するが、遠山も西嶋も上原から強い示唆を受けていたことは明らかである。

(32) この論文の末尾に、上原は次のような一文を添えている。「第一段に関する私の吟味〔人類史＝キリスト教歴史哲学の世界史像〕は意図に反して粗略をきわめたものになってしまったが、その程度の密度をもって第二〔キリスト教とは別の歴史哲学の世界史像〕、第三の課題〔近代歴史科学の世界史像〕に立ち向かうことも、今の私には困難な事情がある。いつか、それらの残された課題を私なりに処理したい、と願っている」(461 頁)。これは著作集では省かれている。

(33) この時期のものとしては、たとえば「ヨーロッパ史の諸時代」(1954 年 11 月 10 日成稿、⑧収録)があるが、むしろこれ以後の上原の作品は、すべて世界史像の試作であったと考えるべきであろう。

(34) 上原は「思考契機」として実は三つ挙げているのだが、ここではその第一と第二を合わせて第一の契機とした。上原自身も言うように、第二のものは「第一の点にすでに含まれている」(⑧ 34 頁) からである。

(35) Karl Löwith, *Weltgeschichte und Heilsgeschehen* がその代表的なものであろう (未見)。戦前に書かれたもののようであるが、1949 年に *Meaning in History* というタイトルで、University of Chicago Press から英訳が出版された。「世界史像の問題」の執筆にあたって、上原がこの著作を参考にしたことはほぼ間違いないと思われる (おそらく英訳版で)。しかし以下に見るように、彼はレーヴィットの見解を踏まえつつ、さらに先へ行こうとした。(邦訳は『世界史と救済史』創文社、1964 年)。

(36)「世俗化」の問題が重要でないということではない。それどころか、この問題は 21 世紀の今日においても、最も重要な世界史的課題の一つであることは間違いない。しかしこの問題を適切に処理するためには、米欧の「世俗化」の議論に行く前に、考えるべきことがある、というのが、上原の考えである。なぜなら、米欧の「世俗化」の議論の前提は「人類史」の世界史像だからである。

(37) 私はここで、保苅実の『ラディカル・オーラルヒストリ――オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』(岩波現代文庫、2018 年。原著は 2004 年) を想起している。保苅がここで使用した「歴史実践」の概念は、彼があらゆる民族の世界史像の「存在理由」＝「存在の権利」の問題に気づいていた例外的な研究者であったことを示している。

(38) 初出は『中央公論』1955 年 1 月号。⑬収録。

(39) 1955 年 11 月 29 日成稿。初出、国際日本協会編『アジア政治経済年鑑』(1956 年) 所収。⑬収録。

(40) 成稿日不明。初出「岩波講座 現代思想」第一巻『現代の思想的状況』(1956 年 11 月 25 日刊行) 所収。著作集には未収録。

(41) 平和五原則が最初に発表された「チベット通商交通協定」の前文では、次のように表現されている。「一、相手国の領土保全と主権とに対する相互尊重　二、相互の不侵略　三、相互の内政不干渉　四、平等と互恵　五、平和的共存」。

(42) 上原は、会議の共同コミュニケのなかで平和十原則が掲げられたことを評価する一方で、「より厳しく検討すると」、それは簡潔な五原則を希釈化したものではないか、との疑念をぬぐえない、とする。コミュニケの第五項として、「国連憲章による単独または集団的に自国を防衛する諸権利の尊重」が挿入されたからである。ここで言われているのは憲章 51 条のことで、武力行使禁止原則を謳う国連憲章の例外として、軍事同盟による武力行使を認めたものであり、米国が滑り込ませた条項であった (豊下楢彦『集団的自衛権とは何か』岩波新書、2007 年)。バンドン会議には、米国によって反共軍事同盟に組み込まれた国々も参加していたので、彼らに配慮したのであるが、上原はそれを平和五原則からの後退と見たのである。

(43)『歴史学研究』1956 年 10 月号。出席者は、家永三郎、上原専禄、江口朴郎、木下順二、遠山茂樹、野間宏、松本新八郎、司会として松島栄一、金沢誠。この座談会からの引用は、『歴史学研究』の頁数で示す。

(こじま　きよし　学問史・思想史研究)

聞き書きという可能性

川田文子『赤瓦の家－朝鮮から来た従軍慰安婦』を読む

廣野 量子

1．はじめに

暴力を受け、傷つき、痛みを抱えたままに、生きる／てきたことをどうしたら肯定することができるのだろうか。もちろん誰だって傷つきたくないし、傷つけたくもない。あらかじめ防げるのであれば、防いだほうがいいに決まっている。だが、抗いようもなく暴力の渦に巻き込まれてしまうということは、確かにある。そのとき、暴力によって傷ついた経験をいかに癒すか、あるいは傷をいかに回復させるかという問いかけは可能だが、それは癒したという終着点を、あるいは回復という目的地を前提とした問いかけである。

癒しや回復という地点が見通せないような傷を抱え込んだ人間が、それでも生きのびようとしたとき、その痕跡を丁寧に拾い上げていくこと、そこに議論の足がかりをつかむことはできないのだろうか。わたしが研究の対象としているのは、日本軍「慰安婦」だった人の経験であり、その経験をどのように捉えればよいのかということである。いま現在を生きるわたし／たちは、どうしたら日本軍「慰安婦」としての経験を抱え持つ人びとの生きてきた軌跡を捉えることができ、そこから議論の場を開いてゆけるのだろうか。

日本軍「慰安婦」問題は、1990 年前後の一連の流れのなかで本格的に争点化したと言われている。「日本人慰安婦」に関する言説分析をした木下直子は、日本軍「慰安婦」問題を「旧日本軍の『慰安婦』制度が問題視され、日本政府が対応を求められている問題」と定義づけたうえで、その背景として、韓国をはじめとする諸外国の被害者や被害者支援の運動体、各国政府から真相究明や謝罪・補償を求められたこと、そして被害者の過去を知り衝撃を受けた人の情動が揺さぶられ、そうした人びとが支援運動や言論活動に関わるようになったことを指摘している [(1)]。

争点化からおよそ 30 年経った現在においても、日本政府に対する「解決」を求める動きは続いているが、この 30 年間で議論は複雑化し、混迷してきていると言わざるをえないだろう。その一因として、いわゆる歴史修正主義の影響力は大きいと思われる。歴史修正主義的な言説に抗うなかで、たとえば「性奴隷」か「売春婦」か、「強制」か「自由意志」かといった極端な二項対立の議論が繰り広げられ、日本軍「慰安婦」問題にかかわる議論自体が、ある種の「闘い」としての様相を帯びるようになった [(2)]。

またそれは、この議論に加わろうとする者の立場をめぐる枠組みとしても機能して

きたように思われる。わたし自身、「あなたは日本軍『慰安婦』問題の『解決』を求めているのか、それとも歴史修正主義者なのか」という直接的／間接的な質問を何度も受けてきた。この質問自体が、まるで踏み絵のように感じられ、何を言うことが「正しい」のか分からず、言い淀むことがあった。日本軍「慰安婦」だった人の経験、あるいはそれにかかわる言葉を発することに恐れを抱くようになった。

しかし、恐れを抱きながらも考えることをやめられなかったのは、この議論の枠組み自体への違和感を拭い去ることができなかったからだ[3]。わたしが本当に知りたかったのは、自らの痛みを語り出した人に対して自分がどう応え、関係していけるのか。それを「連帯」とひとまず呼ぶのであれば、どう「連帯」していけるのか。そして、今なお形を変えながらも平時戦時問わずに性暴力が連綿と続いていることや、その被害の語りにくさ／聞かれにくさをどう考えたらよいのか、といったことである。とするならば、やはり議論の場は開かれなければならない。では、どのようにしたら開いていけるのだろうか。

2.『赤瓦の家』という聞き書き

そこでまず注目してみようと考えたのが、聞き書きである。ここで言う「聞き書き」は、大畑凛の「言葉によって新たな集団性をうみだそうとする行為」として定義したい。大畑は「聞きとった語りをいかに書き表すのか」という書き方に力点を置き、聞きとった音声を一言一句違わず書き起こしたものは聞き書きではないと主張している。聞き書きのまず何よりの特異性は、「聞くことと書くことのあいだに不可避に入り込む間隙を聞き手＝書き手が自覚すること」にあるという[4]。

> 語られなかったこと、沈黙をも含めて語りを聞きとり、記憶のなかで何度も反芻し対話する過程で聞き書きの言葉はうまれる。他者の声によって語られた言葉を、じぶんの言葉として書き直すこと。聞き書きのなかの間隙が求めるのは文字通りの翻訳行為であり、託された言葉を別の誰かが書き継ぐという意味では、言葉によって新たな集団性をうみだそうとする行為にもなりうる。

聞き手（書き手）は自らが聞き、感じとったことを「記憶のなかで何度も反芻し対話する」。その工程を踏むかぎり、聞いたことをそのままの形で取り出し記すことは不可能である。なぜなら、聞き手（書き手）は無機質な録音機などではなく、聞き手（書き手）という一存在として、その語りに関与しており、また聞き手（書き手）は聞いた語りに対して自分の感情や感覚、あるいは自身の経験を、ときに重ねながら理解していくはずだからである。それゆえ、聞き書きとして記される経験は、聞き手（書き手）という「翻訳」者がいる時点ですでに集団的であるともいえる。さらに聞き書きを読むという点に則して言えば、読み手がいる限り、聞き書きの集団性は不断に増殖していく。経験が聞かれ、書かれ、読まれ

るという反復する動作のなかから、日本軍「慰安婦」だった人の経験をどのように考えていけるだろうか。

本稿では、1987 年に発表された川田文子（1943-2023）の『赤瓦の家—朝鮮から来た従軍慰安婦』（以下、『赤瓦の家』[5]）をとり上げ、本作が聞き書きであるということに着眼点を置く。そのうえで、どのようにしたら日本軍「慰安婦」だった人の経験にまつわる議論を開かれたものにしていけるか。この問いのための試論として、まずは考えていきたい。

以下、簡単に『赤瓦の家』という作品の背景について述べる。

『赤瓦の家』は、沖縄の渡嘉敷島で日本軍「慰安婦」にさせられた、朝鮮半島出身の裴奉奇（1914-1991）[6] の半生についての聞き書きである。川田は、1977 年から約５年間かけて[7]沖縄で暮らす裴のもとを訪ね、語りを聞き、録音し、さらに５年の月日を経て『赤瓦の家』として上梓した。

川田が裴のもとを訪ねた直接的なきっかけは、高知出身の友人に「30 年ぶり『自由』を手に　不幸な過去を考慮　法務省　特別在留を許可」と題する高知新聞の切り抜きを見せられ、慄然としたという体験にある[8]。その後、川田は沖縄で暮らす裴を 2、3 か月に一度のペースで訪ね、一度の滞在で１日おきに５日間ほど話を聞いた。だいたい午後１時頃に訪ね、夕方５時か６時頃まで裴の語る言葉にひたすら耳を傾け続けた。１日につき、120 分のカセットテープを２本くらい使用し、東京に戻ってから 10 本程度のテープおこしを大学ノートに手書きしたのだという。多くの手間と時間を要するこの作業を川田は好んでいた。それは、音声を一言一言ノートに書き留めていく過程で、「一度聞いただけではインプットできなかったことがらが、自分の心身に入ってきた」からである[9]。

また、川田は裴の話を聞くさいに、年代順に聞くことも、質問らしい質問をすることもなかった[10]。ある人の語りを聞くとき、必ずしも年代順に聞くことが語り手にとっての記憶の連なり方と一致するわけではないこと、そして、聞き手からは一見バラバラに思える事柄でも語り手にとってはすべてがつながっていることがあるということを、川田は理解していた。だからこそ、川田は「語り手がひとつの記憶をたぐりよせる、その記憶と語り手の中ではつながっている記憶をたぐる、その接ぎ穂を折らずに聞く」という聞き方を第一にしていた[11]。

もともと『赤瓦の家』は中間報告のつもりで発表されている。というのも、川田は「この記事（高知新聞の切り抜き記事：引用者）に記された女性の人生をきっちり記録すれば朝鮮と日本、ヤマトと沖縄の近代史が辿れると考えていた」が、「奉奇さんと対座した時、そのような観念的、図式的な姿勢ではこの女性の人生を記録することは決してできないことを痛感した」からだ[12]。これは時間が解決できる問題ではないと判断した川田はいったん中間報告として発表したものの、「奉奇さんの凄絶な人生は記録しきれていない」と回顧している[13]。

次節では、自分が体験したわけでない苦しみや痛みを、自分の言葉として書くとい

う聞き書きの実践は、単なる「代弁」ではないということを述べる。先取りして言ってしまえば、聞き書きは、「当事者の証言を代弁する」ものとして在るのではなく、「当事者」とは別様の「当事者」になっていくプロセスとして在るのではないか。

3. 経験を聞く書くことと、「当事者」性

佐藤泉は、石牟礼道子『苦海浄土』を取りあげながら、聞き書きとは「ヌエのごとき存在である」と述べる[14]。それは、「証言の事実性や客観性を最優先の価値とする」従来の実証主義的歴史学とも[15]、政治と切り離す形で「純粋に芸術的である」ことを求める文学の芸術的価値観[16]とも異なるものとして存在している。どちらのカテゴリーからも排除されがちな聞き書きは、翻って、「それら（従来の実証主義的歴史学と文学の芸術的価値観：引用者）の秩序が暗黙のうちにどのような主体を規範化することで成り立っているのかを告知する存在になりかわる」[17]、すなわち、どちらのカテゴリーにおいても「個人」という主体が前提として成り立っている、と佐藤は主張する。

本来、語ることも聞くことも、それ単体としては独りでに始まることも終わることもできない行為である。佐藤によれば、聞き書きという一語に込められているのは「異種混淆の主体、重層する時空[18]である」[19]。聞き書きの場で生じているのは、２人の異なる個人の一方が語り、他方が聞き、書くというものではなく、両者の「絡み合い、もつれ合」[20]いであると言える。換言すれば、「語り手も聞き手も、ともに互いを前提とし、互いを支えとして存在している」[21]場において編まれる言葉の姿は、個人の言葉であるというよりも、新たな集団性を帯びた言葉として存在していると言えないだろうか。

さて、ここで聞き書きにおける主体と「当事者」という言葉を重ね合わせながら考えてみたい。日本軍「慰安婦」問題において「当事者」という言葉は、日本軍「慰安婦」としての被害を受けた「当事者」という意味で使われてきた。日本軍「慰安婦」問題に関わる支援運動や言論活動は、木下が述べたように、「被害者の過去を知り衝撃を受けた人の情動が揺さぶられ」[22]たことがきっかけで展開されたものであった。そこでは、「当事者」の立場を尊重し、その声に真摯に耳を傾けるという態度が取られた。もちろんそれはその声を聞き受ける者として求められるべき態度であるが、同時に「当事者」とそれ以外の間に境界線を引くことにもなる。「当事者」以外を「非当事者」として括ることは、「当事者」の他者化にもつながりうるのではないか。

鄭柚鎮は、「女性のためのアジア平和国民基金」（以下、国民基金）をめぐる議論において、賛否いずれの立場においても被害者の声がそれぞれの主張の拠りどころとされてきたことを批判する[23]。「被害者が国民基金に反対するから運動をやる（反対するのが正しい）」あるいは「国民基金を受け取る被害者がいる。だから基金を進めるのは正しい」というように。いずれにせよ、それぞれの立場の正しさを証明する根

拠として被害者の言葉は解釈されてきた。

だが、ここで問われるべきだったのは被害者／「当事者」の言葉をいかに「正しく」代弁をするのかではなく、他者としてその言葉を聞こうとする者の、聞き方それ自体である。それゆえ、国民基金をめぐる議論は、「正しく聞きとり正しく代弁したという記述主体のポジションを問題化する契機」を表面化し、また「根拠とみなされ、たえず議論の外におかれてしまう目にあった者たちの、出番の意味を想起させる起点」にもなった[24]。つまり、「当事者」の声を尊重するという態度が、ひとつの側面として、議論のなかで「当事者」を他者化させていく効果を生んでしまったということである。

鄭は一例として国民基金をめぐる議論を取り上げたが、こうした「〇〇被害者」「そうではない被害者」として被害者を分類し、さらにそれぞれが感じた痛みを比較し解釈するという構図[25]は国民基金の議論だけにとどまらない。もちろん、日本軍「慰安婦」問題を「解決」しようと精力的な活動をつづけてきた人がいることも、精緻な研究を積みあげてきた人も知っている。ここで、これまでの運動や研究の蓄積を否定したいのではない。だが、「当事者」という位置を重視し、発された言葉を「当事者の証言」として刻印していくことは、むしろ「当事者」を自分とは異なる他者として定義し、動かし難い立場としての「当事者」をつくり出してきたともいえるのではないか。

直野章子は、広島と長崎の原爆の被爆者に「遭うたもんにしかわからん」と言わしめる言語秩序を検討し、「当事者」と被爆体験が自動的に結びつけられることによって引かれる、被爆者とそうでない者との間の境界線にいかなる権力作用が働いているかを問いかける[26]。直野によれば、体験と「当事者」性を直結させることは、「〇〇問題」と呼ばれる領域に対峙するのは「当事者」であるというゲットー化の論[27]につながる恐れがあるという。

> 当事者がいかにして「当事者」として徴づけられたのかを問うこともなく、無徴のマジョリティが観客の位置に留まりながら「当事者」を舞台に上げて「問題」との格闘を上演するように強要しつづけるならば、それはなんと暴力的なことだろうか。（中略）「当事者性」を尊重することは抑圧と紙一重でもあるのだ[28]。

ここで必要なのは「当事者」性を確定済みのものとしてとらえるのではなく、「〇〇問題」がいかに「問題」として分節化され、「当事者」がいかにして「当事者」にされていったのかのプロセスを問うことである。その工程をとばして「〇〇問題」の「当事者」としての語りを聞こうとする態度はきわめて暴力的な作用をもたらす。「当事者」への共感に基づく連帯は、一方で「〇〇問題」を生み出す力と対峙するためには不可欠ではあるが、他方で「当事者」をつくり出す権力構造を問えなくさせる[29]。

ここでこれまでの議論を整理しよう。佐藤が述べるように、聞き書きの主体が「異種混淆の主体」であるのなら、聞き書きと

いう実践から見えてくるのは、個人として揺るぎのない「当事者」ではなく、「当事者」と「当事者」ではないとされてきた者たちの境界が揺らぎ、関係が変容し、集団性を獲得していく有り様である。「当事者」の声を聞き、そのことによって「情動が揺さぶられ」、その経験を自らの言葉として紡ぎ出したとき、それは単に「代弁」しようとしているのではなく、新しい別様の「当事者」になっていくプロセスとしてあるのではないだろうか。

4.『赤瓦の家』を読む

川田が「膨大な分量のテープおこしした語りのなかから引用したくなるのは、語り手の独特の表現、真意がよく表れている箇所だ」[30] と述べているように、『赤瓦の家』は部分的に裴の語りが直接引用され、その前後を補うように、川田が自らの言葉として筆を走らせる。

ここで『赤瓦の家』の構成について簡潔に触れておく。まず、「ポンギさんの放浪」と題された第１章では、幼少期から川田と出会うまでの裴の半生が川田によって綴られている。つづく第２章で照射されるのは、裴本人ではなく、裴のいた渡嘉敷島の住人や元日本兵を含む裴のすぐ傍にいた人びとや、裴とともに釜山を発った女性たちが送られた座間味島や阿嘉島の人びとである。第３章は、幼少期に裴がいた場所や関わりのあった人びとを調べるために韓国を訪ねた川田の訪問記である。本節でとりあげるのは、第１章の特に裴が渡嘉敷島に到着してから、戦争を経るまでの描写に限定する。

沖縄守備軍の第 32 軍は、当初、慶良間諸島は地形が険しく飛行場に適する平地もなかったため、米軍が沖縄本島に先立って慶良間諸島に上陸することはないだろうと予測していた。そこで、米軍の上陸地を沖縄本島西海岸と想定し、米艦艇を背後から狙う目的で座間味島に海上挺進第一戦隊を、阿嘉・慶留間島に第二戦隊を、渡嘉敷島に第三戦隊を配置した[31]。渡嘉敷島では、1944 年 9 月 9 日に、まずは鈴木少佐を隊長とする第三基地隊の約 1,000 人が上陸し、基地隊はすぐに陣地構築に取りかかり、住民も動員した形で陣地構築作業が開始された。同年 9 月 20 日には、赤松大尉を隊長とする海上挺進第三戦隊 104 人が渡嘉敷と阿波連に上陸し、駐屯した。海上挺身隊は、いわば海上特攻隊である。赤松隊は特攻舟艇、通称マルレを 100 隻保有し、米軍艦船を背後から襲撃し、撃沈させるという重要な任務を担当していた[32]。

裴を含む７人の女性たちは、那覇から物資を運ぶために使われていた徴用漁船に乗ってまずは座間味島に向かい、一泊した後渡嘉敷島へ向かった。裴たちは最初、茅葺きの小さな民家に入れられた。娯楽と呼べるようなものが何ひとつなかった将兵らは、７人の女性の来島を歓迎し、すぐに「慰安所」が用意された。茅葺きの民家にはほんの数日だけ滞在し、すぐに渡嘉敷港のそばにある大きな赤瓦の家に移された。ここは元々仲村渠（なかんだかり）一家の住居だったが、軍の接収によって半ば強制的に住人が追い出され、業者に提供された。裴は赤瓦の家ではアキコという源氏名で呼ばれていた。他の

6名もそれぞれ、キクマル、ハルコ、スズラン、カズコ、ミッちゃん、アイコという名前で呼ばれていた[33]。

『赤瓦の家』に特徴的なのは、住民との接点を書き留めていた点や、日本軍「慰安婦」としての経験に焦点化するというよりかは、渡嘉敷島の戦場としての様相を裴の動きとともに書き留めている点にある。たとえば、自宅を接収された仲村渠家の長女の初子さんは、家畜小屋に残していた豚や山羊に毎朝晩餌やりに行っていた。そのうち、初子さんは同じ年頃の朝鮮の女性たちと言葉を交わすようになった。初子さんがもんぺ姿で家畜に餌をやっていると、スズランが手招きをし、「こんな若い人がお化粧もしないで、汚いものばかりいじってかわいそう……」と言い、化粧をしてくれたという[34]。また、家畜小屋の一部を改装した部屋をあてがわれたキクマルは、初子さんが小屋へ行くたびに「ああ、うるさい。この山羊うるさい。どこかへ連れて行ってよ」と太い声で訴えていた[35]。ハルコの場合は、隣家の新里家によく遊びにいき、新里好枝さんと話しながら「おばさんと話をしていると、うちのお母さんを思い出すのよ」と、時折、涙ぐんでいたという[36]。

島に初めて軍隊が入り、なおかつ村のはずれの一角で朝鮮から来た女性たちが性を「売買」する状況は、島の人から見れば異様な光景として映ったであろうし、事実、島の女子青年団員らは「慰安所」の設置に反対していた。そうした島民の反応がある一方で、初子さんや好枝さんのように、朝鮮から来た女性たちと言葉を交わしたり、目を真っ赤に腫らして泣く姿が目撃されていたことを[37]、川田は『赤瓦の家』のなかにしっかりと書き込んでいる。

他方、裴に関しては、1945年の正月に軍からもらった泡盛を裴を含む7人で飲み、酔っ払い、皆親きょうだいや子どもを想って泣き出すなか、一人だけ泣くことがなかったことを記している。川田は当時の裴について、「残してきた子を偲び、親きょうだいを偲んで泣いている朋輩を、酒をあおりながら心虚ろに見ていた」、「翌朝、こみあげてくる苦い胃液を、しらじらと噛みしめた」[38]と書き留めている。

川田がこのように書き留めたのには訳がある。裴は1914年に母親の実家がある龍谷里（ヨンゴンニ）という村で生まれ、その隣村である忠清南道礼山郡新禮院（シルレウォン）で幼少期を過ごした。父の崔冨基（チェプギ）、母の李貞順（イジョンスン）のもとに生まれ、2つ上の姉の奉先（ポンソン）と3つ年下の弟龍甲（ヨンガプ）、そして裴の3人きょうだいだった。ところが裴が幼い頃、祖母の死後に母親が突然姿を消し、姉は他家に奉公に出され、弟もどこかに預けられた。裴はいったん父親の実家に引き取られたが、その後ミンミョヌリ[39]として4度他家に出され、2度の結婚生活からも逃げ出している。つまるところ、どんなに酔ったところで、裴には偲ぶべき家族などの存在が思い当たらなかったのだ。だからこそ川田は上のような表現でもって、裴が朝鮮から沖縄にやってきた同胞のなかにいても、孤独感のような感情を持っていたことを仄めかしているのではないか。

裴にとっての本当の“戦争”が始まった

の は 1945 年 3 月 23 日 だ。3 月 20 日、21 日はマルレの秘匿壕が完成した暁の休養日だったが、21 日の午後、そして翌 22 日の午前 10 時頃と午後 2 時半頃に B29 が飛来した。23 日の朝 10 時頃、空襲警報が出された。間もなく赤瓦の家の真上を大きな飛行機が覆いかぶさり、けたたましい音が響き渡った。咄嗟に風呂場に逃げ込んだ裴は、落下物に襲われ、外へ無我夢中で駆け出した。裴は、川岸の茂みに身を隠し、雨のように降り注いでくる機銃弾に肝を冷やしながら、飛行機が遠ざかった隙になんとか壕へ逃げ込んだ。夕方には緊急の医務室と化していた国民学校に避難をした。

24 日も朝から空襲がつづいていた。丸 2 日、爆撃を浴びた渡嘉敷島では山が黒煙をあげ、集落の方の民家は火を噴いていた。翌 25 日からは空襲に加えて、艦砲射撃も加わった。裴は軍から山へ逃げるように言われたが、地理がよくわからずに無我夢中であちこちを逃げ惑った。

> 五日間、何も食べない。ひもじいさね。スズランが黒砂糖持っておった。これ、少しずつくれて、嘗めたらちょっと腹の足しになるさね。それでひもじいのもひもじいが、一番水が飲みたい。昼間は飛行機が飛ぶし、船からも艦砲やるでしょ。艦砲射撃する時は頭がチリチリするんですよ。こわかったよ、本当に。暗くなったら、艦砲も飛行機も来ないさね。ホーヤホヤ、下に降りて、山からチョンチョン水が流れる。これ、飲むのよ。部落に近い所だから小こい畑があるさ。葉っぱも何も見えないけど、掘ったら小指くらいの芋が出てくる。これ掘って、一つ二つ食べても、ちょっと腹の足しになるね [40]。

食べられるものは何でも口にし、なんとか爆撃を逃れようとする裴の姿が浮かび上がる。川田は、裴が次第に「飛行機がくる方角が死角になり、そこに身をひそませれば危険率は低くなる」ということを覚えていったことも記している [41]。こうした描写から明らかなのは、当然のことながら、裴は日本軍「慰安婦」としての被害経験がある以前に、戦争という状況を生きていたという事実である。そこでは、いかに今日を生きのびるのかが差し迫った問題としてあった。いかに爆撃を逃れ、飢えを凌ぐのか。

川田が、戦局悪化を辿る状況下での裴を書き留めていったことは、裴の受けた「被害」がいったい何だったのかと問いかける。つまり、日本軍「慰安婦」被害者として裴奉奇という人物は知られるが、川田が『赤瓦の家』で裴の半生をつづるとき、その「被害」はとても日本軍「慰安婦」としての被害には包摂しきれないのだ。大日本帝国の植民地統治下の朝鮮で生きるということ、朝鮮のなかでも移動を強いられたこと [42]、戦禍を生きのびたこと、戦後沖縄で生きたこと、こうした個々の状況のなかで生きのびるということを、いったいどのように考えていけばよいのだろうか。もちろん、植民地支配／戦争／ジェンダー化された暴力といった用語や概念を使うことはできるが、聞き書きという形で紡れた本作からは、

そうした概念では説明し尽くせないような経験の領域を垣間見れるだろう。

5. おわりに

川田が裴に出会ったのは、裴が日本軍「慰安婦」だったからである。だが、裴の口から語られるのは「飲み屋より兵隊の方がいいよ[43]」という言葉だった。日本軍「慰安婦」だったということを入り口にしながらも、川田は裴の語るひとつひとつの話に耳を傾けながら、裴の苦しみを想像し、裴の経験が一体何だったのかということを繰り返し問いかけ、想像し、なんとか書き留めようとしている。

裴の語りを聞くうちに、川田は繰り返し同じエピソードが語られたり、同じようなつぶやきが何度も吐露されていることに気づいた。そのひとつが「私みたいに苦労した人間はいないんですよ[44]」というつぶやきだった。川田はこの「苦労」という単語に、裴が経てきたいくつもの経験を重ね合わせて考えようとしている。そして、それらの経験とつぶやきから、「裴さんは連続する極限状況で生きていた[45]」のだという理解に至っている。

裴の「連続する極限状況」に対する、このような川田の理解は、川田自身の経験と交差する地点があったということを仄めかしているのではないか。本稿では川田の来歴について詳述できなかったが、川田の育った環境は貧しく、自らを「資本主義の発展途上で村から放り出されたルンペン・プロレタリアートの二世[46]」と称する。だからこそ、女性の「性売買」や女工や奉公に出されることが他人事ではなく、自分の階級と身近な出来事として受け止められていた。それゆえに、川田は裴の「私みたいに苦労した人間はいないんですよ」というたった一言のつぶやきから、その意味や込められた想いを具体的に想像しようとしたのではないだろうか。

川田は「自分が経験した貧困と日本の植民地支配下で裴さんが経験した貧困は次元が異なることを痛感した[47]」と述べるが、それは「日本の植民地支配下で裴さんが経験した貧困」の理解の土台には「自分が経験した貧困」が経験として蓄積されていることを意味するのではないか。つまり、ここには、自分自身の経験とは異なりつつも、自分の経験の延長線上で他者の経験を理解しようとする川田の姿勢が読み取れる。これを、本稿第 2 節で述べたように、聞き書きを通して川田が裴とは別様の「当事者」になっていく過程として読むことはできないだろうか。裴の経験として聞いていたはずのものが、聞き書くプロセスにおいて、さまざまな感情や身体感覚をともなって川田に入り込んでくる。文字起こし作業について語った川田の「一度聞いただけではインプットできなかったことがらが、語られた一語一語をノートに書き留めることで自分の心身に入ってきた」という言葉は、その作業のなかで裴の経験が川田の経験と共振していた可能性を示す。

以上見てきたように、川田の『赤瓦の家』という聞き書きから見えてくるのは、単に日本軍「慰安婦」だった人物としてのみ裴奉奇を捉えている限りは見えてこないであ

ろう、裴が生きのびてきた些細な痕跡である。もしも日本軍「慰安婦」として裴の経験を掴もうとするならば、まずもって日本軍「慰安婦」としてどのような経験があり、また具体的な被害の状況や、「慰安所」での待遇がどうであったかが重視されるであろう。もちろん、日本軍「慰安婦」だったと事実を抜きにしても、裴の経験を捉えることは不可能だが、裴の半生は、日本軍「慰安婦」として説明するだけでは包摂することができないものとしてある。

川田は「奉奇さんの凄絶な人生は記録しきれていない」としつつも、その「凄絶」さがどれだけのものなのかを、自らとの関係において考え、想像し、自分の言葉として書き留めた。翻って、『赤瓦の家』という聞き書きを＜わたし＞が読むということは、描かれる裴の経験を、書き手である川田の言葉とともに読むということであり、そこでは再度、読みながら自分自身の感情や経験、記憶が、直接的にではないにせよ、揺れ動き、ときに重なるという体験であった。これは、読むという行為を通して、裴の経験の一端を目撃した＜わたし＞が、裴や川田とは別様の仕方で「当事者」になっていくプロセスでもあったのかもしれない。

注

(1) 木下直子（2017）『「慰安婦」問題の言説空間—日本人「慰安婦」の不可視化と現前』勉誠出版、2 頁。

(2) たとえば、2019 年に劇場公開された映画『主戦場』は、まさにタイトルの通り、歴史修正主義の論者と、（敢えていうなら）「解決」派の論者とが対極に置かれ、それぞれの主張を闘わせる場として機能していたように思われる。ここで言いたいのは、映画そのものの良し悪しではなく、映画の構成が「闘い」の場になっていたということである。

(3) 日本政府による謝罪や賠償の必要性や重要性は理解しているが、同時にそれは具体的に誰から誰に対する謝罪や賠償なのだろうか。また、亡くなった人やそもそも日本軍「慰安婦」として認知されてこなかった人、あるいは認知されていたにもかかわらず脇に置かれてきた人のことは、どのように考えていけばいいのだろう。わたしが日本軍「慰安婦」問題に出会ったのは、まずは日韓の歴史認識問題としてであったが、当然のことながら、「日韓」あるいは「日朝」という枠組みではこの問題の広がりを十分にとらえることは不可能である。当初は以上のような疑問から「日本人慰安婦」という属性に着目していたが、日本軍「慰安婦」にかかわる議論空間において、この属性に着目すること自体、対「歴史修正主義」という観点から緊張感をともなうことでもあった。

(4) 大畑凛（2022）「（研究手帖）翻訳としての聞き書き」『現代思想』50（3）、238 頁。

(5)『赤瓦の家』は筑摩書房から 1987 年に発表された後、1994 年には文庫化され、2020 年には新版として高文研から出版された。

(6) 裴奉奇の姓の漢字表記は「襄」の字が採用されている場合もあるが、本稿では川田文子の表記に倣い、「裴」の字で統一している。

(7) 川田文子（2016）「沖縄の軍事的性暴力—証言と陣中日誌（2）」神奈川大学評論編集専門委員会編『神奈川大学評論』（83）、166 頁。

(8) 川田文子（2017）「70 余年を経た複郭陣地跡と『慰安婦』の写真」中央大学商学研究会『商学論纂』58（5・6）、63 頁。

(9) 川田文子（2020）「第 3 章　語るにまかせて」金富子・小野沢あかね編『性暴力被害を聴く—「慰安婦」から現代の性搾取へ』岩波書店、105-106 頁。

(10) 川田は裴と出会う前から、日本各地の女性たちからその人生譚を聞き、文章にしていくことを生業にしており、質問事項をあらかじめ用意しないというスタンスはそのときから一貫している。川田は「消費社会の文字文化圏で暮らす者が用意する質問事項は、生活に必要なあらゆる物を五感を駆使して作り出し、生きてきた女性には的外れになると感じていた」のだという。同上、106 頁。

(11) 同上。

(12) 川田（2017)、前掲論文、63 頁。
(13) 同上。
(14) 佐藤泉（2013)「『苦海浄土』のさまざまな「栄耀栄華」—「聞き書」の主体とはだれであるのか」『敍説 . 3：文学批評』(9)、24-39 頁。
(15) 同上、37 頁。
(16) 同上、29 頁。
(17) 同上、38 頁。
(18) 佐藤によれば、語る者と聞く者はその場に同時に存在するが、それを文字に残した場合、書いた者がその場にいなくとも、究極的に言えば亡くなっていても、それを読む者がいる限り意味作用をつづける。その意味で「聞き書が巻き込む時間性は、その現在を分有する異なる言語行為のズレに関わる」(37 頁）という。つまり、聞き書きにおける「重層する時空」とは、過去、現在、未来という時間軸が行ったり来たりすること、あるいはそういう時間軸が交わっていくことでもあるのかもしれない。ここには、聞き手と書き手に加えて、読み手の存在が大きく関わる。
(19) 同上、37 頁。
(20) 同上、38 頁。
(21) 同上。
(22) 木下、前掲書、2 頁。
(23) 鄭柚鎮（2014)「『慰安婦』問題とポストコロニアル状況—『女性のためのアジア平和国民基金』をめぐる論争を中心に」『人権問題研究』14、137-148 頁。
(24) 同上、146 頁。
(25)「日本人慰安婦」の存在が日本軍「慰安婦」問題の議論において二の次、三の次とされてきたのは否めない。そこには、ナショナリティによって「被害者」が分類され、誰の痛みが最も重いのか、誰の声にまず最初に耳を傾けるべきかという前提が設定されてきたように思う。
(26) 直野章子（2008)「被爆を語る言葉と痛みの共振」『日本学報』(27)、69-92 頁。
(27) たとえば、「在日の問題」として設定されたとき、日本人の問題であるにもかかわらず、「当事者」としての「在日」の人が問題に対峙すべきであると理解される。直野曰く、ゲットー化の論に至る過程には「単にマジョリティが問題に無関心であるということだけではなく、『当事者』を祀り崇めるという態度も含まれる」のだという。
(28) 直野（2008)、前掲論文、72 頁。
(29) 同上、72-73 頁。
(30) 川田（2020)、前掲書、118 頁。
(31) 渡嘉敷村史編集委員会（1990)「第５章　沖縄戦と渡嘉敷」『渡嘉敷村史　通史編』渡嘉敷村役場、194-195 頁。
(32) 沖縄県教育委員会編［1974］(1989)『沖縄県史 10 沖縄戦記録 2（復刻版)』国書刊行会、685-686 頁。
(33) 裴の記憶では、数え年でキクマルが 28 歳、ハルコとカズコが 23 歳、スズランが 20 歳、ミッちゃんとアイコは 19 歳だったが、後に川田が聞いた仲村渠初子さんや元伍長の記憶では年齢も名前も裴の記憶とは若干のズレがある。本稿では、川田が裴の記憶に基づいて記していることから、裴の述べた名前と年齢を採用する。
(34) 川田（1987)、前掲書、69 頁。
(35) 同上。
(36) 同上。
(37) 同上、63 頁。
(38) 同上、70 頁。
(39) 朝鮮ではかつて貧しい家の幼い女性がゆとりのある家に預けられ、子守りや家の仕事の手伝いをしながら、成長したらその家の息子と結婚させられるという風習があったという。女性の生家にとっては口減らしとなり、男性の家にとっては無給の労働力を得つつ、早くから嫁（ミョヌリ）への教育ができる等の利点があった（川田 1987)。
(40) 同上、82 頁。
(41) 同上、84 頁。
(42) 本稿では、『赤瓦の家』のなかで裴が渡嘉敷島にいたときの状況に絞って考察しているため触れていないが、裴が朝鮮で暮らしていたときのことや戦後沖縄で暮らしていたときのことは、また稿を改めて考えてみたい。
(43) 同上、105 頁。
(44) 川田（2020)、前掲書、107 頁。
(45) 同上。
(46) 川田文子（1979)『つい昨日の女たち』冬樹社、233 頁。
(47) 川田（2020)、前掲書、105 頁。

（ひろの りょうこ 同志社大学大学院博士後期課程）

沖縄を語る言葉の「切断線」を引き直す

―「不可能な発話」を感知することからはじまる歴史叙述に向けて―[1]

木谷 彰宏

第１節　はじめに

沖縄の地で様々な人と出会い、様々なことを見聞きし学ぶ中で、「誰の何をどのようにみれば沖縄の戦後の歴史を明らかにしたことになるのか」という問いが絶えず頭の片隅にあり続けている。沖縄戦後史研究についていえば、これまで「基地の島」として支配するアメリカ統治と、それに抵抗する復帰運動史に代表されるような社会運動史という基軸のもとで様々な研究がなされてきた。しかしながら、沖縄に移り住み、市町村史の編纂に関わったり、そこで暮らす人びとと関わったりする中で、そのような基軸では捉えることのできない沖縄の戦後史の叙述があるのではないかと考えるようになった。

冒頭の問いに関わって、例えば、沖縄戦・沖縄戦後史研究者である謝花直美が指摘するように、「既存の概念の枠組みに沿って人々の経験を書く方法は、時にその人にとって大きな意味をもつものを後景に押しやっている」[2]としたら、誰の何をどのようにみるか、が問われなければならないのではないか。この点について、冨山一郎は、社会や歴史を語る際、様々な社会集団や所属を前提にするが、記述の主語となる社会的なカテゴリー自体が問われている[3]として、「所有格のついた言葉や経験を当たり前のように受け入れている限り、予め排除され、話していても話しているとはみなされない者たちが存在し続けることになる」[4]と指摘している。これらの指摘は、歴史の主体を予め前提としない形での沖縄の歴史叙述が可能であるのかが、沖縄の戦後史研究の課題であることを含意している。

では、なぜ、発話[5]していても発話しているとみなされない人びとがいるのだろうか。またそれは、いったいどのような人びとなのか。それら人びとの何を、どのようにみれば、それら人びとの発話を捉えることができうるのか。これらを考えていくことは、歴史叙述の後景に押しやられた人びとの〈生〉を捉える手がかりとなり、ひいては、歴史研究における史資料とその取り扱い方を考えることにもなるのではないか。

そこで本稿では、これらの問いを、ジュディス・バトラーが『触発する言葉』[6]の中で論じた「切断線 (bar)」[7]をもとに考えていく。「切断線」に着目するのは、「切断線」が発話可能な言説の社会的範囲を示す概念

で、言語的秩序の問題を検討しているからである。本稿では、「切断線」から沖縄戦と地続きの占領下の沖縄の歴史を語る言葉の在り処を探っていく。そのうえで、後景に押しやられた人びとの姿を感知できるよう、幾重にも重なった沖縄を語る言葉の「切断線」を引き直すとはいったいどのようなことなのかについて考えたい。

本稿の構成としては、第 2 節において、「切断線」の外にある、発話とみなされない発話について、バトラーの論考をもとに「検閲」と主体の形成との関連から検討する。第 3 節では、「切断線」の外で語っていても語っているとみなされていない人びととはいったいどのような状況に置かれた人びとであるのかを、バトラーの「不安定性」の概念をもとに検討する。そのうえで、沖縄戦とそれに続く占領下の沖縄において、これまで歴史叙述の後景に追いやられてきた人びとの〈生〉を考えていきたい。さらに、第 4 節では、近年、歴史研究の分野で注目されているエゴ・ドキュメント研究を踏まえ、これまで歴史研究の対象とみなされることが少なかった一人称の文書を「切断線」の観点から考察していく。第 5 節では、「切断線」の外にある、語っているとみなされない発話を、どのようにすれば感知できるのかについて検討していく。最後に、第 6 節では、これまで述べたことをまとめるとともに、今後の課題について言及する。

第 2 節　「切断線」

バトラーは、「検閲」と主体の形成とを関係づけて「切断線」を論述している。ここでは、「切断線」とは何かを示す前に、語ってほしくない発話を抑制しようとする「検閲」が、主体の形成や主体の発話とどのような関係にあるのかについてみていきたい。

一般的に「検閲」というと、法によって語られた、ふるまいも含めた発話の是非を判定し、発話不可能だと判定されたものを規制するものだとされるが、バトラーは、語られる前に発話を排除しようとする「検閲」の働きに注目する。これは法による「明白な検閲」に先立つ形で行われ、しかも暗黙のうちになされる[(8)]。この「暗黙の検閲」は、発話そのものではなく、発話しようとする人を発話主体として承認するかどうかを判定する。そのためこの「検閲」は、発話しようとする人に発話可能性を取りしきっている規範を受け入れることを要求する。発話しようとする人は、その規範を受け入れると語ることができるが、その規範を受け入れないと発話主体として認められず、発話可能領域の外に追いやられてしまう。そのような状態において、発話しようとする人がたとえ話したとしても、発話したとは認められなくなり、自らの生存可能性が脅かされるリスクを負うことになる。その危険性から逃れるには、自ら発話可能性を取りしきっている規範を身体化[(9)]し、発話主体としての自己の地位を示すことによって、生存可能な主体になるのである[(10)]。

このように、「検閲」は何かを奪うだけでなく、「明白かつ暗黙の規範にしたがって主体を生産」しようとする[(11)]。また、そ

のような「主体の生産が発話の規則と深く関わって」おり、「主体の生産」が「主体の発話を規制することによってだけでなく、発話可能な言説の社会領域を規定することによってもなされる」[12]のだ。その意味で「検閲」は、主体の形成や発話可能領域を規定する「生産的で形成的な権力」[13]であり、「ある種の市民を生存可能にし、他の市民を生存不可能とするために機能」[14]するものでもあると、バトラーは指摘している。

上記のことをバトラーは、精神分析学で用いられる「予めの排除 (foreclosure)」という概念[15]で説明している。先に述べたように、発話の可能性が危険に晒されていると主体が感知する時、みえない「検閲」として「予めの排除」が作動する[16]という。これは、「法にもとづく審判によるものではなく、審判の存在しない排除」[17]であるが、「主体を立ち上げ、形作り、主体の生存可能領域としての発話可能な言説の境界を定めている」[18]のである。バトラーは、「予めの排除」によって定められた発話可能な領域の境界を「切断線」と呼んだ。発話可能領域内にいる人びとは、発話を取りしきっている規範を受け入れるという「言語行為をつうじてみずからの位置を示すこと」で「主体の解体という脅威」から守られることになる[19]。一方で、発話可能領域外にいる人びとは、話しているのに話していないようにみなされる。仮にそのような状況の中で発話したとしても、その発話は割り引かれ[20]、ただの身体動作[21]にすぎないと捉えられてしまうのだ。

このように、言説空間は「予めの排除」によって引かれた「切断線」によって、発話可能な領域とそうでない領域とに分けられる。前者の領域での発話は、許可される発話である。発話は、「予めの排除」によって生産されることで、発話たりえる。これに対し、後者の領域の発話は許可されない発話である。そこでの声や身体動作は、非社会的な「不可能な発話」[22]だとされ、社会的な認識の対象となる発話ではないとみなされてしまうのだ。

では、いったいどのようにすれば、「不可能な発話」を認識することができるのだろうか。バトラーは、「切断線のまえにあるのは、その『まえ』を想像することによってのみ知りうる」[23]という。ただ、発話可能領域外の状況を発話可能領域の文法で説明したとしても、その説明はあくまで、「切断線」の内の発話で「切断線」の「まえ」を説明したに過ぎない[24]ので、「予めの排除」によって引かれた「切断線」に対抗するには、その境界を引き直すことしかない[25]、とバトラーは指摘する。その指摘は、「切断線」を「まえ」に引き直した時、語っていないとみなされた人びとの発話を、歴史を語る言葉として捉えることができるかもしれないという可能性を示している。このことについては、第５節で改めて検討する。

第３節　「不安定性」の中に生きる人びと

本節では、発話可能領域外、バトラーの言葉を借りれば、「切断線」の「まえ」にいる人びととは、いったいどのような人びとであるのか、について考えていく。

先に述べたように「予めの排除」は、「ある種の市民を生存可能とし、他の市民を生存不可能とするために機能」し、「切断線」は生存可能領域の境界でもあった。人は「予めの排除」によって自らが危険に晒されていると感じた時、排除されることを回避し、生存可能となるために、その言語的秩序を受け入れた。

このような生存と発話可能性の連関について、バトラーは、①同性愛者が軍隊に入る時の自己否定や改悛、②奴隷から市民に解放されるために自らの労働力を売り渡さなければならない状況、③家庭内の性暴力を法廷で訴えるために、女性が自らの性的純潔さを示すことという三つを例示している[26]。

では、生存可能領域外にいた人びととは、いったいどのような人びとなのだろうか。バトラーは、現在の新自由主義経済社会の中で、多様な住民がますます「『不安定化（precarization）』と呼ばれるものに服従する生政治的状況の直中」[27]にいて、「私たちは住民の一部が使い捨て可能であるという考えを持った新しい手法に直面している」[28]として、人びとの生をフーコーの生権力[29]から導出した「不安定性（precarity）」という概念から検討している。「不安定性」とは、女性、クィア、トランスジェンダーの人びと、貧者、身体障害者、無国籍者、また宗教的、人種的マイノリティといった、置かれている社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きている人びとを集合させた概念[30]で、社会的・経済的なサポートのネットワークの欠陥によって苦しみ、不当な扱いや暴力や死に不平等にさらされるようになる状況をさす[31]。

さらにバトラーは、「不安定性」の中にいる人びとの間にも格差があるとして、〈あやうさ〉と〈悲観可能性〉という言葉を用いてその格差を説明している[32]。それは、あらゆる生がさらされている「あやうさ（precariousness）」が嘆きうる存在として政治的に承認される「不安定存在（precarity）」としての〈生〉と、いかに傷つき、失われても決して承認されることのない〈生〉である[33]。「あやうさ」の中の二つの〈生〉の格差は、主体として政治的な承認を受けているかどうかによる。「あやうい」とみなされ守られるべき存在であるか、失われても承認されることのない使い捨て可能な存在としての〈生〉であるかである。つまり、「不安定性」の中にあって、生存可能領域（発話可能領域でもある）にある〈生〉は嘆かれうる〈生〉であり、生存可能領域外（発話可能領域外）にある〈生〉は使い捨て可能とみなされた〈生〉であるといえる。

この使い捨ての〈生〉を統治性の観点から論じたのが、カメルーンの哲学者・歴史学者のアシール・ム（ン）ベンベである。フーコーのバイオパワー（生かせしめる権力 power to let live）[34]の考えを発展させ、ムベンベはネクロパワー（死なせしめる権力 power to let die）[35]を提示した。ムベンベは、近代社会には、バイオパワーという規律化され統制されたプロセスに並行して、ネクロパワーによって組織化された領域が隣り合わせに存在してきたことを指摘

した[36]。後期植民地占領は、生政治（生権力による政治）的な要素と死政治（死権力による政治）とが組み合わさったものであり、このネクロパワーの最も完成された形態の支配がみられるのがパレスチナであるという[37]。さらにムベンベは、この新しく特異な社会的存在としての「死－世界（death-worlds）」では、膨大な数の人が「生ける屍＝（living dead）」とされる〈生〉の状態に置かれるようになったと述べている[38]。この「生ける屍」としての〈生〉こそが、使い捨ての〈生〉にほかならない。ネクロポリティクスの中で、失われても承認されることのない、「使い捨ててもよい」とみなされた〈生〉は、発話主体としてはみなされず、発話可能性の領域外にいるとみなされている人びとということになる。

では、「一切の生命と生命が生きるための条件を抹殺」[39]した沖縄戦と地続きの占領下において、その時代を生きた人びとの生をどのようにみれるのだろうか。このことに関して謝花は、「人々の生存の場から歴史を書いていくという視点」[40]から、占領当初の沖縄島の食糧事情を次のように詳述している[41]。それによると、沖縄島での戦闘が終わった1945年７月の段階では収容地域の食糧の８割は、使役によって収穫された芋などで賄うことができた[42]が、収容される者が急増するにつれ、米軍は輸入食糧を配給するようになった。配給される食糧は無料で、「無償配給」と呼ばれたが、それは基地の拡大や維持のための労働と結びついた配給[43]で、労働という生産能力と就労機会の程度によって、食糧配給の量が左右されるものでもあった。配給できる食糧が不足し、やがて通貨復活に伴い「無償配給」が停止されると、労働という生産能力の違いによって、食糧を確保できる者とそうでない者とを分ける政治が現れた[44]。復興に向かう動きの中で、収容地区での労働から排除された者は、労働を求めて別の地域への移動を余儀なくされた。一方、軍労働から排除されただけでなく、移動が出来ない人びと（女性や高齢者など）は取り残され、沖縄戦前に北部に移動させられた那覇市民の中には、配給が途切れたために多くの餓死者が出たという[45]。

このように、占領下の沖縄における食糧配給からは、沖縄島に生きた人びとが、生きていくことにおいて「不安定」な状況におかれていたことがわかる。このうち、占領下において復興に寄与し得る労働力になるとみなされた者は、「あやうく、嘆きうる存在」として政治的に承認された〈生〉であり、その点において米軍の占領統治は、フーコーのいう「生かせしめる権力」による統治としてみることができる。一方、生きていくことにおいて「不安定」な状況におかれていた点では、先の人びとと食糧配給から取り残された人びとは同じであるが、生産能力が低い水準にあっても、生きていくのが「あやうい」存在であるとは政治的にみなされず、救済されることさえなかった。たとえそのように取り残された人びとが死に至ることがあったとしても、それは犯罪行為が問われる死としてみなされることはないのだ。それらの人びとの生は、「使い捨ててもよい」とみなされた〈生〉

ではなかったか。その点において米軍による沖縄の占領統治は、ムベンベのいうネクロパワー（死なせしめる権力）による統治であったといえる。

これらの研究を踏まえると、沖縄戦とそれに続く占領において、発話可能領域外で生存可能性が脅かされた人びと、言い換えれば、「切断線」の「まえ」にいた人びとの〈生〉が浮かび上がってくる。

第４節　エゴ・ドキュメント

本節では、歴史研究における発話可能領域外にいた人びとの姿が捉えられる史資料についてみていく。発話可能領域外にいる人びとは、語っていたとしても語っていないとみなされた人びとである。ただ、そのような人びとが何も残さなかったのかといえば、必ずしもそうとはいえない。エゴ・ドキュメント（ego-document）と呼ばれる文書には、発話可能領域外にいたとされる人びとが語った言葉や、その人びとの声や情動、身体動作を捉えることのできるものがある。

エゴ・ドキュメントは近年、歴史研究の分野で注目され、様々な一人称の文書が考察の対象となっている。エゴ・ドキュメントとは、「一人称」で書かれた資料を示す用語で、「自己文書」や「私文書」などが試訳としてあてられている[46]。エゴ・ドキュメントに該当するといわれる史資料には、書簡・手紙、日記、回想録、自叙伝、オーラルヒストリー、医療検診記録、警察調書、法廷尋問、スクラップブック、写真・アルバム、歌、映画、自画像、さらに落書きなど、が含まれる[47]。長谷川貴彦は、エゴ・ドキュメントを歴史研究に用いる利点を、次のように指摘している。エゴ・ドキュメントは、「語り手の視点から外側の世界をみる手段であり、記憶・感情・欲望・知識・意味などの主観性を考察しうる利点」をもち、「個人という主体の構築において、背後に複雑な社会的・歴史的過程が存在すること」[48]を明らかにする。つまり、エゴ・ドキュメントは〈エゴ＝個人〉の語りを通して主体の形成や変容、主体と社会とのかかわりが見えてくるドキュメント[49]であると言い換えることができる。人びとの経験を語りの対象とするエゴ・ドキュメントからは、言葉を紡ぎ出していった人びとの姿が浮かび上がり、その内なる葛藤やよみがえった記憶に、隠された感情の動きを探る手がかり[50]をえることができるという。これまで歴史研究の対象とみなされていなかった文書を読み解くエゴ・ドキュメント研究は、歴史研究の新たな地平を切り拓いていくことのできる可能性を秘めている。

ここで大黒俊二の、中世イタリアにおける「限界リテラシー（marginal literacy）」[51]ともいえる状況にある人を対象としたエゴ・ドキュメント研究をみていきたい。「限界リテラシー」とは、「読む」「書く」という行為のリテラシーが十分に備わっていない状態のことで、この研究ではとりわけ、「書く」ことがおぼつかない人が書いた手紙を分析している。「限界リテラシー」層にいた人は、いったいどのような人で、どのような状況におかれていたのだろうか。そして、その人はなぜドキュメントを残し

たのか。

大黒によると、ドキュメントを残した人の多くは「書字を奪われていただけでなく、書字を生み出す動機すらも奪われていた」[52] 女性であったが、その女性たちにはドキュメントを残す動機があった。それは「内面の奥深い個人的な動機であり、‥女性たちが負わされていた諸価値－家族、子ども、夫－の喪失から生じたものであった」[53] という。ある女性にとっては、それは夫や息子の不在という喪失であり、また別のある人にとっては、それは親子の絆の喪失であった[54]。この危機的な状況の中で、それらの人びとは、「文字を獲得し、声による話し言葉の世界から書き言葉の世界に足を踏み入れ」[55]、自らの思いを「紙の上に固着」[56] させていったのである。ある人は、出奔した夫との連絡のため[57] に、また、ある人は商用で外地に滞在する夫と連絡をとるため[58] に、手紙を書いた。自らを虐待した者を相続から排除するために遺言書を書いた[59] 人もいた。このように、自らの〈生〉を脅かす「限界状況（marginal situation）」[60] に陥った時、人びとはその状況からの脱却を目指して、ペンを手にして書き始めたのである。

さらにもう一つ、大黒の論考である、魔女裁判に関わるエゴ・ドキュメント研究[61] をみてみよう。先ほどとは違い、書くリテラシーが限界状態にないドキュメントである。それによると、魔女の嫌疑をかけられた女性は初め、自分が魔女であることを否定していたという。しかし、審問の過程で女性のエゴは揺れ動き、変容する。審問での物理的な圧力と誘導を前に、肯定へと転じていくのである。やがて自らが魔女であることを確信したドキュメント、「告白」を執筆する。この「もう一つのエゴ」を執筆した後、女性は自死して審問は結論をみることなく終わった。実は、女性が記した「告白」には、審問による巧妙な改ざんと、それを巧妙に隠蔽する工作があったことがこれまでの研究によって明らかにされており、「もう一つのエゴ」の中に「創られたエゴ」もあった[62] という。さらに大黒は、女性のドキュメントの中に審問官や書記など多声（ポリフォニー）があることだけでなく、その多声の中に当時の社会通念や慣行に従った「社会の声」があることを見出した[63] のであった。

このように、エゴ・ドキュメントが生成される過程に目を凝らす時、ドキュメントの中には書き手の〈声〉だけでなく、それを取り巻く人びとの〈声〉があること、そしてそのドキュメントの中の様々な〈声〉の中に、書き手の周りに漂っていた〈声〉があることがわかる。このことは、「エゴ・ドキュメントが関係性の中で存在している」[64] ことを示している。それと同時に、書き手を取り巻く関係性のなかで成立したエゴ・ドキュメントの中の自己とは、ソーシャル・セルフとして社会的に構築されたものである[65] ことをも示しているといえる。

以上のことから、エゴ・ドキュメントには書き手自身の〈声〉だけではなく、ドキュメントには記述されていない人びとの〈声〉があり、書き手を取り巻く関係性があるこ

とがわかる。このようなエゴ・ドキュメントの生成のプロセスに目を凝らす時、書き手がどのような動機をもち、どのような状況で、自らの経験を記述したのかを垣間見ることができるのだ。さらに、ドキュメントが社会的自己として記述されていることを勘案すると、エゴ・ドキュメントを読み解くことは、ドキュメントの中にある他者の存在や身体、ひいては「切断線」の「まえ」を感知する契機にもなるだろう。

第５節　「切断線」の引き直し

本節では、エゴ・ドキュメントをはじめとする史資料をどのようにみれば、「切断線」の「まえ」を感知[66]できるのかを考えていく。バトラーは、「切断線」を感知できるのかという問いに対し、私たちは政治性に満ち、権力の働きのある「ある枠組」を通じて他者の生を、失われたものあるいは傷つけられたもの（あるいは、失われうるもの、傷つけられるもの）として、感知し損ねてしまっている[67]、と述べている。さらに「ある枠組」は、私たちの「認識できるものの条件を一方的に決定するわけではないものの、認識できるものの領域それ自体の範囲をさだめよう」[68]としており、私たちの認識は「生産的で形成的な権力」である「予めの排除」によってその範囲が定められ、領域外にいる人びとの失われたもの、あるいは傷つけられたものを感知し損ねることになるというのだ。

ではなぜ私たちは、ネクロポリティクスに生きる人の〈生〉を感知し損ねてしまうことがあるのだろうか。そのことを考えるためには、沖縄の戦後史研究において、何が予め排除されてきたのかを問わなければならない。バトラーのいう「ある枠組」は、沖縄の戦後史研究の枠組みの中にも厳然と存在する。その一つが、先に述べた、「基地の島」として支配するアメリカ統治と、それに抵抗する復帰運動史に代表されるような社会運動史という枠組みである。その枠組みによって、言説境界が定められ、「切断線」が引かれた。そこでは、「あやうく、嘆きうる存在」として政治的に承認されていない人びと－先のバトラーの言葉を借りるならば、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きている人びと－が、たとえ何かを語っていたとしても語っているとは一切みなされず、その人びとの言葉は「予め排除」され、歴史を語る言葉としてみなされてこなかった。

ただ、これまでの沖縄戦後史研究の枠組みの中でも、「不安定性」の中に生きる人びとのことが叙述されてはいた。例えば、それは「土地を奪われた」「移動させられた」などの言葉によって表象される抑圧された主体として描かれてきたし、筆者自身も同様の記述をしてきたこともあった。しかしそれは単に、不安定性の中に生きる人びとを、外部からのまなざしによって「切断線」の内にある言葉によって回収・説明し、記述しようとしているだけではなかったか。そうであるならば、「切断線」の「まえ」にいる人びとの生きている姿を、いったい何によって感知し、どのように叙述できるのか、という新たな問いがここに生起する。その問いを考えていくためには、「予

めの排除」によって言説境界の領域外におかれた言葉に目を向けることがその起点となるのではないか。

それでは、いったいどのようにすれば、発話可能領域外にある発話に目を向け、「切断線」の「まえ」を想像し感知できるのかを、エゴ・ドキュメントから考えていきたい。第４節でみた、「限界リテラシー」状態の女性が記した手紙からは、その生成の動機、書き手を取り巻く関係性、生成に至るまでの書き手の経験、ドキュメント内に貫かれている書き手の感情をみてとることができた。また、魔女裁判にかかわるドキュメントの中には多声があった。このことは、エゴ・ドキュメントが様々な社会的な関係の中で生成された結果であることを物語っている。そこには、個人の経験や感情だけでなく、他者の経験や感情もまた、あるのだ。このように、ドキュメントの中には、多様な声が響き、書き手を幾重にも取り巻く関係性といった「語りの複合性・重層性」[69]があり、他者の姿を捉えることができるのだ。この「語りの複合性・重層性」をドキュメントから見出す時、「切断線」の内にいる人だけでなく、「切断線」の「まえ」にいる人びとの身体、行為、声や感情などの〈生〉の痕跡を感知することができるのではないか。

そこで、これまで私は、ネクロポリティクスのもとで生きる沖縄の人びとが残した様々なドキュメントの中で、「切断線」の「まえ」を感知できるドキュメントの一つとして、沖縄の戦後において初等中等教育期の子どもたちが書いた作文に注目してきた。なぜなら、子どもたちもバトラーのいう「不安定性」の中、すなわち、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きていたからである。そのような中にあって子どもたちは、〈生〉の痕跡－日々の生活の中で、家族や学校、社会の姿を見て、自らが見たこと、感じたこと、考えたことを記述し、自らが生きている場所や時代の風景－を作文の中に残している。しかし、私がこれまで作文を歴史研究の場で考えようとした時、それらの作文には「本当の子どもの声がない」、「作文は教員の手が加わったものだ」、だから「史資料的には価値が低い」、ということを暗に言われたことが何度もあった。子どもたちの作文は、歴史を語る言葉とみなされず排除されてきたし、そのようなまなざしに遭遇することは今もよくある。

そこで、ここまで述べてきたことを踏まえて、作文について考えてみたい。まず、行為面からみていこう。作文は子どもの社会化を促し、社会的な規範を身体化する場である学校で、教育の一環として書かれたものが多い。沖縄の場合、「うちなーぐち（方言）」ではなく「標準語」を身体化し、沖縄教職員会は「日本人」になることを子どもたちに求め、教室は子どもたちの身体と記憶を組み替えていく[70]場になったという。子ども自身が学校生活の場でうまくやっていくには、学校内では「うちなーぐち」は語りえないものとなった。子どもたちは「うちなーぐち」で語ら（語れ）なくなっただけでなく、教員の求めるものから大きく逸脱する事柄をも語ら（語れ）なくなっ

た。なぜなら、そこに「生産的で形成的な権力」としての「予めの排除」が働いていたからである。つまり、作文を書くという行為は、自らの主体化を促す契機でもあり、自らを守ろうとする行為でもあったのだ。

次に、記述面を考えてみよう。小熊英二は、1960 年代に沖縄で発刊された文集類は、「どれを読んでも、沖縄の生徒たちが、『日本人』として自覚を述べたものであふれ」[71]、「教員たちの国民教育運動の思想を、そのままくりかえして」[72] おり、作文に当時の「学校で理想として教えられている価値観を忠実に反映しようとした傾向があっただろうことは否定できない」[73] と述べている。小熊は沖縄教職員会の「国民教育」[74] を批判的に検討する立場で作文をよみ、その効果が判断できる記述に目を向けた。教員の価値観に「同化」しきれない心情が綴られている作文がある [75] ことから、沖縄教職員会の「国民教育」が内包する矛盾に議論の矛先を向けていく。この点について戸邉秀明は、作文を「同化主義を例証するための材料」[76] に留めておくのでなく、「教員自身の言葉と身体、渇きと怖れを、同化主義の表徴に押し込めず」[77]、教員の「微細な言葉や実践の読解」が必要である [78] と指摘している。

第４節でみたように、一人称で語られたドキュメントは、社会的な関係の中で生成され、その中には様々な〈生〉の痕跡－人びとの身体、行為、声や感情など－があった。しかしこれらがドキュメントにあったとしても、ドキュメントをみる人がその認識可能領域範囲外にあるものだとみなしてしまえば、それらの〈生〉の痕跡を感知することはできない。そうであるのなら、ドキュメント中の〈生〉の痕跡をみるためには、基軸となっている枠組みからいったん離れ、自らの認識可能領域を広げること、言い換えれば、自らの「切断線」を引き直すことが必要となってくる。そこでは、自らの中にある「切断線」としての研究姿勢や構えを問い直すことが前提として求められているのだ。

「切断線」を「まえ」に引き直した時、これまで語っているとみなされなかった発話は、歴史を語る言葉としてよみがえるだけでなく、その言葉は「切断線」の「まえ」の人びとの〈生〉の痕跡を感知する起点となるのではないか。

第６節　終わりに

本稿の目的は、沖縄の戦後史研究において、誰の何をどのようにみればよいか、を考えることであった。その際、「切断線」を歴史研究の場に援用し、そのことを通して歴史を語る言葉の在り処を検討した。

「切断線」は、「予めの排除」によって定められた発話可能領域の境界であり、発話主体の生存可能領域、認識可能領域の範囲を示すものであった。境界線は目に見えず、人びとはそれがあることにすら気づかず、それに守られながらその領域内で発話する。「切断線」の内では、発話は継続的に生産され、同時に発話は制限された [79]。発話の規範を受け入れられない人は領域外におかれ、たとえ発話したとしても発話しているとみなされることはなかった。

さらに本稿では、沖縄戦と地続きの占領下の時代に「切断線」の外の位置（「切断線」の「まえ」）にいた人びとの生について、バトラーのいう「不安定性」の概念から検討してきた。そこでは、「あやうさ」が政治的に承認されるかどうかで生の格差があり、政治的に承認されなかった人びとの〈生〉は「使い捨ててもよい」とみなされた。その人びとは発話していても発話しているとみなされなかったが、ドキュメントの中に「語りの複合性･重層性」を見出す時､「切断線」の内にいる人だけでなく、「切断線」の「まえ」にいる人びとの身体、行為、声や感情などといった〈生〉の痕跡を感知することが可能になることを指摘した。しかし、私たちはそのような〈生〉の痕跡を感知し損なってしまうことがある。なぜなら、「切断線」の「まえ」にあるものを､「切断線」の内にある言葉によって説明し、記述しようとしているだけだからである。研究者の認識領域が「切断線」の内に留まっている限り、「切断線」の外の発話を認識することは難しくなる。「切断線」を認識するには、その領域を押し広げること、すなわち自らの「切断線」を「まえ」に引き直すことが必要なのだ。そしてその時、歴史を語る言葉の在り処を見出すことができるはずだ。

本稿では、「切断線」の「まえ」にある発話－とりわけ、発話として承認されていない発話や、言葉のない身体的変化や動作、行動－に着目した。発話として認めらないのは、認めらない状況、言い換えれば、「予めの排除」によって「切断線」がそこに引かれているからである。語ら（語れ）ないのは、語ることができない状況があるからであるし、言葉を伴うことのない身体動作、行動はそうさせる何かがあるからだ。そうであるのなら、「切断線」を引き直す前に、「切断線」が引かれた状況そのものをも問うていかなくてはならない。

最後に、冒頭の問い「誰の何をどのようにみるか」に応答してみたい。それは、沖縄戦と地続きの占領下の時代、発話可能領域外の位置にいた人びとの、「不可能な発話」とみなされた発話の「切断線」を「まえ」に引き直すことによって捉え、その発話から「使い捨ててもよい」とみなされた〈生〉の痕跡を感知することである。もちろん、「不可能な発話」を感知したからといって、それがすぐさま歴史叙述に直結するものでもない。しかしながら、「不可能な発話」を感知することは、基軸となっている枠組みとは異なる切り口で歴史叙述をしようとする起点になるのだ。ただ、たとえ「不可能な発話」を感知したとしても、そこには感知したものの解釈の問題が残る。なぜなら､「切断線」の「まえ」に饒舌な語りはなく、「既存の言葉とは別の姿を纏って停留している」[80]からだ。それらを既存の言葉で説明してしまうことは、〈生〉の痕跡を感知できず、結果として「不可能な発話」を排除してしまうことにもつながる。「別の姿を纏っている」ものをどのように解釈するのか、バトラーは既存の言葉の誤用と意味の置き換えを提起している[81]が、これについては今後の課題としたい。いずれにせよ、「切断線」の「まえ」に停留していたものが動き出す時、そこから歴史叙述がはじまるのだ。

注

1 本稿は、「風景に刻まれた『基地の街』コザをみる－子どもたちの作文からひろがる沖縄戦後史－」（同志社大学 グローバル・スタディーズ研究科 博士学位論文［2023 年］）の序章第 3･4 節などの「切断線」に関する記述を踏まえ、加筆修正のうえ作成した。

2 謝花直美『戦後沖縄と復興の「異音」米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』有志舎、2021 年、26 頁.

3 冨山一郎「復興と復帰 書評 謝花直美『戦後沖縄と復興の「異音」－米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』」『MFE ＝多焦点拡張』第 2 号、2022 年、124 頁.

4 同上.

5 本稿では、「発話」をつぶやきなど、他者が言葉として認識できない言語での表現や、しぐさや振る舞い、態度、感情表現など言語を伴わない身体動作を含んだものとする。その意味においては、沈黙も発話の一形態ということになる。

6 ジュディス・バトラー著／竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店、2004 年.

7 前掲、バトラー『触発する言葉』211-212 頁.

8 前掲、バトラー『触発する言葉』203 頁.

9 前掲、バトラー『触発する言葉』208 頁.

10 前掲、バトラー『触発する言葉』211-212 頁.

11 前掲、バトラー『触発する言葉』207 頁.

12 同上.

13 前掲、バトラー『触発する言葉』206 頁.

14 同上.

15 J. ラプランシュ、J.B. ポンタリス著／村上仁監訳『精神分析用語辞典』みすず書房、1977 年、375-378 頁.

16 前掲、バトラー『触発する言葉』216-217 頁.

17 冨山一郎『始まりの知 ファノンの臨床』法政大学出版局、2018 年、46 頁.

18 前掲、バトラー『触発する言葉』220 頁.

19 前掲、バトラー『触発する言葉』212 頁.

20 同上.

21 前掲、冨山『始まりの知』46 頁.

22 バトラーは例として「精神病患者」の呻き声をあげている（前掲、バトラー『触発する言葉』208 頁）。

23 前掲、バトラー『触発する言葉』215 頁.

24 前掲、バトラー『触発する言葉』215-216 頁.

25 前掲、バトラー『触発する言葉』218 頁.

26 前掲、バトラー『触発する言葉』212-213 頁.

27 ジュディス･バトラー著／佐藤嘉幸、清水知子訳『アセンブリ 行為遂行性･複数性･政治』青土社、2018 年、22 頁.

28 前掲、バトラー『アセンブリ』18 頁.

29 ミシェル・フーコーは 19 世紀の政治的権利の最も巨大な権利の変化のひとつとして、「生き『させる』、そして死ぬに『任せる』権力」が配置されたとしている（ミシェル・フーコー著／石田英敬、小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない コレージュ･ド･フランス講義 1975-1976 年度』筑摩書房、2007 年、241 頁.）。

30 前掲、バトラー『アセンブリ』77 頁.

31 ジュディス・バトラー著／清水晶子訳『戦争の枠組 生はいつ嘆きうるものであるのか』筑摩書房、2012 年、37-38 頁.

32 前掲、バトラー『戦争の枠組』9-45 頁.

33 冨山一郎『流着の思想「沖縄問題」の系譜学』インパクト出版会、2013 年、54-55 頁.

34 米山リサ「二つの廃墟を越えて－広島、世界貿易センター、日本軍「慰安所」をめぐる記憶のポリティクス」（小澤祥子／小田島勝浩訳）『記憶が語りはじめる』（歴史の描き方 3）、東京大学出版会、2006 年、159 頁.

35 同上.

36 同上.

37 Achille Mbembe “Necropolitics” Translated by Libby Meintje, *Public Culture*, Duke University Press 15(1), Winter 2003, p.27.

38 Mbembe, “Necropolitics,” p.40.

39 冨山一郎「沖縄戦を考えるということ」『歴史学研究』第 1023 号、績文堂出版、2022 年、28 頁.

40 前掲、謝花『戦後沖縄と復興の「異音」』6 頁.

41 謝花直美「占領沖縄，食糧配給と労働を巡る政治－「金武湾」「みなと村」の空間編成－」『歴史学研究』第 1023 号、績文堂出版、2022 年、35-46 頁.

42 前掲、謝花「占領沖縄，食糧配給と労働を巡る政治」37 頁.

43 同上.

44 前掲、謝花「占領沖縄，食糧配給と労働を巡る政治」38 頁.

45 前掲、謝花「占領沖縄，食糧配給と労働を巡る政治」

42 頁.

46 長谷川貴彦「エゴ･ドキュメント研究の射程」『エゴ･ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、2 頁.

47 前掲、長谷川「エゴ･ドキュメント研究の射程」3 頁.

48 前掲、長谷川「エゴ･ドキュメント研究の射程」8 頁.
ここでいう主体とは、社会関係を通じて構築され、個人の内部で身体化され、時間を通じて変化する歴史性をもつ存在であると捉えられる（長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント論－欧米の歴史学における新潮流－」『歴史評論』第 777 号、校倉書房、2015 年、52 頁.）。

49 大黒俊二「浮動するエゴ、もう一つのエゴ、創られるエゴ－魔女ベレッツァ・オルシーニの審問記録と手記（1528 年）より」『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、19 頁.

50 長谷川貴彦「語りのかたち－パーソナル・ナラティヴの歴史学－」『西洋史学』第 251 号、2013 年、19 頁.

51 大黒俊二「文字のかなたに声を聴く－声からの／声に向けての史料論－」『歴史学研究』第 924 号、青木書店、2014 年、2 頁.

大黒俊二「マッダレーナ･ナルドゥッチの遺言書（1476 年）－限界リテラシーの現れ方、現れるとき－」『社会言語学』ⅩⅣ号、「社会言語学」刊行会、2014 年、45 頁.

52 大黒俊二「史料をなぜ分類するのか－『限界リテラシー』という切り口－」『西洋史学』第 268 号、2019 年、98 頁.

53 同上.

54 前掲、大黒「史料をなぜ分類するのか」102 頁.

55 横山百合子「遊女の『日記』を読む－嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件をめぐって」『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、194 頁.

56 同上.

57 前掲、大黒「史料をなぜ分類するのか」93-95 頁.

58 前掲、大黒「史料をなぜ分類するのか」95-96 頁.

59 前掲、大黒「史料をなぜ分類するのか」99-101 頁.

60 前掲、大黒「史料をなぜ分類するのか」97 頁.

61 前掲、大黒「浮動するエゴ、もう一つのエゴ、創られるエゴ－魔女ベレッツァ・オルシーニの審問記録と手記（1528 年）より」19-44 頁.

62 前掲、大黒「浮動するエゴ、もう一つのエゴ、創られるエゴ」33-39 頁.

63 前掲、大黒「浮動するエゴ、もう一つのエゴ、創られるエゴ」38-41 頁.

64 これは、成田龍一が長谷川貴彦、桜井厚との座談会で述べた内容である。長谷川貴彦、成田龍一、桜井厚「座談会 個人史研究の現在、そしてエゴ･ドキュメントへ」『歴史評論』第 777 号、校倉書房、2015 年、16 頁.

65 Mary Fulbrook and Ulinka Rublack, “In Relation: The ‘Social Self’ and Ego-Documents,” *German History*, Vol. 28, No. 3, 2010, pp. 263-272.
長谷川「エゴ・ドキュメント論」24 頁.

66 バトラーは「感知する（apprehend)」を「承認する（recognize)」と区別して用いている。「感知」は「完全な認知を欠いたままで、注意をむけ、心にとめ、みとめる」という意味あいをもち、「承認」ほど厳密な用語でないが、承認によって承認されていないことを感知することができ、承認の規範に対する批判の土台となりうるという（前掲、バトラー『戦争の枠組』10-14 頁.）。このことからすれば、承認によって、承認されていない〈生〉があるということを「感知する」ことはできる。

67 前掲、バトラー『戦争の枠組』9 頁.

68 前掲、バトラー『戦争の枠組』9-10 頁.

69 槇原茂「私語りから市民の物語りへ」『個人の語りがひらく歴史－ナラティヴ／エゴ・ドキュメント／シティズンシップ－』ミネルヴァ書房、2014 年、6-7 頁.

70 田仲康博『風景の裂け目－沖縄、占領の今』せりか書房、2010 年、116-120 頁.
ただ、作文教育の実践報告をみると、必ずしもこのように言い切れない。方言を使わないことよりも、どのようにすれば子どもたちが自己表現できるかを目標にした実践記録がある。例えば、①石川哲子「一年生の作文指導の歩み」『文教時報』第 14 号、琉球政府文教局研究調査課、1955 年、②平敷りつ子「みんなが書けるようにするにはどうすればよいか（わが校作文指導の歩み)」『沖縄教育』第一集第五次教研集会報告、沖縄教職員会、1959 年. などである。

71 小熊英二『〈日本人〉の境界　沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998 年、584 頁.

72 同上.

73 前掲、小熊『〈日本人〉の境界』585 頁.

74 小熊英二は沖縄での「国民教育」の実践をつぎのようにまとめている。
「『日本人』意識育成のため、『日の丸』『君が代』の奨励のほか、歴史観の改変が行なわれた。」。例を挙げるなら、「『日本』ではなく『祖国』、『沖縄人』ではなく、『県民』を使用するよう奨励し、本土の出版社が発行する日本地図に沖縄を挿入させるべく運動が行なわれ、本土との文通では必ず、『沖縄県』と記入させることが徹底された」。文化面でも「『日本の美しい伝統や文化を守り育てる態度』の育成と、『共通語の奨励』『風俗習慣の改革』といった目標が掲げられた」(前掲、小熊『〈日本人〉の境界』574 頁.)。

75 小熊英二「資料解題」『EDGE』第 12 号、Art Produce Okinawa、2001 年、41-42 頁.

76 戸邉秀明「沖縄教職員会史再考のために　六〇年代前半の沖縄教員における渇きと怖れ－」『沖縄・問いを立てる 2 方言札 ことばと身体』社会評論社、2008 年、157 頁.

77 前掲、戸邉「沖縄教職員会史再考のために」176 頁.

78 前掲、戸邉「沖縄教職員会史再考のために」177 頁.

79 前掲、バトラー『触発する言葉』211 頁.

80 冨山一郎「記憶が現れる -- 森崎和江の聞き書きから --」『人文學報』京都大學人文科學研究所、第 119 号、2022 年、54 頁.

81 バトラーは「予め排除されている言葉を他の目的のために積極的に誤用すること」、「もともとの適切な意味を不適切な意味に置き換えること」を提起している（前掲、バトラー『触発する言葉』216 頁.）。

（きたに あきひろ 沖縄戦・沖縄戦後史研究者）

見当

当たるも八卦　当たらぬも八卦（２）

佐藤 博昭

「戦前」愚考

（１）新しい「戦前」

①　タモリ、発言する

昨年末（もう半年も前のことだ)、わたしは街の中の食堂でひとりで昼食の弁当を摂っていました。弁当の中身を口に運びながら、店内の壁掛けテレビの映像を見るでもなく見、音声を聞くでもなく聞いていました。大下容子の時事解説番組（！）が終わり、つぎに、「徹子の部屋」が始まり、黒柳徹子が、タモリが本日のお客様だと紹介し、本人が登場しました。

すでに、わたしは、黒柳徹子 (1933 ～) とタモリ (1945 ～) との番組冒頭のやり取りの詳細を憶えていません。タモリがどんな表情を黒メガネで隠して言ったのかは見逃しましたが、そのタモリが「新しい戦前」と発言したことは、この耳でたしかに聞き記憶に残りました。

後日知人が配布したこのタモリの発言に関するコピー「ラサール石井の東憤西笑」（東憤西笑は「東奔西走」の捩り。２０２３年１月５日付「日刊ゲンダイ」）には、次のように記されています。

> （略）黒柳徹子さんに「来年はどんな年になるでしょう」と聞かれ、（タモリは―引用者）「新しい戦前になるんじゃないでしょうか」と即答した（略）
>
> この簡潔な言葉には様々なニュアンスが盛り込まれ、今の時代の空気感を表現していて、さすがにタモリさんならではである。

また、ラサール石井は、「新しい戦前」ということばについても補足しています。

> 「新しい戦前」とは、今生きている日本人がほぼ誰も経験していない「戦前」がもうやって来ている、という意味であり、「このままでは同じ道をたどることになる」という警鐘であることは間違いない。

わたしは、その発言について岸田総理大臣がいうところの「新しい資本主義」に対するタモリの皮肉か、そんなとんちんかんな感想しか沸きませんでした。それから、なんだか、恥ずかしいなとでもいえそうな気持ちがおこり、はなから番組を最後まで聞くつもりはありませんでしたから、その後、食事を終えるとテレビ視聴も切り上げてすごすごと店を後にしたのです。

皮肉かと思い、恥ずかしいとでもいえるような気持になったのは、タモリ像についての吉本隆明（１９２４～２０１２）の次のような発言があったことをどこかに記憶していたからなのかどうか。

> （略）芸を壊す芸、劇を壊す劇、話を壊す話芸よりほかにタモリが生き生きと感じられる場面などありうるはずがない。いやいやながら妙なくすぐりの寸劇をやっているタモリの表情をみていて、悲惨な気がした。こんなのおれにやらせるのかといえば通るだろうに[1]。

タモリの「芸」について、吉本隆明は、三浦雅士 (1946 ～) との対談で次のようなことも言っています。

> 吉本　タモリというのはフィクションだとおもうんですよ。つまり実態がないというところがいい。（略）たんに寺山修司や竹村健一の物まねをするからというのではないけれど、とにかく自分のほうがいつでもニセモノといいますか、そこがあの人の芸の本質なんじゃないか。なにをやってもタモリの型というのはある。しかし、何をやってもニセモノだということですね。ぼくはタモリがそういう〝空〟というのに耐えられなくなって、個性とか主体性とか、そういうことをしだしたら、ちょっと危ないんじゃないかという気がする。
>
> 三浦　もう危ないんじゃないかな[2]

さて、４０年以上も前の対談でのタモリ評をわざわざ引っぱりだしながらいうのもなんですが、タモリという像の現在について何も知らないわたしがその評の枠にあわせてその言動を論じるのはいかにも不適切です。

そこで、ここでは、わたしが先のタモリの発言に引っ掛かり（疑問）を感じた、そのことをまず、起点にして当の発言について考えてみたいと思います。ラサール石井は、その発言「ずっと「永遠の戦後」をつづけなければ」が「新しい戦前」につながるものとして考えているのでしょうが、そうであるならば、ますますわたしには疑問が募ります。

ここで、わたしが引っ掛かりということについて、たとえば、次のようなことかと問うひとがいましょう

⑴「戦前」ならとっくに始まっているわい、今更、新しいなどと勿体をつけるな。

⑵そんなに後生大事にすべき「戦後」がどこにあった。

⑶タモリもラサール石井も「戦前」ということばにこれまでに込められた歴史的な意味があるという前提に立って、つまり、「過去を価値づけること（あるいは、過去の価値観）、イデオロギー」に基づき発言している。

しかし、いまのわたしには、まだ、なんともいえません。わたしの疑問をどう表現すればいいのか、それをこれから考えようとしているのです。ふがいない話ですが実情です。

わたしは、どこかで、「新しい戦前」ということばをさっそくもちあげとにかく消

費しようとする空虚さのほうが空恐ろしいものではないか、とも思います。つまり、「新しい戦前」ということばが仮に的を射たものであっても、そのことばが空気の様に吸い込まれ吐かれて、しかも、今までと何にも変わらない雰囲気に飲み込まれていってしまっている。そっちの方がおかしいんじゃないの、怪しいんじゃないというそんな漠然とした気持ちを抱いているのです。わたしの感想などみごとに的を外していて、あのことばが少なからぬ人のこころや胸の奥底にあるなにものかと共鳴して、いまもどこかでくすぶりつづけているのであればなおさらわたしの疑問や感想の的はずれ具合を明らかにすべきでしょう。

ところで、その後、タモリやラサール石井は「続編」や「続き」を発信していますか。

②　警鐘を鳴らしたの？

もうすこし、ことばを継ぐとしたら次のようなことかもしれません。

まず、わたしには、タモリが「みんな知っているか、気づいていないんじゃないか、知らないのか」と世の中に「警鐘を鳴らす」かのようにいっていると聞こえたがために、そのことの小賢しさを、わたしは他人事ながら恥ずかしいと思ったのかもしれません。「警鐘を鳴らす」ひとはわかったつもりでいるのかもしれませんが、「つもり」だけで実はなにもわからない、ということは誰にでもどこにでもある、そしてなんとももどかしいことのことです。なぜ、わたしが「わかったつもりになっているだけ」などというのかについては、追々考えていきます。

さて、「警鐘を鳴らす」ひとが、いっときでもよそ見をしている人の存在を許せないような気持ちになり、そんな気持ちってちょっとまずいことだよ、という自分への声掛けもできないなら、これはたまりません。そこでは「警鐘を鳴らす」ひとが「警鐘を鳴らす」ひとと「よそ見する」ひととのあいだにすでになんらかの優劣が存在するとみなすことを許して自他の生きる道筋を狭めていることにも鈍感になっているということだからです。いってみれば、それは競争の論理の反映でしょう。

したがって、ぶっきらぼうと思える「新しい戦前」という表現ではなく、歯応えがある事態ではあってももっとしっかり咀嚼したうえで吐かれたことばであれば、それが他人のことばを真似たものであってももうすこしちがった表現ができ、聞く人の心臓にまでぐさりと刺さったのではないか、ということはありうると考えるべきです。そんなときには案外、それを聞いたひとは黙って、感得して、その人のことばをその人のことばとしてしっかり記憶するものです。

そして、ときに咀嚼もし、延命のエネルギーになることで「自然に」力を得るでしょう。もっとも、タモリの言動を「徹子の部屋」という番組が忌避し放送しないという事態は想定できますが。

あるいは、タモリは、タモリという露出度の、あるいはタレント性（パーソナリティ）の高いベテランとして自他ともに認める評価を得ている「芸人」として、ここ

いらで風を吹かそうとしただけなのかもしれません。タモリが、自分の「芸」の延命に手を拱いていては、それこそその名に恥じることになりかねない、とは考えない人ではなさそうに思うので、そのように言ってみるのです。そんな意味では、タモリは、もっとあの「徹子の部屋」という場の「新しい戦前」度の限度を測ろうとしてみてもよかったのです。

つまり、タモリは、「新しい戦前」ではなく、「いまや日本のひとびと（国民）は日本国の名のもとに囚われてやせ細っていく平和を疾駆している」とでも適当にいってみた方がよかった、ということです。そうすれば、「永遠の戦後」などというわけのわからない礼讃ではなく、「敗戦後」の東アジアに力で埋め込まれているわれわれの「平和」という生活地盤の脆弱さを、まだまだ「豊かな平和」に至るまでにはハードルはこれから先も並んでいることを語り合える場ができないとも限らないのです。もっとも、これ自体、わたしの単なる夢想に過ぎませんが。

③タモリはタモリをついに葬ったのか

わたしが恥ずかしいと感じたことには、「タレント」タモリと非「タレント」森田一義の別人格性という思い込みもありそうです。つまり、わたしの現時代認識では、タモリの発言を「タレント」であるいうタモリの像と森田一義という人格の像との差異のあるなかでの発言と捉えたとすると、じつは、「遅れている」のはわたしの方であり、タモリはもうすでに森田一義として登場もしていた（タモリ像を殺いだ）、ということを見逃しているのかもしれません。これは、もっと言えば、タモリは少なくともふたつの人格を適当に使い分けることができるということであるのかもしれません。要するに、持たざるものであるわたしが感じた恥ずかしさとは、裏返せば、ねだっても手に入れることができないものを手にする者への、いわば、その発言の当否は別としても、嫉妬という面を否定はできないか、ということです。いや、そんなことを言って、事を面倒にしているだけか。

（２）古い戦前

①戦前＝戦争が始まる前？

さて、まず、ここでは「戦前」とは「戦争が始まる前」のこととだけ言ってみましょう。

もっとも、「戦争」が規則正しく宣戦布告のうえで「構え、撃て」とはじまることなど稀有ですから、こんどは「戦争が始まる」とはいつのどの時点のことだと騒ぎになるに決まっています。そうなればなったで、「時間の幅」をとるしかない、となり、「幅」の取り方など人の数だけある、ということになりましょう。

そのようなことを含みながら、あえて、「新しい戦前」に対応する、たとえば、「古い戦前」は、過去の歴史上のどの期間あるいは時期のことをいうのかと、いい加減に、かつまじめに考えてみることにします。

古い（あるいは、かつての）戦前とは、いつのことなのでしょうか。それにけりが附いたら、心づもりとしては、「新しい」

ということばの意味についても考えてみたいと思っています。

その際、単純に考えてみて、ひとびとの記憶がまだ生きていて記録で確認できるという意味では、考える対象とする時間の起点を明治が始まった１８６０年代後半と設定し、終点は１９４５年８月１５日とします。そして、その期間から、「戦争期」を引き算すれば、「戦前期」といえる期間をさだめることができる、という見立てです。

さらに、この問いを考えることには、「古い戦前」を探ることにどれほどの意義があるというのか、という大切な問いがついて回ることを忘れてはなりません。その「古さ」には「古い」ゆえに「新しい」に対抗するほどの意義を見いだせるのか、ということです。

しかし、おそらく、「古い」を持ち出し、それに対して「新しい」を「対抗」することにだれも意義など見いだせず、その「古い」を持ち出す企ては骨折り損の草臥れ儲けにおわることになるのではないか、と思いもします。なぜなら、「新しい」を語る現状では「古い」が身に纏わりつけている「戦争」という局面だけの話では済まず、人類とか地球環境とかのレベルの要素を加えてしかるべきものであり、対抗とか対照とかの話をしようがないのではないか、とも思うからです。

また、つぎには、「戦前」とはいつのことなのか、ではなく、「戦前」という考え方をすること、それ自体の意義をどう考えるのか、その方が大切だといえそうだということです。

手っ取り早くいえば、「戦前」とはいつのことかという問いには、「時期」だけに限れば、それは「今のことだ」と答えるほかない、ずっと「現在」のことだ、ということです。そして、そのようにいうということは、この先に日本国のわれわれが「戦争」をすることがありうる、という考えを今でも、警鐘など鳴らされなくとも手放せないと考えているということです。

こんなことをいうのは、保坂正康 (1939～) がいった「新しい戦争観を考える必要がある」ということば [3] にひっかりがあるためでしょう。

ウクライナの戦争下にあるひとたちに「戦前」はいつですか、ありましたか、と問うこと自体愚かですが、それでも、「そんなものない」、「戦争か平和か、それだけだ」と答えてくれる人はいるかもしれません。

②「戦前」期のいくつかの考え方

「古い戦前」の時期の考え方について、いくつか検証しましょう。そこから、なにか、予期に反して、思いもよらぬことが浮かび上がるかもしれません。

第一考 「１９４５年８月１５日に天皇ヒロヒトが読んだ「終戦の詔勅」に記された戦争期間の前の時期」というのはどうでしょうか。

小森陽一 (1953 ～) は次のようにいいます。

> 「終戦」といっても、ここ（終戦の詔勅―引用者）では「米英二国に宣戦セル」戦争しか問題にされていない。し

かし、ポツダム宣言の受諾は「米英支蘇四国ニ対」して行われているのだから、当然、「支」すなわち中国との戦争について、まずふれなければならないはずだ。ここでは中国とソ連とが除外されることによって明らかに、戦争の期間を一九四一年以降の戦争にのみ限定しようとする作意が表れている[4]。

第一考については、アジアとの戦争の行われていた時期がネグレクトされている、という小森の主張を見過ごせませんし、賛同します。ちなみに、中華人民共和国との国交回復は１９７２年、平和友好条約締結は１９７８年。また、日ソ国交回復は１９５６年、日ロ平和条約は未結です。

それでは、第二考、「アジアとの戦争」を含み込んだ戦争期間を考えに入れてみます。その場合、いつまで遡った先に「古い戦前」は、みつかるのでしょうか。

第二考を検討するにあたり、宇野重規(1967～)の次のような主張に耳を傾けます。

戦後の安保政策の大転換にあたり、様々な可能性を模索しながら、日本がこれからどんな国家になるのか、その理念を語ることが大切です。残念ながら、現実はまったく不十分です。憲法９条の解釈をめぐり様々な議論がありましたが、日本は軍事力の行使に関しては他国より厳しい基準を自国に課し、守ってきました。９条を中心とした平和国家をアイデンティティーにしてきたのです。それが岐路にあるにもかかわらず、国際環境の変化という現実に、ずるずるべったりと引きずられているように見えます。

戦前日本を代表するリベラリストの石橋湛山（1884～1973―引用者）は、経済的合理性の視点から日本の植民地放棄を論じ、平和な貿易立国を目指す「小日本主義」を提唱しました。これに対し、理想主義の極みとか、非現実的というレッテルが貼られました。しかし、戦争に負けて戦後になると、石橋に先見の明があったということに社会は気づきます。非現実的と言われたものが状況が変わるとそうではなかった、ということはしばしばあるのです[5]。

ここで、宇野重規がいう石橋湛山の「小日本主義」の主張は、１９２１年『東洋経済新報』に掲載された[6]ようです。とすると宇野は１９２１年当時をまだ戦前という時代区分に入れていいと思っているということでしょう。まあ、宇野とて「戦前」をどれほど厳密に考慮すべきか、などとは考えていないにちがいありません。

ところで、清朝を含む中国との戦争がいつ始まったのか、という問いについて、「米英二国」に関し１９４１年１２月８日（ハワイ・パールハーバーの米軍基地攻撃）と答えるのと同様に年月日を明確にして答えることはなかなかに難しそうです。

煩瑣をいとわず、年表的事実の概略を追うと、次の通りです。

日本が朝鮮半島への侵略を意図して引き起こした朝鮮・江華島事件（１８７５年９月）以降の出兵・侵略・駐留・統治に対し、清国が宗主国の地位を主張し、１８９４年

には朝鮮・東学党の蜂起に対する弾圧をきっかけに両国間に戦争（「日清戦争」）が勃発しました。

１８７５年９月の江華島事件（計画的な武力攻撃）以前には、１８６３年７月には鹿児島湾での薩摩藩と英国海軍との戦闘（薩英戦争）、１８６４年９月下関海峡での長州（萩）藩と英・米・仏・蘭の四か国海軍との戦闘（馬関戦争）があり、薩長同盟を経て「明治維新」として「大日本帝国」を、天皇崇拝―宗教政策、殖産興業、富国強兵の実業政策の二本立てで形成せんとする輩が欧米の軍事力の前に一度ひれ伏したこと（敗戦体験）、かの輩が明治政府の軍事力増強に走っていったことはよく知られています。

大日本帝国は洋風の戦力整備を経ていたことで清国軍に勝り下関条約で戦勝国としての地位を諸外国に宣言しました。その後、清国での諸外国の利権争いにたまりかね、「扶清滅洋」を叫ぶ義和団を支持して清朝・西太后 (1835 ～ 1908) が欧・米・日に宣戦布告したのをきっかけに大日本帝国は軍隊を派遣し西欧諸国とともに弾圧軍を構成し、１９０４年にはようやく凋落期に入りつつあった大英帝国との日英同盟の目的のひとつ、朝鮮・中国（満州）の利権へのロシア進出阻止を目的とした代理戦争（「日露戦争」）を遂行しました。英国のロシア敵視政策は現下のウクライナ戦争にも反映され、それは両国の植民地分割戦争での対立からつくられた政治的伝統の残滓です。

大日本帝国の対ロシア戦の外債発行による戦費（借款）調達はイギリスの口利きで進み、日本は、この資金調達のために国内増税策とともに、塩、たばこなどの製品の製造、販売を旧大蔵省専売局に一括（国営化）し、いわば借金への「担保」確保を策しました[(7)]。

１９４５年８月以降には「専売化」した事業を専売公社化し、「民間」企業とは一線を画した経営形態をとりました。１９８０年代後半に日露戦争戦費の借金が完済される[(8)]までの間の喫煙者は日露戦争戦費の一部の返済のために煙草をふかしていたともいえます。

ほうっておくとどんどんわき道にそれます。

さて、この時期のどこを「古い戦前」といいましょうか。

ある時期を区切り答えるには抵抗があります。外国の領土を占領し、人心を統制し、反対者を殺戮しておきながら、「戦争前」と主張するのはあまりにも理不尽、破廉恥というものです。中国、朝鮮の人たちは武器を手にして在留大日本帝国軍とゲリラ戦とはいえ「抗戦中」だったのですから。当時の大本営（今話題の広島に設営されていた）は、プーチンにさきだつ百年以上も前に大日本帝国軍は「戦争」ではなく「特別軍事作戦」を展開していた、といったのでしょうか。

１８７５年以降の大日本帝国は朝鮮、台湾、琉球の植民地化―武力支配のうえに成り立ち、そのうえに生活、文化の「平穏」があった、といえます。

そこに「戦前」が成立していたといえるとしたら、近隣諸国への断続的な侵略戦闘

行為によって、たかだか大日本帝国内だけでのはなしです、ということを認めなければならないでしょう。

もちろん、その大日本帝国内には軍靴の響きがしだいしだいに大きくなってきて家の中にまで土足で踏み込んできている気配を感じていたひとが大勢いました。渡辺白泉 (1913 ～ 1969) はよく知られた次の句で、それを表現したのでしょう。

戦争が廊下の奥に立ってゐた（1939 年）[9]

また、白泉には次の句があります。

玉音を理解せし者前に出よ（1945 年）

ところで、わたしたちのそばに、日清・日露戦争を戦場で体験し、シベリア出兵を体験し、朝鮮、辛亥革命後の中国との戦闘に加わったひとがいて、そのひとが１９４５年８月１５日を迎えることができたとしたら（もちろん、人間の寿命だけを単純に考えるという前提。その期間の生存は可能です）かれにとって「戦前」とは、いつのことなのか、などとばかばかしくも考えてしまいます。

もうひとつ、どうしても、戦前期をかたちづくろうと思えば、つぎのような第三考目を持ち出すことができます。つまり、時代区分はひとびとの体験と記憶に結びついていてしかるべしとして、たとえば、次のように「戦後」期を規定して「戦前」期の期間を考えることはできそうです。

「戦後」という呼び方を、荒正人の提言（『朝日新聞』一九五六年八月二七日）にしたがって、一九四五年（昭和二〇年）から一九五〇年（昭和二五年）までに限りたい。朝鮮戦争以後は、「戦後」とは質的にちがう時代的体験にぞくする。戦後派という場合には、第一次戦後派（戦中派）は、戦争時代に動員の可能性の中におかれ、しかも満州事変発生にさきだつ軍国主義以前の社会体制の記憶のないもの。つまり、一九四五年に、十七歳から二十六歳まで。第二次戦後派（純粋アプレゲール）は、戦争時代に動員可能性なく、しかも、戦時の小学校教育をおえ戦時の社会で社会的自覚を持つようになったもの。つまり、一九四五年に十二歳から十六歳までのもの。両方合わせると、一九四五年、終戦の年に十二歳―二十六歳までのものが、戦後派である。これが、戦後派の中核をなすわけで、（以下、略）[10]

前述の通りの内容を参考にすれば、１９４５年に二六歳以上になっていたひとたちを戦中派の前の時期の人とするという意味では、「戦前」を形成することはできるかもしれません。

その時期を年表に当てはめて考えれば、シベリア出兵、米騒動のあった一九一八年、朝鮮で三・一運動、中国で五・四運動が展開され、北一輝 (1883 ～ 1937) が『日本改造法案大綱』を発刊し、雑誌『改造』、『我等』、『社会問題研究』などが創刊され、友愛会が労働組合総同盟に発展した一九一九

年以前を「戦前」期とするということになります。

それにしても、ここまで来て、あらためて言いますが、「古い戦前」とは、いつのことだったのでしょうか。そんなものは、やはり、存在しなかったと思えてきました。

現憲法を「戦後憲法」といい、いわゆる「明治憲法」を「戦前憲法」などと表現するひとがおり、そっちにも引っ張られればことはますます面倒になります。

この場合、「戦前憲法」の施行期間を考えれば、「戦前」とは明確に限定できてしまいます。そして、その通りとすると、１９３０年代などはすっぽり「戦前」に入ってしまいます。そうなればなったで、「戦前」規定することとの齟齬を解消しようと、「戦前前期」とか「後期戦前期」とかさらなる時期の細分化とその根拠を示したうえで、歴史的事実をどこかの区分に差し込む、ということを考える人はいるのかもしれません。しかし、そんなことは不要でしょうし、「こんなことできません。」「できません、できません。わたしにはこんなことできません。」[11]

「戦前」がいつからいつまでだって、そんなこともうどうでもいいじゃないの、といいたくもなるに決まっています。

（３）「敗戦―戦後」が生んだ「戦前」（敗北前）

①「古い戦前」の時期の意義

みずから「古い戦前」を掲げ、その「時期」について探ろうとしましたが、案の定、着地に失敗、いまのところ自ら名付けた「古い」について確定的なことはなにもいえません。

しかし、このままでは、なんとも痛ましく心残りです。

そこで、次のような「問い」と「答」にならない「答」だけ掲げておくことにします。

⑴大日本帝国が明治期以降に経験した「戦前」期とは、と問えば、大雑把には、自国の軍隊の中から他国領に戦闘員として派遣されている者（職業軍人、徴兵者）が外国侵略という戦闘状況にありながら、戦闘員以外の「国民（内国人）」が不自由さのなかでも日常生活を送れている、そんな日々のことでしょうか。「内国人」と断りを入れたのは、東アジアの人たちが政治的・軍事的強制力により、あるいは商業ベースで流入、流出をくりかえしながら、内国人の差別意識に晒されながら大日本帝国内に居留していたことをはっきりさせておくためです。

これらの状況をひっくるめて「総力戦体制」確立にいたる前、といってしまいそうになるのですが、そういうためにはもっと手続きが必要になります。つまり、これは「戦争観」におよぶ話になりましょう。「総力戦体制」[12]ということにまみえるには、まだまだ、力不足です。

⑵「戦前」は正対して現に認められることではなく、振り返るというしぐさのもとで視線の先にあることがらとでもいえばいいでしょうか。振り返る支点となる頭部や足腰がぶれれば、「戦前」はいかようにでもぶれるのです。

②「戦前」の意味合い

さて、懲りずに、めげずに、そして、震れずに、こんどは、目先を「時期」から「戦前」の「意味合い」に転じてみましょう。

昨年暮れ、アメリカのシンクタンクが２０１６年に設立した「バーグルエン哲学・文学賞」を受賞した柄谷行人 (1941 ～) は、『〈戦前〉の思考』（１９９４年初出）の「あとがき」に次の通りに述べていました。

> ここ数年来、「共産主義が終わった」、「五五年体制が終わった」というふうに、「終り」が強調されてきた。しかし、そのようにいうとき、われわれは実は〈戦前〉に立っているのではないかと思う。実際、戦前においても、共産主義の終焉、自由主義の終焉、西洋の終焉、近代の終焉、そして世界最終戦争というふうに「終り」のみが語られた。たぶん、人が「終り」を口にするのは、実は何かの「事前」に立っていることを直感しているからだろう[13]。（傍線は引用者による）

この文章にある傍線部の「戦前」は、わたしには曖昧に思えます。それは、単に「時期」が明示されていないということではありません。

むしろ、わたしは、ひとびと、つまり、大日本帝国臣民の多くが１９４５年８月１５日敗戦を宣せられたとき、ただただ呆けていたわけではないし、これから先のこと、これまでのこと、その両方を思い、口にできたはずだし、できただろうと思っています。柄谷がここではそのことに拘泥しておらず、「あとがき」であるこの文章で指針を差し出そうとしているわけではない、「私は、将来の見通しとか解決策について語っていない。決して「終る」ことのありえない諸条件・諸矛盾を明確にしようとしただけである。（略）今後においてどのような「解決」（終り）が唱えられようと、それが欺瞞でしかありえないことを示しえたと思う」[14] と説明しています。

「敗戦」によって終わった「戦争」がもたらした「解決」とはどんなものだったのか、という問いに対して答えることは容易ではありません。むしろ、なんの「解決」ももたらしてはいない、という表現が、かえって当事者の緊張をほぐしさえするようにも思えます。そんなわたしの感覚が、さきの「曖昧」につながっているのでしょうか。

さて、ひとびとは、「大日本帝国」が隣組を組織して相互監視させ、全マスコミを動員し反対派の口を封じ、必要ならば惨たらし方法で人命そして関係を奪い、土地を奪い、建物を破壊し、そのうえで「大本営発表」を軍艦マーチとともにくりかえし始めたときには「戦争期」に突入していることを、また、あるときは旭日旗の小旗を振りながら認めていたし、隣家の出征兵士を「さようなら」といって送りだしながら自分もおなじ立場にいることを、納得してはいました。

天皇が告げる「敗戦」を契機にそうした心持ちとそれまでの体験とが「いびつ」であるという風が今度は吹き始めたとき、渡

辺白泉の「玉音を理解せし者前に出よ」との声に応じることができたものはいたのでしょうか。

すでに姿勢を支えていた心棒を突然外されたと思うまもなく地べたに倒れこんだひとたちの心身にとっては、その立て直しは、なかなかに困難だったはずです。敗戦という事実は、生き残った大日本帝国臣民にとってはまことに身も心をも絞り切ろうとし、また、逆に開放（解放）しようともする焦点機能をもつ事態でした。とはいえ、その心身に刻まれた天皇崇拝も、後日、１９８８年の天皇御不例に際する下血云々の報道について、「なんとおいたわしい、そのようなお姿を報道するとはなんということだ」とは声も上げ涙も流しても「力」として結ばれることはありませんでした。これをもって、敗戦から四〇有余年の時の流れこそ実に勇者、というべきなのでしょうか。

すこし話を戻しますが、第三考とし引用した文章中の「戦中派」とは、ほぼわたしたちの父母の世代に当てはまります（高齢人口構成率の高い日本、戦中派が完全にいなくなる日は近づいている、といえます）。したがって、かれらがどんな「戦前」を語りえたのかと考えたとき、実はかれらには「戦前」などなく、「戦中」として語る記憶しかありません。かれらのする話はほとんどすべて「戦争体験」です。

そして、かれらは、「戦中」の生活環境によって、「敗戦」という事態の重さに耐えきれず、いわばノックアウトされたままに地面に倒れ込んで息を吹き返したときにはじっと動かず、事態を理解しようとする者であったか、ノックアウトされたなどと思うこともなく、したがって、地べたに伏したりなどしていない、いられないと、「戦中」―「敗戦」の事実など思い起こすこともなく、すぐさま前だけ向いていこうとする自分だけを温存した者だったか、そのいずれか、あるいはそのバリエーションであったでしょう。

「敗戦後」、かれらの語りうる「戦中」と語りえない「戦前」との併存とは、「天皇制」の絶対専制とその後の「人間宣言」の双方の体験とつながり、息切れしないまま、むしろ「天皇制」に蝶番の役目を与えて保たれて来たといえます。

「戦前」と「戦後」とは「敗戦」が生んだ双生児の、いまだに併存する観念です。

そして、わたしたちは「平和な戦後」のなかで歴史的存在として「戦争期」に飲み込まれ覆い隠された「戦前期」よりも「戦争期」を二度とあってはならないものとして忌避し発言してきました。

中井久夫 (1934 ～ 2022) の次のようなことばを思い出してみてもいいでしょう。

> 戦争と平和というが、両者は決して対照的概念ではない。前者は進行してゆく「過程」であり、平和はゆらぎをもつが「状態」である。一般に「過程」は理解しやすく、ヴィヴィッドな、あるいは論理的な語りになる。これに対して「状態」は多面的で、名づけがたく、語りにくく、つかみどころがない[(15)]。

（４）「新しい戦前」

①「状態」としての「戦前」

繰り返しになりますが、「戦前期」の字義とは、「戦争」開始がいつであるかが明確にわからないとしても、「戦争」に突入しているんだと感得したときには終わったことということだといえます。

かつて、ひとびとが「戦争だ」と認識ができるきっかけは、召集令状の特別送達があった、肉親の戦死公報の通達があった、大本営発表がやかましく戦果を広報することによってとか、また、アメリカ軍の艦砲射撃やＢ２９爆撃機による空襲によって「真実」の戦争を知ったとか、さまざまだったにちがいありません。ひとびとはどこかで、中井久夫のいう「状態」から「過程」への心象の切り替えをおこなったのです。もっとも、当時のひとたちにはだらだらと続いていた「戦前期」が「戦争期」に切り替わったなどという認識は持ちようもありますまい。そのときには、ことばにも身の回りの状況にも「戦争」という軸（心棒）が動かしがたいものとして設けられていました。

ひとびとが戦争を語り、語り継ぐのは、その忌避感からの振り返りによることにほかなりませんが、それは、すなわち、時の過ぎた後の当人またはほかのひとたちの「歴史的な」視点によって眺めることができたからだ、といえることです。その「戦前期」があったことをひとびとがおぼろげであれ意識できたのは「敗戦」のもたらしたショックとでもいえばいいでしょう。

ともあれ、「敗戦後」からの眺めだけではなく、敗戦時前に関する証言などによれば、全国民が同じ方向だけを向くように教育を受け、また、そのように強いられ、みずからそれを支えもしたわけですから。

一方、戦争遂行勢力や軍隊にとって「戦前期」とは、すでに「過程」に組み込まれていたのであり、「総力戦」体制にいたるまでの、どこかではっきりとした区切りをつける必要などない「戦争期間」にほかなりませんでした。

わたしたちは、戦争が「終った」とき、ひとびとは自分の敗戦に至るまでの体験をどういうふうに考えたのか、考えようとしたのか、と立ち止まって考えるとし、また、わたしたちが見聞きしたのは、「敗戦後」期にあって、戦争期を過ごしたということをどう考えるのか、と思慮するひとたちだったのですが、どうも、わたしたちは自分の視点を個々（人）の事情というレベルに設けてはじめてなにごとかを知ることができるのではないかという思いを捨てられません。先にも言いました通り、戦前期の認識は、その有無を含めて、人それぞれ、千差万別でした。

「戦前期」が終わったと認識したひとたちがどれほどかいた、となるとまた話はややこしい。

②「戦前」とはやせ細りつつある平和のことか

共同通信客員論説委員・岡田充(1948～　)は、「「安保３文書」決定は台湾有事を煽る外交的敗北だ　日本の衰退を加速させる一方の防衛費増額」を東洋経済ＯＮＬＩＮＥに掲載しています（配信は２０２２

年１２月２４日)。「今進めるべきなのは、中国脅威を煽って対中軍事力強化を弁解することではない。中国敵視をやめて、停止状態にある日中首脳交渉を再開して信頼醸成を図ることが求められる」というものです。

わたしは、タモリが慣れ親しんでいる人物がコーディネートする「徹子の部屋」という番組で親しく「内向き」に「新しい戦前」と語ることよりも岡田の言の方に、その具体性により事態への対応の妥当性を感じます。そして、タモリの言動が「内向き」なのは、かれが「外交」の可能性を語らないままに座を占めて認められている「内」にのみ認識を集約しようとしたから、あるいはなにがしかの自信からなのか、と思うのです。

あるいは、タモリがいう「戦前」とは、ロシアのウクライナ侵攻を真に受けとめて、ここぞとばかりにアメリカとの安全保障条約―日米同盟に腐心し、役に立つかどうかは二の次、アメリカ軍事産業へ「国民」の納めた税金、また、納めるのであろう税金に紐をつけて貢ぐ「国政の態度」、その急傾斜化のことでしょうか。

もし、そうならば、とっくの昔に、われわれは「日本国」が沖縄米軍駐留経費を支払い、給油だとか見回りだとかで軍隊の海外派遣体験済みであり、漸次、内閣が憲法解釈を変更してきたことを知っています。いまさら、「新しい戦前」というのであれば、むしろ、それ自体の認識不足を批判されても仕方ありません。

最後に次のような投稿が『朝日新聞』「声」欄（「どう思いますか　憲法と平和」）に掲載されているので、ここに記してだけおきます。

> （略）わたしは、戦中派で、戦争と共に少年時代を過ごした。いまから思うと、戦争が始まる前の状況を知っていた大人たちは「戦前」を意識していたのかもしれない。歴史の教訓から、私たちは戦前から戦後に踏み込むことを最大限防がねばならない。いまこそ第２次世界大戦後に生まれた平和憲法を生かし、平和の尊さを日本から世界に発信することが、内閣の責務ではないだろうか[16]。

タモリはタモリの「終り」を自覚したのでしょうか。どうも、こりゃぁ危ないな、と。

いや、タモリをよく知るひとは、「タモリ、とっくに了ってるよ」というでしょう。

すると、かれのテレビジョンでの姿は、すでに、いわば余禄とでもいえるものなのかもしれません。

わたしは、余禄と付き合った、ということかぁ。

注

(1)　吉本隆明「映像の共同体」(『情況としての画像』所収　河出文庫版　１９９５年　２７―２８頁)

(2)　引用は注記を含め、https://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/2016/02/5719824-5c84.html による。それによると、対談の初出は『平凡パンチ』１９８２年4月１２日・１９日・２６日号

その内容が、吉本隆明『思想の基準をめぐって』(深夜叢書社刊　１９９４年7月）に「現代と若者」として転載されました。

(3)　２０２３年3月9日　ＮＨＫ―ＢＳ１「最後の講義　保坂正康」の回での発言

⑷　小森陽一『天皇の玉音放送』（五月書房　２００３年　５３頁）

⑸　宇野重規「国際環境に流される日本」（２０２３年２月２１日付『朝日新聞』朝刊　耕論「侵攻にみる現実と規範」）

⑹　ウィキペディア「石橋湛山」の項に１９２１年に石橋湛山が書いたとみられる『東洋経済新報』社説の一部が紹介されています。なお、このウィキペディアの同じ項のなかでは、田中秀臣 (1961 ～　) が石橋の「小日本主義」について次のように述べていることを紹介してもいます。

「石橋湛山の小国主義は、政府・日本銀行の適切な政策運営で日本の潜在成長をサポートしていく、というリフレ政策の立場を基礎にしている」

「『リフレの経済学』は小国主義的であり、自国の政策によって、国内の経済・社会問題を解決し、他国を政策に利用せず不干渉で近隣諸国と友好を測る方策といえる」

（田中秀臣『経済政策を歴史に学ぶ』（ソフトバンク新書　２００６年　２１２―２１３頁）

⑺「日露戦争と大蔵省」をネット上で検索すると、財務省のＨＰ　https://www.mof.go.jp　にある 3ki_c2.pdf という文献を見ることができます。「第２章　日露戦争と大蔵省　第１節　日露戦争の戦費調達」および「第２節　専売事業の確立」を参照ください。

なお、借金の担保には関税収入やたばこ事業収益などを当てていたようです。

⑻　麻生太郎財務大臣（当時）は、第２０４回国会、２００２年２月１６日の衆議院金融財務委員会の席で次のように発言しています。(「衆議院議事録」による）

（略）国債というものは、ご存じのように、日露戦争のときの国債、１９０５年ですから。あの国債をいつ返したんだと。あれは１千万ポンドを借りているわけですから、戦時公債として。１千万ポンドの戦時公債を払うという約定から大幅に、第２次世界大戦等々もありましたので、日本は敗戦国にもなっておりますので、そういう意味では、あのときの公債というのは、実際は１９８８年に返した。だから８５年か何かで返し終わっているんだと思いますので（以下､略）日本は何年かかろうがご先祖様の力で借金はきちんと返してきた、それで約束を守るという信用を諸外国から得ている、というのが、麻生の「持ち駒」であり、ことあるごとに、これをくりかえしているようです。巨額の国債を発行している日本政府の金融財務政策に関する防衛線です。

⑼　渡辺白泉らは、１９４０年には治安維持法違反で拘束されました（「京大俳句事件」）。

⑽　久野収　鶴見俊輔『現代日本の思想―その五つの渦―』（岩波新書　１９５６年　１９０頁）

⑾　ＮＨＫ Ｅテレ番組「おかあさんといっしょ」より

⑿　山之内靖 (1933 ～ 2014) に『総力戦体制』（伊豫谷登士翁ほか編　ちくま学芸文庫　２０１５年）という書物があります。

⒀　柄谷行人『〈戦前〉の思想』（講談社学術文庫　２００１年　２５０頁）

⒁　関連個所はつぎの通り。

本書において、私は、将来の見通しとか解決案について語っていない。けっして「終る」ことのありえない諸条件・諸矛盾を明確にしようとしただけである。それは解決の提示ではまったくない。しかし、今後においてどのような「解決」（終り）が唱えられようと、それが欺瞞でしかありえないことを示しえたと思う。私は悲観論者ではない。ただ、認識すること以外にオプティミズムはあり得ないと考えている。

⒂　中井久夫「戦争と平和についての観察」（『中井久夫集９』 みすず書房　２０１９年　２頁）

⒃　２０２３年５月１７日付『朝日新聞』朝刊　投稿者は９２歳の方。投稿の書き出しは「昨年末、タモリさんが黒柳徹子さんの番組で…」です。なお、引用箇所は、文の末尾部です。

２０２３年５月２０日　記す。

（さとう　ひろあき　見当見習）

『乙丙の頃（1815 － 16 年）の覚え書き（其の九)』を試・私訳

ヤオ　イミン

小序

清朝末期の詩人・思想家の龔自珍（きょうじちん）（1792 － 1841、号は定盦（ていあん））は二十五歳頃に「乙丙之際著議第九（原題)」という、「三千年未有の時代」の到来を予言した名文を著した。のちに中国近代文学と思想の開祖と賞賛された彼は、李白に次ぐ詩才や「経世治用」的な学問を抱えながら、清末の文化界のスーパースターとして高名を得ていた。梁啓超が評価したように、アヘン戦争以来の変革や維新派や革命党の多くが一時期彼に傾倒していた。「電撃を受けるように震えた」と、梁氏が彼の文章を読むときにこう嘆いた。

深く『春秋』という経典を知る人の史論によれば、有史以来、時代は三種があり（衰乱世、昇平世、太平世ーー訳者注)、三種の時代はそれぞれにふさわしい人材を生み出している、という。だが、人材の特質の違いから見れば、治世（ユートピア）、乱世（ディストピア）のほか、衰世という時代がある。

衰世とは、その言説も治世に類似し、名分も治世に類似し、見た目や表象や人の笑い声や音の高さも治世に類似している時代である：

白と黒が雑りあい、五色（ダイバーシティ）の区別が見づらくなるさまは、治世の純潔で明るい白さと同じように見える。

音色の違いやけじめがなく、五音階の協調性が崩れたさまは、治世の靖らぎや静謐（せいひつ）とかわらない。

路線が荒廃し、右や左などの境界線が崩れたさまは、治世の平々坦々で広々とする自由空間に似ている。

人の心は混沌して、正しいことばかりを言って批判を畏れるさまは、治世の紛議なき状態と同様に見える。

政界の左右に才ある官僚や知識人もなく、戦場に才ある指揮官なく、学校に才ある次世代なく、自治体に才ある市民なく、工場に才ある労働者なく、市場に才ある経営者もない。さらに街に才ある泥棒さえもなく、山に才ある盗賊さえもない。「君子」が乏しいだけではなく、「小人」もまた極めて尠（すくな）い。

このような時代にあたって、才ある人々があらわれると、凡百の不才の輩が寄ってたかって取り締まり、縛り上げ、はては殺してしまうのである。殺すのに、包丁や銃

剣などを用いるわけではない。言説も殺すし、名分でも、見た目や表象や人の笑い声や音の高さでも殺す。そして殺すにあたって、有権者や公権力にも上申せず、組合にも伝達しない。もちろん権力者たちもまたその責を負おうとしない。

さらに彼らの殺し方にも要領を得なく、ただその心を殺すのだ。

その憂える心を殺す。

憤りを能くする心を殺す。

思慮を能くする心を殺す。

作為を能くする心を殺す。

廉恥（はじ）を能く知る心を殺す。

汚れを拒否する心を殺す。

それも一日で殺すのではない。じわじわと、ときには三年かけて殺し、ときには十年かけて殺し、あるいは百年かけて殺す。才ある者は、自分が殺されつつあると覚えると、日夜治世を求めて呼びつづける。だが治世が求めようもないとなれば、ラディカルな者は日夜乱世を求めて呼び始める。しだいに人々は、ニヒルや暴力に現を抜かし、かしこくなる一方で虎視眈々として、一世を己の利便に供しようとするのだ。

こうなれば、すでに人才の有無はよほどの問題ではなくなる。それでかの凡百の輩が喧しく、「ほら、いったもんだ」、などなど、と騒ぎ立てる。このような世をよく見れば、意外にも乱はもはや間近である。

さればこそ、よく勉強してきた人々は、三千年来の史書をよく読んできて、良い歴史家の憂いを持って天下を憂えるのである。

ヤツらが才ある者が現れる世を憂えるのと同様に、才なくして凡庸なる者の世を憂える。

才があるせいで皆が畏れる世を憂えるのと同様に、才なきために皆が哀しむ世を憂える。

霜を踏む足は、来るべき堅氷を予感してより寒く感じる。

雨の兆しにそなえる鳥は、風の音だけにもこころが痛む。

壊疽（えそ）ほど怖くないが、潜伏する症状はもっと危険である。

萎れそうな花を見るたびに、枯れ木を見るより胸が痛む。

古来の聖人たちは、奇巧の士や挑戦者も見捨てず、鈍いものや貧弱者を手厚く養成して、時世の変化に目を凝らした。これこそ聖の極めと言うべきではないか。

（蘭陵嘻々生（らんりょうききせい）　訳）

吾聞深于春秋者、其論史也、曰、書契以降、世有三等、三等之世、皆觀其才。才之差、治世爲一等、亂世爲一等、衰世則爲一等。衰世者、文類治世、名類治世、聲音笑貌類治世。黑白雜而五色可廢也、似治世之大素。宮羽淆而五聲可鑠也、似治世之希聲。道路荒而畔岸隳也、似治世之蕩蕩便便。人心混混而無口過也、似治世之不議。左無才相、右無才史、閫無才將、庠序無才士、隴無才民、廛無才工、衢無才商、抑巷無才倫、市無才賈、藪澤無才盜、則非但鮮君子也、抑小人甚鮮。當彼其世也、而才士與才民出、則百不才督之縛之、以至于毀之。毀之非刀、非鋸、非水火。文亦毀之、名亦毀之、聲音笑貌亦毀之。毀之權不告于君、不告于大夫、不宣于司市、君大夫亦不任受。其法亦不及要領、徒毀其心、毀其能憂心、能憤心、能思慮心、能作爲心、能有廉耻心、能無渣滓心。又非一日而毀之、乃以漸。或三歲而毀之、十年而毀之、百年而毀之。才者自度將見毀、則蚤夜號以求治。求治而不得、悖悍者則蚤夜號以求亂。夫悖且悍、且睊然睭然、以思世之一便己、才不可問矣。鄉之倫、聒有辭矣。然而起視其世、亂亦竟不遠矣。是故智者受二千年史氏之書、則能以良史之憂憂天下、憂不才而庸、如其憂才而悖。憂不才而衆憐、如其憂才而衆畏。履霜之驕、寒于堅冰。未雨之鳥、戚于飄搖。癉瘵之疾、殆于癰疽。將萎之華、慘于槁木。三代神聖、不忍薄醨士勇夫、而厚豢駑羸、探世變也、聖之至也。

解説

海内での詩名がますます高まるとかわりに、龔定盦は政治の場で不遇な扱いを受け続けていた。アヘン戦争が勃発する前の1839 年、禁煙を担当する大臣かつ親友である林則徐を追いかけて南下し、そして風雲劇変する 1841 年に謎に急死した彼は、死ぬまで時代の行き方を模索していた。一方、まだ天朝（せんしんこく）の夢を見ていた清帝国はそれまでにずっと彼をバカ扱いにして評価しなかった。こういった「バカ」が、バカの愚痴を文章・学問・詩に綴り、林則徐・魏源などの親友や思想家にリレーし、アジア思想における「近代」の幕を開けた。

「但開風気不為師。」

（「但し風気を開き、師に為らんとする」）

という名句を詠んだこのバカ野郎は、近代の歴史の中で無視できない星であり、眩しく夜空に輝いた。

ところで、日本語文献の中で龔自珍の存在感は非常に薄い。おそらくそれは翻訳の問題だと考える。詩才において李白とも並べる龔氏の詩文は華麗で放恣であり、大量な出典や思想背景を掌握しない限り読解しにくいというイメージは、多くの研究者の中で言われている。だがそれは誤解である。龔自珍の詩文は非常に孤独的である一方、多くの人々の心に長く響けるように言葉を綴っている。それは、古典や学問、生活経験の間に言葉を探し、モヤモヤする気分を形に捉える遊びである。笑らってくれる、泣いてくれる、共感してくれる、生々とした感性の共有である。そして単に言葉や知識の羅列ではなく、リズムや強度にこだわった経験の再生でもある。直訳は、緊急措置に過ぎない。

漢文は直訳すればいいという日本語の錯覚はあるが、それで漢文が敬遠されるのもおかしくもない。翻訳は一人、一回でやればいいという錯覚もありがちなのだが、反複にテキストを咀嚼し、生活経験を参照してニュアンスと用語をアレンジするやり方もある。そうではないと、翻訳は言葉の骨を発掘する考古学になるのだ。骨、死人を生者世界から測定・排除した実証主義に対して、200 年前と今をわたる詩・死の世界を肯定するのは、人文学の役目もあると思う。少なくとも「髑髏の復活」は文化史の中では珍しい題材ではない。

従って前文において、岩波書店『原典近現代中国思想史（一）』によって発掘された髑髏を勝手に横領し改造したいと思う。大雑把に現代語に直された現有成果の上、そのリズムと行間、用語などをもう一度アレンジすることで、髑髏に関節と血肉を与え、死文を詩文に蘇生させたいと思う。

訳者　頓首

（やお　いみん　「定盦門下走狗」）

말과 세태

코로나 재난 속의 경마장

니시카와 가즈키（西川和樹）

경마는 한 마리의 드라마가 아니라 군중의 드라마라는 겁니다.

데라야마 슈지（寺山修司）

0. 시작하며 : 경마와 기억

경마 팬에게 코로나 재난이란 어떤 사건이었는가? 본고는 이 물음에 대한 것인데, 그에 앞서 경마와 기억의 관계성에 대해 탐색하는 데서 시작하고자 한다.

개인적인 이야기를 하자면, 경마에 대한 가장 오래된 기억은 지금으로부터 30 년 가까이 전으로 거슬러 올라간다. 사쿠라 치토세 오가 승리한 천황상（天皇賞）가을. 그해 가을에는 여동생에 해당하는 사쿠라 캔들도 엘리자베스 여왕배에서 승리했듯, 이 무렵에는 이름에 '사쿠라' 라는 단어가 들어가는 말이 실로 곧잘 달렸다. 지금은 흐릿해진 이 시절 기억은 텔레비전 화면을 통해 얻은 것이겠지만, 신기하게도 영상 기억이라기보다는 오히려 신문이나 잡지를 통한 문자 정보로서 머리에 새겨져 있다.

처음 경마장에 간 것은 아마 그 이듬해였을 것이다. 이쪽은 좀 더 신체적인 감각을 동반한 형태로 기억한다. 사쿠라 로렐이 승리한 올커머. 그 무렵에 쓰다누마（津田沼）에 살던 조부모님 댁을 찾은 김에 아버지가 근처의 나카야마（中山）경마장에 데려갔던 것 같다. 1996 년 가을, 아직 소학생이던 시절 내 작은 몸의 감각이 떠오른다.

어릴 때부터 경마를 접한 사람이 왕왕 그렇듯 그 만남은 가정 환경에 기인하는 면이 크다. 내 경우 소학교에 입학해서 글자를 배우기 시작하고 얼마 되지 않아 아버지가 경마 신문이나 경마 게임을 건넨 덕에 경마와 관련된 기본적인 문해력을 길렀다. 그 시절에는 전화 회선과 패미콘을 이용해 집에서 마권 투표가 가능해진 때기도 해서, 기계를 잘 못 다루는 할아버지의 부탁으로 마권 종류나 구입 방식도 얼추 배웠다.

취미란 요컨대 그와 관련된 방대한 데이터베이스를 머릿속에 넣고 그 개개의 요소가 이루는 변화나 중첩을 즐기는 일 아닐까? 경마의 문해력을 습득하기까지（소학생에게는）엄청난 수의 새로운 단어를 배워야 한다. 터프 (turf), 마일 (mile), 페브러리 (February), 노던 (Northern), 사일런스 (Silence) 등등, 잇따라 출현하는 외래어를 의미도 모르는 채 머리에 흡수하던 기억이 난다. 요즘 영어 조기 교육의 중요성이 떠들썩하게 거론되고 있는데, 내게는 이

것이 영어 교육의 시작이었다.

경마 팬이라면 한 번쯤은 이렇게 스스로의 오래된 층을 뒤지듯이 경마와의 만남을 이야기하게 되는 것은 일단 경마 자체가 기억이 자아내는 예술이라 할 수 있기 때문이다. 계절의 순환은 경마를 성립시키는 중요한 요소로, 매년 매해 같은 계절에 같은 경주가 돌아온다. 벚꽃이 피면 벚꽃상(桜花賞), 5월 말의 일본 더비, 가을에는 프랑스 개선문상, 연말에는 아리마(有馬) 기념…… 하지만 같은 경주가 돌아온다고 해서 경마장을 달리는 말의 대열, 성원을 보내는 관중들, 경주 후의 뒷맛, 뭐 하나 같은 것은 없다. 제 손에 든 마권의 성패는 물론이고 경주의 전개, 응원하는 말의 노력, 승자의 말, 패자의 말, 그런 모든 것들이 합쳐져서 하나의 경주가 완성된다. 그 결과를 앞에 두고 환희나 감동은 그대로, 분함이나 슬픔이나 분노 같은 부정적인 기분도 수용하면서 경마 팬은 또 새로운 기억을 스스로에게 새긴다

물론 매주 빠짐없이 경마를 본다고 한들 열을 올리는 정도는 다르니까 기억에 남는 정도도 다르다. 그래도 특히 일 년에 몇 번 있는 큰 경주 가운데에는 그때의 신체 감각이나 장소의 공기감을 포함해 시간이 지나도 선명하게 떠올릴 수 있는 장면이 분명 있다. 가전제품 판매점의 텔레비전 매장에서 본 1999년 아리마 기념, 태풍이 직격한 가운데 교토(京都) 경마장으로 달려간 2017년 국화상(菊花賞), 입원 중에 침대에서 본 2021년 일본 더비 등등, 마치 나무가 조금씩 자라는 것처럼 경마와 관련된 기억의 줄기는 매년 새로운 나이테를 더하듯이 커져 간다. 자신의 신변에 일어난 사건을 하나의 경주와 연결해 오래된 기억을 재생하기 위한 참조 축으로 삼는 것은 경마 팬의 습성인지도 모르겠다.

본고는 코로나 시대를 경마와의 관계 속에서 기록하고자 쓴 것이다. 이를 통해 경마장이라는 '장'이 위기의 시대에 맞춰 어떻게 변화했는가를 다시금 질문하고, 요 몇 년 사이 세간을 떠들썩하게 한 코로나 시대를 이해하는 데에 일조하고 싶다. 이 물음을 축으로 펜을 움직이는 과정에서 경마장은 단지 사람들이 열광하고 도박에 열중하는 장이 아니라 사람들의 집합적인 기억이 머무르는 상상/창조의 공동체임을 보여줄 수 있기를 바란다.

1. 도주마의 시대, 추입마의 시대

코로나 재난 속의 경마를 독해하기에 앞서 시대는 조금 과거가 되지만 말과 세태의 관계를 자못 독창적으로 이야기한 데라야마 슈지와 무시아케 아로무(虫明亜呂無)의 대담『경마론』을 펼쳐보고자 한다. 경마론의 고전으로 유명한 이 책은 둘 다 열정적인 경마 팬인 극작가 데라야마와 연극 평론가 무시아케가 다양한 각도에서 경마에 대해 이야기한 것인데, 뿐만 아니라 대담이 이루어진 1960년대라는 시대를 가둬서 결정체로 만든 듯한 책이다.

「경마는 군중의 드라마」부터 시작하는 대담에는「경마는 서정시인가, 서사시인가」,「영웅은 늘 인공적이라는 사상에 대해」,「패자로 태어나는 문화」등의 표제가 늘어서 있다. 현대적인 눈으로 보면 지나치게 치장한 듯이 보이지만, 그 점을 빼더라

도 거기에는 경마의 깊이를 엿볼 수 있게 해주는 금언이 아로새겨져 있다.

각각을 상술할 수 없는 것은 아쉽지만(지쿠마 문고(ちくま文庫)로 입수할 수 있으니 관심이 생기신 분은 꼭 원전을 찾아보시기 바란다), 여기서 다루는 것은「도주마의 시대, 추입마의 시대」라는 표제로 시작하는 데라야마의 이야기다.

경마의 기초 지식을 복습해 보자. 경마란 정해진 거리를 가장 빨리 주파하는 말을 예상하는 것인데, 말들은 출발부터 전력질주하는 것은 아니다. 말을 탄 기수는 세심한 주의를 기울이면서 페이스를 배분하고, 결승선에 이르는 마지막 직선까지는 각각의 말의 적성에 맞는 위치를 잡고자 한다. 결승선을 가장 먼저 주파하기 위해서는 상응하는 페이스 배분과 전술이 필요하며, 강한 말이란 곧 기수의 행동에 가장 잘 응답할 수 있는 말이라고도 할 수 있다.「도주마의 시대, 추입마의 시대」에서 데라야마가 이야기하는 '도주마', '추입마'란 그 같은 전술 가운데 양 극단의 경주 운용을 주특기로 삼는 말을 가리킨다.

'도주'란 스타트 대시에 성공해 후속마들을 따돌리고 그대로 결승선까지 주파하고자 하는 것이다. 무리를 이끄는 리더로도, 무리에서 달아나는 겁쟁이로도 보인다. 당연히 리스크가 높은 전술이기도 해서, 경주 초반에 체력을 다 쓰는 바람에 속도가 늦어져서 큰 패배를 맛보는 경우도 드물지 않다. 반대로 '추입'이란 선행하는 말들의 속도가 떨어지기를 기다리며 중반까지는 뒤쪽에서 체력을 온존하고, 마지막 직선에서 형세 역전을 노리고자 하는 것이다. 다른 말을 단숨에 추월하는 순발력과 말들의 정체를 뚫고 나가는 담력이 필요 조건이다.

각각의 전술에는 일장일단이 있고, 전술과 경주 전개는 마권을 구입하는 경마 팬이 밤을 새울 만큼 중요한 요소다. 어쨌든 다른 말의 추월을 한 번도 허용하지 않는 깔끔한 '도주'와 결승선 앞 몇 미터의 '추입' 대역전은 겉보기가 화려하기도 해서 그만큼 인기가 붙기 쉬운 전술이기도 하다.

「경마론」의 데라야마는 '도주마', '추입마'를 언급하면서도 이러한 일반적인 이해와는 다른 각도에서 접근한다. 데라야마가 우선 주목하는 것은 수많은 말들 가운데 사람들은 어떤 말에 끌리는가라는 본질적인 물음이다. 단적인 대답은 사람은 자신과 공통점이 있는 말에 끌린다는 것이다. 이 점을 짚어 데라야마는 "스스로를 산다. 즉 경마장에 굳이 한 장의 종이가 된 스스로를 사러 가는 셈이다. 그래서 다들 자신과 많이 닮은 말을 사서 온다"라고 이야기한다[1].

경마의 '예상'이라는 것은 대단히 복잡한 과정이다. '강한 말'을 고르는 사람이 있는가 하면 '좋아하는 말'을 고르는 사람도 있다. 데이터를 중시하는 사람이 있는가 하면, 전술이나 혈통을 중히 여기는 사람도 있다. 행운의 숫자나 오컬트적인 요소로 예상을 세우는 사람도 있다. 그리고 대체로 틀린다. 이러한 '예상'이라는 행위를 뒷받침하는 것 속에 '자기 자신'이 포함되어 있다고 데라야마는 말하는 것이다.

그것이 군중적인 행동 양식이 되고 말의 인기가 되어 나타날 경우에는 어떻게 말할 수 있을까? '도주마', '추입마'를 언급하면서 데라야마는 이렇게 쓴다.

“극히 조잡한 사회과학 식으로 말하면 사회가 상대적으로 안정돼 있을 때는 도주마가 평가를 받습니다. 이는 현상 유지로 어디까지 도망갈 수 있는가라는 발상에서 유래해요.”[(2)] ‘도주마’는 안온한 생활 또한 태우고 달린다. ‘추입’에서는 그와 반대의 일이 일어난다. “반체제 운동이 흥하는 기운 속에서 추입마가 평가를 받는 건 형세 역전이라는 느낌이 많이 있는 거죠.”[(3)]

사회의 기세가 말의 위치 정하기와 겹쳐진다. 여기서 이어지는 다음의 이야기는 「경마론」에서도 가장 기세가 좋은 부분 중 하나로 경마와 세태를 생각할 때 중요한 시사를 준다. 조금 길어지지만 한번에 인용한 다음 코로나 재난 속의 경마에 대해 써 나가는 계기로 삼아보자[(4)].

> 가령 안보 투쟁이 있었던 해에 대중은 ‘역전’ 무드를 대망했어요. 그 해에는 헬리오스라는 한쪽 눈이 안 보이는 도주마가 있었는데, 막바지를 달리는 속력이 대단했지만 클래식 경주에서는 일승도 못 거뒀죠. 그 해는 스타 로치가 아리마 기념에서 예상을 뒤엎고 크게 승리한 걸 비롯해 기타노 오자, 쿠리페로 등의 추입 역전마가 활약했어요. 이상한 일이죠. 상대적으로 평화 무드가 돌기 시작하면서 각자가 가정에서 전기 냉장고를 중심으로 몽상을 시작하니까 메이즈이 같은 도주마에 대한 기대가 높아져요. 스탠드에서 “그대로 가!” “그대로 가!” 외치잖아요. 달아나고 있는 건 메이즈이가 아니라 자신들의 안정된 가정 생활(my home)이에요.

2. 스테이 홈 경마론

“달아나고 있는 건 자신들의 안정된 마이홈”이라는 건 명언이다. 이를 본따 코로나 시대의 경마를 표현한다면 “바깥에서 스테이 홈을 되물리치다”라고 하면 될까? 코로나 재난 속 경마계에서 일어난 주요 사건에 대해서는 다음 절에서 구체적으로 살펴보자. 불요불급한 외출 자숙을 권하던 이 시기, 관객은 경마장에 들어가는 것이 허용되지 않았지만 경주 자체는 예정대로 시행되었다. 여기서는 2020년을 획기적으로 인상 지은 경주로서 초봄에 열린 두 개의 경주, 벚꽃상과 고월(皐月)상을 다루겠다. 두 경주 다 “집안에 있으라”고 강박적으로 외치는 세간에 맞서듯 승리마가 경주 종반에 ‘바깥’에서 호쾌하게 진출하여 앞서 가는 말을 압도적으로 추월하며 우승했다.

먼저 벚꽃상부터. 히가키 다쓰야(檜垣立哉)는 『철학자, 경마장에 가다』라는 저서에서 “벚꽃상이야말로 경마의 꽃이다. 나는 벚꽃상이 일본 경마의 중심임을 믿어 의심치 않는다”라고 단언하고 다음과 같이 묘사한다[(5)].

> 벚꽃이 흐드러지게 핀, 한신(阪神) 경마장이 있는 니가와(仁川). 나는 오사카(大阪) 북부에서 매년 눈보라처럼 날리는 벚꽃 속을 자동차로 서쪽으로 달린다. 대학이 있는 (경마 팬이라면 친숙한) 마치카네(待兼)산을 넘어 왼편에 이타미(伊丹) 공항의 활주로를 보면서 이나(猪名)강을 지나쳐 쇼와(昭和 일본의 연호로 1926년~1989년: 옮긴이) 초기의 한신칸(阪神間 오사카

와 고베 사이의 지역 : 옮긴이) 문화를 잘 전해주는 솔숲이 우거진 무코(武庫)강을 빠져나간다. 눈앞에는 한신 경마장의 위치를 확인하는 랜드마크 같은 가부토(甲)산. 그것을 표지 삼아 벚꽃이 만개한 니가와로 향해 간다.
십 몇 년 전부터 간사이(関西)에 살게 된 내게 니가와의 벚꽃과 요도(淀)의 국화로 가는 것은 흡사 종교적인 순례 의식 같다. 거기서 나는 내가 어찌할 도리 없이 나이를 한 살 먹었다는 것, 지구가 한 바퀴 돌았다는 것을 확인한다.

벚꽃상은 니가와의 한신 경마장에서 열린다. 히가키는 여기서 경마의 규칙성을 확인하면서 벚꽃상의 아름다운 원풍경을 그려낸다. 하지만 2020년의 벚꽃상 때는 비가 올 것 같은 날씨였다. 앞이 보이지 않는 불온한 세태를 반영하는 듯한 날씨였다. 비가 내리면 마장은 질퍽거리고, 이곳을 달리는 경주마에게는 평소와는 다른 적성이 요구된다. 일반적으로 소모가 심한 잔디밭을 달려내는 마력이 강한 말이 대두한다고들 한다. 당일 날씨는 기수의 전술이나 코스 결정에도 영향을 주어 강한 말이 승리하지 못할 때도 있다.

날씨가 경쟁에 미치는 영향에 대해 일괄적으로 논하기는 어렵지만, 이 해 벚꽃상에 관해 말하면 경주 전개는 선행 그룹에 유리했다. 잔디 상태는 때마침 내리던 비로 물을 머금고 있어 보기에도 달리기 힘들 것 같았다. 그 가운데 초반에 선수를 잡은 두 마리의 말이 마지막 직선에서도 선두를 양보하지 않아 그대로 밀고 나가나 싶었다. 후방에 대기하던 말은 이미 힘이 다 빠졌는지 좀처럼 앞과의 차를 메우지 못한다. 그 속에서 단 한 마리 따라온 것이 데어링 택트였다. 그녀는 최종 코너인 직선으로 들어가는 입구에서 '바깥' 진로를 잡았다. 후방 집단에서 빠져나오더니 거리를 쭉쭉 좁혀 몇 십 미터 남은 곳에서 선두에 섰다. 바깥쪽 코스에서 훌륭하게 추월한 것이다. 안장 위의 마쓰야마 기수는 온후한 성격으로도 알려져 있는데, 이 날은 드물게 감정을 드러내며 있는 힘껏 기쁨을 표현했다[6].

벚꽃상이 젊은 암말들이 모이는 일전이라면, 그 다음 주에 열리는 고월상은 수말들이 모이는 중요한 경주이자 다음 달에 열리는 경마의 제전 일본 더비를 내다보며 격전을 벌이는 일전이다. 봄부터 여름에 걸친 이 시기에는 상반기의 중요 경주가 집중돼 있다 보니 계절의 발걸음에 맞춰 매주 충만한 기분이 고조돼 간다. 그러니 무관객으로 담담히 지나간 이 해의 경마는 예년과의 낙차도 커서 경마장은 이질감만 쌓이는 희한한 분위기로 가득했다.

고월상의 무대는 나카야마 경마장이다. 연말에 열리는 아리마 기념의 무대로도 알려진 이 경마장은 삼각김밥처럼 생긴 형상에 마지막에는 직선 오르막이 있는 특징적인 코스로, 말을 잘 다루는 기수의 수완을 시험하는 경마장으로도 유명하다. 뿐만 아니라 고월상은 실력이 미지수인 젊은 말들이 모이기도 해서 매년 파란이 넘치는 결과가 나온다.

하지만 이 해는 가장 관객의 지지를 많이 모은 콘트레일이 쾌승을 거두었다. 주목할 것은 어떻게 이겼느냐인데, 전 주의 벚꽃상

과는 또 다른 형태로 ‘바깥’에서 추월하는 데에 성공한 것이다. 고월상에서 콘트레일이 뽑은 번호는 1 번, 즉 가장 안쪽 출발이었다. 게이트에 따른 유불리도 마권을 사는 팬들에게는 큰 고민 중 하나로, 1 번 게이트와 18 번 게이트에서는 당연히 기수가 잡는 진로가 달라진다. 가장 안쪽인 1 번 게이트는 손실 없이 코스를 뛰어다닐 수 있다는 점에서는 우위에 있지만, 바깥 게이트의 말이 덮쳐오는 경우도 많아서 말에게 괜한 스트레스를 주기 쉽고 무엇보다 마지막 직선에서 진로가 열리지 않는 어려움이 있다.

고월상에서 콘트레일은 가장 안쪽에서 출발한 뒤 중간에 대기해 경주 도중에는 예상대로 ‘안’에서 인내해야만 했다. 이 말을 응원하는 이들의 머릿속에는 그대로 안에 갇혀서 힘을 발휘하지 못하는 전개도 스쳤을 것이다. 승부는 마지막 직선 입구에서 결정났다. 결승선을 향해 가속을 시작하는 많은 말들이 작은 반경으로 회전하는 코너에 대처하지 못하고 바깥쪽으로 부푸는 순간을 놓치지 않고 안장 위의 기수는 눈으로 쫓을 새도 없이 진로를 바꿔 ‘바깥’으로 진출했다. 절묘한 타이밍에 ‘바깥’으로 진로를 연 콘트레일은 쫓아오는 다른 말들의 추격을 따돌리고 그대로 결승 지점에 들이닥쳤다. 기수의 뛰어난 진로 변경이 빛나는 바깥에서의 추월이었다.

그 뒤 데어링 택트는 오크스, 추화(秋華)상에서 승리하고 콘트레일은 일본 더비, 국화상에서 승리해 2020 년은 두 마리의 삼관마가 탄생한 기적의 한 해가 되었다. 경마사에 이름을 남길 새로운 명마의 탄생을 목도하면서도 경마장에 발길을 옮길 수 없었던 것이 원통하기는 했겠지만 많은 경마 팬들은 최대한의 갈채를 보냈으리라. 벚꽃상과 고월상은 그 시작을 고했다는 의미에서 훗날까지 계속 이야기될 경주가 된 셈이지만, 사람들을 강하게 매료시킨 것은 바깥쪽으로 진로를 잡음으로써 현 상황을 타파하는 그 궤적 아니었을까? 이러한 진로 변경은 엄정한 승부의 세계에 몸을 둔 기수들의 순간적인 판단에 따른 것으로, 결코 의도적이지 않을 것이다. 하지만 영어로 ‘콘트레일(contrail)’이 ‘비행운’을 의미하는 것처럼, 고월상에서 그가 달려간 길은 강박관념처럼 ‘집/안’으로, ‘집/안’으로 하고 외쳐대기를 그치지 않는 스테이홈 시대에 이를 되물리치는 ‘바깥’으로의 진로 변경으로서 언제까지나 지워지지 않을 한 줄기 길이 되어 사람들 마음속에 깊이 새겨졌다[7].

3. 코로나 시대의 경마

위에서 본 두 경주는 코로나 시대에 경마계에서 벌어진 상징적인 사건이 되었다. 그러면 더 구체적인 측면에 초점을 맞추어 경마계 전체를 내다볼 때, 사람들의 활동에 제약이 가해지는 특수한 상황 속에서 경마계에는 어떤 사태가 벌어졌을까? 주된 사건을 여기에 기록해 두겠다.

주최자의 발표나 각종 보도를 따라가 보면 경마 업계에서 감염 방지 대책이 이야기되기 시작한 것은 2020 년 2 월 하순이었다. 일본 중앙 경마회(JRA)는 2 월 28 일부터 당분간 무관객으로 경마를 실시하기로 결정하고, 이와 더불어 전국에 흩어져 있는 마권 발매소의 영업 중단도 발표했다. 경마

가 무관객으로 개최된 것은 처음이 아니다. 지난 전쟁 말기, 이 시기에는 오락을 위해 말을 달리게 하는 것은 이미 불가능했지만 군마 양성의 필요성과 마산업 보호라는 명목으로 무관객으로 경마가 열린 적이 있다. 당연히 그때는 마권도 발매하지 않았지만, 이번 경우는 정반대로 인터넷을 통한 마권 투표가 널리 선전되고 원래는 유료 방송인 케이블 텔레비전의 경마 중계가 무료가 되는 등 자택에서 경마 관전을 즐길 수 있는 태세가 정비되었다.

3 월이 되어 감염이 세계적으로 확대되자 경마 개최의 옳고 그름을 따지는 목소리도 들리게 된다. 스포츠계에서는 같은 달에 예정되어 있던 춘계 선발 고교야구의 개최가 중지되고 프로야구 개막도 연기를 발표하는 등 중대한 영향이 나타나기 시작했다. 경마의 경우도 마찬가지로, 서양 각국에서는 개최 중지나 큰 경주의 연기가 속속 발표되었다.

이런 혼란 속에서 3 월 28 일에 개최를 예정하고 있던 두바이 월드컵을 둘러싼 일련의 소동은 당시 상황이 얼마나 유동적이었는지를 보여준다. 매년 이 시기에 열리는 두바이 월드컵은 윤택한 오일 머니를 반영한 고액 상금으로도 알려져 있는데, 이 시기는 다른 나라에서는 경마의 오프 시즌에 해당하다 보니 그 지역뿐 아니라 해외의 강호도 모여들고 일본 말도 매년 대거 달려간다.

멀리 두바이로 운반된 말들이 세계 각지에서 먼 길을 온 다른 말들과 얼굴을 맞대고 마장을 달리는 그 모습은 하루에도 몇 개씩 큰 경주가 열리는 시간의 경과—저녁쯤에 시작해서 어둑어둑해졌다가 이윽고 조명이 번쩍이는 야간 경마가 된다—도 포함해 상당히 볼 만하고, 한 번쯤은 현지에 가보고 싶어지기도 하는 이른 봄의 풍물시 중 하나인데, 2020 년은 개최 시기가 좋지 않았다. 미지의 바이러스가 한창 퍼지는 가운데 상황이 시시각각 바뀌는 불온한 나날의 기억은 아직도 선명하다. 특히 두바이 월드컵에 관해 말하면 유행이 번지기 시작한 서양을 중심으로 자국에서 출국하지 못하는 관계자도 생기는 등 상황은 이른 단계부터 부정적이었다. 상황이 악화됨에 따라 관련 이벤트 중지나 무관객 개최가 결정되었지만, 그래도 경주 자체는 예정대로 시행된다고 했다. 그러다 결국 개최 6 일 전에 중지가 결정된 것이다.

일본에서는 대략 20 마리가 출전 예정이었다. 개최 중지의 영향은 컸다. 출국 직전에 공항에서 중지됐음을 안 관계자가 있는가 하면, 이미 현지에 도항한 기수나 마구간 스태프도 있었다. 해외 경주에 참가할 때 말은 현지 환경에 적응하기 위해 일찍부터 현지에 들어가는 것이 통상적이므로 대부분의 말들은 아무 것도 모른 채 두바이에서 준비를 계속하고 있었다. 원래 해외 경주에 출전하는 것은 리스크가 크다. 익숙하지 않은 환경에서 지낸 뒤에 컨디션이 나빠져서 그대로 기세를 회복하지 못하는 경우도 있다(반대로 운송을 좋아하는 말이 있기도 해서 재미있지만). 이번에 일본에서 멀리 두바이로 운반된 일군의 말들은 그곳 경마장을 달리지 않고 돌아왔다. 그 말들의 마음은 얼마나 헤아릴 수 있을까? 또 미지의 감염증이 퍼지는 가운데 자기 몸의 안전

도 결코 확보되었다고 말할 수 없는 상황에서 일찍부터 현지에 가 있던 기수나 마구간 스태프의 낙담도 컸을 것이다. 현지에 이미 도착해 있던 기수 몇 명은 경주에 나가지 않고 귀국했다. 이 기수들은 귀국 후에 검사를 받고 격리 생활을 해야 했을 뿐 아니라 2주 동안 경마장과 트레이닝 센터 입장도 금지 당했다. 봄 시즌의 중요한 몇 주를 낭비한 셈이다.

그런데 코로나 재난 초기 단계에서는 국경을 넘은 뒤의 일정한 격리가 인간에게 부과된 새로운 행동 양식이 됐는데, 이 점에서 특필할 것은 이 같은 일은 말의 세계에서는 오히려 통상적이었다는 점이다. 동물의 국경 이동에는 나라나 종에 따라 세세하게 규칙이 정해져 있다. 국제 경주에 출전하는 경주마의 경우 현행 규칙으로는 5일 동안의 수입 검역과 3주 동안의 착지 검역이 부과되는 것이 일반적이다. 두 경우 다소정의 검사를 받으면서 일정 기간 격리되는데 착지 검역 기간에 들어가면 말을 목장 등 관련 시설에 운송하는 것이 가능해지기 때문에 수입 검역 때에 비해 어느 정도 훈련이 허용된다. 이렇게 일정 기간을 둔 뒤에 질병 증상이 나타나지 않으면 다른 말과 접촉하거나 다음 경주에 출전하는 것이 가능해진다. 이러한 시책은 코로나와 관계 없이 이전부터 이루어지고 있었으니 이 점에서는 인간의 세계가 말의 세계 쪽으로 조금이나마 다가간 셈인데, 검역에 관한 규칙이 이미 정비되어 있었다는 것은 전염병이 유행하는 가운데 경마를 실시할 수 있었던 이유 중 하나로 꼽을 수 있을지도 모른다.

그 외에도 유동적인 나날에 대응하기 위해 다양한 변화나 혼란이 나타났다. 각각은 자잘한 사건이기는 하지만 여기에 비망록으로 써두고자 한다. 긴급 사태 선언 즈음이 되자 사람과 말의 이동을 최대한 줄이려는 조치가 취해진다. 기수는 주말 동안 다른 경마장으로 이동하는 것이 금지되어 같은 경마장에서 말을 타게 됐다(가령 큰 경주에 맞춰 토요일은 도쿄, 일요일은 교토 식으로 장소를 바꾸는 것은 보통이었는데, 그렇게 할 수가 없어진 영향으로 젊은 기수가 유력마를 맡을 수 있는 기회가 늘었다). 기수는 경마 개최 전날부터 정해진 시설에 머무르며 공정한 경마라는 관점에서 외부와의 통신을 차단 당하지만, 3밀(밀폐·밀접·밀집: 옮긴이) 방지라는 관점에서 이것도 완화되어 당일에 경마장에 들어갈 수 있게 됐다.

또 보조금과 관련된 관계자의 불상사도 있었다. 사업을 계속하기 어려워진 개인 사업자를 대상으로 한 정부의 급부금을 기수나 마구간 스태프를 포함하는 많은 수의 경마 관계자들이 수령했음이 밝혀졌다. 자세한 경위는 확실치 않지만, 경마는 개최되었으니까 이들 대부분이 수급 요건을 채우지 못했을 터이다. 그 뒤 급부금 반환, 관계자 징계, 관련 조직의 사죄 등을 거쳐 막이 내렸지만, 그 외에는 부정 수급으로 형사 사건으로까지 발전한 안건도 있는 만큼 참 뒷맛이 찜찜한 느낌이다.

경마장 풍경은 한동안 무관객 상태가 이어졌지만, 전염병 유행에 대응해 취했던 방책도 시간 경과와 함께 완화되었다. 경마장에 관객이 조금쯤 돌아온 것은 2020년 10월 10일 개최 때였다. 그 뒤에도 관객 동원

은 사전 신청을 통한 추첨제가 되어 경마장에 들어가는 관객 수는 대폭 줄었다. 이 제한도 서서히 완화되었지만, 천황상이나 일본 더비 등 한 해에 몇 번 있는 큰 경주에서는 2023년 봄 시점에도 사전 신청이 필요하며 아직 완전히 복구되지는 못했다. 입장 규제 하나만 봐도 경마장은 경계를 닫거나 열거나 하면서 현재진행형으로 모습을 바꾸고 있다.

4. 경마의 돈은 어떻게 도는가

이처럼 즉각적인 대응에 내몰리면서도 끊이지 않고 주말 경마를 할 수 있었던 것은 울적한 세태에 비치는 한 줄기 빛이었다. 다른 많은 대규모 이벤트가 어쩔 수 없이 중지되거나 연기되었던 것과는 대조적으로 무관객이기는 했지만 일본 중앙 경마는 연간 경주 캘린더를 예정대로 소화할 수 있었다. 이것은 왜 가능했을까? 여기서는 그 요인에 대해 경제적인 측면에서 파헤쳐 보고자 한다.

우선 알아 두어야 할 것은 경마 개최는 마권을 구입하는 팬은 물론이거니와 말을 생업으로 삼는 직업인들에게 중요한 의미가 있다는 점이다. 말을 타는 기수, 경주마를 훈련시키는 마구간 스태프, 마산업에 종사하는 목장 관계자, 경마장이나 목장 등의 시설 관리자 등이 여기에 포함된다. 경주마의 현역 생활은 짧다. 두 살 여름부터 순차적으로 데뷔를 맞이해 다섯 살부터 일곱 살 사이의 어딘가에서 은퇴를 맞는다. 드물게 오랫동안 활약하는 말도 있지만, 세 살 가을까지 실력이 붙지 않으면 출전할 수 있는 경주가 없어져 버린다. 부상이나 경쟁 능력 상실로 빨리 은퇴하는 말도 많을 뿐만 아니라, 육성 단계에서 능력 부족이나 사고로 경주마로서의 출발선에 서지 못하는 경우도 드물지 않다. 즉 경마장에서 게이트에 들어가는 말들은 이미 수많은 과제를 뛰어넘은 희귀한 존재이고, 목장 관계자는 그러한 말들의 활약을 대가로 생업을 이어간다. 경마 개최 중지는 말에게는 귀중한 경쟁 기회를 놓치는 것을 의미하며, 목장 관계자나 마구간 스태프에게는 일용할 양식을 얻을 수 있는 거의 유일한 수단을 잃어버리는 것을 의미한다.

그렇다면 경주마가 얻는 상금은 어디에서 나오느냐 하면, 대부분은 마권 매상에서 온다. 그리고 이것이 코로나 재난 속에서도 경마를 계속 개최할 수 있었던 가장 큰 이유일 것이다. 프로 스포츠나 다른 대규모 이벤트에서는 구장이나 극장 등 관람을 위한 입장료 및 손님들이 구입하는 관련 굿즈나 음식물이 수익의 중요한 부분을 차지한다. 경마장에는 (자리를 고르지 않는다면) 몇 백 엔으로 들어갈 수 있다. 한 해에 몇 번은 무료로 들어갈 수 있는 날까지 있다. 주최 측 수익의 대부분을 차지하는 것은 경주에 걸리는 막대한 내깃돈으로 연말의 중요 경주인 아리마 기념에서는 지금도 마권이 500억 엔 넘게 팔린다. 여기에는 당첨 마권에 돌려주는 배당금도 포함되지만, 경주가 어떤 결과로 나오든 전체 매상의 20퍼센트 이상은 주최 측의 몫이 되는 것이 정해져 있으니 (이렇게 쓰고 보니 새삼 마권에서 따는 것이 얼마나 어려운지 알 수 있다) 한 경주가 이루어지는 고작 몇 분 사이에 엄청난 단위의 금액이 움직이고 있는 셈이다.

이러한 수익 구조를 지탱하는 것이 인터넷을 통한 투표다. 앞에서 인터넷 투표를 통한 스테이 홈 경마 환경이 정비되었다고 썼다. 하지만 여기에는 주석이 필요한데, 이는 오히려 예전부터 다수파에 속하는 방식으로, 코로나 재난은 그러한 흐름을 가속화한 데에 지나지 않는다. 이제는 은행계좌와 인터넷 환경만 있으면 전국 어디에 있든 간단히 마권을 살 수 있게 되었다. 그렇다 보니, (본고에서 대상으로 하는) JRA 주최 경마는 주말에 모여 있지만 그 외에 각 지자체가 주최하는 지방 경마가 있는데, 이것은 경합을 피하기 위해 평일이나 야간에 경주가 설정되어 있는 경우도 많아 배팅을 그만두지 못하는 일부 사람들에게 이것은 이것대로 문제가 있는 구조다.

코로나 재난 때도 전과 전혀 다름 없이 마권을 살 수 있었다. 그러니까 무관객 개최여도 흥행을 계속할 수 있었다. 이것이 왜 경마 개최가 가능했는가라는 물음에 대한 가장 단적인 대답이다. 오히려 대규모 이벤트 개최나 다른 오락이 제한되는 가운데 경마에 대한 주목도는 높아졌다. 주최 측 발표에 따르면 일 년 동안의 마권 매상은 근래에 3 조 엔을 웃도는 수치를 유지하고 있었는데, 놀랍게도 2020 년과 2021 년은 모두 전년을 3 퍼센트 정도 웃도는 매상을 기록했다. 코로나 재난으로 경마장 입장은 규제됐지만 마권 판매는 호조였다.

한편으로 사태의 추이를 주의 깊게 살펴보면 코로나 유행 당초에는 파칭코 가게에 대한 집요한 비난도 있었으니까 경마계에는 공영 도박이기 때문에 생기는 위기감도 있었던 것 같다. 결과적으로는 기우로 끝났지만, '불요불급한' 오락에 대한 원한이 그대로 경마계에도 불똥을 튀길 가능성 또한 충분히 있었던 것이다.

이러한 우려를 반영해서인지 경마계는 대외적인 지원책을 적극적으로 표명했다. 경마 개최를 계속하는 것이 기정 노선이 되자 JRA 기수 클럽은 기승 횟수에 따라 의료 종사자에게 기부를 하겠다고 발표, 여기에 이어 마산업이나 마주 등의 관계자 단체도 기부금을 통한 지원을 표명했다. 또 주최 측 움직임으로 6 월 후반에 열리는 다카라즈카(宝塚) 기념 경주의 마권 수익에서 50 억 엔이 전염병 대책 지원으로 갹출됐다. 원래 마권을 통한 수익의 일부는 국고 납부금으로 정부에 헌상된다. 근래에는 그 액수가 연간 3000 억 엔을 가볍게 웃돈다. 경마 개최 계속을 바라는 팬들은 "마권을 구입해서 경제를 돌린다", "경마가 있어서 스테이 홈 할 수 있다" 등 유행하는 어구를 써서 경마 개최에 대한 지지를 인터넷 상으로 표명하기도 했다.

이렇듯 코로나 속 경마 개최를 뒷받침한 요인으로 우선 수익 구조를 지적했는데, 앞에서 썼듯 경주마의 짧은 현역 시절, 원래 전염병을 상정한 검역 제도의 정비 등 말의 바이오 리듬에 입각한 사정도 있을 것이다. 그 외에도 농림성으로 이어지는 경마 관계자의 정치적인 연줄, 각종 광고를 제공하고 있는 언론사와의 관계 등 다면적인 요소가 관련되어 있다고 생각되므로 다른 원고로 더 따져볼 여지가 아직 남아있는 것 같지만, 마지막으로 문화적인 측면을 조금 더 파들어가면서 마무리하고자 한다.

요즘의 미디어 전략이 주효했던 경마 인

기의 고조도 흥행을 지탱한 요인으로 중요하다. JRA는 그때까지 몇 년 동안 여러 젊은 인기 배우를 기용한 텔레비전 광고를 통해 젊은 경마 팬을 개척하려 움직였다. 또 새로운 팬의 획득이라고 하면 2021년에 나온 <우마무스메(ウマ娘)>가 경마 게임의 틀을 넘어 사회 현상이라 할 수 있을 만한 인기를 얻었다. 역대 명마를 의인화하여 아이돌 문화를 접목시킨 이 게임은 애니메이션화나 라이브 이벤트의 개최 등 다방면의 미디어로 전개되어 경마를 잘 몰랐던 층도 끌어들였다고 여겨진다.

이 게임에서 얻은 수익은 마권과는 다른 형태로 경마계로의 순환 구조를 만들고 있다. <우마무스메>를 개발한 회사의 모회사에 해당하는 사이버에이전트사 사장은 열성적인 경마 팬으로도 유명하고, 이 게임이 크게 히트한 것과 때를 같이하여 마주 자격을 취득해 2022년 셀렉트 세일에서는 합계 18마리, 총액 22억 엔이 넘는 경주마를 구입했다. 목장에서 육성한 젊은 말을 마주에게 파는 경매 시장은 매년 초여름에 각지의 말 산지에서 열리는데, 이 셀렉트 세일에는 엄선된 '혈통 좋은 말'이 시장에 나오는 경우도 있어 이틀 사이에 정신이 아득해질 만한 금액이 움직인다. 2022년에는 매상이 257억 6250만 엔으로 과거 최고치에 달했다. 3억 이상에 낙찰된 말도 몇 마리 있었다. 이는 호조를 보이는 마권 매상을 반영하고 있기도 하겠지만, 이제는 일본의 마산업도 해외 경마와 잇닿아 있으니 코로나 후의 세계를 석권한 물가 상승을 반영해서인지 경마계에 흘러 들어오는 돈도 멈출 줄을 모른다.

5. 맺으며: 조용한 경마장과 날뛰는 마권

텔레비전을 통해 보는 코로나 재난 속 경마장은 평소와는 다른 이화(異化)된 세계였다. 아무도 없는 경마장은 한산했다. 평소에는 관객의 성원에 섞여 버리는, 말이 달릴 때의 공기의 흔들림이 아주 가깝게 느껴지고 레이스 중에 기수가 안전을 위해 주위와 주고 받는 구호 소리도 들렸다.

말은 천성적으로 겁이 많은 생물이라고 한다. 말의 시야는 350도나 되는 모양인데, 늘 주위의 모습을 살피고 있다. 말은 결승선을 향해 달리는 것이 아니라 후속마들로부터 달아나기 위해 달리는지도 모른다. 도주마라는 것은 절묘한 표현이기도 하다.

큰 경주에서는 10만 명 가까이 되는 군중이 경마장에 몰려들 때도 있다. 경마장의 열기는 새로운 계절이 왔음을 알리는 풍물시가 되고, 경주 전에는 팡파레와 박수 소리, 스타트를 끊으면 큰 환성, 마지막 직선에서는 응원하는 말이나 기수의 이름을 열심히 부른다.

주의 깊은 말들 입장에서 보면 경마장의 열광은 무척 민폐일지도 모른다. 큰 환성에 겁을 먹거나 흥분하여 그 때문에 실력을 다 발휘하지 못하는 말도 있다. 해외 경마에서는 소음을 억제하는 배려도 이루어진다. 일본에서도 요즘 들어서야 대책을 강구하는 목소리가 나오기 시작했지만, 흥분한 경마 팬의 환성을 억제하기는 쉽지 않아 보인다. 이러한 환경에서도 훌륭하게 달려내는 말이 강한 경주마라고 보는 관점도 있다.

그러니 무관객 경마가 되어 다음과 같은 일이 일어날 법하다는 것은 쉽게 상상이 간다.

정적에 싸인 경마장을 달리는 말들은 평소처럼 소음으로 괴로워할 일도 없이 자신의 실력을 충분히 발휘하는 것이 가능해졌다. 그렇다면 실력 있는 강한 말이 그대로 경주에서 이길 것이다. 예상하는 쪽은 어려운 생각은 하지 않고 순순히 실력을 평가해서 마권을 사면 된다고.

하지만 코로난 재난 속 경마장에서는 이것과는 정반대되는 기묘한 사건이 일어났다. 마권이 사정없이 날뛴 것이다. 경마 배당 구조상 어떤 말의 실력이 평가를 받아 마권이 팔리면 그만큼 배당이 낮아진다. 반대로 실력이 없다고 간주되는 말 (= 인기가 없는 말) 이 예상을 뛰어넘어 잘 달리면 배당이 뛰어오른다. 이것을 '큰 구멍을 맞힌다' 거나 '날뛴다' 고 한다. 마권에서 따고 싶으면 인기가 없는 말의 진짜 실력을 간파해야만 한다. 하지만 너무 노리면 안 맞는다.

코로나 재난 속 경마는 여느 때보다 날뛰었다. 특히 큰 경주일수록 그랬다. 2020 년 여름 하코다테 (函館) 기념에서는 15 번 인기인 어드마이어 저스타가 승리했다. 배율은 77.3 배였으니까 1 등을 맞히는 단승일 경우에는 100 엔이 7730 엔이 되는 계산이다. 하지만 여름 경마가 '날뛰는' 것은 잘 알려져 있어 이 정도는 예상 범위 안이다. 그러다 2021 년이 되어 이른 봄의 금호 (金鯱) 상에서 인기 최하위인 기베온이 이기자 (단승 227 배 !) 어쩐지 불온한 공기가 감돌았다. 가장 격식이 높은 G1 경주에서는 유력마에게는 세심한 주의를 기울여 관리하기 때문에 실력마가 잘 달리다 보니 예상 밖의 결과가 나오는 경우는 적다. 하지만 코로나 재난 속 G1 경주에서는 어쨌든 1 번 인기마 (지금도 지지를 받아 마권이 잘 팔리는 말) 가 이기지 못했다. 2021 년 겨울의 호프풀 스테이크스부터 2022 년 가을 국화상까지 1 번 인기마의 연패 기록은 16 번이 되어 그때까지의 기록을 크게 갱신했다. 탄탄한 배당을 노리는 견실파에게는 지옥, 파란을 선호하는 한 방 역전파에게는 천국이었으리라. 조용한 경마장에서 마권은 크게 날뛰었다.

마권을 사는 경마 팬들은 경마장에서 관객의 소음이 사라지는 갑작스러운 변화를 따라가지 못했던 걸까? 아니면 갑작스러운 변화에 당황한 것은 말들이었을까? 애초에 말은 관객이 조용할 때야말로 실력대로 달릴 수 있다는 진단이 틀린 것이고, 빨리 달리기 (달아나기?) 위해서는 나름의 소음이 필요한 걸까? 조용한 경마장에서 마권이 날뛴다는 묘함은 코로나 재난 속 경마계에서 생긴 하나의 난문이었다.

본고에서는 2020 년부터 몇 년에 걸친 경마계의 움직임을 돌아보며 코로나 재난으로 일어난 현상 몇 가지를 고찰해 보았다. 그 움직임을 망라해서 쓰지는 못했고, 어느 정도 진정되었다고는 하나 상황은 지금도 유동적이라 전염병의 새로운 유행으로 경마장이 또 다른 모습을 보여주는 사태도 충분히 상정할 수 있다. 마지막으로 본문에 잘 끼워넣을 수 없었던 몇 가지 사건을 써서 남기며 마무리하고자 한다.

2023 년 4 월 보수 공사로 오랫동안 폐쇄되었던 교토 경마장이 재오픈했다. 보수에 들어가기 전의 개최에서 이미 무관객이었기

때문에 이를 포함하면 3 년이 넘게 교토 경마장에 들어가지 못했던 셈이다. 개인적으로 (경마장이 있는) 요도에 다니지 못하는 일상은 알코올이 빠진 맥주나 매한가지였다. 재오픈한 교토 경마장은 예상했던 대로 인터넷 좌석 예약이 우선시되고 유료 좌석 구역도 늘어나는 등 경마장의 조닝이 진행됐지만, 그래도 불쑥 들르는 관객을 맞아들일 여지는 충분히 남기고 있었다. '장' 의 매력이란 이렇듯 차별 없이 사람을 맞아들이는 개방성으로 담보되는 것 아닐까?

또 최근의 사건으로 마구간 스태프의 파업이 있었다는 것도 써두어야 한다. 노동자 처우라는 점에서 볼 때 마권 매상이 호조임에도 불구하고 말과 가장 가까이 접하는 마구간 스태프의 급여 체계는 개선되지 않았다고 한다. 이러한 상황 속에서 2023 년 3 월 처우 개선을 요구하며 마구간 스태프 조합이 파업을 시작했다. 이 주말에는 경마 개최가 불가능해질 터였지만 (실제로 그렇게 보도되었다), 조합에 속하지 않는 마구간 스태프의 조력으로 경주는 예정대로 실시되었다. 평소처럼 경마가 있는 주말을 보낼 수 있었던 것은 과연 좋은 일이었을까? 향후 상황을 주시하고자 한다.

마지막으로 다룰 것은 다큐멘터리 영화 < 오늘도 어딘가에서 말은 달린다 > (히라바야시 겐이치 (平林健一) 감독, 2019 년) 다. 이 영화가 그려내듯 그 걸음은 결코 빠르지 않지만, 요즘 경마계에서는 은퇴한 경주마의 여생을 지원하는 움직임이 갑자기 늘어나고 있다. 매년 탄생하는 많은 경주마 가운데 현역에서 은퇴한 뒤 번식이나 승마 등 두 번째 커리어로 진출할 수 있는 말은 극소수다. 은퇴한 말에 대해서 자세히 알 수는 없고, 아마 그 여생은 행복하지 않을 것이다. < 오늘도 어딘가에서 말은 달린다 > 에는 말과 관련된 다양한 현장에서 이러한 현재 상황에 의문을 품는 사람들이 등장한다. 이들은 은퇴마를 직접 거둬들이는 등 저마다의 형태로 지원을 보내고 있다. 요즘은 경마계 내부에서도 이 문제에 대한 목소리가 나오기 시작했다. 그 목소리는 아직도 작고, 인간 사회와 동물의 관계라는 더 광범위한 주제와 관련되기 때문에 논의할 과제가 많이 있다. 하지만 코로나라는 긴급 사태에서 말이라는 생물이 자신의 삶에 얼마나 둘도 없는 존재였는지 새삼 깨달은 사람도 많으리라 생각한다. 나도 그런 사람 중 하나로 그 목소리를 받아안고 싶다.

각주

(1) 寺山修司・虫明亜呂無『対談 競馬論』筑摩書房、1993 年、p.29.
(2) 同上、p.29.
(3) 同上、p.29-30.
(4) 同上、p30.
(5) 檜垣立哉『哲学者、競馬場へ行く 賭博哲学の挑戦』青土社、2014 年、p.21.
(6) 제 80 회 벚꽃상
https://www.youtube.com/watch?v=upETw4WKUbk
(7) 제 80 회고월상
https://www.youtube.com/watch?v=IHzE8_cVkWM

(にしかわ　かずき　競馬ファン駆け出し)

다소가레테이（黄昏亭）

도미야마 이치로　（冨山 一郎）

장（場）을 만드는 것을 계속 생각하고 있다．이는 기존의 관계가 새롭게 바뀌는 것과 그 계기를 확보하는 것과 관련된다．기존의 관계가 질서로 존재한다면，새롭게 바뀌는 것이란 그 관계를 성립시키는 전제인 질서에 물음이 제기되는 일이고，그러한 물음이 던져질 수 있는 가능성을 확보하는 것이 장이라는 문제다．이는 모든 것이 이미 예정되고 질서가 부여되어 있는 세계에 바뀔지도 모른다는 예감을 끌어넣는 일이고，필연 속에 우연을 가지고 들어와 우연을 필연으로서 발견하는 일이기도 하다．

그러한 가능성을 확보하는 것이 장의 사명이라 생각해 왔다．이는 장에 모인다，곁에 머문다，말을 주고 받는다，논의한다 같은 지극히 평범한 행위에 미래를 거는 일이기도 하다．또 이는 연구나 학문에 한정된 것이 아니다．

대학 근방에 그러한 장을 만들고자 해왔다．이렇듯 장을 만드는 일은 앞으로도 추구하고 싶다．하지만 동시에 내 매일의 활동 무대인 대학이라는 곳에서 이러한 장을 발견하고，또 나날의 실천 속에서 장을 만드는 것도 중요하다고 생각해왔다．즉 대학의 바깥이라고 말하는 순간，물어야 할 질서가 안이한 이분법으로 추인된다고 생각했기 때문이다．하지만 이는 어디까지나 매일의 많은 시간이 대학과 관련돼 있다는 나 자신의 사정에 기인하며，일반적으로 대학이 중요하다는 말이 아니다．또 대학에 있을 시간이 많이 남지 않은 지금，그뒤의 장을 어떻게 만들까 하는 것을 이제 생각하기 시작하고 있다．

다소가레테이라는 바가 있었다．그곳은 낡은 건물 삼층에 있는데，신발을 벗고 들어가면 안에는 카펫이 깔려 있었다．가게 안은 어둑어둑하고，카운터와 그 뒤에 무리하면 8 명쯤은 앉을 수 있을 것 같은 테이블이 있었다．건물에는 훌륭한 서체로 ‘다소가레테이（黄昏亭）’라는 글자가 세로로 적힌 커다란 간판이 있었는데，개점 시간이 되면 불이 들어온 간판이 어두운 길에 떠올라 멀리서도 잘 보였다．대학원에 들어간 뒤로 일주일에 두 번은 이 바에 드나들었다．혼자 가는 경우는 드물고 대체로 두세

명이 같이 갔는데, 많을 때는 사전에 테이블이 비어 있는지 아닌지 전화로 확인하고 거기에 진을 쳤다. 이층은 고깃집이어서 계단을 오갈 때마다 좋은 냄새가 났다.

특집의 '장'이라는 말을 보고 떠오른 것은 이 다소가레테이다. 그곳은 글자 그대로 술을 마시는 장소로 굳이 말하자면 더 마시지 못할 때까지 마시는 술집이었는데, 점주인 히로코 씨가 만드는 요리가 특출나게 맛있고 맨 처음에 내주는 가벼운 안주는 제철 식재료를 쓴 것이었다. 때때로 손님이 가져다 주는 호화로운 음식을 나눠주기도 했다.

히로코 씨는 백화점 미술품 담당이었기도 해서 다기나 공예품에 대한 심미안이 있었다. 또 분명 관세류(観世流 일본의 전통 예능인 노가쿠의 한 유파: 옮긴이) 노가쿠시(能楽師 노가쿠를 직업적으로 하는 사람: 옮긴이)였던가 해서 요곡(謡曲 노의 성악 부분: 옮긴이)이나 아악에 대한 지식도 풍부했다. 젊은 시절에는 교토부(京都府) 학련(교토 학생 자치회 연합회) 위원장이었다는 이야기도 들은 적이 있다. 기동대에게 곤봉으로 얻어 맞았을 때 생긴 머리의 흉터를 보여준 적도 있었다. 카운터 안에서는 손님의 이야기에 전혀 맞춰 주거나 하지 않고 가만히 이야기를 듣고 있는 경우가 많았지만, 가끔 끼어들 때도 있었다.

언제였나 친구와 동아시아 반일 무장 전선의 투쟁에 대해 이런저런 이야기를 하고 있을 때 그 친구가 폭탄 투쟁에 비판적인 의견을 말한 순간 히로코 씨가 개입했다. "우리가 방치해온 책임을 그 사람들이 대신해 주었다고 나는 생각해." 그것은 미완으로 끝난 천황 폭살도 포함하고 있었을 것이다. 또 그때의 '우리'는 일반명사가 아니라 나와 친구를 우선은 의미하고 있었다.

손님은 대학 관계자뿐 아니라 행상으로 교토에 온 사람, 서점이나 출판 관계자, 출입하는 업자들, DV에서 달아나 도망 중인 사람, 늘 오는 정체불명의 사람들 등 각양각색이었다. 대체로 사티의 음악이 조용히 흐르고 있었지만, 종종 손님들 사이에 격론이 벌어지거나 또 합창이 열릴 때도 있었다. 그럴 때 사티는 지워져서 들리지 않았다. 세간에서는 '과격파' 혹은 '트로츠키스트'라는 말을 듣는 사람들도 곧잘 마시러 오곤 했다. 어느날 밤, 친구들과 술을 다 마시고 계단을 내려가는데 아래에 공안으로 보이는 남자 두 명이 기다리고 있었다. 한 사람씩 순서대로 회중전등을 얼굴에 바싹 들이대더니 "위에서 마셨나?" 같은 신문을 했다. 집에 가는 도중에 이 공안들이 뭔가 하지 않을까 걱정이 되어 다시 다소가레테이로 돌아가 아무 일도 없어 보이는 히로코 씨를 보고 안심했던 기억이 있다.

그곳은 논의의 장이자 새로운 만남의 장소이기도 했다. 또 대학에서는 거의 대화를 나눈 적이 없는 사람들끼리 다시금 관계를 만드는 장소이기도 했다. 낮에는 부끄러워서 하지 못하는 말도 어둑어둑한 가게 안에서는 말할 수 있었다. 때로는 밀담조가 되고, 또 종종 끝이 보이지 않는 격론이 됐다. 폐점 시간은 새벽 2시쯤이었는데, 밖에 나가니 날이 밝은 뒤였던 적도 있다. 많은 제안이 나왔다가 취기가 깨는 동시에 사라져 갔지만, 실현한 것도 있다. 대학 옥상에서 <깜짝 영화제>라는 이름으로 <알제리 전투>를 대학 당국의 반대를 무릅쓰고 상

영했을 때도 그 16 밀리 필름을 (당시에는 비디오가 없었다) 다소가레테이에서 이따금 마주치는 , 도에이 (東映) 에서 조감독을 하던 히로코씨의 남동생의 도움을 받아 조달했다 . 이 동생은 교토에서 영화 상영 운동을 계속하던 사람이다 . < 깜짝 영화제 > 성공 뒤풀이도 다소가레테이였다 .

오버닥터 때도 포함해 대학원에 있던 8 년 남짓 , 거의 매주 다소가레테이에 드나들었지만 그 뒤에는 해에 몇 번이 됐다 . 좀처럼 가지 못하게 되고서 깨달았는데 , 오랜만에 가면 가게의 공간이 나를 감싸고 있는 듯한 감각이 든다 . 검고 또 조금 벗겨진 카운터를 손으로 어루만지면서 내가 지금의 나에게서 차츰 이탈해 가는 듯한 신체 감각을 느끼는 것이다 . 이는 과거에 지배되어 가는 듯한 감각이라고 해도 좋다 . 하지만 과거로 돌아가는 것도 , 옛날을 그리워하는 것도 아니었던 것 같다 .

매주 가지 않게 되고 10 년이 넘게 지났을 때 히로코 씨에게서 전화가 왔다 . 상의하고 싶은 일이 있다고 한다 . 곧장 가게로 갔더니 다소가레테이에 오던 사람들을 모아 큰 연회 같은 것을 열고 싶으니 그 간사일을 좀 해 달라는 것이다 . 돈은 모아둔 것이 있다고 . 또 장소는 이미 정해져 있었다 . 걸어서 5 분도 걸리지 않는 긴카쿠지 (銀閣寺) 근처에 있는 하쿠사손소 (白沙村荘) 다 . 이곳은 일본화가인 하시모토 간세쓰 (橋本関雪) 의 아틀리에로 만들어진 곳인데 , 현재는 하시모토 간세쓰 기념관이 되어 있다 . 그곳의 대화실 (大画室) 과 넓은 정원에서 연회를 한다는 것이다 . 손님으로서도 친교가 있었던 그곳 관장인 하시모토 다에 (橋下妙) 씨가 이 연회를 기꺼이 수락해 주었다고 한다 . 명목은 27 주년 축하라는 , 참 대충인 타이밍이었지만 내가 다소가레테이에 인연이 있는 사람들에게 쓴 초대장은 다음과 같은 것이었다 .

다소가레테이에
인연이 있는 여러분께

우리가 술잔을 주고 받던 다소가레테이가 예의 건물 최상층에 출현한 뒤로 내년이면 27 년이 됩니다 . 어둠속에서 빛나는 < 다소가레테이 > 글자에 이끌려 발길을 옮기고 고기 굽는 냄새를 한순간 맛보면서 철계단을 올라가면 사티의 음악과 함께 평소의 담소 혹은 격론 소리가 들려옵니다 . 그리고 문을 열면 “어서오세요” 라는 히로코 씨의 목소리 . 이렇게 시작되는 평소의 혹은 새로운 만남 속에서 많은 것이 이야기되고 관계 또한 만들어졌습니다 . 그것은 지금도 이어지고 있습니다 .

27 년이라고 하니 , 다소가레테이에서 생겨난 많은 것들을 가지고 와서 늘 그 장에 계셨던 히로코 씨를 둘러싸고 유유히 시간을 보내고 싶다는 생각이 듭니다 . 이것은 분명 “옛 이야기로 꽃을 피운다” 같은 것이 아니라 깊은 밤 그 최상층에서 이야기했던 것이나 생겨난 관계를 다시 한번 확인하고 앞으로를 위해 확보할 다시 없을 기회일지도 모릅니다 . 다소가레테이에 인연이 있는 여러분 , 꼭 모여주십시오 .

일시　2008 년 3 월 29 일 (토요일) 3 시부터
장소　하쿠사손소 대화실

‘다소가레테이’ 27 주년을 축하하는 실행 위원회

지금 다시 읽어보니 새삼 다소가레테이는 인연을 만들어내는 장이었다는 생각이 든다. 이 연회에는 100 명 가까운 사람들이 왔다. 대화실 마루방에서, 혹은 정원을 산책하면서 이야기는 계속됐다. 그것은 마치 다소가레테이가 여기저기에 생겨난 것 같았다. 작은 공간에서 매일 밤 생겨나던 인연이 한자리에 모인 것이다. 인연들이 보이는 것이다. 저마다가 저마다의 인연을 가지고 이 연회에 모였다. 작은 바의 기억이 뭔가 다른 곳으로 움직이기 시작하는 것 같았다. 물론 모두를 다 아는 사람은 히로코 씨밖에 없다.

회비는 징수했지만 턱도 없었다. 히로코 씨는 지금까지 모은 돈을 전부 이 연회에 썼다. 모임 뒤 몇 개월이 지난 교토의 더운 여름, 히로코 씨는 도와준 보답이라며 몇 사람을 기부네（貴船）의 유카（床 여름에 음식점에서 야외의 강가나 개울 위에 좌석을 설치해 요리를 내는 것 : 옮긴이）에 초대해 주었다. “이걸로 돈은 전부 다 썼다” 며 웃으면서.

그 뒤에도 다소가레테이는 이어졌지만 언젠가부터 멀리서도 보이던 ‘다소가레테이’의 네온이 꺼진 채였다. 얼마 안 돼 또 히로코 씨에게서 전화가 왔다. 건물 천장이 부서져 빗물이 들어오는 바람에 가게를 계속할 수 없게 됐다고 한다. 간사이（関西）지역을 직격한 2018 년의 태풍 21 호 때다. 그 문제로 상담할 것이 있다고 해서 나와 대학원 때 정말로 곧잘 함께 다소가레테이에서 마시던 버섯 연구자 후키하루 도시미쓰（吹春俊光）씨와 같이 오랜만에 히로코 씨를 만났다. 가게를 재건할 생각도 했던 모양이지만 결국 다소가레테이는 끝났다.

장이란 역시 기억과 함께 있다. 이는 걸으면 찰캉찰캉 소리가 나는 철계단이나 고기 굽는 냄새, 가게 앞의 작은 신발장, 사티의 음악, 논의를 하는 시끄러운 소리나 러시아 민요를 부르는 목소리, 그리고 조금씩 벗겨지는 검은 카운터에 내려 쌓인 기억이다. 이러한 사물이나 소리, 냄새나 색깔 하나하나가 장의 기억을 만들어낸다. 이렇게 기억이 꺼내질 때 늘 장이 나타난다고 해도 좋다. 다소가레테이는 끝났지만, 다소가레테이의 기억은 꺼내져서 장을 만든다.

장이란 기능적인 공간을 가리키는 것이 아니다. 그때만 할당되는 교실도 아니거니와 세미나실도 아니다. 무엇보다도 거기에는 기억이 축적돼 있으며, 거기에 가면 무언가가 시작된다는 예감이 있다. 굳이 말하자면 기능적 연관은 장에서 발이 걸려 넘어지고, 생각지도 못한 역사가 거기서부터 개시된다.

다소가레테이는 사라졌지만 그때 하쿠사손소에 모인 100 명 속에는 기억이 분명 있을 것이다. 그 기억들은 여기저기서 장을 만들어내고 있을지도 모른다. 기억이 있는 한 장은 이어지고, 계속해서 확장된다.

（とみやま　いちろう　MFE 編集委員）

ＭＦＥの対話

MFE は、書くことと読むことの連なりを大切にしたいと思っています。書くことは読むことにつながり、読むことが思索や対話を生み、もうひとつの（あるいはいくつかの）書くことへとつながる。こうした行為の連なりから、新しい場が立ち現われてくるのではないでしょうか。連なりを作る回路のひとつとして、「MFE の対話」のページを始めます。平たく言えば読者のページ。どなたであれ、過去号の文章たち（あるいはその著者たち）へのメッセージを編集委員会 (mfe.editor@gmail.com) にお寄せください。それがまた、新たな場の起点とならんことを。

冨山 一郎

噛みしめる

３号の特集である「物語の楽しさ」の最初にある沈正明さんの文章を読んで、なるほどと思った。「物語はもっと良い世界を、未来を作り出す種をもっています」。物語は、現実としてある今の世界を、変えていく種なのだ。井上光晴は『小説の書き方』で、小説を書くことは「事実より強い嘘」をつくことだと書いていたが、それを読んだときはなるほどと思いつつ、井上のいう「強い」といういい方に、はたして問題は強弱なのだろうかと、少し引っかかっていた。なぜなら強いということをいったとたん、強弱を定義する力学系は何かという問いが、すぐさま浮かび上がるからだ。だが沈正明さんは的確にも、「力ということを言う前に」という一言をそこに差し込む。事実を凌駕する強い力を求めるのではなく、まずは「楽しむ」ことが重要だというのだ。ストンと腑に落ちた。力の領域にすぐさま飛びつくことではなく、「楽しむ」ということにおいてこそ広がっていく未来を、考えてみたいと思う。

『ショウコの微笑』の作者チェ・ウニョンの発言を引きながら、姜文姫さんは、「チェ・ウニョンは人と人の付き合いの事後を「何回」も「噛みしめる」」と述べ、事後的に「事実を噛みしめる」ことが、既にある現実の関係から「関係の流動性」を引き出すことにつながっていると指摘している（30 頁）。物語の始まりは、過去の出来事や関係を噛みしめることなのだ。こうした出来事には、もう取り返しのつかないことや、既に失った人あるいはモノなどがあるだろう。そしてこうした過去が今の世界をゆるがない現実として築き上げるとしたら、この取り返しのつかない過去を噛みしめ流動化させてみることは、今とは違う別の未来の始まりなのかもしれない。そして物語は、この始まりを確保するのかもしれない。では噛みしめるとは、どういうことなのだろうか。

崎山多美は自らの小説『月や、あらん』の出発点に、母から聞いた言葉があるという。それは崎山の母が宮古島の日本軍「慰安所」と「慰安婦」に出合ったという話を崎山にしたことだ（崎山多美「＜ベー＞を反芻する」李静和『つぶやきの政治思想』所収）。母は死の直前に突然「慰安婦」の口真似をして語りはじめたのだ。崎山その言葉を何度も何度想起する。「あのときの、あの表情、あの身振りは、私のなかで何度も反

芻され、今では映像化されてしまっている」（同、147 頁）のである。それは資料としてファイル化された言葉ではない。反芻されるたびに浮かび上がるのは、表情や身振りとともにある言葉の姿なのであり、またそこでは視覚が前景化していく。

そして崎山は、その映画の断片のような言葉の姿を何度も噛みしめることにより、物語を書いたのだろう。それは言葉の姿が変わることでもあり、沈正明さんが石沢麻依の『貝に続く場所にて』から見出した津波のあとの遺物や、沈恬恬さんが嗅いだ証言本のカビの匂いが、過去の事実にかかわる新たな言葉として語りかけてくることでもあるのだろう。こうした噛みしめながら浮かび上がる言葉たちともに、過去の出来事が物語として現れ（三田牧さん）、「物語が私を包んでくれる」（沈恬恬さん 94 頁）のだ。

そしてだからこそ確認しておかなければならないのは、噛みしめることから始まるのは、チェ・ウニョンや崎山多美のように物語を書くことだけではなく、過去の事実が物語として私を包み込むことであり、それは物語を読むことでもあるということだ。事後的に噛みしめることとは、作家に限定されていることではなく、沈正明さんや姜文姫さんのように物語読むことでもあり、楽しむことでもあるのだ。沈正明さんが友人の死を想起しながら既にこの世を去った者たちに対して、「もしかすると築けたかもしれない潜在的な関係があるかもしれない」（11）というとき、あるいは姜文姫さんが「日本で暮らしている「韓国人女性」」という日常を支配する前提にたいして、「本稿は私の日常での経験から出発し、どうにか私にできる限りの言葉で書きとめようとしたものである」（30）と冒頭で述べるとき、物語を読み、論じている沈正明さんや姜文姫さんも、噛みしめている。

噛みしめるということは、動かしがたい過去が流動化し、物語として現れるということだけではなく、物語を読み楽しむということにも連動しているのだ。逆にいえば、物語を読む行為、すなわち楽しむということは、過去を噛みしめることでもあり、ここに「未来を作り出す種」が確保されるのではないだろうか。また姜文姫さんが「本稿は」というように、そこには論じるということも含まれている。だから論文を書くのも楽しいはずなのだ。またあえていえば楽しさが喪失した論文は、未来への種を見失っているともいえる。

ところで噛みしめるという言葉とよく似たいい方を、日高由貴さんは、絵本を読み聞かせる時の子供たちに見つけている。「ことばを食べる」（23 頁）のだ。その言葉は絵であり声であり、こうして物語は子供たちを包んでいく。また言葉を食べているのは読み聞かせをしている人にもいえることだろう。言葉はそこでは声として反復され、時には身振りも伴う。まるで　本を読む時に声が出てしまう茶園敏美さんのように（27 頁）。出来事や経験は、噛みしめることにより物語として語り手を包み、聞く者はそれを食べ、噛みしめ、咀嚼し、血肉にして、また物語を語るのだ。それは山代巴が『民話を生む人々』で描いた民話の世界でもあるのかもしれない。

過去の起きた出来事に、もしこうだったならという問いを立てることは、反事実的条件命題とよばれるものであり、いわゆる研究や論文の名において禁じられていることが多い。過去の出来事は実証し分析すべきであって、噛みしめるものではないというわけだ。しかし人が今と異なる現実を想像し、別の未来への契機をつかもうと過去を振り返るとき、ひょっとしてあったかもしれない可能性を探ることや、もしという問いを立てることは、間違いなくある。それは、自分の生きてきた過去だけではなく、もし自分があの場にいたらどうするかという問いでもあり、こうした問いのないところで準備されている未来は、ただのカーナビのようなもので

しかないだろう。そして精緻なカーナビをつくることが研究だというなら、それはやはりつまらない。噛みしめるとは、噛みしめる者自身がどうするのかという問いを抱え込むことであり、カーナビの未来に従うことではないはずだ。またそれは、確かに楽しくワクワクすることだが、後悔や悔恨もまたそこには帯電するのだろう。

福岡弘彬さんは、ベビーカーを片手で押しながら一杯になったバックパックをかかえて電車に乗り込んだ際に生じた出来事を、怒りと悔恨とともに噛みしめている。噛みしめながら、エナジードリンクを支えにしていた過去の自分や、コロナ禍の状況も噛みしめている。そして噛みしめたまま福岡さんは、津村記久子の「地下の叙事詩」(『アレグリアとは仕事はできない』所収)を読み、喰らい、論じるのだ。そこでは、物語を論じることは過去の出来を噛みしめることと一つながりになっており、思考することは、今どうするのかという未来への問として浮かび上がる。私は出来事を事後的に噛みしめ、物語を読み、喰らい、論じ、物語は私を包み込みながら未来に向けて更新され始める。こうして声を上げる手前の状況が整えられていくのだ。「そっちはどんな感じですかね？」(87 頁）という連帯の挨拶は、確かに聞こえた。

永岡 崇

第３号を読んで

映画、ドラマ、小説、マンガ、あるいは学術論文にいたるまで、ねじくれていたり、悲しみや怒り、寂しさ、後悔といった負の感情が渦巻いていたり、話がこんがらがっていたり、とにかくそういうのが好きだ。自分自身の性格がそれほどねじ曲がっているわけでもないと思う（当社比）のだが、どういうわけかそういう嗜好がしみついてしまっている。たぶんだが、そうしたねじれや屈折が自分の思考にもたらす抵抗とか負荷に快楽を覚えるのと、そういう部分にこそ人間のリアルが宿っているという、素朴な信仰があるのだろう。

『ＭＦＥ』第３号の特集「物語の楽しさ」は、人と物語との多様なふれあい方を垣間見せてくれるものだった。物語を読む／書くことをめぐる反省的考察もあれば、個別の作品を手がかりにして社会をとらえなおす試みもあり、さらには物語そのものも含まれている。

これらの作品をどのように読んでもいいわけだが、僕はやはり、それぞれのなかにどのようなねじれや屈折の要素が潜んでいるか、というところが気になってしまう。おそらくあらゆる物語（あるいは物語をめぐる語り）には、それぞれの仕方でねじれや屈折が畳み込まれているのだと思うが、この特集を読んで僕が印象深く思ったのは､「ためらい」もしくは「立ち止まり」の感覚だ。

たとえば特集扉にイントロダクション的な文章が載せられているが、そこではいったん「今回の特集はあれやこれやの物語が持っている力ということにしよう」という考えが示される一方で、すぐさまそれが「物語が何かを本当になし得ることを前提しているようにも聞こえ、また一方では、物語に何か現実に働きかける力がないと意味ないでしょう、と受け取られるかもしれない」というためらいが表明されている。価値観の押し付けを避けようとする常識的配慮ではあるのだが、そこには物語について考え、語るということの個人性と社会性とのせめぎあいが見え隠れしているようにも思われる。物語を読むと、自分の解釈は誰とも共有できない自分だけのものだという感覚と、その解釈や感動を誰かと共有したいという欲望の両方が生み出され、ある意味では互いに矛盾する両面性のなかに、物語というものの魅力があるのかもしれない（個人の感想です)。

沈正明「物語に、生きている」や姜文姫「時

の流れが変える関係性の「むなしさ」」、福岡弘彬「地下鉄乗客階級のひそやかな構成」は、それぞれ物語のなかの／を介した連帯、つながりに注目しながら、同時にそうした連帯へのためらいや立ち止まりを表現しているように思える。たとえば姜は、現代日本における韓国文学の受容について、それがフェミニズム的文脈のなかで生じており、そこでは「シスターフッド」にもとづく日韓の女性たちの連帯の可能性が強調される傾向にあることを指摘する。しかし、姜はむしろ、韓国文学を女性どうしの連帯という側面からとらえる見方を攪乱するような作品を分析の俎上にのぼせることで、安直な連帯の賛美ではなく、時の経過のなかで流動する関係性についての思考を試みている。

沈と福岡の論考は、自分たちのリアルな生と物語世界を連結させながら語るところが印象的だ。死者と生者の（あるいは死者を介した生者どうしの）、あるいは満員の地下鉄に乗り合わせる者たちの間のある種のつながりが論じられているが、そのつながりは安定的・永続的なものとはいえない。基本的に、死者と生者（とくに死者と直接的な関係のない生者）には一定の距離があり、地下鉄乗客たちにいたっては憎悪や軽蔑の感情を（ひそかに）向けあっている。沈や福岡の文章を読むと、物語はそうした日常の現実に裂け目を入れて、ささやかな対話や協働の可能性を垣間見せると同時に、その儚さをも表現しているのだと考えさせられる。

日高由貴「物語と声、怖さについて」で言及されている、物語を読むことへの恐れと、にもかかわらず新たな物語へと向かっていこうとする「冒険」のせめぎ合いも面白い。僕はどちらかというと、そういう「怖さ」を感知できない方なのだが、読書を冒険ととらえると、新たな地平が開けそうな気がしてくる。では、自分ならどのような冒険がありうるのか。そんなことを考えた。

奥田のぞみ

第３号の特集を拝見したとき、思っていた以上に本や小説をとりあげた、正当なアプローチが多いなというのが第一印象でした。

私が編集者として携わっているのは、社会や政治に関わる学術書がほとんどなので、文学とは立ち位置が異なるかもしれません。でも、本を作る過程で自分が「物語」という言葉を使っていることに、３号のテーマを考えているときに気づきました。学術書は著者が調べたことをベースに自らの考えを書き記すものですが、それを並べただけの、ざっくり言うと箇条書きのような原稿もけっこうあります。そういうとき私は、もっと読者に届くように本１冊を物語のようにしてください、とお願いすることがあります。起承転結を求めているのではなく、他の人に語りかけるようなものにしてほしいという意味です。他の人にわかってもらいたいとき、箇条書きでは語らないと思うのです。

特集では、姜文姫さんの「時の流れが変える関係性の「むなしさ」：日本における韓国文学受容とチェ・ウニョン『ショウコの微笑』」がとくに勉強になりました。韓国文学に共感し、受容する日本人読者がひじょうに増えてきた一方で、日本文学にそういった盛り上がりはあまり見られないのはなぜなのかと考えていたので、姜さんの「2016 年以後の韓国では文学とフェミニズム、民主化をめぐって激しい議論が展開されつつある。韓国で展開している民主化とフェミニズムの関係に関する現在進行している議論が、日本における韓国文学とフェミニズム結合には抜け落ちている」という指摘に深くうなずきました。ほんのわずかでも政治的なことが忌避される日本では、文学でも映画でも民主主義が重要な要素になることはほとんどなかったように思います。

けれども人が生きていくうえで、あらゆることには政治がかかわっているのであり、それが欠けていると、どこか現実とずれた話になってしまうように感じます。文学に政治の要素が、学術書に文学の要素が加われば、どちらも物語としてもっと可能性が広がるかもしれません。どんな本も人生も、ひとつの物語なのではと私は思っています。

川村 邦光

読書と追想の日々：MFE ３号の感想

10 年前、何をしていただろうか。記憶は遙か彼方に消え失せてしまっている。電車の中でかなり本を読んでいたことは確かです。自慢じゃない（自慢かもしれない）が、実は私はこれまでになく本をたくさん読んでいます。暇つぶしといわれれば、そうかもしれません。数年前に買った物、それも翻訳書がおもで、新刊書はほとんどありません。少しあげますと、以下の通り。

ジョン・アーヴィング『ひとりの体で』（新潮社、2013 年）、同『第四の手』（新潮社、2002 年）、ハン・ガン『菜食主義者』（クオン、2011 年）、余華『死者たちの七日間』（河出書房新社、2014 年）、陣野俊史『テロルの伝説：桐山襲列伝』（河出書房新社、2016 年）、ポール・オースター『インヴィジブル』（新潮社、2018 年）、莫言『蛙鳴』（中央公論新社、2011 年）、閻連科『愉楽』（河出書房新社、2014 年）、甘耀明『鬼殺し』（白水社、2017 年）、レベッカ・ソルニット『ウォークス』（左右社、2017 年）、J・M・クッツェー『恥辱』（早川書房、2003 年）、アンソニー・ホロヴィッツ『カササギ殺人事件』（創元社、2018 年）、ブルース・チャットウィン『黒ヶ丘の上で』（みすず書房、2014 年）、ケイト・モートン『秘密』（東京創元社、2013 年）、会田誠『性と芸術』（幻冬舎、2022 年）、村上春樹『街とその不確かな壁』（新潮社、2023 年）、一色次郎『青幻記』（筑摩書房、1967 年）、ミラン・クンデラ『笑いと忘却』（集英社、1992 年）、アルベルト・ルイ＝サンチェス『空気の名前』（白水社、2013 年）など。

次は MFE ３号の感想もしくはコメントです。ほとんど刊行前に書いたもので、後に追加しています。人の文章を読んでいると、つい自分のことを振り返り、過去の記憶が呼び覚まされたり、不意に出てきたりして、悔いや反省に見舞われることがしばしばあります。それも「物語の楽しさ」ですが、苦味のある味わいが多くなっているようです。

沈恬恬「石と証（三）」：「歴史は確かに軽々と一瞬のうちに「廃墟」とならざるを得ない」、確かにそうです。だから、廃墟に眼を向けて、そこからがらくたを集めるのも必要になり、楽しくもあり、苦々しくもあります。だが、廃墟には眼を向けられずに忘れ去られ、「新しい物語」がせっせと作り上げられています。あえて廃墟のカビの匂い、あるいは本のカビとその匂いを思い起こしてみよう。柿田肇さんはちょうど 10 年前の６月７日、ガンで亡くなりました。享年 46。その年のお盆過ぎ、柿田宅に線香あげにうかがいました。その際、両親から、蔵書を整理してほしいと頼まれました。とにかくたくさん本がありました。また、パソコンとメモリが残されていました。パソコンはパスワードがないために開けられませんでした。メモリは数多く預かってきました。翌月、私は院生のガラシーノ・ファクンドさん、湯天軼さん、永岡崇さんと一緒に柿田さんの本の整理に行ったのです。

本は机のある部屋、書棚と床に本を置いた部屋、もう一部屋、３部屋にありました。どのように分けられて配置されたのかは解りません。本当にカビの臭いがしたのかと問われると自信がありません。本の主のいなくなってしまった部屋、そこには手づかずのまま放置された本がひっそりと並んだり、積み重ねられたりしていました。見捨てられたわけではなく、主に置き

去りにされた本、主をなくした本、それにはカビが生え腐っていくかもしれませんが、本の貰い手が現われるかもしれません。それには本の旧主の記憶が残り、懐かしい物語が語り始められて伝えられ、歴史とでも言っていいものが生み出されてくるかもしれません。私たちはダンボールに本をどしどし詰めまくって、積み重ねました。私たち４名は形見として数冊の本を貰い受けるとともに、大阪大日本学研究室に送ってもらい、これも研究室の人びとに形見分けとして、好きな本を引き取ってもらいました。

その後、『文化／批評』春季臨時増刊号に「特集：柿田肇の仕事」と題して、柿田さんの書いた物をまとめて刊行しました。2016 年のことで、春の彼岸に合わせました。表紙には、柿田肇さんの父とその母親の写真と思われたものを用いました。それは私のゼミのレポートに別冊として添えられた家族アルバムからの一葉でした。柿田宅にこの冊子を持参したところ、両親から、表紙の母子写真は全くそうでないと言われました。浴衣を着た母親の前に法被をまとい、鉢巻を締めた子供が立っている、慈しみ深そうな母子写真です。子供の法被の襟には「山笠」と記されています。とすると、これは福岡天神祭りの山笠の記念写真なのではないかと思われます。私はうるわしい母子物語を想像し、歴史の記憶を捏造していたようです。ともあれ、この表紙は柿田さんの好みにぴったりだったのではないかと思っています。

私はセクシュアリティ関連の本を形見として貰い受けました。私の家の北側の部屋は本棚と床一面、本で埋め尽くされていますが、壁際は結露して黒カビが生えやすく、困ったものです。壁紙は黒ずみ剝がれているところもあります。そんななかで本たちは棲息し、カビが付き、ぶよぶよになって膨れている本を見ると、すまない心持になります。

張夢霄「ピュアにならない部屋」:そういえば、この頃はないのですが、一時期、ゴキブリが出ていたことがありました。私は好き嫌いがなく、どうでもいいのですが、妻に言われて、新聞紙を丸めて叩き殺します。すばやい動きでほとほと感心します。捕まえられませんでしたが、猫が追いかけていたこともありました。W はゴキブリだったこと知ると、何だか狐につまれたかのような感じになりました。私の部屋は冬の結露が乾き切って間もなく、梅雨時の湿気に見舞われている昨今です。

姜文姫「時の流れが変える関係性の「むなしさ」」:「ショウコの微笑」の最後間近、ショウコがソユの祖父キムへ送った手紙、キムは読むことなく、亡くなっていた。ソユはショウコに祖父の死を伝える手紙を送り、泣き続けます。その後、ショウコからの電話。「時が経つにつれ」、祖父に対する悔いが募ってきたのでしょう。その一方で、祖父と繋がっていたショウコに対する妬みが湧き上がってきます。このあたりがこの小説の読ませどころかと思いました。嫉妬と後悔、時の流れの中で薄らぐことだろうが、ふと現われることがあります。ソユは薄らいでいっただろうか。二人の再会、ショウコはソユの手を握り「うっすらとほほ笑んで私を見つめ」ます。いわばどんでん返しの「ショウコの微笑」です。そして、祖父の 200 通位の日本語手紙、英訳による再配達。ショウコの「礼儀正しい微笑」、ソユはどのような表情をしたのだろうか。終わりもショウコの「礼儀正しい微笑」を見て「寒くなった」ソユ。二人の間に和解のようなものがあったのではないかと思って読んだが、作者はそのように書きませんでした。読者に二人の行方、やり直しを想像させたかったのでしょうか。

奈良県立図書情報館では「図書企画展 韓国文学への旅：現代韓国文学とその周辺」（下にハングル表記；目録も刊行）と題した展示をしています（５月 23 日～６月 29 日）。50 年以上前、私の周辺では金芝河（キムジハ）が読まれていました。韓国

の民主化運動、北朝鮮スパイ事件があり、その流れで沢正彦牧師の教会を訪ねたことがありました。金素雲編訳『朝鮮詩集』を手にしたのはその頃でしょう。沢牧師の妻が金素雲の娘、金(キム)纓(ヨン)で、今はどうか解りませんが、仙台に住んでいたことがありました。その娘が音楽家の沢知恵、活躍しています。朝鮮戦争での殺戮を描いた、黄皙暎(ファンソギョン)『客人(ソンニム)』（鄭敬謨訳、岩波書店、2004年)、これはすばらしかった。黄の『懐かしの庭』（青柳優子訳、岩波書店、2002年)、『パリデギ』（青柳優子訳、岩波書店、2008年）を読みました。訳者の青柳は知り合いで、最近、編訳『金作品集Ⅰ新しい歌』（南北社、2022年）を出しました。近年読んだ韓国翻訳書は以下の通り。李承雨『生の裏面』（藤原書店、2011年)、ハン・ガン『少年が来る』（クオン、2016年)、クォン･ジエ『師任堂の深紅の絹の包み』（図書刊行会、2019年：韓ドラのイ・ヨンエ主演『師任堂』に引かれて読みました)、イ・ラン『アヒル命名会議』（河出書房新社、2020年：ここに「手違いゾンビ」というのがありました）チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房、2018年)。ハン・ガン『菜食主義者』（クオン、2011年)。

沈正明「物語に、生きている」:「物語を読む理由はいろいろあるけど、たまに物語だけが死に立ち向かえると思えることがある」という文から以下のようなことを思いました。

弔いについて思い巡らし考えていた際、ささいな文章であれ、小説や評論、詩歌、絵、彫刻など、あらゆる作品は弔いのためのもの、弔いそのものではないかと思うようになりました。誰の弔いなのか。さしずめ特定の死者がいるかもしれないし、想定されているかもしれません。すでに亡くなった近しい人、親しい人、親兄弟姉妹などためかもしれない。だが、それはそうした人に自分を仮託しているのではないか。自分以外にありえないのではないかと思うようになったのです。時々の何らかのものの消失、喪失を留めておこうとする絶えざる営み、いわば墓碑の建立なのかもしれません。

ある作家がかつて書いた小説を書き直したり、膨らませたりした。何かがまだ終わっていない感じ、いわば弔いが未完のままだという感じが澱のようにずっと潜んでいたのかもしれません。それが納得いくほどすっきりと解消されたのかどうかは解りません。おおよそ果たされなかったという感覚が残っただろうが、踏ん切りをつけることも大事でしょう。

藤本紘士「私小説とラップ」: 私小説の「曝け出し」と「神聖味」もしくは「宗教性」。私は潔さ・潔癖さ、そこから崇高さを覚えます。やはり自分を他者として距離をとることによって、自分を葬ろう、弔いたいとする強烈な意思・意欲が粘着質の文体に感じます。叫ぶこと、単に憤懣を吐き出すのではなく、切迫して、何かを訴える、危機を体現した声こそ、老若男女に求められているのではないでしょうか。何十年も叫ぶことのなくなってしまった私ですが。

アジテーションのようなもの、それは世間・識者からひどく嫌われましたが、大学などでは消え失せていきました。かつて比叡山の僧兵は集会を開いてアジり、都へと神輿を担いで攻め入ったそうです。じょうずなアジは七五調でリズミカルなもので、昂揚させ、気合が入りました。そして、インターナショナルやワルシャワ労働歌が歌われ、デモを繰り出していきます。アジや労働歌、デモ、実に身体感覚に訴えるもので、連帯、一体感が喚起されるでしょうが、それなりに楽しいものでした。あのような集団性は毛嫌いされるようになりますが、機動隊と衝突したり、逮捕されたりすると、やはり個人というものを意識させられたことでしょう。

日高由貴「物語の声、怖さについて」: 物語る声は怖さを喚起するだろう。幽霊話はまさしくそうでしょう。擬態語は活字で読むよりも、声に出した方が効果てき面です。とはいえ、わ

ざとらしいいかにも巧みな声音は物語を聴く怖さを減退させます。振り返ってみると、我が家では囲炉裏があったのですが、そこで昔話のようなものを話されたり、読み聞かせられたりしたことはないような気がします。覚えていないだけかもしれません。

私が記憶している絵本として『石童丸』というのがあります。祖母が長野の善光寺にお参りに行った際に、土産に買ってきたものです。高野山で出家した刈萱道心のもとを息子の石童丸が訪ねて行くという話。父は桜の花の散るのを見て、無常を感じ、妻子を捨てて出家を志します。妻に諫められて、「蛇身と書いて女と読む、理非のわからぬ女」と問答しても仕方がないといったん出家を諦めますが、家をでて出家します。絵本には、出家前、女性たちが蛇に変身した姿の影が障子に写った絵があります。「人を憎み、妬み給えば、生きながら、鬼とも蛇とも、なるぞかし」（御伽草紙『いそざき』）ということで、だから女性は地獄に堕ちるとされていました。

私は女性が蛇に変身するのを不気味に思い、怖さを感じたのだろうか。蛇は時折眼にしたが、ぞくっとさせられます。特に木のうろ（洞）に生まれたばかりのごく小さな蛇が数多く蠢いているのはそうです。不気味な物、厭わしい物、毛嫌いしている物、汚い物、グロテスクな物、こうした物は眼をそむけたいのだが、ついつい見てしまいます。物語・小説でも、そうしたものを期待し、引き込まれていきます。アンビヴァレントな心理というものでしょうか。後年、高野山に行ったついでに刈萱堂を見てきました。

茶園敏美「シェイクスピアの挑戦状」：調べてはいませんが、やっぱりポーシャは男装でズボンを履いていたでしょう。男装で思い出すのは『琴姫七変化』の松山容子です。沖縄だけで売られているボンカレーのキャラクターです。こちら良妻風で、テレビドラマでは可憐でお転婆なお姫様と凛々しい若衆姿です。明治期あたりまでは盆踊りや祭りで男装女装はありふれていましたが、風俗紊乱として一応禁止、運動会などの仮装行列で受け継がれ、今では少女マンガに残り、ゲイやレズビアンのファッションになっているというところでしょうか。西洋などでも、カーニヴァルでのファッションになっていたのではないでしょうか。『ベニスの商人』はカーニヴァル的な祝祭劇だったのではないかと思ってしまいました。

三田牧「出会いを物語に：沖縄県糸満にて」：フィールドワークが「海人」という物語に結実しています。エスノグラフィと物語、ほとんど読まれないものと少しは読まれるものといった違いはあるかもしれないが、あまり違いはなさそうです。エスノグラフィは英国・米国の文化人類学あたりから定型化されたのでしょうか。無味乾燥と言っていいほどの記述や数値を駆使した硬い文体の報告書に徹底していったようです。

「異文化を学ぶと言うことは、全身全霊で取り組む「変容の体験」なのだ」、それは「文学や絵画として表現するのに適している」、「感性で学びとったものを論文に書く道は、ほぼ封じられている」、恐らくそうでしょう。「個人的な色彩」を帯びさせないようにするのは学術論文なるものの作法、アカデミズム制度なのでしょうが、それを自らに課してしまうのは限界もしくは迎合であり、それを突破してもよかったのではないかと今では思っています。

私は1980年前後、宮城県と青森県の盲目巫女さん（おがみさま／いたこ）と晴眼の巫女さん（かみさま）に話を聴きいていました。アポイントメントもとらず、直接訪ねていきました。青森県の岩木山麓の赤倉では、一週間以上、晴眼の巫女さんのお堂に泊めてもらい、仕事を少し手伝ったこともありました。宮城県の盲目と晴眼の巫女については、やや学術・論文調でまとめました。青森県の巫女さんについては論文

として書かず、エッセイ風のものを書いただけでした。晴眼の巫女の中には〝世に出してくれ〟〝世に出たい〟と言う人もいて、プライヴァシーも考慮しつつ、すべて実名を出しました。

当時の私には学術論文的でなくとも、実名を出さないのはせっかく話してくれた人に失礼であり、実名を出すことこそ当人を尊重することになると考えていました。私が話を聴いた巫女さんたちはすべて亡くなっています。故人のために少しは弔いになっているのではないかと思います。亡き人に出会えるのは筆者だけなのだとも思って、懐かしむとともに悔いも生じてきます。

福岡弘彬「地下鉄乗客階級のひそやかな構成」：津村記久子の「地下鉄の叙事詩」（2008 年）から、「地下鉄乗客階級」の生成発展を思索して、あるいは妄想して、様々な所に連れて行ってくれそうな文です。私もこれに誘われて、津村の小説を初めて読んでみました。

昨今の多くの出来事・事件すべてに、福岡の言う「暴力衝動」の発揮、もしくは怒りの「暴発」を見ることができると思いました。それは得体の知れない怒りでしかないかもしれない。だが、津村の「地下鉄の叙事詩」ではそうではなく、小説だから当然かもしれないが、かなり言葉で表わせられる怒りです。恐らくそこに「地下鉄乗客階級」形成の潜在的な可能性があるのでしょうか。それは福岡の言う「労わり」の目覚めであろうが、やはり対話や会話、議論が介在する必要があろうかなどと考えてしまいます。「脱線」は震災と同様、大災害を生むと同時にひと時の連帯または「労わり」を生み出すことがありますが、ここでは一応階級が消滅したかのような世界が現われるようです。

「痴漢」事件はこの「労わり」を目覚めさせる「特異点」になったが、他方では怒りの発火点にもなったでしょう。何らかの共同性をもつ想像（妄想・幻想）が創出される出来事において、ナショナリズムでも、社会主義・階級闘争でも、怒りは組織化されるのだろう。だが、悪・不正義とみなされた者への暴力は異端・異分子・非国民の排除・抹殺へと向かうことがあることは歴史が示すところでもあります。階級という言葉には久々に出会ったような気がします。階級とは概念・観念でもいいのだが、今ここ、そこかしこに生成する運動態（体）のようなもの、一時的であれ、長期的であれ、電車の中ででも立ち現われる、流動するもとして考えたほうが、階級闘争なる言葉を復権させるかもしれないと思いました。かつてはやはり物神（フェティッシュ）化していたのだという感慨をあらためて思い知らされます。

今は隠居の身なのですが、以前「地下鉄乗客階級」ではなく、「電車乗客階級」だった私も身につまされます。私は授業をほとんどすべて午後にしていたせいか、満員電車にも痴漢事件にも遭遇したことがありませんでした（ただし秋口から金曜日は２・３・４時限の授業になり、早起きにひと苦労しましたが、その後の酒飲みだけを楽しみにしていました）。家から学校まで１時間 40 分、ミステリーが多かったのですが、たくさん本を読めました。

川村邦光「子狐と貨幣の因縁」：新美南吉は子狐に何を託そうとしたのか、もう一度振り返ってみます。少年少女のために書かれた小説・童話、子狐は少年のメタファだと考えても、そうしなくてもいいでしょうが、幼い子供の一人で買い物の冒険を描いて、少年少女に提供した、僻地の子供が町場で買い物をしたとするのはつまらない。冒険といっても子狐にはそうでないが、ささいなものです。やはり狐・異類と人の交流が眼目でしょう。新美は異類の側に立って話を進めています。

新美がこれを発表した 1933 年、満洲事変、満洲国建国、小作争議多発、風間丈太郎・紺野与次郎ら共産党再建・壊滅が背景にありますが、

中国侵略や共産党事件はあまり関わりなかったでしょう。都市部ではエロ・グロ・ナンセンス、地方では農漁村部の窮乏という情況が「手袋」の背景でしょう。母娘の狐に対する思いやり、「手袋」のテーマは人のやさしさとすると、そこにはエロ・グロも窮乏もありません。狐が鶏を盗もうとして追いかけられたというほかは、拍子抜けするほどの穏やかでのどかな世界が没社会的・政治的に描かれています。母子狐の生きている世界は過酷なはずなのに、人間世界との交流・共存がほのめかされています。中国との共栄を示唆しているとは考えられませんが、外部の異類との共存の可能性が何ら配慮なく期待されているようです。やさしさ、慈しみといったものに過剰な期待を寄せていると思うのです。

金大勲「ハルモニの遺したもの」：讃美歌に刻まれた歴史、そこには「抵抗」も籠められて歌い続けられたのでしょう。私はガラクタ・廃品を思い出しました。福島県南会津の山間部で育ったが、私が小学生の頃、1950 年代後半から 60 年代前半、こんな山深い所にも在日の人がいました。私の家のごく近くに安ショウコウさん一家、かなり離れた所に柳さん。二人とも朝鮮人。同級生に台湾人の青松正徳。安さんは廃品回収業者、それなりの規模で、金属を圧縮する機械が装置され、繁盛していました。小学生の餓鬼は空き缶や空き瓶、銅線、屑鉄などをかき集めて売って、小遣い稼ぎをしていました。アカガネ（銅）は高く買ってくれますので、近隣の物を黙って持っていきました。

柳さんも廃品回収業者ですが、こちらはバタ屋というところで、廃品を集めて、安さんの所に売って生計を立てていたようです。貧しく粗末な家、私よりも２学年ほど上の娘と暮らしていました。柳さんと娘は露骨に差別されていました。子供たちに何やら囃し立てられていました。安さんはどうだったか、当時としてはそれなりに羽振りのいい暮らし、小さな町のことですから、表立ってではなくともやはり差別されていたでしょう。安さんも柳さんも、60 年代初め頃、忽然としていなくなりました。後で知ったことですが、北朝鮮に帰りました。安さんも柳さんも見送る人とてなく、国鉄会津線から磐越西線に乗り換えて、新潟港から万峰号で祖国へと帰還したのでしょう。同級生の青松正徳は家が離れ、同じクラスにならなかったため、親しくなることがなく、中卒とともに東京へ出ていったようです。青松は体格がよく、苛められるようなことはなかったようです。

木谷彰宏「風景に刻まれた「基地の街」コザをみる」：「みえなくなってしまった人たち」ルポルタージュ、小説、写真などで浮き彫りにされていることもあるでしょう。

作文を書いた者たちは光・明／影・暗の外にいるのだろうか、その間にいるのだろうか。「かわいそうだとおもいます」「くやしくなります」「嫌な思い」「いやな感じ」を抱いてしまう自分の「風景」、それを描いたなら、「基地の街」のイメージに潜む重層的な風景・構造を抉り出すことがでたのではないかと思いました。こうした感情、同情や嫌悪感を抱いたことは、排除する姿勢というよりも、むしろそれを直視したことに意義があるのでしょう。

佐久川恵美「自分たちの「今」を伝える」：Ｇ７が広島で開催されたが、福島原発事故・被災者に関しては何も語られなかったようです。その前、韓国大統領に対して福島原発処理水放出に関して立入り検査を認めることが報道されましたが、これとて「「正しい」知識」を喧伝し、浜通りの漁師自身に対して「風評被害者」から「風評加害者」へと転換するぞという脅しなっていると、本稿を読んで思いました。福島原発事故・コロナを無視して忘れ去り、虚妄な核抑止力なるものを前提にして、戦争体制を強化しようとする趨勢になっています。パレスチナやミャンマはどうなんだろうか。

浜恵介「「地方」における原水爆禁止運動の成立」:「平和委員会」が各地域で活躍していますが、これは共産党国際派系の組織で、６全協以後、原水協などでヘゲモニーを握っていったのでしょうか。この「平和委員会」の担い手はどのような人々だったのか、いつまで目立った活動をしていたのか、今でもあるのだろうか。広島は政権をはじめ、色々な所でダシに使われ、見世物として晒され尽されて、捨て去られるのかと、広島Ｇ７で思いました。

岡本直美「人びとの移動と土地闘争」: 清田政信の「真謝は真謝部落のもの」を批判した所論において、「農民が＜村＞の排他性を提示することで、連帯の可能性を捨ててしまったという解釈」に対して、阿波根昌鴻を援用して批判します。清田は農民組織の「下向するコミューン」志向、「労働者や農民との連帯」を構想して、「村の排他性と血脈」を見出して批判しました。岡本は「飢えに向き合っているのがニンゲンである以上、「真謝は真謝部落のもの」という言葉は「他のニンゲンと繋がりを持つための開かれた言葉であるし、それは暴力を無化させない力を持っている」(「暴力を無化させない」が理解できなかった）と清田を批判します。

清田の「黒田喜夫論」の発表は 1967 年。当時からすれば、スターリン批判を経た、先鋭的な思考だったのであり、真謝・沖縄・日本へと連なる郷党主義・愛郷主義や民族主義、パトリオティズム、ナショナリズムに対抗していました（労農同盟、プロレタリア革命を夢想していたかもしれないが)。清田は「村の排他性」を指弾することによって、「連帯の可能性を捨ててしまったという解釈」をしたのだろうか。「労働者や農民との連帯を分断した」、ステロタイプ化された革命主体の人民観だろうが、「分断した」という言葉に少しはこだわってみてもいいのではないか。流動する状況の中で分断も流動し変わっていくだろう。また、真謝・沖縄・日本へと連結（密通？）させる心情的・排他的な地域・民族主義を批判することは、意義があろう。恐らく理念としての（あるいは公式的な）労農連帯こそ問われてもいいように思います。

三里塚闘争を思い起こしました。ここの農家は稲作、ピーナッツなどの畑作、酪農をやっていて、極めて豊かでした。関東ローム層の畑は広大で、私の出身地の会津の山間部と比べものになりません。こういう土地柄だからこそ、反対運動を続けることができたのかとしみじみと思いました。代替不能な土地、それを通じて繋がる血縁・地縁の利己的かつ協働的な生活者、失う物はないとされるプロレタリアートよりも豊かであるがゆえに、強いというパラドックス、もしくはまっとうな根拠を思い知ったような気がしました。

空港反対同盟内では、古くからの農家よりも、戦後の開拓農家の方が崩されていったと言われています。ひとえに土地への執着があるでしょう。開拓農家は満洲からの引揚げ者だったようです。脅迫もあったでしょうが、国のやることだから、いつまでも反対していても無駄だ、仕方がないと、懐柔されたでしょう。それに補償金と代替地、それが大きかったでしょう。多分、代替地は都市部に近く、これまでの農地よりも地味がいいと思われたでしょう。集落・反対同盟内で古い農家と開拓農家との間に確執・差別があったかもしれません。代替地はどこだったのか、農作物はよく育ったのか、収入はどうなったのか、恐らく誰も調べていないでしょう。裏切り者、脱落者としかみなさなかったのであり、今思うに、極めて残念なことです。今更ながら、こんなところに当時の闘争の不充分さがあったと思います。

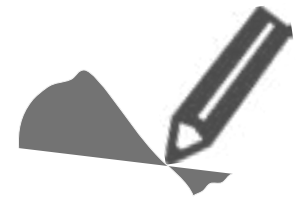
佐藤博昭「見当」: あの当時、安倍のような者は殺されて当然だ、殺すほどの値打ちがない、と私は思ったようでした。この二つは矛盾・相反しているようだが、そうではなく繋がってい

るような気がします。殺すに値しなくとも、殺されて当然だと思うこともあるわけです。そんな風に思うことの根柢には、殺し／殺されることを自明視しているところがあるかもしれません。私でも、一応は反暴力・反殺人・反戦です。識者や文化人、マスメディアでは、おためごかしに、暴力は許されない、と前置きして極めて冗舌に語っていました。第二の事件も起きましたが、九波流行を控えたコロナと同様に余り語られなくなりました。誰も飽きやすいし、そんなことにいつまでもかかずらっていられないということでしょうが、やはり他生の縁を探っていくのも大切でしょう。そんな「見当」です。

私は山上が近鉄奈良線の新大宮駅から大和西大寺駅、一駅だけ通過して、いともたやすく暗殺したのにいたく感心しました。後の報道では、岡山あたりまで偵察に行ったようですが、隣近所といった程の移動だけで、いわば安直に暗殺を成就させてしまったのです。武器の製造、山中での試し撃ち、統一教会奈良支部への射撃など色々と苦労を重ねながら、凝縮し煮詰まった時を過ごしただろう。それはかけがえのない、いわば至福の時だったろう。妬みうらやんだ人もいただろう。だが、安重根のような暗殺者を想起すると、追跡・移動の手短さがいわば驚異的です。〝暗殺なんか、簡単なもんです〟といった呟きが聞えそうです。山上は私の住んでいる所から、500 メートル程離れた所に住んでいました。近くスーパーですれ違ったと思うと、何とはなく親近感めいたものを覚えてしまいます。烈士とか義人とかと讃える人もいるでしょう。だが、私は山上の体験した暗殺のために営んだ時の流れを思い巡らしてしまいます。

次号特集

留置と拘束



みなさんへ

こんにちは。私は姜文姫です。

私と友人が韓国語で共同翻訳した『最終獄中通信』（大道寺将司著・イ・ジョンミン、カン・ムニ訳、エディトゥス、2022 年）が昨年出版されました。翻訳のはじまりは、共同翻訳者からの提案でした。この翻訳作業をきっかけに私は人と人がつながることについて考えるようになりました。『最終獄中通信』は表題通り、2017 年に亡くなった大道寺将司さんが 1987 年に死刑確定されてから出された本のなかの、「最終」のものです。

COVID19 の世界的流行のなか行った翻訳はとても楽しく、また多くの課題を残しました。私は翻訳をする中で新たな人と知り合ったり本の中でも色々な人と集団に出会いました。1971 年から日本帝国主義に対する批判の意味を含め武装闘争を展開した「東アジア反日武装戦線」は、1975 年 5 月 19 日の一斉逮捕以後獄中で様々な運動を展開します。不当な獄中の処遇への改善要求運動、弁護士に頼らず獄中と獄外の者らが共同原告となって裁判に参加する T シャツ訴訟など。特に大道寺さんを含めて支援者と仲間たちが関わっているのは死刑廃止運動です。死刑が実質的に 25 年間行われていない国から来た私は、死刑制度について考えたことがありませんでした。大道寺さんの文章には、自分が犯してしまったことについて時間をかけて省察する機会が与えられないことを含め、刑務所・拘置所のように身体を拘束するシステムへの考察が仲間とのつながりとともに綴られています。最近観た映画『プリズン・サークル』（池上香監督、2020 年公開）も、留置と拘束、そしてそれから生じる処罰的装置というものについて考えさせられました。

このような考察を仲間と共有するのが難しい状況のなかで、それでもともに考えてみようとするのはまたどのような場と言葉をつくるのか。実際には「獄中」にいるがその「外」を想像すること、また逆に「外」から「中」をどのように想像できるか。そして我々はいかにして想像しつながることが可能なのか。COVID19 のため移動と人との接触が難しい時期であったからこそ、どうやったらつながる・つらなることができるか、が翻訳作業とともに抱いていた課題でした。

みなさん、身体の自由を拘束し留置し閉じ込めるものは何でしょうか。ともに考えてみませんか。考えたいことは、刑務所や拘置所、死刑に限定されません。入管法にかかわる拘束や難民への処遇、あるいは精神疾患を理由にした隔離や身体拘束など、私たちの社会のまるで前提のように存在し続ける留置と拘束を考えたいのです。ぜひ原稿をお寄せください。

まず MFE 編集部までエントリーをお願いします（メールアドレス：mfe.editor@gmail.com）。

特集以外の原稿も募集しています。お待ちしております。

다음호 특집

‘유치와 구속’

여러분께

안녕하세요. 저는 강문희라고 합니다.

제가 친구와 함께 한국어로 공동번역한『최종옥중통신』(다이도지 마사시 저, 이정민/강문희 공역, 에디투스, 2022년)이 작년 출판됐습니다. 번역의 시작은 공동번역자의 제안에 의해서였습니다. 이 번역작업을 계기로 저는 사람과 사람이 이어진다는 일에 대해 생각하게 되었습니다.『최종옥중통신』이라는 표제에서 알 수 있듯, 이 책은 2017년 사망한 다이도지 마사시 씨가 1987년 사형이 확정되고나서 쓴 책 중 ‘마지막’ 책입니다.

코로나바이러스감염증-19가 세계적으로 확산되는 상황 속에서 수행한 번역은 매우 즐거웠고, 또 여러 과제를 남겼습니다. 저는 번역을 하는 과정에서 새로운 사람과 사귀거나(혹은 이어지거나) 책 속에서도 여러 사람, 그리고 집단과 만나게 되었습니다. 1971년부터 일본제국주의에 대한 비판의 의미를 담아 무장투쟁을 전개해 온 ‘동아시아반일무장전선’은, 1975년 5월 19일 일제체포 이후 옥중에서 여러 운동을 전개하게 됩니다. 부당한 옥중 처우에 대한 개선요구운동, 변호사를 선임하지 않고 옥중와 옥외의 사람들이 공동원고가 되어 재판에 참여하는 ‘티셔츠 소송’ 등. 특히 다이도지 씨를 포함한 지원자와 동료들이 지속적으로 관여하고 있는 것은 사형폐지운동입니다. 사형이 실질적으로 25년 간이나 집행되지 않은 나라에서 온 저는, 사형제도에 대해 깊이 생각해 본 적이 없었습니다. 다이도지 씨의 글에는 자신들이 저질러버린 일에 대해 시간을 들여 성찰하는 기회가 주어져있지 않음을 포함하여, 형무소와 구치소같이 신체를 구속하는 시스템에 대한 고찰이, 동료들과의 이어짐과 함께 쓰여져 있습니다. 최근 본 영화『프리즌 서클』(이케가미 카오리 감독, 2020년 공개)도, 유치와 구속, 그리고 그로부터 생겨나는 징벌적 장치라는 것에 대해 생각하게끔 만들어주었습니다.

이러한 고찰을 동료들과 공유하는 일 자체가 어려운 상황 속에서, 그럼에도 불구하고 함께 생각해보는 일은 어떠한 ‘장’과 ‘언어/말’을 만드는 것일까. 실제로는 ‘옥중’에 있지만 그 ‘바깥’을 상상하는 일, 또 반대로 ‘바깥’에서 ‘안’은 어떻게 상상할 수 있을까. 그리고 우리들은 어떻게해서 상상하고 이어질 수 있는 것일까. 코로나바이러스감염증-19 탓에 이동, 사람과의 접촉이 어려워진 시기에야말로, 어떻게 이어지고, 또 나란히 함께 할 수 있을까, 라는 것이 번역작업을 하면서 가지고 있던 과제였습니다.

여러분, 신체의 자유를 구속하고 유치하며 가두는 것은 무엇일까요. 함께 생각해보시지 않겠습니까. 하지만 함께 생각하고 싶은 게 형무소와 구치소, 사형에 한정되는 건 아닙니다. 출입국관리및난민인정법에 관련된 구속과 난민에 대한 처우, 혹은 정신질환을 이유로 한 신체구속 등등, 우리들 사회에서 마치 전제처럼 존재해 온 유치와 구속에 대해 생각해보고 싶은 겁니다. 부디 원고를 투고해주세요.

우선 MFE 편집부 앞으로 엔트리를 부탁드립니다. (이메일 주소 : mfe.editor@gmail.com)

특집 이외의 원고도 모집하고 있습니다. 귀중한 원고를 기다리고 있습니다.

편집후기

◆지금은 일상이 작은 여행 속에 있다. 며칠에 한 번씩 베개가 바뀌다 보니 두통약을 놓지 못하는 시기도 있었지만, 앞으로 삼 주쯤 잠을 잘 장소에 대해 늘 궁리하는 날들에도 익숙해지자 그런 문제에 골머리를 썩히는 일도 줄어들었다. 며칠에 한 번씩 이동을 거듭하는 생활을 하면서도 소지품을 거의 잃어버리지 않는 스스로에게 '소유' 관념이 이렇게 강하게 뿌리내리고 있었나 조금은 어이가 없기도 하다.

그러한 나날 속에서 마찬가지로 여기저기 이동을 계속하며 매일을 살아가는 사람들과 이야기할 기회도 많아졌다. 동영상 편집, 프로그래밍, 컨설턴트, 작가 등 요즘 풍 직업에 종사하는 이 사람들은 회사에 고용되어 있기도 하고 직접 창업을 하기도 하는 등 각양각색이지만, 대부분이 뜻밖일 정도로 규칙바른 노동의 리듬을 따르면서 나와 똑같이 노트북을 가만히 바라보며 매일을 보내고 있는 듯하다.

얼마 전에 이야기를 나눈 어떤 여성은 드라마 광고일에 종사하고 있었다. 좀 더 정확히 말하면 클라이언트(어패럴이나 식품회사가 많다)의 의뢰를 받아 그 회사 제품을 텔레비전 드라마 화면에 집어넣기 위해 제작 측에 영업을 한다는, 여기서 다시 설명해 봐도 뭔지 잘 알 수 없는 시스템 속에서 일하고 있었다. 세상은 실로 다양한 시스템으로 돌아가고 있는 것이다. 그 사람은 직업상 방영되는 드라마를 놓치면 안 되어서, 이야기 흐름 속에서 요즘(당시) < 엘피스 > 가 아주 재미있다고 가르쳐 주었다. "이렇게 재미있는 드라마는 이제까지 없었을지도 모른다"고.

실제로 그 말이 맞았다. 이렇게 재미있는 드라마는 본 적이 없다. '억울한 죄와 보도'라는 주제를 서서히 '미디어와 권력' 문제로 슬라이드 시키면서 서사로서 충분히 볼 가치가 있는 것으로 완성하는 동시에 주제의 깊이와 복잡함을 잃지 않고 이야기를 끝냈다. 이것이 점차 매력을 잃어가고 있는 텔레비전 드라마라는 매체에서 생긴 일이라는 데에 신선한 놀라움을 느꼈다. 이렇게 대단한 작품을 보면 당분간 다른 드라마를 즐기지 못하게 되지 않나 하는 기분이 들었다. 이거 참.

조리가 서 있는 인물 조형, 힘있는 말로 된 각본, 주제에 대한 천착의 깊이, 전반에 고조를 만들어내는 편집 방식 등, 좋은 점을 들자면 끝이 없지만 이 작품을 매력적으로 만드는 것은 < 프라이데이 봉봉 > 의 경박함, < 방울뱀(ガラガラヘビ) > 이나 < 보내는 말(贈る言葉) > 등 시대를 느끼게 해주는 삽입곡, 조연인 여성 신문기자의 엄청나게 어지르는 버릇 등 이야기 전개와는 직접 관계없는 비스듬한 시선, 여백 부분이거나 한다.

이번 특집인「장과 관」은 "필자의 말을 비스듬하게 옆에서 이끌어낸다"라는 이미지로 기획했습니다. 평소에는 각자의 주제와 정면에서 마주하는 연구자들도 이런 테마를 설정함으로써 다른 각도에서 글을 엮어갈 수 있지 않을까, 그리고 거기에는 스스로 생각하는 것 이상으로 풍요로운 세계가 펼쳐져 있지 않을까 하는 착상을 믿고 만들었습니다. 이번 호를 통해 독자와 필자가 스스로에게 잠들어 있는 언어나 문체, 새로운 이야기 방식과 조금이라도 만날 수 있었다면 기쁘겠습니다.(西)

◆특집에 원고를 보내주신 도요시마 가즈토(豊嶋和人) 씨에게는 내가 투고를 제안했다. 지난호의 후지모토 히로시(藤本紘士) 씨처럼 트위터에서 알고 지내는 사이다. 아니, 아직 알고 지내는 건 아닐지도 모른다. 후지모토 씨는 지난번 < 제 3 호를 읽는 모임 > 에도 참가해 주셨고 투고를 부탁하기 전에도 길에서 한 번 인사를 나눈 적이 있는데, 도요시마 씨와는 아직 한 번도 만난 적이 없다. 트위터에서 같은 경륜 팬으로 몇 번 멘션을 주고받은 적이 있는 정도고, 그것도 내가 경륜 책을 내고 나서니까 요 몇 년 사이의 일이다. 다만 내 쪽에서는 그전부터 조금 알고 있었다. 2008 년에 간행된『경륜 팬 에세이집 NO MARK』(あざみエージェント)에 글을 쓰신 적이 있기 때문이다. 오사카의 경륜 예상지『경륜 연구』에서 아르바이트를 하던 분이 인터넷상의 경륜 팬들에게 제안해 편집한 자비출판 도서로 30 명 정도의 필자가 참가했다. 졸고에서 썼듯 이 에세이집이 나왔을 무렵에 나는 경륜에서 조금 멀어져 있어서 인터넷에서 경륜에 대해 쓰거나 하지도 않았다 보니 팬의 한 사람으로서 제안이 오지는 않았다. 자료로 구입했는데 좋은 글을 쓰는 경륜 팬들이 이렇게 많았나 놀랐다. 내가 앞으로 경륜 책을 쓴다면 이 사람들이 수긍할 수 있게 써야만 하겠구나 하고 어렴풋이 생각하기도 했다. 도요시마 씨는 본명을 조금 바꾼 필명으로 개성적인 글을 쓰고 계셨다. 나중에 트위터에서 분명 그 글을 쓴 사람이겠구나 하고 발견해서 팔로우했다. 가가와현에서 농가를 하신다는 것, 나보다 조금 어린 나이로 나와도 인연이 있는 오사카의 대학에서 학생 생활을 보내셨다는 것, 농협 잡지

『집의 빛 (家の光)』에 에세이를 쓰고 있다는 것 등을 알게 됐다. 이번호 테마에 딱 맞는다는 생각이 들어서 제안을 했더니 과월호도 때때로 읽어 보셨다면서 흔쾌히 승락하셨다. 그 시절 니시노미야 (西宮) 경륜장의 난잡한 관객석에서 같은 하늘을 보고 있던 분과 MFE 라는 장에서 라인을 짤 (경륜에서 다른 선수와 협력 관계를 맺는 것 : 옮긴이) 수 있어서 기쁘다.(古)

◆상담할 일이 있어 Y 선생님에게 전화를 걸었더니 받지 않는다. 며칠 뒤에 다시 연락해 봤더니, 그때는 마침 도시샤대학을 바삐 걷고 있어서 전화가 온지 몰랐다고 한다. 약속 시간에 늦어져서 서두르고 있었던 참이어서, 나중에 생각하길 그래서 내가 전화를 걸어온 건가 했다고. 나는 한국에 있었던 데다 Y 선생님이 그때 어디서 무엇을 하고 있는지는 알 수 없으니까, 있을 수 없는 이야기이기는 하다. 하지만 이 타이밍의 절묘함이 어쩐지 좀 신기했다. Y 선생님은 그날 도미야마 선생님과도 만나고 오랜만에 화요회에도 참석했다고 들었다. 나를 알고 있는 사람들도 있어서 그들과 내 이야기도 조금 했다고. 부럽다, 저도 거기 같이 있고 싶었어요 말하면서도 문득 이런 생각도 조금 들었다. 장이 있다는 것은, 거기에 때마침 내가 있지 않을 때도 함께 있을 수가 있다는 뜻 아닐까 하는. 거기에 있는 관계들과 기억이 그것을 가능하게 해줄지도 모른다는. 장소에 시간이 쌓여 있음을 느낄 때가 있다. 아무런 흔적도 남아있지 않을 때조차 거기에 확실히 존재했던 사람들이나 거기서 일어났을 수많은 사건들을 상상하면 하나의 장소가 보이지 않는 무수한 층들로 이루어져 있는 것처럼 보일 때가 말이다. 이번 특집을 읽으면서 시간을 뛰어넘어 함께 있는, 다른 곳에 있으면서도 모일 수 있는 가능성에 대해 조금 생각해 본다.(明)

◆ 1 ~ 3 호와 이번 4 호를 비교해 보시기 바란다. "어째 좀 깔끔해졌는데"라고 생각하시지 않을까? 그렇다, 장인이 바뀐 것이다 (정확히 말하면 지난호부터 바뀌었지만, 새롭게 등장한 재능이 지면을 쇄신한 것은 이번 호부터). 레이아웃뿐 아니라 편집 절차도 개선해서 드디어 간행 스케줄도 정상화되어 가고 있다. 감사한 일이다.

하지만 이 편집후기를 쓸 타이밍이 되니 "이번 호에도 내 원고는 쓰지 않았네……" 라는 서글픈 기분이 들고 마는데, 쓰고 싶은 주제 리스트가 늘어가는 것은 좋은 일이라고 생각하기로 했다. 참고로 이번 리스트는 <TRICK> 론 (전에도 말했던) 과 하타 마사노리 (畑正憲)= 짱뚱어 (ムツゴロウ) 론이다. 실현할 수 있게끔 여기에 써두기로 한다.(N)

◆ 1 학기 수업에서 이토 노에 (伊藤野枝) 를 읽었다. 읽은 것 중에「야마카와 기쿠에 (山川菊枝) 론」이 있다. 이토와 야마카와는 논쟁 상대였는데 이「야마카와 기쿠에론」에서는 야마카와의 냉정한 분석력을 높이 평가한 뒤에 '그만두려 해도 그만둘 수 없는' 절박한 상황 속에서 사고하기를 이토는 야마카와에게 요청하고 있다. 여기서 상정되는 것은 기존 방식으로는 어찌할 수 없는 상황인 동시에 그럼에도 불구하고 포기할 수는 없다는 강한 마음이다. 이토는 야마카와에게 이러한 상황 설정과 마음을 요청한 것이다. 거기서 무엇이 시작되는가? "마음속에 간직하던 패션이 마침내 불타기 시작한다" 라고 이토는 말한다. 이토다운 표현이지만, 거기서는 이제까지의 전제가 붕괴할 때 생기는 가능성이 똑똑히 보이고 있다. 저 말콤 X 가 말한 "by any means necessary" 가 겹쳐진다. 중요한 것은 패션이 불타기 시작하기 바로 전의 지점을 확보하는 것이고, 시작을 정비해 두는 일이다. 다름 아닌 거기에 지적인 영위가 있다고 이토는 말한다.

이토 노에와 야마카와 기쿠에는 둘 다 여성들만의 사회주의 단체인 '적란회 (赤瀾会)' 에 참가해 여성 노동자의 투쟁을 조직하고 지원하고자 했다. 이 '적란회' 가 1921 년 제 2 회 노동절 행사에 RW(Red Wave 의 약자) 로고가 들어간 깃발과 함께 등장했을 때, 경관대에 얻어맞는 극심한 폭행을 당하고 전원 검거된다. "여자들 주제에" 라는 말과 함께 문답무용의 압도적인 폭력이 행사된 것이다. 이 폭력 앞에서 우선은 할 수 있는 게 없다. 하지만 출산 직후라서 이 노동절 행사에는 참가할 수 없었던 이토는 그 직후에 탄압을 가한 자들에게 경고문을 보낸다. 그 내용은 다음과 같다. 확실히 현재 상황에서는 우리와 너희들 사이에 힘의 차이는 역력하다. 그러니까 지금은 너희들을 분쇄하는 것은 포기한다. 하지만 그것은 "노예의 포기" 가 아니다. "이지의 눈을 활짝 뜬 포기" 다. 이토는 이렇게 말하며 분쇄될 때가 반드시 도래하리라는 것을 탄압자들에게 경고한다. 이것은 이토가 학살당하기 2 년 전에 한 말이다.

이토의 이 경고는 단순한 협박이 아니다. 압도적인 약세의 위치에 있으면서도 강약을 결정하는 질서의 토대가 무너지고 거기서 이제까지 보이지 않던 패션과 잠재적인 가능성이 나타나기 시작하는 것을 이토는 응시하고 있다. 그리고 현실을 성립시키고 있는 전제가 융해할 때 시작되는 사태를 그 바로 전에 앎과 함께 확

보하는 것. 미래가 미래로서 나타나기를 정비해 두는 것. 이러한 앎을 이토는 야마카와에게 요청한 것이다.

이러한 앎은 보편적인 앎이라기보다 개개의 상황에 놓인 앎이고, 저마다의 구체성 속에 끌어안긴 잠재적인 가능성을 계속해서 확보하기 위한 앎이다. 그 가능성은 따라서 상황에 의존하며, 또 개별적으로 보인다. 하지만 그것은 전제와 관련돼 있기 때문에 당연히 전체와도 관련된다. 개별이자 전체. 그런 가능성을 담보하는 잡지이고 싶다고 생각한다. (冨)

◆매미 울음소리가 시끄러운 벚나무 가로수가 이어지는, 둑의 나무 그늘 길을 걷는다. 눈부시게 빛나는 햇살 아래 가로수가 끊긴 다리를 건너 도서관으로 향한다. 냉방이 잘 된 도서관은 고맙다. 젊은 사람과 노인이 많다. 본문만 400 쪽을 넘어가서 다 읽지 못하겠지 생각하면서 오마타 라포 히토미 (小俣ラポー日登美) 의『순교의 일본: 근세 유럽의 선교 레토릭』(名古屋大学出版会, 2023) 이라는 책을 빌려 왔다. 기독교 순교자는 망령이 되어 나와도 좋을 것 같은데, 망설임 없이 천국에 가버릴 것이다. 어쩐지 불만스러운 기분이다.

최근에 권헌익의『베트남 전쟁의 유령들』(Heonik Kwon, Ghosts of War in Vietnam, Cambridge University Press, 2008) 을 다시 읽고 있다. 베트남 전쟁의 폭력적인 대량사, 그것은 병사든 농민이든, 알제리인이든 미국인이든 한국인이든, 이동 속에서 일어났기 때문에 시신 · 유골은 이향에서 썩어 없어져 가까운 사람이나 친족들에게 매장되지도 못하고 제사도 받을 수 없이 망령이 될 수밖에 없었다. 이 전사자의 제사를 받지 못한 부유령에 대한 민중의 상상을 둘러싸고 베트남 전쟁의 기억과 체험을 파헤친다. 망령은 연고 없는 친족들의 양자가 되어 정성스러운 제사와 공양을 받아 공덕을 베풀며 영력이 있는 신이 되거나 또 지역의 수호신이 되어 사당에 모셔질 때도 있다. 이렇듯 망령이 신으로 변용됨으로써 기성 신들의 히에라르키를 뒤흔든다. 세속의 히에라르키를 동요시키는 경우가 거의 없는 것은 아쉽다. 베트남, 더 일반적으로는 오늘에 이르는 세계의 전쟁과 집합적인 기억의 전개를 생생하게 그리고 있다.

일찍 세상을 떠난 나의 친구들은 거의 꿈에도 나타나지 않고 망령이 되어서도 나오지 않는다. 내게는 전혀 신심이라는 것이 없지만, 때때로 일찍 세상을 떠난 이를 떠올릴 때가 있다. 살아남은 사람은 이러한 죽은 자를 위해 뭔가를 해야 할까, 뭔가 할 수 있는 것이 있을까, 이루고 싶었던 바람, 이루지 못했던 바람 같은 것은 역시 알 수가 없다. 도미야마 씨에게 Joan Baez Rare, Lives & Classic(Vangnard, 1995) 을 빌려 존 바에즈의 세 장 짜리 CD 를 만족스럽게 들었다. 고맙다. 베트남 반전운동에서 뭔가가 시작됐다. 하지만 여전이 도상 (途上) 이라고 생각하는 작금이다. (光)

MFE 간행을 위한 기부 안내

지금까지 MFE 에서는 편집・번역 작업을 해주시는 분들께 약소한 사례금을 지급해 왔습니다. 이는 한 독지가가 기부를 해주신 덕분입니다. 하지만 독지가의 기부만으로는 MFE 간행이 조금 불안한 것도 사실입니다. 그런 관계로 여러분께 MFE 를 지속적으로 간행하기 위한 기부를 부탁드리고 있습니다.
기부를 하고 싶으신 분은 편집위원회 (mfe.editor@gmail.com) 에 연락해 주시면 입금 계좌번호를 알려 드리겠습니다. 부디 잘 부탁드립니다.(光)

編集後記

◆今は日常が小さな旅のなかにある。数日ごとに枕が変わるので、頭痛薬が手放せない時期もあったが、これから三週間ほどの眠る場所について、常に思いを巡らせている日々にも慣れてくると、そのような不調に悩まされることも少なくなった。数日ごとに移動を重ねる生活をしながらも、ほとんど身の回りのものを失くさない自分に対して、「所有」の観念がこんなにも強く根付いていたのかと、少しだけあきれている。

そのような日々のなか、同じように転々と移動を重ねて毎日を歩む人と話す機会も多くなった。動画編集、プログラミング、コンサルタント、ライターなど、今風の職業に従事するこれらの人びとは、会社に雇われていたり、自分で起業していたり様々であるが、そのほとんどが、意外なほど規則正しい労働のリズムを刻みながら、自分と同じように、ノートパソコンをじっと眺めて日々を過ごしているようだ。

少し前に話したある女性は、ドラマの広告の仕事に携わっていた。もう少し正確に言うと、クライアント（アパレルや食品メーカーが多い）から依頼を受けて、その会社の製品をテレビドラマの画面に滑り込ませるために、制作側に営業をかける、とここで改めて説明しても何だかよくわからない仕組みのなかで仕事を進めていた。世の中は実にいろいろな仕組みで回っているものだ。仕事柄、彼女は放映されるドラマを見逃してはならず、話の流れのなかで、いま（当時）「エルピス」がとても面白いということを教えてもらった。「こんな面白いドラマ今までなかったかもしれない」と。

実際、その通りだった。こんな面白いドラマ、みたことなかった。「冤罪と報道」というテーマを、徐々に「メディアと権力」の問題にスライドさせながら、物語として十分に見応えのあるものに仕上げつつ、主題の奥行きと複雑さを失わずに最後まで語り切った。それが、次第に魅力を失いつつあるテレビドラマという媒体で起こったことに、新鮮な驚きがあった。こんなに凄い作品をみせられたら、しばらく他のドラマを楽しめなくなってしまうでないか、という気持ちになっている。やれやれ。

筋の通った人物造形、言葉の強い脚本、テーマへの踏み込みの深さ、前半に盛り上がりをつくる編集の作法など、良いところを挙げればきりがないが、この作品を魅力的にしているのは、「フライデーボンボン」の軽薄さ、「ガラガラヘビ」や「贈る言葉」など時代を感じさせる挿入歌、脇役である女性新聞記者の派手な散らかり具合といった、物語の展開とは直接関係のない、斜めの視線、余白の部分であったりする。

今回の特集「場と館」は、「執筆者の言葉を斜め横から引き出す」ということをイメージして企画しました。普段はそれぞれのテーマと真正面から向き合う研究者も、こうしたテーマを設定することで、別の角度から言葉を紡ぐことができるのではないか。そして、そこには、自分たちが思っている以上に豊かな世界が広がっているのではないか、という着想を信じて作り上げました。今号を通して、読者と執筆者が、自らに眠る言葉や文体、新しい語り口に、少しでも出会うことができれば、嬉しく思います。（西）

◆特集に原稿を寄せていただいた豊嶋和人さんは私がお誘いした。前号の藤本紘士さんもそうだったがツィッターで知り合った。というか、まだ知り合ってもいないのかもしれない。藤本さんには先日の「第3号を読む会」にも参加してもらったし、寄稿を呼びかける前にも一度路上で挨拶をしたことがあったが、豊嶋さんとはまだ一度もお会いしたことがない。ツィッター上で競輪ファン同士として何度かやり取りしたことがある程度で、それも私が競輪の本を出してからなので、ここ数年の話だ。ただ、私の方からは、もう少し前から何となく存じ上げていた。二〇〇八年に刊行された『競輪ファンエッセー集　NO MARK』（発行：あざみエージェント）に寄稿されていたからだ。大阪の競輪予想紙『競輪研究』でアルバイトをされていた方が、ネット上の競輪ファンに呼びかけ編集した自費出版本で三〇名くらいの書き手が参加していた。拙稿で書いたように、このエッセー集が出た頃の私は競輪からちょっと遠ざかっており、ネットで競輪について書いたりもしておらずファンのひとりとして声はかからなかった。資料として購入したのだが良い文章を書く競輪ファンってこんなにいるのかと驚いた。自分がこれから競輪の本を書くとしたらこの人たちを納得させなければいけないんだな、とぼんやり思ったりもした。豊嶋さんは、本名をちょっとだけ捩ったペンネームで個性的な文章を書いてらした。のちにツィッターで、おそらくあれを書いていた人だなと発見しフォローした。香川県で農家をされていること、ちょっと下くらいの年齢で、私も縁のある大阪の大学で学生生活を送られたらしいこと、農協の雑誌『家の光』にエッセーを書いていることなどを知った。今回のテーマにぴったりだと思いお誘いすると、過去号も時々読んでいただいていたそうで快諾いただいた。あの頃の西宮競輪場の猥雑な観客席から同じ空を見ていた方と、ＭＦＥの場でラインが組めてうれしい。（古）

◆相談することがあってＹさんに電話をかけたら、つながらなかった。数日後にまた連絡をしてみると、その時はちょうど同志社大学構内を急いで歩いていて電話に気づかなかったという。ちょっと迷ったせいで約束の時間より遅くなってしまっていたから、それで私が電話をかけてきかなと後で思ったと。私は韓国にいたし、Ｙさんがその時にどこで何をしているかは知りようもなかったから、あり得ない話である。でも、このタイミングの絶妙さはなんだか不思議な気がした。Ｙさんはその日冨山先生と会い、火曜会にも出たらしい。あなたのことを知っている人たちもいて、一緒に話したりしたよ、と。いいですね、私もそこにいたかったと答えながら、ふとこんなことも思ったりする。場があるということは、そこに居合わせていない時も、そこにいることができるということではないかと。そこにある関係と、記憶がそれを可能にするのではないかと。

場所に、時間が積もっていると思うことがある。形あるものが何も残ってない時ですら、そこに確実にいた人たちや、そこで起きていただろうさまざまな出来事を想像すると、ひとつの場所が目に見えない無数の層をなしているように見えることも。今回の特集を読みながら、時間を隔てて一緒にいる、違うところにいながらも集まれる、ということについて思い巡らせてみる。（明）

◆一～三号とこの四号を比べていただきたい。「なんかきれ

いになっている」と思われたのではないだろうか。そう、職人が変わったのである（正確には前号から変わっているのだが、新しい才能による誌面の刷新は今号から）。レイアウトだけでなく、編集の段取りも改善して、ようやく刊行スケジュールも正常に向かいつつある。ありがたいことである。

しかしこの編集後記を書くタイミングになると、「今回も自分の原稿書けなかったなぁ……」と悲しい気持ちになってしまうが、書きたいテーマリストが増えていくのは良いことである、と考えることにしたい。ちなみに今のリストは、『TRICK』論（前も言ってた）と畑正憲＝ムツゴロウさん論である。実現するように、ここに書き留めておく次第である。（N）

◆前期の授業で伊藤野枝を読んだ。読んだものの中に、「山川菊枝論」がある。伊藤と山川は、論争相手だが、この「山川菊枝論」では山川の冷静な分析力を高く評価したうえで、「やむに止まれぬ」という切迫した状況の中で思考することを伊藤は山川に求めている。そこで想定されているのは、従来のやり方ではどうしようもない状況であると同時に、にもかかわらずあきらめることはできないという強い思いである。伊藤は山川にこうした状況設定と思いを求めたのだ。そこから何が始まるのか。「畳み込んでいるパッションがついに燃え出す」と伊藤はいう。伊藤らしいいいかただが、そこにはこれまでの前提が崩壊するときに生まれる可能性が見据えられている。あのマルコムXのいう「by any means necessary」が、重なる。そして重要なのはこのパッションの燃え出す手前の地点を確保することであり、始まりを整えておくことなのだ。そしてそこにこそ知的な営みがあると伊藤はいうのだ。

伊藤野枝と山川菊枝はともに女性だけの社会主義団体である「赤瀾会」に参加し、女性労働者の闘いを組織し支援しようとしていた。そしてこの「赤瀾会」が一九二一年の第二回メーデーに、RW（Red Wave の略）のロゴの入った旗とともに登場した際、警官隊から殴る蹴るの激しい暴行受け、全員検挙される。「女のくせに」という言葉とともに、問答無用の圧倒的な暴力が行使されたのである。この暴力を前にして、とりあえずなすすべはない。だが出産直後でこのメーデーには参加できなかった伊藤は、その直後、弾圧を行った者たちに警告文を出す。その内容は次のようなものだ。確かに現状では、私たちとお前たちの間には、力の差は歴然としてある。だから今はお前たちを粉砕することは諦める。だがそれは「奴隷の諦め」ではない。「理知の眼をみはった諦め」だ。このように伊藤は述べたうえで、粉砕されるときが必ず到来することを弾圧者に警告するのだ。それは伊藤が虐殺される二年前の言葉だ。

この伊藤の警告は、たんなる脅しではない。圧倒的な弱勢の位置にいながらも、強弱を決定する秩序の土台が崩れ、そこからこれまで見えていなかったパッションと潜在的な可能性が現れ始めることを、伊藤は凝視しているのだ。そして現実を成り立たせている前提が融解するときに始まる事態を、その手前において知として確保すること。未来が未来として現れることを整えておくこと。そのような知の在り方を、伊藤は山川に求めたのだ。

こうした知は普遍的な知というより個々の状況におかれた知であり、それぞれの具体性の中に抱え込まれた潜在的な可能性を確保し続けるための知だ。その可能性はしたがって状況に依存し、また個別的に見える。だがそれが前提にかかわるものあるがゆえに、当然ながら全体にかかわる。個別にして全体。そんな可能性を担う雑誌でありたいと思っている。（冨）

◆蝉の鳴き声がかまびすしい桜並木の続く、堤の木蔭の道を歩く。燦々とした陽射しのもとで、並木の途切れた橋を渡り、図書館に向かう。冷房のきいた図書館はありがたい。若者と老人が多い。本文だけで四〇〇頁を越え、読み切れないだろうと思いながら、小俣ラポー日登美『殉教の日本：近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』（名古屋大学出版会、二〇二三年）という本を借りてきた。キリシタンの殉教者は亡霊になって出てきてもよさそうだが、迷うことなく天国へ昇ってしまうのだろう。なんだか物足りないと思うのである。

最近、ホゥニック・コン『ヴェトナムにおける戦争の亡霊』（Heonik Kwon, Ghosts of War in Vietnam, Cambridge University Press, 2008）を読み返している。ヴェトナム戦争での暴力的な大量死、それは兵士であれ農民であれ、アルジェリア人やアメリカ人や韓国人であれ、移動のなかで起こったがゆえに、遺体・遺骨は異郷の地で朽ち果て、近親者・親族によって埋葬されず、祭祀を受けることもなく、亡霊とならざるをえなかった。この戦死者の祭祀されない浮遊霊に対する民衆のイマジネーションをめぐって、ヴェトナム戦争の記憶と体験を掘り下げていく。亡霊は無縁の親族たちの養子となり、丁重な祭祀・供養を受けてご利益を授け、霊力のある神となり、また地域の守護神となり、霊廟に祀られることもある。こうした亡霊の神への変容を通じて、既成の神々のヒエラルキーを揺さぶっていく。世俗のヒエラルキーを動揺させることはほとんどないのは残念だ。ヴェトナム、より一般的には今日にいたる世界の戦争と集合的な記憶の展開をめぐって、生き生きと描いている。

私の早世した友人たちはほとんど夢にも現われないし、亡霊になっても出てこない。私にはまったく信心というものがないのだが、時々早世した者を思い浮かべることがある。生き残っている者はこうした死者のために何かすべきなのだろうか、何かできることがあるのだろうか、果たしたかった想い、果たせなかった想いなど、やはり解らない。冨山さんから、Joan Baez Rare, Lives & Classic（Vangnard, 1995）を借りて、ジョーン・バエズの三枚組みCDを堪能して聴いた。ありがとう。ヴェトナム反戦運動から、何事かが始まった。だがいまだ途上なのだと思う、昨今である。（光）

MFE 刊行のための寄付呼びかけ

これまで MFE では編集・翻訳をやっていただいた方に些少の礼金を送ってきました。それはある篤志家の寄付によるものです。だが、篤志家の寄付だけでは MFE の刊行が心もとないことは言うまでもありません。そこで、皆さんに MFE の刊行継続のために、寄付を募ることになった次第です。
寄付をされてもいいと思っている方は編集委員会（mfe.editor@gmail.com）に申し出てください。追って振込みの口座番号をお知らせします。よろしくお願いします。（光）

MFE 編集委員会

安里陽子　五十嵐惠邦　石山祥子　姜文姫
近藤有希子　申知瑛　沈正明　竹原明理　車承棋
全成坤　鄭柚鎮　永岡崇　成定洋子　西川和樹
福岡弘彬　謝花直美　ニコラス・ランブレクト
冨山一郎　古川岳志　川村邦光　奥田のぞみ
安岡健一　平野克弥　酒井朋子　廣岡浄進
北村毅　沈雅亭
（順不同）

MFE　第４号

多焦点拡張／다초점확장

2023 年 8 月 25 日　発行

編集・発行　MFE 編集委員会

E-MAIL: mfe.editor@gmail.com
URL: http://doshisha-aor.net/mfe/
https://sites.google.com/view/webmfe/